

【巻末資料】

実施事業の報告

（令和6年度）

1. インタビュー
2. 3公園での取り組み
3. 菜園及び子どもたちの居場所の設置
4. 振返りの会の開催
5. 情報発信ツールの作成

1. インタビュー

当事者の方々・市民・関係団体等の方々へのヒアリングを実施し、その内容をインタビュー記事として WEB・SNS（Instagram）等で公開した。さらに、インタビュー記事を冊子としてまとめた。

インタビュー記事を次頁以降に示す。

	対象		実施日
1	やっぱりコミュニケーションを育まないことには	清野緑さん	令和6年6月19日
2	試されることを待っているアイデア	横田宙土さん	令和6年6月28日
3	あたたかい眼差しさえあれば	遠山敬子さん	令和6年6月28日
4	理学療法や作業療法の知見を地域にひらく	中山雅和さん	令和6年7月12日
5	ずっとみんなでなんとかしてきたんだよ	串田光弘さん	令和6年7月12日
6	来づらい人がいるんじゃ、道理が通らない	前田多實子さん	令和6年7月18日
7	生きることは嬉しいよって背中で語りたい	亀井寛之さん	令和6年7月19日
8	医療的ケアが必要な子にも勧められる公園を	田村利治さん、内田薫さん	令和6年7月19日
9	やさしい日本語を、やさしいまちから	山脇弘美さん	令和6年7月29日
10	安心と挑戦の拠り所としての公園	木本茜さん	令和6年7月31日
11	怖くて公園に行けない人、たくさんいます	加藤さやかさん	令和6年9月3日
12	共生社会を本当に願うなら	富永美和さん	令和6年10月21日
13	迎え入れることを備え続ける公園的な地域へ	阿部裕太郎さん	令和6年11月19日
14	地域の植栽から考える、これからのインフラ	倉石篤さん	令和6年11月20日
15	それぞれの経験が持ち寄られる地域を目指して	星郁子さん	令和6年12月9日
16	ここからだと環境は切り離せないから	鞍田愛希子さん	令和6年12月23日

play here *interview*

これは、「みんなのための」そして「みんなによる」公園づくりを通して、「ここで遊ぼう」という想いを、誰もが叶えることができるまちにしていくためのプロジェクトです。

とはいえ、「みんな」という口当たりの良い言葉に頼りすぎること、かけがえのない「わたし」という存在がおろそかになってしまうことは避けたいと考えています。また、プロジェクトを進めていくうえで、統計をとったり、データとして数値化をしたりすることで、判断材料を潤沢にしていくことはもちろん必要でありますし、進めていくべきことだと考えますが、かけがえのないそれぞれの「わたし」というものは、単なる数字やキャッチコピーのようなフレーズに置き換えられるものではないとも考えています。

公園は、かけがえのない、それぞれの「わたし」という存在にひらかれた場所であるべきです。そして、それを目指すこのプロジェクトも、それと同じようなものであるべきです。そうであるために、ではどうしたらよいのか？

このインタビューシリーズは、それを問い続け、応え続けていくためのものでもあります。しかしながら、まだまだ、お話をお伺いすべきであるにも関わらず、できていない方々がたくさんいらっしゃいます。時間の許す限り、このインタビューシリーズを続けていきたいと考えています。そして、随時更新公開をしていく予定です。是非、ご関心をお寄せくださいますと幸いです。

聞き手・執筆・写真：熊井晃史

校正：小林勢（小金井市環境政策課）、山崎寛之（同経済課）、荒ひかり（パシフィックコンサルタンツ）

目次

やっぱりコミュニケーションを育まないことには	清野緑さん	3
試されることを待っているアイデア	横田宙土さん	11
あたたかい眼差しさえあれば	遠山敬子さん	22
理学療法や作業療法の知見を地域にひらく	中山雅和さん	32
ずっとみんなでなんとかしてきたんだよ	串田光弘さん	41
来づらい人がいるんじゃ、道理が通らない	前田多實子さん	52
生きることはうれしいよって背中語りしたい	亀井寛之さん	62
医療的ケアが必要な子にも勧められる公園を	田村利治さん、内田薫さん	74
やさしい日本語を、やさしいまちから	山脇弘美さん	82
安心と挑戦の拠り所としての公園	木本茜さん	93
怖くて公園に行けない人、たくさんいます	加藤さやかさん	106
共生社会を本当に願うなら	富永美和さん	120
迎え入れることを備え続ける公園的な地域へ	阿部裕太朗さん	131
地域の植栽から考える、これからのインフラ	倉石篤さん	146
それぞれの経験が持ち寄られる地域を目指して	星郁子さん	153
こころとからだと環境は切り離せないから	鞍田愛希子さん	165

清野緑さん

やっぱりコミュニケーションを 育まないことには

取材日：2024年6月19日



みんなでつくっていくということを、みんなで大切にするための方法

熊：私はこのプロジェクトに今年度から参加しているのですが、清野さんには昨年度にも当事者という立場からもうすでにご意見を伺っていますので、そこからの進捗という意味でも少しご紹介をさせてください。まず、「インクルーシブ遊具の設置の前に、トイレが整備されていないと出掛けることができない」というお話があったかと思います。

清：しましたね。

熊：これまでの調査のなかで清野さんに限らず、当事者の方々からの同様の声を受け止めて、トイレといった基本的なところの環境整備に目を向けて、少しずつ具現化を図っているところです。やっぱり当事者の方々と議論や対話をしていきながら、プロジェクトとして持つべき理解度を深めていかないといけないと思いますし、そのプロセスも今回のインタビューの記事などを通して公開していきたいと考えています。

清：結論ありきではなく、プロセスも地域にひらきながら進めていくというプロジェクトのあり方は、よく言われていることだと思うんですけど、それが実際にできていることはどれくらいあるんだろうって思っていました。私が知らないだけかもしれないですけど。

熊：あ、いや、そう思います。形だけのプロセス公開型というか、話を聞くだけ聞いておいて、その後がおざなりになっているもの、多いと思います。

清：そうですね。だからSNSの発信をすれば良いってことじゃなくて、実際にそれがどれだけ当事者や地域住民に理解されていくかっていうことが大切ですよ。なんというか、行政任せにしたいわけでもないの、「みんなでつくっていく」ということを、みんなで大切にしていくなためにも、そういうことが必要ですよ。

熊：まさに、そういうことを考えています。

清：いろんなことと言えらると思うんですけど、やっぱりステップが大事だと思っていて。今って、すぐ答えを出さないといけないことが多すぎると思うんですけど、そもそも、みんながみんな同じ意見であるはずがないですし、誰かしら何かしら思うところがあるはずなので、そこを恐れずに会話をしたり、対話をしたりしていこうよっていうことで、みんなで話し合っ、折り合いつけていって、これやってみようあれやってみようっていうステップが増えたらいいなって本当に思っ。

熊：プロセスの試行錯誤に意味があるというか、過程そのものも目的になるという感じはありますよね。

ありのままを受け入れられると試行錯誤ができる

清：なんというかその、子どもが特別支援学校に入ってそれをすごく実感したんですよ。息子は先天性の筋疾患で、一歳手前で診断がつかました。一般の子たちと一緒に保育園で生活をして、特別支援学校に入る段階で、それはもう決められているというか、もうそこ以外入れるところはないのに、その就学のタイミングでズンって心が重くなっ、

熊：ああ。

清：それで、今は小学2年生ですけど、1年生の秋ぐらいに発表会があつたんですよ。それを観て、これで良かったって思えたんです。息子もそうなんですけど、知的障害、発達障害と、いろんな障害のある子たちがそれぞれできることを、先生方が、失敗成功とかじゃなくって、それが上手くいくかどうかじゃなくって、その子の試行錯誤そのものを受け止めてくれているんですよ。そうやって、子供たちが感じられる安心があるから、そこからちよとずつ、これやってみようっていうチャレンジの気持ちが出たりとか、なんて言うんだろうな、成長が感じられるって。

熊：それはもう、障がいの有無に関わらず、すべての子どもたちに必要な環境だと思いますし、なんなら、子どもだけでなく、大人にとってもそうであるような気がします。

清：特性があるとか、この言い方もじっくり来てないんですが、発達特性のある子たちの存在自体が、生産性ばかりを求められる今の社会からどんどん欠けていく部分をなんとか保ってくれていると最近すごく思っていて。だから、その子たちに街のなかに出ていってもらいたいし、なんならもうみんなに特別支援学校に社会見学に来て欲しいです。

熊：ああ。ちょっと深堀りしたいところがたくさんあるんですが、プロジェクトに紐づけて言うならば、子どもたちが安心を感じることができて試行錯誤できる状況を社会に広げていくべきですし、その舞台に公園がなかったらなと願います。

清：本当にそうですよね。

熊：ちなみに、発達特性があるという言い方にじっくり来ていないのは、どのような想いからなんでしょうか。

清：だって、特性があるかどうかでいったら、みんなそれぞれあるじゃないですか。特性が無いなんてことはないのです。

熊：本当にそうですね。

街に、公園に、気軽に行けない

熊：なんか、えっと、プロジェクトがどうあるべきかって、公園がどうあるべきかという話はもちろんなんですが、社会がどうあるべきかっていうところとやっぱり筋を通しておかないといけないんだろうなという気はしています。そういう筋道で引き続き会話を続けていきたいのですが、公園ってどうですか？やっぱり気軽に行けないですか？

清：私たちって、街にトイレがないと思って出かけないじゃないですか。コンビニでもどこにでもあるし。子どもが小さいうちは公園でも敷物をひろげてさきっとオムツを替えてたんですよ。大きくなってくると、流石に家の中でも友だちが来たりしたら、ついたては立てるようにしています。やっぱり、それぞれの尊厳があるので。でも、公園についたてを持って歩いて行くわけにもいかないですよね。だから、外への出やすさやアクセシビリティというところでは、身体が不自由な子どもや大人がオムツ替えができるトイレがあるっていうのが重要で。最近、ユニバーサルベッド（大人サイズの横になれるベッド）のあるトイレが少しずつ街の中でも増えてきているようではありますけど、じゃあそれがどこにあるのかっていうのを意識して探したり覚えておかないといけないんですよね。

熊：当たり前にある、という状況ではないから、気にかけ続けられないといけない。それはそれで、結構疲れますよね。

清：そうなんですよ。あの、その、このプロジェクトで検討してもらいたいな、でも、入れるとおおごとになっちゃうかなと思うのが...

熊：え、聞かせて欲しいです。

清：やっぱり親が連れて行きやすい場所でないと、子どもが行かないというか、行けないというか。

熊：そうなりますよね。

清：みんなそれぞれ大変だと思うんですけど、公園だと、やっぱり遊具で遊ぶとなっても、自分の子どもが使える遊具が限られていたりとか、子どもを抱っこして、全部が全部、介助しなきゃいけない。よいつしょって、腕とか痛い思いをして、ブランコとか乗せないといけない。結構、ブランコって難しいんですね。なぜかというと、息子を車椅子から降ろして、いろいろと準備をしてるとどうしても時間がかかってしまうんですけど、そうしているうちに、他の子が乗っちゃうんですよね。

熊：横入りかあ。

清：近くで見てるちょっと大きい子がいたら、今この子が乗ろうとしてたよって言うてくれることもあるんですが、それは本当に稀で。それが、インクルーシブ遊具のエリアでも起きているんです。何回も抜かされるから流石にと思って、横入りした子にお願いしたら、泣かれちゃったこともあって。なんか別に、よその子を泣かせたくて公園に来てるわけじゃないしって、ブランコに1回乗るにもいろんなハードルがあります。

熊：心折れますね。

清：体力の面もハードルがありますが、やっぱり精神的な部分が大きいかなって思いますね。うちの息子も叫びますけど、どうしようもなく叫んじゃうとか、コミュニケーションが思うようにいかなくて手が出ちゃうという子もいる。特に子どもが大きくなってくると、なにこの人って見られたりとか、やっぱりそういうことは、いくら慣れてるお母さんたち、お父さんたちでも心が折れそうになる。どうしてもやっぱり少数派になるのですね。公園に行くと、まあ街に出ても少数派ですけど、うん。

熊：少数派。

清：そう。なんかワーッと遊んでる子たちを目の当たりにして、やっぱり比べてしまうことが息子が小さいときはよくありましたね。本当だったらこういう風に走り回れるのかなとか、走って自分の好きなところに行って、好きなことができるんだとか。まだコミュニケーションが取りづらかった1、2歳ぐらいのときって、指さしすらままならなかったの、もうどれで遊びたいのかもわからないし、なんか私の都合でこれをさせちゃってるのかなとか思いながら、ああ楽しいねって笑いながら、でも、それ、カラ笑いで。

熊：楽しいから笑うのと、笑うから楽しいのとありますけど、そのせめてものカラ笑いで、気持ちを保とうとするとか。

清：はい。なんかすごい疲れて、滑り台なんて、もう10回ぐらい頑張って滑って、次の日は背中が痛くなったりとかで。公園に行ってゼイゼイ言いながら疲れて帰宅して、そのまま夕方ご飯作ってとかいろいろあるっていう。

だからやっぱり、自分たちだけで行くのは結構ね、勇気も気力もいります。精神的にも余裕があるときじゃないと、公園は行けなかったですね。少数派な分、視線も集中しますし。

分け隔てなく接されたから、今はどんどん質問してって思えてる

熊：もの珍しげに向けられる眼差しは、キツイですね。

清：はい。でも今は、どんどん質問してって感じなんですけど。ちっちゃい子とかね、息子の車椅子を指して、なんでこれ乗ってるの？とか、これベビーカー？とか、そういうのを無邪気に聞いてくれる。今は嬉しいと思うんですけど、それは保育園のお友達がみんな素直にそういうコミュニケーションをとってきてくれたからで。だから、私も公園でそういうふうに知らない子に聞かれても嬉しいって思えるようになったんだと思います。

熊：屈託がないというか、邪心みたいなものがないと、こちらも疑心暗鬼みたいな気持ちが晴れていくというか、それが生まれづらいというか。

清：うちの息子は理解のある保育園に恵まれて、そうやって混ざれてましたけど、でも保育園とか幼稚園に行きたいけど行けなかった子たちやその親御さんたちって、そういう経験が得づらいんですよね。保育園や幼稚園時代のそういう小さいときの、何も分け隔てなく接することができるときに出会える場所ってというのが、公園の本来の目的でもあると思っていて、そういうところが本当のバリアフリーというかインクルーシブな場所であるはずなんですよね。子ども達は「インクルーシブ」なんて言葉を知らずにできている。大人たちがこんなに頭を突き合わせてもできていないのに。

熊：はい。うん。はい。深く感じ入っています。

清：保育園や幼稚園に行くことが叶わなくても、公園に行けば、地域での触れ合いをお互いにすることができるっていう。一般の子たちにとっても大事な経験というのは、保育園の先生からもよく言われていたんですね。それで、当時の息子の発語が、単語が三つ四つぐらいでママとかマンマとかのときなんですけど、保育園の子たちから「お話できるよー」って。お友達と向かい合って、なんかごによごによとおしゃべりしているんですが、大人が聞いたって素通りするようなものでも、その子たちには気持ちで伝わっている感じがして。それと、保育園に新しい子が入ってきて、よかれと思って息子の前に絵本を一冊置いてくれたりするんですけど、そうしたら、他の子が、「ちゃんと自分で読みたいのを選べるから2冊くらい持っておいでよ」とか言って、レクチャーしてくれていたりするんです。

熊：はい。うん。はい。うん。

清：息子の場合はそうやって、理解のある保育園で、本当に温かく見守ってもらって過ごせたんですね。でも、それが叶わない子がいっぱいいるんですよね。特に医療的ケアが必要になると、一般の保育園や幼稚園に入ることがほとんど叶わない。本当は、そういう子たちを小さい頃から目にしていたら、チューブとか呼吸器をつけてる子とか、バギーで横になっている子を見て、心ない言葉なんて出ないはず。

熊：え、えっと、そういう状況に実際にいらっしゃったということですか。

清：え、はい。そうです。だから、公園とかでチラチラと横目になっているだけで、違うと思うんですよね。こういう子がいるんだって小さいときから感じていることができるって。

熊：まさに本当にそう思います。だからやっぱり、公園をどうしていくのか？という話は、私たちが自分たちの社会をどのようなものとして考えたいのか？というものと接続をしないと、結局ハード整備だけの話になっちゃうんですよね。

かわいそうな存在ではない

熊：えーっと、それで…、ちょっと声を大にして言いたいのが、もちろん大変な状況であるということはそうなんだけど、かわいそうな存在ではない、というもので。

清：そうそう。本当にそうなんです。

熊：かわいそうな存在として固定されるような眼差しを向けられたときの親御さんのつらさっていうのは、私自身も結構思うところがあるんですけど、そうじゃなくって、何か支援やケアをされ続ける受け身の状況だとしても、それが積極的な意味をこの社会で帯びることが当たり前をやっぱりあって。あの一、その一、私はずっと教育の仕事をしているんですが、教育や学びというものを、何かが一直線に出来るようになっていくということだけの話にはしたくないという思いが強くなるんですね。だって、みんながみんな最終的には歳を重ねて、何かができなくなっていく存在じゃないですか。そうしたときに、そういった考えだけだと、教育や学びというものがそこになくなるということになってしまう。

清：確かに。

熊：教育学者の佐伯胖という人が、寝たきりの方と目が合ったりした際にどこか心が通った気分になって、それを「理解（appreciation）」や「感謝（appreciation）」として、それに学びというものをみているんですね。それで、「生涯のほとんどをベッドの上で過ごし、形になるものはほとんど何も遺さなかったその人の一生が、最後の息を引き取る瞬間まで「わかる（理解する、感謝する）」という、最も文化的な実践に参加していた、ということを確認した（佐伯胖「『学ぶ』ということの意味」より）」と言うんです。なんか、とても大切なことを言っているような気がするんです。

清：なるほどです。

熊：と、なんかこう、プロジェクトとしての哲学というか、人間観というか社会観のようなものを豊かにしていきたいというのが根底にあるんです。同時に、じゃあどういうところを工夫しないといけないのか？という目の付け所というか、具体的なことも同時に考えていかないといけないわけなんですよ。

ささやかなコミュニケーションで救われる

熊：たとえば、先程インクルーシブ遊具のインクルーシブではない使われ方も話題にあがりましたが、じゃあ、どんな工夫ができるんだろうか？ということも少しずつ捉えていきたいですね。

清：これをやったから100%大丈夫というものはないと思うんです。ただ、ひとまずこれはやったらいいなと思うのは、ブランコでも、府中の森公園がそうだったんですけど、ロープがはってあったり、わかりやすい言葉で看板があったりして、どこに並べばいいのか、誰が先頭で次の順番なのかみたいなことがとてもわかりやすかったんですね。みんなちゃんとそこに並んでいたし。ただ、難しいのは、決して身体が不自由な子だけじゃなくて、待つのが苦手で動き回っちゃう子もいたり、叫んだりパニックになっちゃうとか、そういう子もいるので、本当は、理解してくれる人が増えていったほうが良いんですよね。

熊：本当にそうなんですよ。そもそも、障がいをもった方というのが、当たり前と同じ社会に街に暮らしている。にも関わらず、その方々をあまり見かけないということは、街に出づらいということだし、いるはずの人がそこにいないということの歪さがそこにあるんですよ。

清：体験して欲しいんです。たとえば、身体の不自由な子がバギーや車椅子に乗って横になっていたとしますよね。同じ視線を体験したら、空や木がこんなに綺麗に見えるんだって発見もあるかもしれない。

熊：ああ、また別の見方や考え方をもたらしてくれる体験になるかもしれないという。

清：っていうのも、息子と一緒に公園に遊びに行ったときに、一緒にゴロンしようって言ってくれた保育園のママ友がいて、実際に寝っ転がった後に、こういう景色を見ているんだねって言葉にしてくれたんです。そっか、普通はそういうことをあまりしないなって。体験を通して世界の見え方が変わったときに、考え方も少し変わっていきそうですね。だから、車椅子の目線だったり、視覚過敏の子の光の眩しさとか、聴覚過敏だったらどう聞こえるのかとか。だから喜んで息子と一緒に駆け付けるので、本当に息子を使って体験してほしいですよ。なんていうんだろう、ちょっとやったことあるから車椅子押しますよとか、どういうときに困るの？とか、そういうコミュニケーションが少しあるだけで、親としては、今日は外に出てきてよかったと、本当にね、心から思えますよ。やっぱり外に出てみるもんだなって。捨てたもんじゃなくなってる。結局、人とのコミュニケーションを通して、安心感や肯定感を積み重ねていく、うん、それが結局大事なんだと思います。

熊：清野さん。ここ栗山公園では、来年度のインクルーシブ遊具の設置が予定されています。が、それをまさに遊具の設置で終わらせないために、そういうコミュニケーションが育まれていく機会であるとか、仕組みを考えていきたいんです。ちょっと今度、改めてそのことについて会話の機会を設けさせてもらっても良いでしょうか。たとえば、ハード整備といっても、そういった大掛かりな遊具の設置だけでなくって、落ち葉を捨てないで貯めておくことにして落ち葉プールにしてみたり、みんなで共通の話題になるような鳥の巣箱とか、車椅子の方でも関わりやすい菜園とか、もうすこし細やかなアイデアを検証していく必要があると思っています。

清：ええ、ぜひぜひ。ここは近隣に支援施設もたくさんありますし、リハビリテーションを学ぶ専門学校もありますし、そういうところとも連携をとれたら、良い拠点になりそうですね。

熊：まさにです。



横田宙士さん

試されることを待っているアイデア

取材日：2024年6月28日



旅行も外食も、外に出かけづらいから

横：わたしの次男が特別支援学校に行っているということもあって、周りにも知的障害を持つ子が多いんですけど、たとえば電車の中とかで、体を前後にゆするロッキングをしたりすれば、なんだあいつって見られちゃうんですよね。だから、やっぱり外出はなかなかしにくい。旅行や外食だとか、そういう街に出ることを思うと、そもそもためらう人が多い。ということで、だったらそういう人専用のキャンプ場があれば、出かけやすいし、お互いに交流もできるんじゃないかなって、長野県の佐久市でいまちょうど準備をしているんですよ。

熊：おお。そういうタイミングだったんですね。

横：それを知っててインタビューの話があったのかと思うくらいドンピシャでした。それで、そういう場所で、全国の同じような想いの人が集えたら良いし、さらには、そのキャンプ場を一般の人でも羨むようなレベルにまで上げれば、あのキャンプ場行きたいよねって思う人が出てくる。所ジョージさんの世田谷ベースってあるじゃないですか。あれをデザインした人にデザインをお願いしているんですよ。

熊：へー、スゴい。わくわくします。

横：いろんな人が来てくれたら嬉しいですし、そうすると、そこで立場を超えた交流もできる。もう土地は購入してて、整地が終わったところなんです。それで、まさに今、そのキャンプ場の中に遊具がある公園みたいなものをつくろうと思って、遊具メーカーとやりとりしているんですね。

熊：おお。

横：2社に声かけているんですけど、それぞれともに「インクルーシブってすごい今言われてるんだけど、どんなものをつくっていいのか正直困ってる」って言うんです。だからわたしみたいな人とタッグを組んでつくるっていうのはすごくありがたいって。

熊：知見の蓄積というか、知見を遊具的なものへと反映をさせていくことの知見とでも言えるものが不足しているんですかね。

横：そうなんですよね。実は私も勉強した方がいいと思い「強度行動障害支援者養成研修」を受講してみました。そこでも、やっぱりパニックが起こってからどうするかではなくって、パニックが起きないようにどうするかという予めの対処が大事なんだって言われていて、だから、これからつくるキャンプ場も、そういう子だとか、もしくはそういう子の保護者や支援者の方々が楽しく過ごせる場のあり方をよくよく考えるっていうのは、すごく大事なことなんだなっていうのを思います。

環境がそうさせている

熊：本人やその支援者の方々にだけ努力義務を押し付けるのではなくって、そもそもパニックなどが環境要因によって起こるわけだから、その環境そのものにアプローチをしていくということですよ。

横：そうです。知的障害者はわがままだってよく言われるんですけど。

熊：え、そうなんですか。

横：はい。要するに知覚過敏で、光や音などの刺激に対する感受性が強い。イヤーマフとかをしていますけど、夏の強い日差しも苦手だったりします。だから、たとえば日陰のスペースをつくりましたってなると、「子どもは太陽の下で遊ぶものだ」とか「過保護にしすぎだ」とか言う人もいるわけですよ。

熊：うーむ。

横：そういう子たちが好きな王道の遊びは、ブランコとトランポリンと水遊びっていう3点セットなんですけど。

熊：それ、みんな好きですよ。

横：まあ、そうですね。それで、その3つを整えてもやっぱり日差しがガーッと厳しいと、そういう子たちが安心して遊べないんで。

熊：甘えとか過保護とか、そういう話ではないですよ。要するに、そこにつらさがあるわけで。

横：はい。だから、今、考えているのは、シェードみたいなもので遊具全体を覆って半室内のようにして居心地を良くできないかなっていうものなんです。それって、一緒にいる保護者もカンカン照りの中にいるよりは良いですよ。

熊：ほんと、そうですね。

横：基本的には、障害をもつその本人ばかりに目が行きがちなんですよ。本人だけじゃなくて、周りの支援者も同じように大変だったりする。そもそも、本人が楽しく過ごすためには、周りも楽しく過ごせてないとだめなんですよ。

熊：ああ。

違いを理解したくなる状況をつくる

横：物理的な支援も必要なんですけど、それだけじゃ足りないんですね。じゃあ、何がいるんだっていうと、やっぱり周りの人の心の理解。ただそれって、目に見えるものではないんで難しいんですよ。だからこそ、やっぱり周りの、もっと言えば一般の人も含めたみんなの心の理解を進めることができる公園というのが、究極のインクルーシブ公園なんじゃないのって、わたしは思っているんですけどね。

熊：まさに、ハード整備をして終わりではないという意味でも、本当にそう思います。

横：ただ、インクルーシブ公園って呼ばれているところに視察をしに行っているんですけど、車椅子の人でも利用できますみたいなスロープがついていたりもしますが、要するに知的精神の方に向けてつくられてはないんですよ。

熊：ああ。インクルーシブ公園と呼ばれていても、そこには対応の偏りがあると。

横：そう。視察先でもらった資料に、「うちの子は年齢も見た目も大きいけど小さい子用の遊具がとっても好きなんです」というアンケートの回答があったんですけど、そういうことってたくさんあるんですね。たとえば、わたしのママ友の子もそうだったんですけど、ブランコがとにかく大好きだと。ただ、並ぶのが苦手だし、1回始めるとなかなか終わらない。そうすると昼間に行くと「なんであんな大きい人が、ブランコをずっとやってるんだ」と周りからすごい白い目で見られちゃう。だから、早朝の人がいない時間にわざわざ行くんだっていう。

熊：公園で遊ぶために、時間をずらさないといけなくなっている。

横：そう。でも、そんな早朝に早起きをしていくのは大変ですから、本当は昼間に公園に行きたいわけですよ。ただ、子ども用のブランコって小さいじゃないですか。からだが大きくなった人が楽しそうにずっと遊んでいる風景というのは、異様に写ってしまうと思うんですよ。だから、その隣に大きいブランコをつくってくださいと遊具メーカーにお願いしようと思っています。

熊：キャンプ場もそうですが、まだ世の中で試されていないような具体的なアイデアをたくさんお持ちですね。

横：こっからがミソで、そこに看板を絶対つけて欲しいわけです。ちっちゃいブランコと大きいブランコが並んでいたら、なんだこれってなるじゃないですか。それがチャンスで、いろんな人がそれを読んでくれる。たとえばそこに、そういう特性についての解説があったり、「そういう特性を持つ人にとってもその大きいブランコは良いけど、それだけじゃなくって、大人になってもブランコを楽しみたいという人も是非どうぞ」みたいなことが書いてあるという。

熊：わ、なるほど。

横：そういう解説を一方的に読んでと言っても、なかなか難しいですよ。だから、遊具や公園という場をつかって、そういう理解を深める仕組みっていうんですかね。そういうことができれば良いですよ。

熊：本当にそう思います。

どうにかしたいけど、どうしてよいかわからないという問題

横：きっとまだまだ、いろんな工夫をしていけると思うんですね。たとえば、このあいだスウェーデンに視察に行ってきたんですけど、学校のなかにタイマーもあって、残りの時間ややることがしっかり見える化されているんですよ。そうやってちゃんと見通しが立っていれば、自分から行動に移していけるんです。公園でも、遊具の順番を譲ったり、交代していくようなことも、そういう仕組みがあればスムーズかもしれない。

熊：なんかその議論があまり活発化していないように思うんですけど、どうなのでしょう。

横：遊具メーカーさんも言っていたのが、「自分たちでも、つくってるインクルーシブ公園の遊具が、身体障害者向けが主だねっていうのは、実は気づいてます」と。法律上で言うと、障害者というのは、身体・精神・知的って3つあるわけだから、精神知的の方に向けての遊具も作りたいと思ってるそうなんですけど、要するに「どうしたらいいかわかんない」って。それって、遊具メーカーだけじゃなくて、ほとんどの世の中の人たちが同じような想いを抱いてるんだろうなって、わたしは考えているんですよ。

熊：どうにかしたいけど、どうしたらよいかわからない。

横：心の奥底では人のために役立ちたいっていう気持ちは、多くの人にあると思うんですね。でも、精神知的の方に対しては、何を自分がすれば支援になるかっていうのが全然わからない。街でそういう方を見たとしても、どう

いうふうに接したらいいのかわからない。だからなんて言うんですかね、別に嫌いなわけでもないし、やりたくないわけでもなくて、単にやり方がわからないっていう。

熊：自分も含めてそうかもしれません。

横：だったら知見を共有できれば良いじゃんっていうことで、実はキャンプ場ともう一個並行して、もっとスマートに情報を発信できるようなコンテンツをつくることも考えているんですよね。WebでもTikTokでも、世の中に発信するチャンネルってたくさんあるじゃないですか、そういうのを駆使して伝えていくっていう。公園の話とずれちゃうかもしれないんですけど。

熊：話がずれていくの大好きなんですけど、とはいえ、全然ずれてないと思います。

横：やっぱり心の理解っていうものを、絶対忘れないようにしないとイケない。

そう簡単には伝わらない

横：視察にいったインクルーシブ公園の利用者アンケートを見ていても、設備をがんばって整えているのに、「この公園は、障害者と一緒に遊べるようなことを目指してつくられたってことをご存知ですか」みたいな質問に対して、3割しかYESって答えてなかったんですよ。すなわち7割の人には想いが届いていない。

熊：なるほど、難しいです。

横：要するに、物を整えれば良いという話ではないんだよねっていうことを表してもいるんだろうなって。

熊：だから周知っていうか、そういうことを伝えていくメディア的な活動の必要性を感じられて行動に移そうとされているというわけですね。

横：そうですね。今はこれだけネットだとかで情報が溢れているのになかなか届かないし、伝わらない。だから、そういうこともやらないとイケないんだろうなって。わたし、今回こういった事業をやるために消防士を辞めて。

オープンな仕組みの必要性

熊：え、消防士を辞めてまで、、、というのは、やっぱりご自身のお子さんのことも考えて、という。

横：それもありますが、わたしの姉がダウン症で、生まれたときからもう家族に障害者がいたわけなんで、昔から家族会のようなものに参加したりしてたんですね。だから、一般の人たちに対しての理解を進めていかないとなんだろうなとずっと思っていました。だからまあ、障害者との関わりがないような人たちにも理解をどう深めてもらうのかっていうのが究極の問題解決だから、そこにうまくアクセスできるようなシステムっていうんですかね、そういうものができたらいいなって。

熊：そうですね。そのシステムとおっしゃっているような、仕組みや制度のようなものにある程度は落としこんでいかないとなって感じているんですね。というのも、合理的配慮という言葉もありますが、誰か個人の配慮というか思いやりがあるかないかというように問題を捉えるというよりも、配慮を調節と言い換えている文献もあったんですけど、目が悪くなったらメガネを掛けるというような、ある意味あたりまえのこととして調節していくような社会のシステムがうまく構築されているかどうかという視点で考えたいな、と。ちょっと分かりづらいですが、ただまあこのプロジェクトを小金井市という行政の仕事として捉えたときには、そういう視点は外せない気がしています。もっと言うと、システムと言ったときに、それを再現性と呼び替えても良いんですが、まさに「物」の話の方が簡単なんですね。インクルーシブ遊具を、こことあそこに買って置きます。それを増やしておきますって。でも、このプロジェクトでは、「物」の話で終わらせないで、まさに、横田さんがおっしゃる心への理解だったり、人の関わりといったところに目を向けているという感じなんです。それをいかに仕組みにしていけるか。そのための論点というかキーワードを一生懸命抽出しているところです。

横：「play here」の資料にもあった「遊具に頼らない遊びの例」というのも良いですね。

熊：そうそう、ありがとうございます。大きなインクルーシブ遊具の整備だけを論点にしなくても良いということを表したくて、「遊具に頼らない遊び」というものもたくさんあるよねって言っています。花壇や菜園もそうですし、キュウリなんかを植えて植物のトンネルのような日陰をみんなでつくっても良いかもしれませんし、落ち葉を捨てないで貯めておいて落ち葉のプールのようなものがあっても良いかもしれません。なんなら、木陰やそよ風を楽しむだけでも良いはずなんですよ。大きなハード整備じゃないところに目を向けると、まさに人と公園、人と人との関わり方に意識が向いていきやすくなる気がしています。

横：その通りだなと思います。

熊：なんか結局、大きなハード整備だけを論点化していくと、お金の話に直線的に直結していくんですね。遊具一つで1000～2000万円かかってくる。整備したとしても、その後の維持管理コストも発生していく。そうになると、財源があるかないかで話が終わってしまうんです。もちろん、そのあたりもしっかりと議論していきながらですが、大きなハードに頼らない遊びの大切さもしっかりと論点化していかないと、「関わりしろ」のようなものがなくなっちゃうんですね。「遊具が欲しい」「でも、お金がない」って、議論がそこで終わってしまう。そうじゃない議論の筋をちゃんと豊かにしておきたい。そういう想いが強くあります。

横：資料にも、「本来、子どもたちは何も無いところから遊びを生み出す創造性を発揮する存在であるはず」ってありますよね。確かにその通りなんですよ。

何が伝わると良いのか

熊：さきほどから、なかなか伝わらないという話もあがっていますが、これはまず伝わると良いなっていう話ってありますか。

横：うーん、やっぱりいろんな行動には理由があるということなんじゃないですかね。

熊：理由。

横：イヤーマフは、音への感受性が強いのでそれを和らげるためですけど、他にもヘッドギアをしている人もいますよね。あれは、てんかんで倒れた時に頭を打たないためです。そういうのは理由を知らないから奇異に見えて、変な人ってなっちゃうから、やっぱりその理由をちゃんと伝えていくようなシステムがあればいいなって。

熊：ああ、確かに知る機会がないように思います。

横：他にも、からだを前後に揺らしたりして同じ行動を繰り返すロッキングというのも、身体的に結構気持ちいいとかしっくりくるようなんですよね。

熊：なんか、そのしっくりくる感じはわかる気がします。

横：まあ貧乏ゆすりみたいなものですからね。公園で言うと、ジャングルジムとかの高いところに登って、うわあうわあと叫んでいるとする。これは、眺めが良くて気持ち良くて大声を出しているわけです。

熊：山登りして、頂上でやつほ～ってやっているのと同じですね。

横：そう。でも、シチュエーションが公園だと、そういう特性を知らない人からすると、近寄っちゃいけませんよみたいな反応になるわけです。

熊：ああ。

横：だからまあ、そういった行動には理由があるということがわかるような情報提供があれば、なにも周りをびっくりさせようとしているわけじゃないし、楽しんでいるんだったら、一緒に楽しんじゃおうかなみたいなことになるかもしれないじゃないですか。

熊：楽しい気持ちって、伝播したりしますしね。

横：そうそう。ほら、日本人特有の他人に迷惑かけちゃいけないみたいな美徳みたいなものがあって、迷惑をかけるくらいなら、そもそも公園に連れて行くべきじゃないみたいな自主規制のような空気が昔はよくあって、まあ、今もあると思うんですけど、一般の人も接する機会もなくなっていく。それが悪循環。保育園や幼稚園や学校のことも考えても、当然、障害に配慮した教育は必要だと思うんですけど、離し過ぎちゃうのも、ちょっとやりすぎだよなって思うわけです。ちょうどいい距離感、もしくは、ちょうどいい壁の高さってあると思うんですけど、日本はその壁が高すぎる。

熊：お互いに見えなくなっちゃっている。

横：そうなんです。障害者ってレッテルを貼られた時点で、もうそのルールにもう完全に乗せちゃおうとするとか、一般の人とはもう切り離された存在みたいなところに追いやっちゃってると思うんですかね。

同じ人間同士であることを忘れないために

熊：どういう公園にすべきか？という話は、ほとんど、どういう社会にしていきたいか？という話と同じになってくると思うんですね。なので、そのあたりのこともしっかり考えておきたいです。

横：視察してきたスウェーデンでは、それこそ保育園や幼稚園から一緒なわけですよ。一緒に混ざっているわけですが、配慮すべきところは分けて、配慮が届くようになっているんですね。学校も、日本だと特別支援学校と普通の学校って完全に場所も建物も別じゃないですか。ところがスウェーデンは必ず一緒なんです。同じ敷地内に普通学校と特別支援学校があって、つながってるんですよ。うまくそこを行き来できるようにできてるんですね。だから、たとえば運動会とか音楽会とか、そういうのはもう基本一緒にやるっていう。でも配慮が必要なときはうまく分ける。そこの線引きというか、壁の高さが絶妙なんですよ。

熊：なるほどです。

横：ところが日本では、区切りたがるし、分けたがる。でもお風呂の温度とか料理の味付けだって「丁度いい」ってあるじゃないですか。だから、精神障害がある方向けのグループホームの建設が、その地域の9割の住民による反対運動で頓挫するみたいなことも起こるんですよ。

熊：胸が痛いというか、区切って切り離して、見えないところに追いやりたいとしてしまうことの歪さは感じます。

横：反対運動をしている側の言い分を読んだりすると、子どもたちの安全を守れとか、地域の安全を脅かすなってあって、障害者のことをライオンかなんかだと思ってんのかなって。

熊：笑えないです。

横：ただそれは要は多分情報が無いからだと思うんですよ。さっき言ったように距離感が遠すぎるから、知らない人間のことを怖い存在って、やっぱり思っちゃうと思うんですよ。

熊：うーん。

横：知らないが故に怖いという感情が出てくるんだから、だったらちゃんといい面も悪い面も正しく伝えるっていうことが必要なのに、さっきもちょっと言ったように、精神知的障害者に対する正しい情報を発信するコンテンツが日本では非常に少ないんですよ。だからそういう反対運動が起きるっていうのも、ある意味必然なのかなと思ってるね。

熊：うーん。

横：ただ、そういうコンテンツを用意したところで、ほとんど誰も見に来ないよって、いろんな人に言われています。そもそも興味がない人は自分から見に来ないって。

熊：うーん。

横：だから、公園に話を戻しますが、いろんな人が集まる公園というものが、そういうことを知るきっかけになる場になれば嬉しいというか、社会的に意義のある取り組みになっていくんじゃないかなって思いますよね。

熊：ああ、公園という場を、ひとつのメディアやプラットフォームとして捉えて、伝わるべきメッセージを乗っけていくということの必要性があるということですよ。

横：そうです。

保護者の学びと交流の場

横：姉のこともあって、昔からダウン症の親兄弟の会っていうのに入ってた、そこで仲良くしてる人で、療育施設のセンター長をやってる人がいるんですけど、そこに見学に行ってきたんですね。療育施設って、専門家の人が一時間くらい、その子どもと遊ぶんですけど、大抵マジックミラーになってて、保護者がその様子を見られるようになっているんですよ。それで、たとえばその子どもがこんなおもちゃ嫌だって、おもちゃを投げたりしたときに、その対応や接し方の参考にできる。

熊：なるほど。そもそも、それこそ子育ての様子も普段はなかなか見る機会がないから、知る機会が必要ですよ。

横：大人にとっても学びの場なんですよ。小金井の児童発達支援センター「きらり」にも、同じように保護者の待合室があって、一時間の枠で2人とか3人とかの子どもを受け入れているんで、保護者同士の交流にもなりやすいんですよ。

熊：なるほど。公園がそういう、大人の学びだったり交流の場として機能したら良いなって素朴に思っちゃいました。

横：そういうポテンシャルがあるはずですよ。

自分たちごとにしていくために

横：そうそう、この間、その小金井橋で1人で自転車で待ってたんですよ。そうしたら、生活実習所っていう大人の知的障害者のための施設があるんですけど、その支援者の方が二人、先頭と後ろにいて、それに挟まれるように5、6人かな、利用者の方がいて、晴れているけど長靴履いていたりとかして、まあ奇異に映る集団ではあるんですよ。「お疲れ様です、わたしもお世話になっているんです」なんて一声かければ、支援者の方も、うんそうなんですかってなったと思うんですけど、ちょっとそのときは気が回らなくて、ちょっとチラチラ見るぐらいで終わっちゃったんですね。だから、支援者の方からすると、そのわたしのチラチラが、奇異な眼差しとして感じられちゃったかもなって。それで、そのときに思ったんですけど、自分が協力的で少なくとも理解をしようとしてますよってことを表せる何かがあったらいいなって。

熊：なるほど。

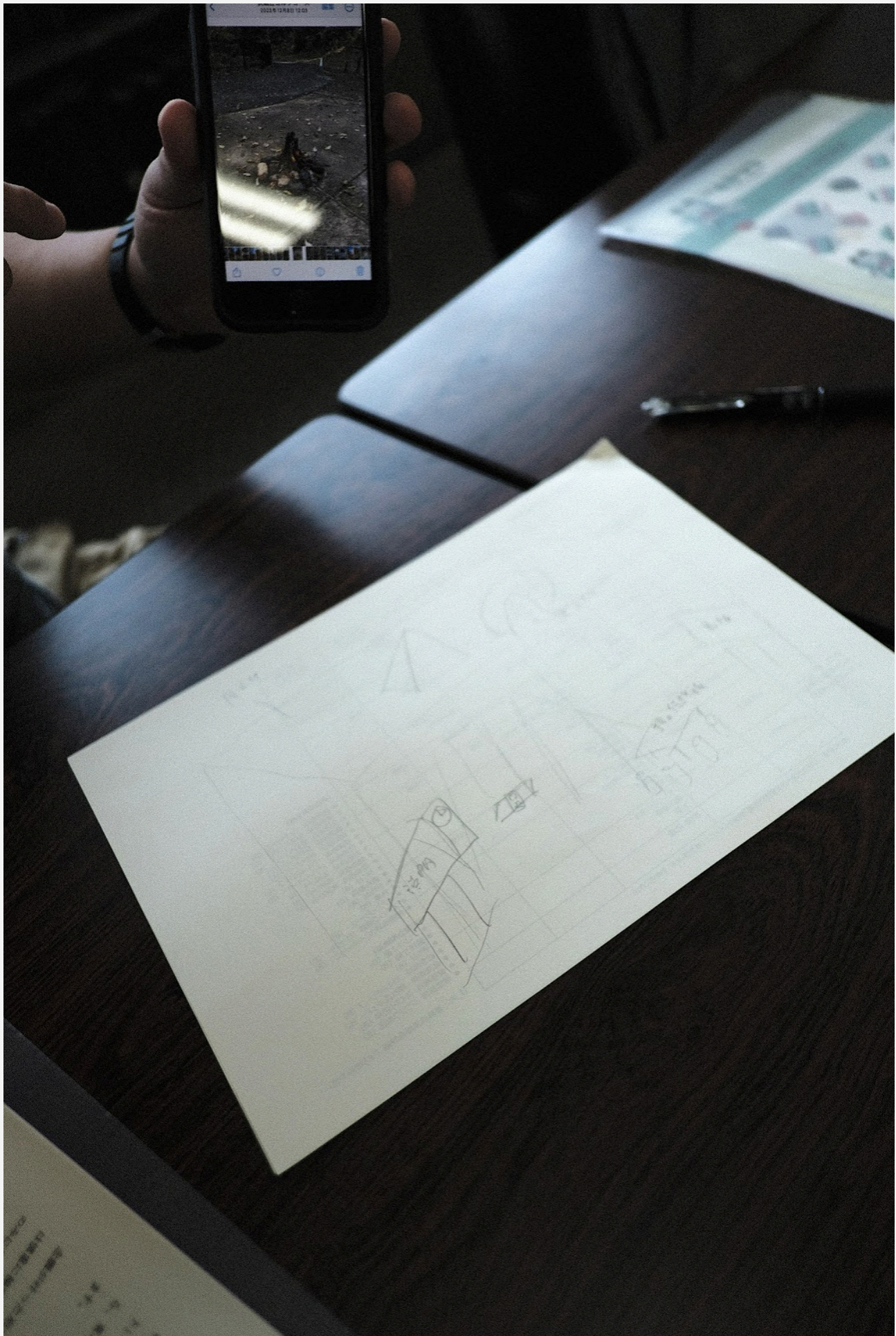
横：たとえば、電車の中でも、そういう方がいたときに、もしなにかあったら手伝いますよみたいなことがわかれば、ちょっと嬉しいじゃないですか。

熊：なるほどなあ。

横：ひとつのヒントになるかもしれないんですけど、3月21日って、国連が制定した「世界ダウン症の日」なんですけど、スウェーデンでは「ロッカ・ソッコールナ」って言って、みんなで左右違う色の靴下を履くんですね。結構普及していて、その日は、大人も子どもも、それこそ総理大臣もみんなですること、そういう理解を社会全体で深めていこうとしているものなんです。「ロッカ・ソッコールナ」って、直訳すると「靴下でロック」で、要するに「左右ちぐはぐの靴下で社会を揺さぶる」という意味がこめられているんですね。

熊：なんか素朴な感想として、そういうのがかっこいいですね。それと、うーんと、なんと言いますか、なにか答えなるものを欲しいとしたときに、あんまりパターンって無い気がしているんですね。答えを持っていそうな外の人に教えてもらうか、自分か自分たちでどうにかするということだと思うんですけど、地域のなかに詳しい人や思いがある人が必ずいらっしゃるはずだから、そういう方々と答えを一緒につくっていくようなことをしたいと、このプロジェクトでは強く感じていたんですね。それでまあ、当事者の方々が詳しいということは、ある意味でいうと、そうせざるを得ないような状況だったとも言えると思うんですけども、とはいえ、とにかくじっくり話を聞かないことにはということで、このインタビューを続けているんです。それで、横田さんって、まだ2時間も経ってないですが、まだ日本で試されていないけど、でも試したほうが良いアイデアみたいなものをたくさんお持ちだになって思って、さらに素朴に思ったのは、それらを少しずつ試行錯誤して、より良い状況に近づけたら良いじゃんって感じちゃいました。試されるのを持っているアイデアがたくさんあるって。

横：いろいろとやってみたいんですね。



遠山敬子さん

あたたかい眼差しさえあれば

取材日：2024年6月28日



あたたかい眼差しさえあれば

遠：「play here」の資料を読んで、自分が感じてきた生きづらさと、不便さと、それと疎外感とかが言葉にされてるのを初めて見たなって感じました。

熊：たとえば特にどのあたりが印象的だったかということをお聞きしてもよいでしょうか。

遠：今、息子のママになってもうすぐ10年で、それまでは自分はマジョリティー側で生きてきたわけなんですけど、子どもができてマイノリティになって、そっち側にいたときは気がつかなかったことがたくさんあって、無意識にやってきたことが、生きづらさとか不便さというものを生んでしまっていたんだなってことが、客観的に理論的に言葉にするとこうなるんだなっていうのをまず感じました。

熊：それは、『「社会」を扱う新たなモード－「障害の社会モデル」の使い方』という書籍から引用しているところあたりですね。このインタビューの依頼があったときには、どのようにお感じになりましたか。

遠：10年経って、やっと来たかって。遅いなっていうのと、ありがたいなっていう両方の言葉がわたしのなかに浮かんで。

熊：ああ。

遠：子どもが小4になって、私だけだったら対応できない大きさとか重さになってきているんですね。それと、平日は人が少なくてストレスがないんですけど、土日に自分1人で遊びに連れて行くと、なにかこう、人々の目に殺されるっていうか、つまり、どんな公園があったとしても、その子たちへの理解とか、親の気持ちの汲み取りとか、少しでもそっち側の発想になるきっかけがないと、行きにくい。

熊：突きつけてくるような眼差しに晒されることの生きづらさ。

遠：そう。いろんな目で子どもが見られる。本当に見たことないような怖い目で見てるよっていうことを伝えたってというのが本音です。

熊：そういった目が、公園に行きづらくしている。

遠：そうですね。公園でなくても、道を歩いてるだけでもそうですね。うちの子はダウン症なので、やっぱ顔つきが特徴的というのと、もうある程度大きいし歩き方も不安定なので、まず公園の中の遊具に行くまでが一苦労っていうか、だからまあ、一つ一つがちょっと目立っちゃう。で、あと、こだわりがあるから遊べる遊具が限られて、ずっとそれをやってる。

熊：ずっとやれちゃう。

遠：うん。他の子どもたちに譲りづらい。だから、「貸して」って言われて対応をするのもキツくて、結局、わたし一人で公園に連れて行けなくなったというのが現状で、わたし一人で連れて行くと心がやられるから。

熊：心がやられる。

遠：そういう困り事を、いろんな人と交流して自分でいろんな人に伝えてくださいねって言われたとしても、絶対嫌。

熊：心がもたない。

遠：もたない。

熊：お聞かせいただける範囲で、お聞きしたいんですけど、やっぱりそういう眼差しのつらさとかも含めて、ある種当事者じゃないとわかり得ないものって当然あって、だからむしろ簡単にというか安易に理解を示されることのつらさもあるというニュアンスもあるんでしょうか。

遠：みんな、多分言ったらわかってくれるんだろうけど、想像を絶する世界...だから、何から伝えたらいいのか正直わかんないです。

熊：ああ、ありがとうございます。今回のインタビューの趣旨というか、インクルーシブな公園を目指すとなったときにまず本当に何をすべきなのかという問いに応じようとしてくださっているわけですね、今。

遠：そう。スロープがあったり、遊具がインクルーシブ対応していたりすることがベストなんだけど、その前に捉え方とか、向ける目を気をつけてねってところがないと本当の解決にはならないです。

熊：おっしゃる通りと思っていて、ハード整備をしてお終いではないはずで、そういう理解というものが促進されることが必要って、強く考えているんですね。それで、えっと、そうしたときに、行政施策とかでよくあるのが、地域の方に集まってもらって、当事者の方の話を聞く勉強会とか講演会のようなものなんですけど、それはそれで重要な機会であると思いつつも、一方で、常に、当事者の方々が説明責任のようなものを背負わされるというか、その説明や説得のようなことを、当事者の方々に丸投げするようなことは違うよなとも思っているんですね。それで、気になったのが、先ほど、「色んな人と交流しながら、困り事を説明してください」みたいなことも心がもたないという話をされていて、そこにある切実さというか、そのあたりのことをもう少しお聞きしたいです。

遠：やっぱり外へ出たら、自分のかわいい子が、怖い目で見られるということが、シンプルに傷つく...。それが、積み積みもって...、うん、トラウマになっちゃった。

熊：うん...。ちょっとごめんなさい、言葉が出ません。

小：わたしは、妹が知的障害をもっていて、その向けられる目というのは、わたしも経験をしていて...、いま、せっかく仕事をさせてもらっているんで、ひとりでもそういう方が公園に来たら、ちょっと落ち着けたり、その後の家事とか育児とかをがんばろうと思えたりとか、そういう場を公園ならつくれるんじゃないかなと思って...。

熊：小金井市の小林さんとわたし二人して...言葉が完全に詰まりました。

小：すみません...。気持ちがわかると言いたいんですけど、でも障害といっても個人個人に違いがあるし、それぞれ気持ちも違うので、たとえ同じ境遇だとしても感じ方も違いますし、だからその...完全にわかることができていくかというところとは思えんですけど、だけど、こういったプロジェクトやチームを通して、しっかり伝えていくということが本当の目的だとも思っているんですね。そういったことは、これから生まれて来る子もたくさんいるんで、時間がかかるからこそ、早くはじめて浸透させて、少なくともせめてこの地域だったら理解があって良かったって言えるようにしたいって...。

遠：そうなったらすごいですよね。そう...、涙が止まらなくなるくらい...、そのくらいの大変なことだっていうことなんですよね。そういう目線に関しては難しいですけど...うん...福祉関係の人とか、そうかなみたいな子のママとかは、やっぱりお互いにニコニコするからわかる。後から、やっぱりそうなんですねってなります。

熊：そうですね。だから、そういうあたたかい眼差しが交差する状況を目指したいと思うんです。

遠：うん…。今は、そういう子を目にする機会がなかなかなくて、だから一瞬怖いと思うから、そういう鋭い目を向けるんだと思います。

熊：普段接する機会がないから、目つきが鋭くなる。その鋭い眼差しによって、そういった方々がますます外に出ることが出来なくなる。そうなることで、より一層、普段お互いに接する機会がなくなる。これって、悪循環ですよね。それで、その悪循環を断ち切るために、そういう眼差しを向けられている側に、気にしないようにしましょう、我慢しましょうとは言えないです。でも、その悪循環は断ち切られるべきだとも思います。

遠：わたしからは、思っている以上に鋭い目つきをしているかもしれないから、ちょっと意識をしてくださいねって感じの言い方をするくらいがやっとで。

熊：なんというか、当事者の方々からお願いされないと変わることができない状況というのも、ちょっと違うというか、先程の説明責任を一方的に背負わせるのも違うという話と同じように、そもそも当事者の方々が懇願というか、お願いをしなきゃいけない状況そのものを変えていかないといけないような気もするんですよね。お願いをする・されるではなくって、それぞれの経験や想いを持ち寄って一緒に、より良いものをどうやって実現していけるのか、っていう。

トイレという、いろはのい

遠：わかりやすいところで言うと、トイレが…。

熊：そうそう、「みんなのための公園を」ってなっても、インクルーシブ遊具ばかりに目が行ってしまいがちで、そう、そういうところなんですよ。

遠：きれいな車椅子用のトイレがあるのは必須です。うちの子は日中はオムツがとれてますけど、外に出るときは、うんちなのかおしっこなのかかわかんないとかで間に合わなかったり、他にも待っている人が並んでたりとかで漏らしたら、もう、うわああああってなるから、オムツしてるって感じで。歩行を補助する装具もゴツいんで、トイレにベッドがあって、ちょっと座らすことができないと、もうオムツ替えは無理。

熊：ベッドが必須という声は本当に良く聞きます。なかなか身近な公園での整備が追いついてないですよ。

遠：そう。赤ちゃん連れも来るし、時間もかかるから、本当は2つぐらいあったらいいなって。

熊：今だっていうときに入れないと…ですもんね。

遠：はい。それと、男性の方って個室が少なくてオムツ替えスペースがなかったり、あってもそもそも少ないことってめっちゃあるから、パパ1人のときはパニックみたいになったり、2人でいても結局なかったよってことでママが連れて行くことになったりします。だから、ベッドがオムツ替えのために必須で、ベッドがなくても着替えるための台みたいのでもすごい助かる。

熊：空港のトイレとかにある、靴を脱いで上がる「チェンジングボード」みたいなやつ。

遠：うん。女子だったら、ストッキングが伝線したときに使ってくださいねみたいな感じで、女子の方の個室には結構あるんです。

熊：あ、そうなんですね。

遠：それが男子の方にもあると、パパが連れてても困らない。

熊：そうか、なるほどです。このプロジェクトでも、トイレのユニバーサルベッドの必要性というのを重く受け止めていて、なので公園の既存のトイレに追加で設置しようという動きもとっていたんですね。でも、そもそもトイレが狭くてベッドが置けないという現実には直面していたんです。トイレを新設する際には、だからそのあたりも考慮していかないといけないと感じているんですが、一方で、今あるトイレをどう活かしていくかということも考えないといけないとも感じていたんですけど、ベッドが置けないからお手上げとかじゃなくて、そういう台があるだけでも、少しはマシになるかもしれないということですよね。

遠：公園のトイレって床が汚いから、そういう台とかで、床から一つ上がったところがないと、オムツ替えとか無理ですね。

街や公園に出れない、家族と一緒に遊べない

熊：うーん…。少し想像しただけでも、先程の鋭い眼差しを浴びるということや、人間の生理現象でもあるトイレもままならないとなったときに、心が折れるというか、どうやって公園や街なかに出掛けることができるんだろうかって。

遠：なので…まず…出ない。それでわたしが今、鬱になっちゃったので、まず出ない。子どものためにつてがむしゃらにやってきたら自分が倒れちゃったから、今、自分のために出ない。

熊：ああ…。

遠：「移動支援」っていう支援があるんですけど、一対一でヘルパーさんが余暇活動をしてくれるんですね。公園でも遊んでくれる。うちの子は今10歳で、去年から利用し始めたんですね。土日は家にいても弟くんもいるし、家にずっといてもつまらないだろうし、だからヘルパーさんに吉祥寺とか、それこそ府中の森公園のインクルーシブ遊具のところに連れてってもらって、わたしは回避できている。土日の人混みの人の目と、トイレの困難さを。

熊：心やからだが壊れてしまわないための、瀬戸際の方法って感じがします。

遠：なんですけど、その移動支援をしていていた事業所が経営困難で潰れちゃって、必死でまた探して、また見つけてっていうことをしていたんですね。まず、そういう事業所が潰れるのがおかしくないかっていう。

熊：正直に言うと、こうやってインタビューをしっかり重ねていかないと、その逼迫した感じでの移動支援の重要性というものには意識が向かなかったんですね。でも、よくよく考えてみたら、公園のなかだけを整備して、「みんなのための公園です」なんてやってたとしても、そもそもにたどり着けない状況があるというのは、あまりにも切実で、そこを直視しないことには、このプロジェクトも絵に描いた餅だになって、強く感じました。

遠：子どもが今は連れていける大きさだけど、中高生とか大きくなった子の親はもっと困っていると思います。

熊：そういうことなんですよ。えっと、遠山さんの上のお子さんが10歳で、下の弟さんがおいくつなんですか。

遠：2歳です。

熊：うーんと、そうなってくると、一緒に出掛けるといことがかなり…。

遠：歩行が不安定なお兄ちゃんと、2歳の弟くん、どっちも遊ぶときには補助が必要で、同時にというのは不可能です。

熊：どうしてもそうなりますよね。

遠：お兄ちゃんだけ移動支援で行って、弟くんはわたしと家や近所で遊ぶとか、逆に弟くんを土曜日の保育園に入れたりとか…。

熊：やりくりをしないといけないことが膨大過ぎます。

遠：どうしても弟くんもお兄ちゃんと遊びたいってなるし、遊んで欲しくもあるから、3人で遊ぼうと思ったら、移動支援のヘルパーさんに来てもらって、同じ公園で一緒に遊ぶ。

熊：それって、鋭い眼差しが注がれてしまうという話もありつつ、それと同時に、子どもたちの命を守るといのか安全管理という意味でも、物理的に無理があり過ぎるといのか。

遠：お兄ちゃんがギリギリ乗れそうな大きめのベビーカーを買って、弟くんが走ったら、それにお兄ちゃんを乗せて追いかけてようかなとか、最初考えてて。

熊：そこまで…。

遠：そこまで考えなきゃいけない。でも、弟くんはイヤイヤ期だから、もう全部イヤイヤってなるから、結局、実質無理。だから、パパの仕事が休みのときに、大丈夫だったら連れていってもらって、パパがお兄ちゃんを遊具に乗せたりとかしてくれますけど、パワー的にもわたしだと大きさに無理になってくるから。

熊：そうですね。

潰れるまでいかないと、支援を求められない

熊：んーっと...これ、ここまで少しお聞きしただけでも、心が折れるというか、潰れるというか、一人の人が背負うことができるキャパシティをかなり超えているというか...。ちょっと安易な質問な気もしますが、みなさん大丈夫なんでしょうか。

遠：わたしは大丈夫じゃなかったというか、最初は自分の子を他の人に任せられないよって思ってたのが、病んじやったから、もう抱えていたものを強制的に手放すことができたようなものですけど、他のママたちは、うちぐらいにいろんな支援を利用してないと思います。自分がやんなきゃとか、自分がみてないとかわいそうだからっていう気持ちが勝っているから。利用したくても、ヘルパーさんが足りなくて利用できないという方も、もちろんいらっしゃると思いますけど。

熊：んー。いやでもそれって、なにかこうギリギリの線にいらっしゃる方が多いという状況ではあるじゃないですか。言い方が適切じゃない気もしますが、遠山さんは、要はぶっ倒れたから、そこで初めて自分自身をケアすることにやっと踏み切れたわけですけど、逆に言うと、ぶっ倒れてなかったら、もう、それ死んじゃうよみたいな話になってくる。

遠：結局、子どもを生んだときから無意識に、一人目だったから健常児を育てたことがないなかで、お母さんだからこういうもんだと思って生きてきて、二人目が生まれて全てがやつつけの状態で崩壊して鬱になって倒れてやっと、普通の生活をしてなかったんだって初めて気づいた。ご飯も洗濯も掃除も別に何も完璧じゃないのに、母親として完璧にやらなきゃって思い込んで、決め付けて頑張っちゃってた。お母さんだからこういうもんだとして生きてきて、子どもを可愛がって世話してきたこと、それが崩壊したときに、そもそも自分がオーバーワークだったんだって。そう言いたかったんだけど、言えなかった。というか、そう思いもしない。

熊：発想の選択肢に....。

遠：そう、発想にも浮かばなかった。けど、そうだという現実がある。ランチ会とかでも、喋り倒して愚痴愚痴は言うから気づいてそうで、やっぱり気づいてない。頑張っちゃってるから。

熊：愚痴は言うかもしれないけど、もう自分のことを気に掛ける余裕もないし張り詰め続けている。助けてなんて言う選択肢も発想も浮かばない。そもそもオーバーワークをしないと子どもたちのケアができる状況じゃなかったから、そのオーバーワークがデフォルトになって、その異常さを感知できない。

遠：子どもが言えない分、今、喉乾いてないかな、お腹空いてないかな、トイレ大丈夫かなって。怪我したら、どこが痛いのかなって。風邪でも、喉が痛いとか、お腹痛いとかもすぐはわからないし、鼻水出てるから、多分鼻と喉がきついんじゃないかって。そんな発想で全部汲み取って、拾い上げて....。

熊：常にそういうことを、息つく暇なく気を回し続けなきゃいけない状況なわけですね。

話を聞かれる機会がない、話を本当に聞くということ

熊：今日のこのインタビューの冒頭で、「10年経って、やっと来た」という感触を寄せてくれたじゃないですか。やっとこういう取り組みが始まったということと、やっと話を聞きに来たということ。その両方の意味で受け止めていたんですね。話が巻き戻ってしまうんですが、そのあたりのニュアンスをもう少しお聞きしたいのです。

遠：それはもう、全部。

熊：全部。

遠：なんかインクルーシブ公園って最近いろいろとできてきているから、行ってみると使いやすいなとか、うちの子が初めて高くブランコ乗れたわとか。

熊：ああ。

遠：うちの子は体幹が弱いから、これまでちょっとしかブランコができなかったんだけど、インクルーシブ遊具のブランコって、ガシャンってからだを固定してくれるから、すごい高いところまでいけて、すごいニコニコになって、ああ、すごいわって。だから、もうちょっと早くからそういう公園があったらよかったなって。「やっと来た」ということで、でも、別に遅いよって責める気持ちはないですけど。うん。なんで...、ありがたいし。あと、うちの子は、4歳ぐらいで歩いているので、そもそも公園を抱っこで回ったり、滑り台に乗つけて、ちょっと滑れるかなとか、そんな感じだったけど、たとえば自閉症の子たちだったら、多分2歳とかからバンバン遊べるから、その視点で話せる人もたくさんいるし、話たいたろうし。うん。だから、そういう感覚です。

熊：これまでにない笑顔を見るとか、初めてのことが叶うというのは、何事にも代えがたいものがある気がします。それで、えっと、このプロジェクトで気にかけていることでもあるんですが、話を聞くということが、いったいどういうことなのかっていうところを、ちゃんと考えていくと、結構難しいことだと思っているんですね。それは、今回のようにちゃんとじっくりお時間を頂いて聞くという深さと、いろんな人からちゃんと聞くという広さという意味でもそうなんですけど、大事なのが、話を聞いた後に変わる覚悟があるかどうかというところで。変わるというのは、自分たちが話を聞く前と後ではちょっとまた少し別の人になっているというか、そういうことの連続なんですね、このインタビューの取り組みが。で、それだけじゃなくて、プロジェクトそのものも、お聞きした話を解釈して反映して、やっぱりそのプランや考え方を更新していかないといけない。自分たちもプロジェクトも、変わる気がないのに話を聞くことって、めちゃくちゃ失礼なことだと思ったんですよ。だから、なにをもって話を聞いたこととするかっていうのが、とても繊細なことだと感じているんです。

ここに居てもいいというメッセージをどうやったら伝えられるか

熊：それで、それこそ今日お話を聞きながら、たとえば「眼差しに殺される」といったことが、もはや比喻でもなんでもなく現実味を帯びる言葉として、自分のなかで響いているんですね。で、それってつまり、「包摂」という意味をもったインクルーシブという言葉の反対側にある「排除」という言葉にもつながってくる。だから、体感として「ここに居たい」とか「ここに居てもいい」という安心感が奪われてる。

遠：はい。

熊：トイレとか遊具とか、そういうことの整備であるとか、移動支援のようなことへのケアの必要性ということも前提に置きつつ、何ができるんだろうって。それで、今回、大きな遊具といったハード整備で終わらせないというためにも、菜園とか花壇、鳥の巣箱とか、まあそういった中規模、小規模な工夫も視野にいれたいと考えていたんですけど、やっぱりそういったものを、みなさんと一緒にできないかなって。

遠：うちの子は、公園をただぐるっと回るだけでも楽しくって、そういう意味でもお花っていうのはすごく良い。

熊：そうそう、「play here」で言っている遊びって、なんというかお散歩とか日向ぼっことか、そういうことも含めてのものだと思うんですね。だから、ただ別になにもしないことの自由だってあるし、風が気持ち良くなってだけでも良いし。それでですね、その花壇とか鳥の巣箱とかをつくる作業を、作業そのものが出来るできないは置いておいて、一緒にできないかなって。そうすることで、その子や保護者の方との公園との関わりが、ちょっと踏み込んだものになるから、少しでも「ここに居ても良い」と感じられる機会にならないかなって。みんなで一緒につくるといって、そのスタートの時間をともにできたら、そのあとは、ああ、あの花が咲いたかなとか、鳥が来ないかなって、公園にいくきっかけにもなるし、人と人が会話するきっかけにもなるでしょうし。

遠：それ、いいですね。

熊：大きな理想を持ちつつ、小さくちょっとずつ、やってみたいんですよ。



中山雅和さん

理学療法や作業療法の知見を地域にひらく

取材日：2024年7月12日



必要としている人たちに届く仕組みを

中：子どものリハビリに関わり始めて、もう十数年ぐらいになるんですね。小金井市の児童発達支援センターの「きらり」さんでお仕事をさせていただいたのが最初で、それは非常勤で今も続けてるんですけども、そのなかで親御さんともいろんな話をする機会があつて。親御さんも通い始めは、やっぱり当然ショックを受けておられている状況ではあるんですけど、リハビリのプロセスのなかで子どもが成長していく姿を見るにつれて少しずつ安心されていきますし、その中でご自身のお子さんの現状を受け入れていくっていう。そういう流れを見る機会がたくさんあったんですね。

熊：ああ、そうか。とても切実で、大切な支援ですね。

中：ただ、そういった支援センターにアクセスすることができるお子さんや親御さんたちはそうなんですけれども、今、小学校などの環境のなかでグレーゾーンに立たされているお子さんたちが本当にたくさんいる。でも、どこに相談していいのかわからないとか、或いはその相談に行くことで、自分の子どもがそういうレッテルを貼られるんじゃないかっていう不安でもって踏み出せない親御さんも地域には多くいらっしゃるんじゃないかなって思っています。なので、そういう支援センターとかにも全く接点がない親御さんや子どもさんにも向けて、関わりをどうやって広げていけるかなってことも考えてきたんです。

熊：支援を必要とされている方が潜在的にとっても多いけど、なかなか接点を持ちづらいと。

中：はい。たまたま知り合いの方で、小金井市内に住んでる言語聴覚士さんがいらっしゃるんですね。その方が、言語聴覚士の仕事をやりつつ、自分でカフェをやってるんです。そこが「まちの保健室」みたいな感じになっていて、近隣に住んでる方たちが、少しずつ集い始めています。そうすると、自分の子供の不器用さがちょっと気になるとか、言葉がちょっと遅いんじゃないかとか、そういう話が出るようになってきて、その流れで「理学療法士さんにみてもらえるよ」っていうことで、わたしも時々そこに呼ばれて、親御さんからの相談を受けるという機会が、どんどん増えていったんですね。

熊：接点がなかっただけで、良い出会い方をしていれば、その必要性というものが具体的になっていくという。

中：そうなんですよね。ADHDやダウン症のお子さんを持つ親御さんも多くいらっしゃるので、次第に、勉強会をやってほしいっていう話が出るようになりまして、どういう関わり方が必要かっていうことを集まってくださった方々にお伝えしていくことになったんです。そうすると、どんどんいろんなお子さんや親御さんにつながるようになっていく。ですけども、自分一人の力で続けていくのには限界がありますし、そもそもカバーできる幅も狭いなど感じていたんです。そういったなかで、今度はその言語聴覚士さんが所属してる訪問リハビリの事業所から、非常勤でいいから関わってくれないかっていうお話をいただいたんですね。

熊：おお。必要性に突き動かされていっている感じですね。

中：訪問リハビリであれば保険が適用になりますし、やっぱりそういう制度があったほうが支援を受けやすくなっていくってところがあるって。たとえば本来ならば診断がなかなかつかないようなお子さんたちにも、お医者さんと相談をしながら訪問リハビリができるようにしていて。

熊：グレーゾーンの状態って、制度的なカバーも難しいのでそういうコーディネーションも求められますよね。やっぱり制度的な担保があると、活動は続けやすいですか。

中：はい。今、月に1日のペースですけども、訪問リハビリの制度を活用して、5件くらいのご家庭に関わらせていただくことが叶っています。

熊：えっと、中山さんは、社会医学技術学院の理学療学科長補佐というお立場もお持ちですけども、学校で理学療法士を目指す方々に向けた先生もやりつつ、そういった活動をされているんですね。

中：そうです、そうです。

公園と、そこにいる人の重要性

中：お子さんに関する理学療法の関わりって、歩けるようになるまでがゴールになりやすいんですけども、本当の問題って実はその後にあることが多いんです。お友達のように速く走れなかったりとか、ジャンプができなかったりとか、そうすると日常の集団生活の中でも、置いてかれてしまう状況が出てくるので、訪問リハビリでは、そういうところをみているということが多いですね。

熊：暮らしや生活ということを考えると、丁寧にそれぞれの状況にみあったゴール設定をすることが求められるということですね。

中：そうですね。歩けるようになったんだけど、走るのがおぼつかなくてとか、バドミントンのラケットの操作ができなくてとか、いろいろなんですけど、個別の困りごとに対応をしています。なので、わたしの訪問リハビリでは、公園で子どもたちと一緒に遊んで、からだを動かしているんです。

熊：え、そうか、そこで公園が出てくるんですね。公園が楽しいリハ室になっているという。

中：公園はすごい大事な環境だと思ってまして、外遊びの大事さとか、遊具の効果といったことも講演会とかでお話をさせていただくことも多いんです。

熊：公園の重要性。

中：子どもの発達のために、外遊びや遊具といったものが重要というのはもちろん、別の観点でいうと、先程から挙げているような、本来必要としている方々との出会いの場としても、公園というものは重要だと思うんですね。

熊：ああ、まさに、地域の中で公園というものが持っているポテンシャルというものをしっかり顕在化していけないといけないような気がしてます。人が想像力を発揮したり、出会ったり、関わり合ったりするという。

中：人の存在って重要ですね。「play here」の資料にも、ハード整備だけだったら不十分だって書いてあったのを拝見したんですけども、本当に全くもってその通りだなと思ってまして、昔はもう遊具なんてほとんどないような公園でも、しっかり遊んでいましたよね。どんな子どもでも、遊びを自分でクリエイティブしていく能力を持っているんですね。ですから、遊具を整備してお終いにするんじゃなくて、遊び方をたくさん教えてあげるっていう、そういう人の存在や、人と人同士の関わり合いみたいな方が大事じゃないかなと思うことが多くて。

熊：まさに、そう思います。

中：小金井市内でも「プレイパーク」をやられていると思うんですけども、その「プレイリーダー」みたいな、上手く遊びを誘発していけるような人がいる状況が常であるような環境づくりができると、子どもだけで公園に遊びに行きやすくなりますし、子どもも公園での遊び方を自分で広げていくっていう経験になっていくので、将来の糧になっていくんじゃないかなと思います。なので、むしろハードよりもそういったソフト面というか、人の存在でカバーできるものが多いと思うようになって、ずっと思っているとこだったんですね。

熊：まさにまさにというところで、今回のこの事業でどこまでカバーできるかということは考えないといけないんですが、だとしても理想像といったものはしっかり持っておいたほうが良いんじゃないかなと考えているんです

ね。で、おそらく人の介在を減らすためのハード整備ではなくって、むしろ人と人の関係性を育てていくためのプロセスを含めた環境整備ということが、目指すべき姿だと思っているんです。

制度や仕組みを使って、後押しすべきものは何なのか

熊：理想をしっかりと持つという意味では、あえて風呂敷を広げるようなことを意識的にしていかないと、安易にすぐできそうなことだけをやって終わらせてしまうという事態を招いちゃいそうな気がしてしまっていて、なんで、そのためにも少し質問を重ねていきたいんですけど、先ほど、一人の力で続けていくことの限界ということもおっしゃられていたじゃないですか。

中：個人のボランティアベースでの活動の限界もありますし、訪問リハビリでいうと、わたしが自分でみることができるのは月に5人ぐらいが限界です。

熊：当然、そうなりますよね。それで思うのが、行政という立場での仕事になってくると、というか社会をどうやって前向きに進めていくかでいうと、それって、誰かの困り事をみんなで解決したり、良い兆しをみんなで後押しして広げていくことによるものだよなってことなんですよ。つまり、必要としている人にちゃんと行き届くような、持続的で広がりをもった施策や制度にしていく必要があるということなんですよ。なので、福祉サービスののようなものを、必要としている人にどう届けていくのかというところが重要なポイントになる。で、それを前提にしつつ、その手前の話として、そこにある困り事や良い兆しがどのようなものなのかっていう理解を深めたいという気持ちもあるんです。なので、冒頭で理学療法を受ける中で、「自分の子どもの現状を受け入れていく」という話もおっしゃっていたと思うんですが、そのあたりも少しお聞きしたいです。というのも、理学療法として一般的なゴール設定であるという「歩けるようになる」ということと付随して、その受容というようなことも、切実な必要性として捉えることもできると思うんです。まさに、僕の息子が希少難病ということもあって、自分自身の経験にも重なるんですね。

中：ありがとうございます。自分自身が障害を持った場合もそうなんですが、自分の子どもの発達が遅いとか、何かしら障害があるっていう場合、やっぱり当然ショックをどんと受けるものです。特に自分のことではなく、子どものことになると、ともすれば自分よりも大事な存在であって、そこに対しての親御さんの責任感やショックっていうのは、本当に計り知れないぐらいの大きなものだと思うんですね。そんななかで、やっぱり、できることならこの子がリハビリをしていく中で、普通の子と同じようになって欲しいなっていう想いを持って来られる方が多くいらっしゃるんですけども、その段階でわたしは理学療法士として、どこまでできるようになるかとか、ある程度の見通しはお話することはあるんですけども、でも、そういう遠い未来の話っていうよりは、まず今、この子がこの位置にいて、ここから一つ階段を上がると、こういうことができるようになるんだよっていう目の前にある目標に、目を向けるようなお話をしていくんですね。

熊：今・ここという感覚のなかで、はたらきがけをすべきところを明確にしていく。

中：はい。おうちではこういうことをやって欲しいとか、リハビリの目的とかの話を一つ一つしていくんですけども、そうすると、普通の子と同じようにっていう漠然とぼんやりしたものから、個別具体的な目標が見えていくようになっていくんですね。それを一つずつクリアしていくなかで、親御さんもできたっていう実感になっていくし、お子さん自身も成功体験を積んでいくことになっていくんですね。子どもたちはみんな探究心のようなものがあるんで、一つできるようになったことによって、子どもの生きている世界ってぐっと広がる。この広がったとこ

ろで、また新しく興味関心があるものをみつけて、そこに向かってまた自分で、心やからだを動かしていくっていう流れが生まれていくものだと思っています。そういうお子さんの姿を見ていくと、親御さんもいつの間にか、普通の子と比べてっていうよりも、その子自身のことをちゃんと捉えられるようになっていくので、そこで受容が進んでいくっていう過程をよく見ているんです。

熊：自分自身のことを振り返ってみても、とても腑に落ちる話です。

中：本当に人間ってみんなそれぞれに個性を持っているものなので、「人それぞれ」っていう言い方があると思うんですけども、でもそれってやっぱり、なんて言うんですかね、そう簡単に投げかけられる言葉ではないと思っています。そういう経験をしてきて受容をしてきた親御さんだからこそ、「人それぞれだよ」って言えるんじゃないかって、わたしは思うんですよね。

熊：それも、非常に重要な感覚のように思います。シチュエーションにもよると思いますが、安易に「人それぞれ」っていう言葉を先回りして持ち出すことによって、そこで会話や対話や議論といったものが終わってしまうような、ある意味ちょっと暴力的なはたらきを持つてしまうというか。なので、このプロジェクトでも、なんと言いますか、思考停止のような状況にならないためにというか、会話や対話や議論を遮断するような言葉使いを避けるための努力はしているつもりです。

中：そうですね。「みんな違って、みんないいんだよ」っていう言葉を、言葉だけで捉えるのと、身を持つての経験を踏まえてそう至るのでは、大きな差があると思います。リハビリをしていくなかで、全員が全員歩けるようになるわけではないんですね。それはあくまでも一般的なゴールなのであって、それこそ、みんなそれぞれに違うゴールというものがあるんで、それを個別具体的に組みんでいくなかで、やっぱり親御さんの表情も変わってきますし、リハビリが終了しても、お手紙を頂いたりしてやりとりが続くこともあります。そういう手応えがあるから、わたしのような仕事は頑張れるということがあると思います。

先生というより、伴走役

熊：僕自身が、理学療法や作業療法といったことの仕事の、ひとつの側面しか捉えることができていなかったような気がします。というのも、運動機能の維持改善みたいな話かと思っていたら、そこに心のケアみたいな話も入ってくるんですね。それって、理学療法や作業療法の領域では、一般的なものなんですか。

中：わたしはそうだと思います。やっぱり、寄り添っていくっていうのが基本なんですよ。病院とか医療関係のところだと、医師は先生ですし、わたしたちも先生なんて言われることが多いんですけども、先生と患者さんという関係ではなくって、つまり上から見ているような存在では全くなくて、二人三脚でお子さんやご家族と一緒に歩いていく存在としてあるんで、やっぱり心の部分も含まれていくのは基本だと考えています。

熊：なるほどです。希少難病の息子を持つ親として自分自身のことを振り返ってみても、かけがえのない自分の子どもを、そのかけがえのなさでもって受け止められるような眼差しの獲得というか回復というのは、上から答えを教わるようなものではなくって、伴走してもらうことで得られていくものだということは腑に落ちるものがあります。中山さんの課題意識としては、そういう伴走役を必要としているのに、そこに出会えないというかアクセスできないような状況の人にまで、どうやってそういった機会を行き渡らせることができるかというものなんですよ。

理学療法士や作業療法士に気軽に会いに行ける街

中：講演会でお話をさせてもらったときに、ぜひ何かお子さんのことで気になることがあれば、地域の理学療法士さんや作業療法士さんに気軽にご相談くださいねって、ポンッとお伝えしたんですけども、終わった後の感想で、「身近に相談できる理学療法士さんや作業療法士さんがいないんですけど、どこに行けば会えますか」っていうコメントがすごく多くて、それに愕然としちゃったんですね。地域で活動することの重要性って、リハビリテーションの世界でもよく言われている割には、全然地域に浸透してないじゃないかって。仕事として地域に関わるっていうのは、やっぱり限定的になってしまっていて、そうすると本当の意味で、地域の人たちにとって接点を持てる存在にはまだなってないんだって思うと、結局、やっぱり採算度外視で個人として動くというか、ある種そういうことじゃないと、地域の人たちの本当のニーズに応えられないんじゃないかって。

熊：現状の制度や仕組みに隙間というか、届かないものがあるから、先程のカフェとか、中山さんみたいに、ボランティアというか、なんならときには持ち出しで、そういう活動を起こしてらっしゃるわけですよね。「地域包括ケア」みたいに、高齢者の方々に向けた地域の連携システムというものは結構議論が活発化してきている印象があるんですが、一方で、そういった子どもたちや保護者の方に向けた対応というのは、まだなかなか制度が追いついていない印象があるんですけど、どうなんでしょう。

中：本当におっしゃる通りなんですよ。置いてきぼりなんだなって思っています。もちろん高齢者の方々にとって安心して暮らしていける街というのも大事なんですけど、とはいえ同時に、子育てがしやすい社会にしていくなめにも、そのあたりのことも活発にしていけると良いですよ。なので、理学療法士や作業療法士を育てているうちの学校なんていうのは、本来もっと地域にひらかれるべきだと思っているんですね。子どものことで気になることがあれば、どんどん気軽に入ってきて、ちょっとみてくださって言える学校になればいいなって思っています。

熊：それは、めちゃくちゃ嬉しい話です。

中：個人の活動ではなくって、学校の看板をもってやるということでは、もちろん慎重にならなければいけないこともたくさんあります。ただ、うちの学校はこの小金井の土地に建って40年ぐらいになるんですけども、小金井生まれ小金井育ちの親御さんから、「あそこに学校があるなんて初めて知りました」って言われたこともよくあって、やっぱり地域にいかにひらいていくかっていうことを考えていかないといけないんですよ。なので、うちの学校には地域貢献委員会っていうのがあるんですが、その枠組みで市民公開講座を、コロナもあったのでようやく久しぶりにやるんですけども、それが子どもの発達に関連する内容なんですね。それを皮切りに、ちょっとずつ子どもの相談ができる学校としての認知が広まったりとか、そういう場所にここがなっていくといいなと考えています。

熊：それは、うん、めちゃくちゃありがたい話です。

そもそも当たり前は、当たり前じゃない

熊：ちょっと自分の話をしちゃうんですけど、自分の息子が希少難病であるということがちゃんとわかったのって、結構後になってからのことで、そのことで結構苦勞をかけちゃったなと思っているんですね。それこそ、ちょっと歩き方はおかしかったんで、親からも病院に行け行け言われて、心配性だなあなんて気持ちでスルーしつつ、とはいえ最初は整形外科にいったら外反母趾ですねみたいな感じで。で、まあしばらく、そんなもんかと思っていたんですけど、まあ親として、ちょっと怖さもあったわけなんですけど、それこそ姉の夫婦が二人して理学療法士で、ここ社医学の出身なんですけども。

中：ええ、そうなんですネ。

熊：はい。なんで、もう四半世紀くらい前ですけど、ここの文化祭に遊びにきたこともあります。それでまあ、家族の正月の集まりで、その理学療法士の姉夫婦から、これはもうただ事ではないぞというアドバイスがあって、年明け早々にバタバタして小児科にいったりして、結局入院して精密検査することになってという流れだったんです。それでまあ、思ったのは、学校の健康診断もありますけど、理学療法士という専門性がないと、気づいてあげられなかったということ。うちは、たまたま親族にそういう人がいたから良いですけど、「理学療法士に気軽に会える」ということの必要性というのは、非常に良くわかるんですね。それでまあ、たとえば足首を曲げたりができないんですけど、そうすると学校でよくやる縄跳びとか徒競走とかが、まあ無理なわけ。それは病気で無理だったわけなんですけど、病気ということがわからなかったの、努力不足みたいな扱いになってたんですね。そういうことが具体的に上げればきりが無い程にある。手先の筋力の問題で不器用さもあって、たとえば家でポテトチップスの袋をあけようとしても無理で、でも病気という発想がなかったんで、「おいおい、がんばれ、もう高学年だし」みたいなことにもなっていたんですよ。ただ、今になって思うのは、手で開けられなかったらハサミをつかえばいいし、なんなら周りの人に手伝ってもらえばよいじゃんっていうことで。

中：すごくわかると言いますか、リハビリテーションのなかでも、必ずしも関わったお子さんみんなが歩けるようになるわけでもないですし、日常生活身の回りのことが全部自分でできるようになる子の方がむしろ少なかったり、何かできないことが必ず残ったまま成長していく子どもたちの方が多いんですよ。

熊：長い目で見たら、どのような人であってもどのみち歳を重ねていけば最終的にはできないことを携えていくことになるじゃないですか。だから、そのできなさをも肯定していきたいと思います。

中：そうですね。自分で、これができないから助けてって言えることって、一つのスキルとしてすごく大事だと思っているんですね。年齢を重ねていくと、羞恥心だったりとか、いろんなものでだんだん蓋をしていっちゃうので、それが難しくなっていくと思うんですが、でも、小さい頃から、いろんな子どもや大人との関わり合いの中で、自然と助け合うようなことが習慣化していくような形になっていくといいなと思います。そもそも得意不得意なんて、みんなにあるわけで、なんというか、できることが当たり前だっていう感覚を一回リセットさせないといけないのかなと思っています。

熊：ああ。

中：ポテトチップスの袋を開けるのだって、どうやってからだをつかっているんだろうねとか、身近なことの不思議を感じるというか、そのための問いかけを子どものときからたくさんしていくことが良いのかなって思います。

熊：だいたいこうやって、しゃべっていることの不思議さもありますもんね。中山さんがおっしゃる、その「できるということが当たり前という感覚のリセット」をしてからじゃないと生まれない、会話や議論や考えというものがたくさんある気がします。

地域のおじさんになりたい

中：今、一般の小学校では、運動支援として理学療法士が関わっていくようなことが制度として成立していきそうなんです。

熊：へー、知らなかったです。

中：政策のビジョンとしては、そういう方向で動いているんですね。でも、小学校に通う前のお子さんのことを考えたり、不登校の状況にあるお子さんも増えていっていることを考えると、やっぱり地域にそれをカバーできる状況があった方が良く思うんですね。究極を言ってしまうと、ある程度の規模の公園に、毎日じゃなくても良いので、理学療法士や作業療法士が常駐できるようになったらなと思います。

熊：わー、なるほどです。

中：こういうこと言っちゃうとなんなんですけど、わたし個人としては、「地域のおじさん」になりたいなと思っているんですね。運動も遊びも教えるし、なんだったら小学校の勉強ぐらいだったら寺子屋みたいに面倒見てやるよぐらいな気持ちもあります。そういうふうに、理学療法士や作業療法士が、地域のあちこちに点在していけるのが理想かなって。

熊：専門性を持って、でも、敷居が高くない人が、生活の身近なところに自然といる状況って良いことですよね。それって、確かに理想ですよ。ぜひ、このプロジェクトでその皮切りというかトライになるような取り組みができれば嬉しいです。あ、そうだ。学校の隣の栗山公園なんですけど、学校関連の授業やイベントであれば、申請は必要みたいなんですけど、使えるそうなんです。なんか、子ども連れとかで公園に遊びに行くと、理学療法士や作業療法士の卵の方々がなんかやっていたら、そこでの交流も生まれそうです。顔見知りにもなりそうですし。

中：ぜひぜひ、公園を舞台になんか一緒にできたらと思います。学生の勉強にもなるだろうし、地域の方との交流の機会を作っていければと思います。



串田光弘さん

ずっとみんなでなんとかしてきたんだよ

取材日：2024年7月12日



梶野公園ができるとき、市の職員も地域もひたすらがんばったよ

串：梶野公園が今のような防災拠点になるときに、市の職員がひたすら頑張って補助金を取ってきてリニューアルすることが叶ったんですけど、そのときにすごいなと思ったのは、当時のその職員の方が考えたんだろうか、ワークショップを3年かけてやったんですよ。どういう公園にしたらいいかっていうんでね。

熊：3年がかりで、地域の方々と考えてきたんですね。

串：あそこは、もともと芝生の広場で、まわりに樹が茂っていてね。このままでいいんじゃないのと。私は、自分の子どもが小さかったときに連れて行ってたんですけどね、鍵が掛かっているわけじゃないんですけど、柵が閉まっているからか、誰も遊びに行かないんですよ。知っている人しか中に入らないっていう、すごい静かでいいと

ころでね。リニューアルするってなったときは、芝生があつて樹があつて、のんびりしてお年寄りも気持ちがいいなつていう、そういうのが残ればそれでいいだろうと思っていたんですね。そしたらば、いやいやテニスコートが欲しいとか、野球場が欲しいとかね、もういっぱい出てくるわけなんです。

熊：そうか、そうだったんですね。梶野公園が、テニスコートとかになっていたかもしれないという可能性があったんですね。

串：あつた、あつた。ただ、静かなゆったりした公園にしたいという声や、昔のように自然のなかで遊べるようにしたいという声もたくさん集まって、よかったよかったって。

熊：なるほど。

串：公園のボランティアグループっていうと、通常は「美化サポーター制度」っていうのがあつて、花壇を作ったり掃除をしたりゴミ拾いをしたりとかね、そういうのが活動の範疇だったんですけど、あそこは違ったんですよ。 「遊び場の会」っていう、子どもたちが自由に遊べるようにっていうことを考えていく分科会をつくってね。それから、犬の散歩もしてもいいんじゃないかって、犬の出入りを許可する公園にしたわけです。

熊：僕も犬を飼っていますけど、犬が入れない公園の方が多いと思います。

串：マナーの問題が出てきますからね。その問題は、今でもひきずっていますけど、「ワンワンパトロールの会」といってね、犬の散歩を通して地域の見守りや防犯や、そのマナーの向上といったことをする分科会も立ち上がって。

熊：いわゆる住民参加型で3年かけてみんなで準備をしてきた流れで、「梶野公園サポーター会議」というものがあつて、その中で、いろんな分科会が出来ていくんですね。

子どもたちとハイタッチ

串：うん。分科会の一つとして、「花ボラの会」というのもあつて、私がつくったわけじゃないのですが、今、その会長をやらせてもらっています。梶野公園の花壇というのは、ちょうど入口のところにあります。そうすると、来た人がまず最初に目にする。通常は午前中に保育園の子供たちがいっぱいいます。

熊：たまに通りかかりますけど、すごいたくさん子どもたちが遊んでいますよね。

串：すごいでしょ。おはよう〜って声かけると、おはよ〜！って返してくれます。先生に、ハイタッチってしても良い？って尋ねてみたら、ありがとうございますって。だから、子どもたちとハイタッチもして。

熊：良すぎます。

串：お花がキレイね、なんて言ってくれる子どもたちもいてね。それと、みんなのことを見ていると、ここは遊具がないですからね、ただただね、何をするってものじゃなくね、駆けずり回っていたりしてね、いいなって。子どもたちって、これでいいんだよなと、何もいらないなと。

熊：「名前が付けられていない遊び」ってたくさんありますし、あるべきですね。

串：そうそう。そのためにも、広い原っぱが必要だね。夏休みになるとね、小学生の子どもたちも遊びに来るわけですよ。井戸があるから、水で遊んだりなんかするけど、こっちがいろいろと花壇の作業をしていると、何してんのって来てね、手伝う？って言うと、うんって言って一生懸命やったりするわけですよ。

熊：良すぎます。

串：だけどね、10分もするとね、あ！ダンゴムシとか言ってね、もう全然違うことを始めたり、別のところへすぐ行っちゃうけどね。でも、それはそれでいいんじゃないかなと。

熊：それも、良すぎます。

串：あれしろこれしろとかね、抜いちゃダメ、触っちゃだめとかね、なんかごちゃごちゃ言わないでね、子どもたちとは、なるべくそういう形の接し方をしよう。

熊：え、それはメンバーのみなさんで、示し合わせているんですか。

串：自然にできてます。私は、一応代表になってるけども、私がそういうふうになろうとしてるっていうんじゃないで、自然に。これはね、メンバーに恵まれているなって思っていることの一つです。

花と場を、大切にしようことさえできたら

熊：もちろん大切な花ではあるので、たとえば、その花に子どもたちが触ろうとしたら、ストップをかけるようなことの方が一般的には多いような気がしますけども、そのあたりはどうなのでしょう。

串：花壇をね、自宅でやりたくてもできない。そういう方のためのコーナーもつくったわけですよ。ここでは、それだけのスペースが使えているということですよ。でもね、やっぱりここは公園なんですよ。自分の家ではない。それに実は、ここの花壇は私の好みでは全くない、真逆なんですよ。だけど、それはそれでということにしていけないと、問題がいっぱい出てくる。

熊：自分の場所で自分のためにやるということと、みんなのための場所で自分を活かしていくということは、やっぱりちょっと違うということですよ。

串：そうですね。公園の花壇っていうのは、誰が楽しめるものなのかっていうことですよ。ただ、「花ぬすびと」はいっぱいいます。植えた苗を持ってっちゃう人も。

熊：うう、そうですか。

串：いっぱいいますよ。それからね、すごいよ。ユリがそろそろ咲くなつていう頃に、すばつと切って持っていつちゃう。

熊：どひゃあ。

串：それはね、市に報告するようなことでもないし、とはいえどうするかといってもね、「花ぬすびと」という言葉があるぐらいだからね、江戸時代からそうだったろうから、今になってどうにかできるわけじゃない。つらいのはね、ゴミがね、花壇のなかに捨てられているというもので、ゴミはまあ拾えばいいんですけど、お弁当の食べかすなんかが、ぽんつと捨ててあって雨が降ったりすると、ぐちゃぐちゃになったりするわけですよ。そういうことがいっぱいある。でも、頑張って綺麗にするしかないなと。来園者の人で、黙ってゴミを拾ってくれる人もいるんだからね、ガタガタ言えないだろうって。

熊：やっぱり、そういうゴミを捨ててしまう方には、それを拾っていたり、その場をより良くしようとしている方々の気持ちのようなものを伝えたくなくちゃなんですけど、まずは「大切にされてきたものを、大切にしよう」ということが成されると良いですよ。というのも、大切にしてくれるのであれば、「気になりすぎて、この花触っちゃいました」みたいなこともむしろ嬉しいことですし、なんなら「触ったら、思わず茎が折れちゃいました」なんてなったら、「じゃあ、持って帰っておうちで飾ってごらん」なんて言っちゃったりしそうですよね。

串：大切なものを、やさしく触ることの練習って大事ですからね。親はね、子どもたちに触っちゃダメ、取っちゃダメとかね、気を遣ってくれて言いますよ。でも、こっちは言わない。

熊：ダメって、自分たちからは言わない。

串：子どもたちは、自分でちゃんとわかっているし、覚えているわけですから。普通はね、花を折ったらダメってすぐなりますけど、私は天邪鬼だから、ほんとにそうかなあって。やっぱりちゃんと考えると、折った後のほうが大事。

熊：折った後。

串：たとえば、何日か後に他の子どもと一緒に公園に来ていて、「あー、花が折れちゃってる」とかいうのを耳にするわけですよ、その子が。そこが肝心かなって。そういうときに、どう感じるかですよ。それでも良いから欲しいって、気にしないほどに花に取り憑かれているということもあるだろうし、ちょっとまずかったかなって、これから気をつけようってなることもあるだろうし。だからね、花に触っちゃいけないのかってことかというと、もうバンバン触ってよって、私は思います。花びらなんか、こう1枚2枚ちぎってね、ちぎるとどうなるんだろうとか、そのぐらいのことはやってほしいなって気がするわけ。

熊：確かに僕も子どものときにやってましたけど、それって、森とか林とかで無尽蔵に植物があればまた話が別ですけど、公園の植物となると大切に管理されているわけで、結構気が引けますけど。でも、串田さんとしては、触っていいよって思うんですか。

串：うん。

熊：うわー。花壇にゴミが投げ込まれることの悲しさなども含めて、そういうスタンスが、公園利用者の方々に伝わったらいいなって思っちゃいました。

子どもとお年寄りが秘密を共有する

申：このあいだね、チューリップの前に子どもとお母さんがいて、わーキレイね、なんて声が聞こえてきたんですね。その後、作業しながら何気なく見てみると、そのチューリップの花の中にね、いろんなものが入ってるんですよ、おままごのような感じで。

熊：わ、素敵。

申：多分、それにお母さんは気がついていないかもしれないけど、子どもはそういうことをやったら、ちゃんと覚えているし、きっと楽しいし、我々もそういうことはちゃんと覚えている。良いとか悪いとかじゃなくて、ああしてこうしてとか、そういうことじゃなくてね、子どもたちが自発的にやったことだから、そういうことはね、大切にした方がいいんじゃないかなって。そういう形で、子どもたちとお年寄りとは、なんとかうまくいつている。

熊：その場で言葉を交わすわけではないけど、そういう見守られているなかで、通じ合いが生まれているんですね。

申：このインタビューのような形で話をすることもあるかもしれないけれども、基本的には、黙ってるんですよ。あまり余計なことを言わないようにしているんですけど、でも覚えているし、子どもの楽しそうな気分というものはわかっている。そうやって静かに、こういうことが増えてくのがいいかなって感じがするんですね。

熊：子どもたちとお年寄りたちの、静かな秘密の共有かあ。それは、公園でしか生まれないような営みのような気がします。

花が、人の間をとり持ってくれるということ

申：市の環境政策課と一緒に、親子で苗を植えようっていうのを毎年やっています。これもずいぶん続いたな。いろんな形でもっとできたらいいなって思っているんですけども。

熊：もっとできたら？

申：入口に入ってすぐのところに花壇があるわけですから、ほとんどの人が見てくれるわけですよ。駐車場もあるので、車椅子の方も来ています。それに、精神的な障害を持った方も、引率の先生といっしょに来ています。あそこは、ベンチが4つあってね、そこでまず荷物を置いたりなんかしてて。それで、声をかけたいんですけどもね、なかなかできないんで、それをどうしたらいいかっていう。これは一番大きな問題かなって気がするんですよ。

熊：最初の出会い方として、どう声をかけたら良いのかという。

申：こちらから一方的な話ってのはいくらでもあるんですけど、相手にとってそれがどうかっているのがね、わからなくて。だからね、ズケズケ聞いて失敗して、怒られて覚えていくしかないんじゃないかなとも思うんですけど

も、それもねえって。なんて考えていたんですけど、ちょうど作業をしていたときに来られたので、引率の先生に、「ご苦労さん」なんて声をかけて「誰か一緒に手伝いたい人いますか」って言うてみたら、そういう人たちを引き入れてくれて。それで、花を植えたりするのをすごく嬉しそうにやってるわけですよ。そこに、車椅子の女の人も来て、こう、じっと見てる。それも嬉しいわけですね。花っていうのはね、こういう魅力があるんだなと。世話するというよりも、花に接することがね、いろんな接し方があると思うけど、人間の根本的ななにかにつながっているんだなっていうのをすごく感じるんですよ。私はね、花が好きって言うても、一番好きなことでは本当はないんですけどもね。

熊：え、なんですか。

串：それは内緒でね。

串・熊：あははは。

串：自分のことはね、また長い話がうんとあるので置いといて。それでまあ、いろんな人がいろんなふうに言うけれども、花が好きというのはやっぱり人間のね、DNAの中に刷り込みとしてあるんじゃないかって。

熊：人間と花は、切り離せない存在。

串：そう。植物ということでは、単に愛でるということだけじゃなくて、酒をつくったりね、麻薬をつくったりだってあるし、利用することも人間はいっぱいしてきたわけですよ。花の美しさということで言えば、チューリップが原因で戦争を起こしたりすることもやってきたわけですよ。植物って、それくらい強く人間を惹きつけるものがあるわけですよ。そういう意味ではね、インクルーシブということの入口としてね、植物が突破口になるかもしれないなっていう感じはします。

熊：人々が、共に生きていく社会を実現するための風穴をあける存在としての植物。

串：植物というのは、自分では動かないで、そこに居座ることを選んで生き続けているわけですよ。光合成をして自分の餌を自分でつくっているわけですけど、その副産物である酸素は、もともとはその当時の他の生命体からすると毒ですからね。でも、その酸素が地球全部を覆って逆転して、生き物すべてが恩恵を受けるという。踏みつけられたり、引っっこ抜かれたり、そういう弱さの典型みたいな雑草みたいなものも含めてね、植物という存在はいろんなことを引き受けながら、環境そのものから変えてしまうだけのパワーがあるんですよ。

熊：それって、植物が人と人の間の潤滑油のような存在でもあることに注目しつつも、植物という存在から見出されるというか、教わる生き方というか考え方があるよねっていうことですか。

串：花壇ボランティアですから、そういう話もおかないとね。植物の知恵や工夫って本当にすごくてね。周りの環境に順応しながらも、一定の場所に居座っているのに、知恵と工夫で自分自身を変えていきながら、周りの世界そのものも変えちゃうんですよ。でも、僕らはね、文句ばかり言って要求ばかりしてね。植物のように自分自身を変えようとする努力が欲しいよね。

熊：だんだん、世界をより良くしていくための革命の方法を植物の精霊というか仙人から伝授されている気持ちになってきました。

串・熊：あははは。

串：やっぱりね、障害を持ったの方やその親御さんって、ご苦労がね、たくさんあると思うんですけど、それをもっと聞きたいなって感じがすごくして。公園に行きづらいとか、お互いに声をかけづらいとか、そういった状況をどうにか、植物の力も借りながら超えることができないかって。先程の嬉しそうに花を植えていた人を引率していた方が、これからもこういうことを続けられるといいわねと言っていてね。あ、これって...！と思いました。

ボランティアっていうのは機械がやることなくってさ

串：と、まあ、いろいろと考えたり、活動をずっとし続けてきているわけですけど、ですけどもね、掃除をしたり、花を世話したりね、それをただ繰り返すことがボランティアなのかっていうと、違う気がずっとしててね。ボランティアってなんだろうかっていうことを、明確にこうだってことを言えるものではまだないんだけど、でも、その考えを変えていかなくちやならない気がしてて。

熊：それ、すごい気になります。たとえば僕と一緒に本をつくらせてもらった文化人類学者の猪瀬浩平さんは、ご自身でも福祉農園をやったりボランティアをしつつ、明治大学のボランティアセンターのセンター長をやられているんですけど、「ボランティアってなんだっけ？」という書籍も書かれていて、そこではボランティアのことを「自治」って読み替えられていました。「頼りない＜私＞たちが、お金の力に頼ることなく、国や大きな権威にお墨付きをもらうこともなく、自分たちにとって生きることを励ます営みを生み出すこと、それを僕は＜自治＞と呼びたい」って。自治は、「誰かに支配され、コントロールされたり、誰かに所有され管理されたりはしない、自分やほかの生命を大切にしたいと思う＜やさしさ＞から生まれる」って。

串：そうね、うん。要はさ、市がお金ないから、暇な年寄りには、そうだ掃除なんかちょうどいいなって。それで、年寄のほうも、暇だからっていそいそとやりますやりますって。そういう構図かなって、ずっと思ってたんですよ。それってさ、話として寂しいじゃない？

熊：そうですね、寂しいです。なんか、そうなっちゃうと、おなじ人間扱いされている感じがしないかもです。

串：もう60年以上もここに住んでますけど、昔はさ、別に「大きな志」があるわけでもなくってね、運命共同体みたいなところで助け合っていて、互助会のようなものだったんですね。子ども会も、親の会も、老人会も、町会も、いろいろあって。

熊：「大きな志」があるから自治をしているというより、「気がついたら思わずしていた自治」みたいな話は、その猪瀬さんとしていました。

贈り物のようにして生まれる、新しくて懐かしい未来

串：火の見櫓（やぐら）があればね、そこにね、消防団がいてね。それで、盆踊りの稽古したりなんかいろいろしてて。そういうような形で地域が成り立たせていたようなものが、消えていく。消えていくコミュニティという話は、関係もあるようで、またちょっと別な話かもしれないですけど、本当はそういうところとインクルーシブの話は繋がってくるといいなっていう感じもあるんですね。昔はね、横丁に出ればね、急ぐのにおばさんにつかまるとか、そういうのあるじゃないですか。

熊：僕は、東小金井の方の富士見通り商店街の近くで生まれ育っていて、たとえばラッキーという犬を飼っていたおばさんなんかは、そのラッキーと一緒に、暇そうにしている近所の子どもたちも誘って連れて一緒に散歩してまして、僕なんかはラッキーに追いかけられるときだけ足が速いねみたいに言われたりしてて。あと、商店街のお惣菜屋のおばさんなんかは登下校時にいつも挨拶したり、雑談していたりして。なんで、なんとなくですが、経験としても想像がつきます。

串：ねえ。「くから送ってきたけど」っていう、おすそ分けなんていうのは、大変なもんでね。

熊：貰ったり、返したりの無限ループ。

串：そうそうそう、もう本当に。でも、そういうふうなのがね、この土地のらしさではないかなと。他から引っ越して入ってくる人がすごく多いにも関わらず、まだそういうにおいが残ってるかなって感じがしてしょうがないんですよ。神社もね、あれですよ大晦日にね、太鼓をどんどんとやりますし、農家のおばちゃんたちがちゃんとね、お酒やたくわんとかをね、全部用意してやってくれていますよ。

熊：へー。

串：東小金井っていうのはね、地元の要望でできた「請願駅」ですから、それができるまで、みんな武蔵小金井駅を使うわけですね。どうやって行き帰りをしているかって言うとね、駅と接続する良い道がないから、線路の脇の配線のようなものの上をね、みんな歩いているわけです。危ねえなって感じもするんだけど、そろそろそろそろ。それで、ついに東小金井駅ができたときにはね、農家のおばさんたちがおはぎをつくって、駅のところでずらっと並んで振る舞っていたんですよ。

熊：へー、そうかあ。

串：みんなのお祝い事としてね。そういうところだったんですよ、ここは。火事があったら、炊き出しなんか大変ですよ。もう、誰々の家が家事だってなったら、消防団が火消しに向かってね、農家のお母さんたちがおむすびをたくさんつくってね。昔は大きな農家のおじいさんたちが全部仕切ってますからね。そういう形で成り立ってきたわけですよ。小学校まで寄付するんですよ、そういう人たちが。まあ、なんていろいろと言っていくと、昔は良かったみたいな話に受け取られちゃうし、「もう時代が変わったんですよ」なんて言われて話が終わっちゃうんだけど。

熊：いや、なんと言いますか、自分たちが身を預けている、その先である地元というものが、どういう成り立ちなのかであるとか、それをそれとたらしめているものが何なのかみたいな話は大切な気がしているんですね。もちろん、時代錯誤的な不正義や不平等は正していく必要があるかと思うんですけど。より良い未来って、なにも最先端

の科学技術によるものだけではなくって、そういう歴史の連続性のその先にもたらされるものでもあるって思うんですね。「かつて体験してきたこれを未来にも」っていうかたちで、贈りもののようにして出来上がる未来というものがあるって、そう思うんです。そういう未来は、なので新しいようでどこか懐かしくなる。

串：本当は、そうですね。

再生すべき、遊びの本質

熊：「play here」の「play」って、「遊び」の意味もありますけど、音楽プレイヤーのボタンにあるように「再生」という意味もあるじゃないですか。なので、この言葉には、僕たちが再生しなきゃいけないものって一体なんだろう？という問いのような想いも込められているんです。

串：うん。言ってみれば、それで、公園って最後の手段みたいなもんでね。近所とか、学校とか、いろいろあるなかの一つだからね、公園って。歴史の話になってくると、「村」って言うのは土地が生命なんです。水害があれば総出だし、作物の疫病が流行っても総出だし、工事があるってなってもそう。良くも悪くも、土地に縛られているといえそうかもしれないけど、それで代々やってきたわけですね。町になっていくと、そういうしがらみがない人達が入ってきますからね。でも、ある程度いくとそこに住み着いてくると住みよい町にするには自分たちも何とかしなくちゃいかんっていうふうになってきて、なんかいろいろ動き出す。そうやって、何事もみんなでなんとかしてきたんですよ。

熊：なるほどな。串田さんは、要はそういうことを身をもって体験されてきたということですし、目の当たりにされてきたということですね。

串：そう。だから、コミュニティとかインクルーシブっていうのは、わざわざ言わなくたって良いて気も一方でするんですね。そういう「自分たちでなんとかしなくちゃいかん」っていう人たちの営みが基盤としてしっかりあれば、そういうことを言わないで済むはずっていう。

熊：えっと、実は「play here」の資料では、その言葉を極力使わないようにしています。というのも、気をつけないと、かえって「わたしたち」と「わたしたち以外」ということが、逆説的に不用意に際立ちすぎるような感覚もあるからです。もっと言うと、「仲間に入れてあげる側」と「仲間に入れてもらう側」といったような上下関係のようなものとしての文脈にはしたくもなくって。ところで、「公園は最後の手段」っておっしゃっていたじゃないですか。確かになって感じたんですけど、同時に、もうその出番がきているんじゃないかなとも思うんです。やっぱりかつてのそういったコミュニティの維持のようなものが、無報酬で働くお母さんたちの労働力に依存していた側面もあると思うんですよ。現在は、生活を成り立たせるためでもありつつ、共働き家庭のほうが多いですし、労働も長時間化してきています。そうなるっていくと、地域の活動に使える時間や体力がほとんど残されていないんじゃないかなとも感じます。それに、学校の先生方も長時間労働化してきていますから、同じように地域に向ける時間や体力が、という。同時に、だからこそ、町内会や自治会といった中間組織も維持が難しい時代に直面していると思います。好むと好まざるに関わらず、人は助け合って生きていかないといけない。それは時代が変わっても変わらない。でも、その助け合い方やその作法のようなものは、また新しく発明されるのを待たれているような気がします。で、今、そのような動きが少しずつ出てきているし、このプロジェクトもそうありたいって。

串：そういう「うねり」がね、公園を拠点にきっかけとして生まれるようになったらいいですね。きっとね、遊具とか公園というものは、「遊びの本質」ではないという気がすごくしていて。

熊：ああ、まさにです。

串：その「うねり」の方がきっと大切なんですよ。



前田多實子さん

来づらい人がいるんじゃない、道理が通らない

取材日：2024年7月18日



土地と地域を守り続けてきた

熊：今日は、前田さんが持つ二つのお立場を踏まえてお話をお聞きしたいと考えています。というのも、「三楽公園」や「三楽の森」という緑地などは、代々前田家のものだったところを地域に提供頂いたという経緯があると思うんですね。その意味で、その土地を守り続けてきたというお立場と、一方で同時に、自治会や民生委員などを務められてきたというお立場もあると思うんです。なので、その両面を踏まえて、より良い公園というものを考えていきたいと思っています。

前：もともとは、うちの土地ではありました。でも、もううちのものではありませんし、そのことは父が成し得たことで、お話できることがあまりありません。これまでも、小林さんに全部お話もしてきてますので、ご承知おきください。

熊：あ、はい。小林さんから前田さんの話を伺っており、そもそも公園や緑地になる前から、その土地を地域にひらいて色んな人が集える状況にしていたということも聞きました。えっと、やっぱり、より良い社会にしていこうためには、いろんな想いを託し託されるという関係をしっかりと育んでいくことが必要であるように感じているんですね。それが無いことには、人や地域の連続性というものが途絶えて、根無し草のようになってしまうって。

前：昔から軸は子どもなんです。子どもたちが健やかに育っていったら嬉しいなと思うだけなので。

熊：そこを、もうちょっとお聞きしたい。

前：大人が仲良くすることは、子どもたちを健やかにすること。

熊：ああ。

前：ニコニコしてればいい。

熊：えっと。

前：周りの大人が仲良くしてないと、子どもたちには伝わらない。

熊：子どものことを話すときに、周りの大人の振る舞いについての話題にいきなりなる方は珍しいと感じます。子どものためについていう時に…。

前：「ために」ではありませんよ。

熊：なるほど、そうですね。大人が健やかでいることが、子どもが健やかでいることにつながるということですよ。そのお考えを、もっと知りたいです。

前：ここは縄文の遺跡が出る場所なんです。縄文人は、みんな仲良くしないとられないっていうこともありますよね。

熊：仲良くしないと、そもそも生きていけない。

前：わたしは外からこの土地に嫁いだものなんですけれども、ずっと違和感がたくさんありました。なぜなぜって。でも、この年になってみて、いろんな経験したなかでわかることもたくさんあります。わざわざインクルーシブだの、わたしはあんまり好きじゃない。そもそも、人間はひとりで出来ることはあまりありません。

熊：ええ。

前：子どもたちとの触れ合いについては、わたしは子どもから覚えられるようにしています。それで、叱ることはもう恐れてません。必ず視線を下げて合わせて、なんのために叱ってるかっていうことをちゃんと伝えます。その

ことで理解をしてもらおう。周りの人たちには、顔も家もさらしているんだから余計なことをしなさんなって言われますけど、父も母も主人も、そういう人でした。

ずるいことをしないという矜持

熊：今、頭の中に、自分の記憶が蘇っています。小学校の時に、富士見通りが通学路だったんですけども、そこで通る民家の庭の柿の木に実がなって、なんか美味しそうだなって、勝手にもいで食べてたんですよ。それでまあ、その家のおじいちゃんに当然叱られたんですけど、「食べたいなら、ちゃんと言ってくれ」って。つまりそれって「ずるいことはするな」ということじゃないですか。で、ピンポン押して「食べたいです」って言ったら、もうどっさりくれるわけです。その一連のことは、今でもよく思い出しますし感謝をしています。

前：道理や分別がわかってるのよ。

熊：道理と分別。

前：そう。

熊：ああ、そうですね。前田さんから感じるのは、「お天道様に見られて恥ずかしくないように」だとか、その先祖というのも、この土地で人々が助け合って暮らしていた縄文時代までさかのぼるくらいのイメージで「ご先祖様に恥ずかしくないように」というニュアンスなんですよ。

前：そう。

熊：ああ、ちょっと喋りたくなっちゃったんですが、菊竹清訓という日本の戦後を代表するような建築家と、レム・コールハースという、その菊竹さんよりも年下の世界的な建築家の二人の対談（「プロジェクト・ジャパン メタボリズムは語る」）を読んでいたんですが、菊竹さんが「地主」というものについて語っていたんです。要は、建築家や都市計画家が地域をつくるというよりも、そもそも地主が地域をつくってきたんだ、という話なんですよ。菊竹さんによると「かつて日本では地主はインフラストラクチャーの担い手であり、文化の保護者でした。学校をつくる、水門をつくる、耕作地のいろんな整備をしていく、といったものはすべて地主がやっていましたし、神社もお寺もみんな地主がサポートしていたんです」と。さらには「日本は地域ごとに、地主がいわゆる地域社会をサポートしていたんです。地主がいなければ社会も文化もなくなる」とまで言っているんです。それが菊竹さんの建築の原動力であると。

前：そうだったんですよ。

熊：で、そのことを知らないし、知られていないんですよ。僕は今住まいが三鷹ですけど、自分が通っていて今じゃ息子が通っている中学校の土地が、まさにもともと地主さんから提供を受けた林のような場所なんですよ。さらには、それを「みんなで開墾して念願の学校をつくったんだわ、根っこが深くてねえ」みたいな話を、その作業をしていた地元のおじいさんから以前聞いたわけです。正直、その話を当の本人から聞くまでは、そういうことに意識が向いていなかったんですよ。で、そのおじいさんは最近亡くなられてしまったんですけども、自分たちの暮らしや地元を成り立たせているものに関しては、やっぱりある程度知っておかないと、それこそ、道理が通らない

ような気もします。で、菊竹さんは時代の変化のなかで「パブリック・インフラストラクチャーをどうつくるか考えなければならない」と言っています。それって、つまりこのプロジェクトの課題感とも重なるんです。

ものを始めるときの肝心さ、続けていくことの大切さ

前：そう。自分のことを言うのは恥ずかしいけど、うん、でも聞きますけど、ここずっと歩いてきてどんなふうになりました？

熊：あ、そうそう、ゴミ一つ落ちてないと思いましたし、あと、実はこの取材の前に見てきたんですが、すぐその三楽公園のトイレもすごい綺麗だなんて。男性用トイレの暖簾も素敵だなとも思いましたし、そもそも屋外の公園のトイレに暖簾が掛かっているのも珍しいなと思っていました。

前：じゃあ、暖簾の話をすると、最初はトイレに暖簾はなかったんです。

熊：それはそうですね。

前：町会にいる若い人が障害者の方向けのお仕事をしてらして、「どう思う？」って言ったら、「こう、脱ぐでしょう。そうすると見られるから、開けっ放しは良くない」って。

熊：ああ、そうかあ。ズボンとか全部脱がないと出来ない方もいらっしゃる、と。

前：そう。その彼女とわたしは、しょっちゅう公園に様子を見に行っているからね、こういうふうにした方が良いとか話していたわけね。市役所の人は、最初は及び腰だったんだけどね、しまいには自分で暖簾をつくるみたいなことをおっしゃって、それもすごいでしょ。

熊：いろいろすごいです。

前：あの、なんでもそうなの、ものを始めるときが一番大事なの。よく考えるべきなの。

熊：もう頂くほかありません。

前：それで工事の現場責任者に相談して、こういうのがある、ああいうのがあるって話をして、それで今の形になったんです。そしたら、だんだん暖簾の切れ目が裂けてくるから、そうするとまた余計に外から見えるから、それでわたしは…。

熊：ああ、見ました見ました、パチッとくつつける茶色い留め具のようなものが付いていましたよね。

前：そう。

熊：そういった配慮をなさっているのはすごいことだと思います。そこからも学ぶべきことが多くあるように思います。きっかけなどはあったのでしょうか。

前：公園にはいろんな人が来る。そうすると障害者の方に対して、いぶかしい目で見える人もいるでしょ。それを相手はすごく感じる。

熊：ええ。

前：そういうのを見たときが始まり。ごめんなさい、障害っていうの嫌なんだけど、公園の掃除をしてくださる障害者の方々の団体がいてね、それはもうわかったんですけど、とっても真面目にちゃんと掃除をしてくださるのね。そういった方々を、行政が依頼をしてくださったのね。それで、やっぱりまずは指導者の人たちと挨拶をすると、掃除をしてくれているその方々も、こっちを向いてくれるでしょ。そうして、「いつも綺麗にさせていただいてありがとう」って言葉を掛ける。そうすると、だんだんだんだん、向こうから「前田さんこんにちは」って挨拶をしてくれるし、良い関係ができる。やっぱりそうやって良い輪をつくっていくことが肝心ですね。

熊：なんと言いますか、そういうことの連続性の一つとして、あの暖簾があったんですね。ちなみに、ゴミ一つ落ちていないのはやっぱり掃除をされているんですか。

落ち葉は汚いのか！？

前：自分のことを言うのは恥ずかしいけど、うん、でも言うと、具合が悪くなければ、わたしは毎朝掃きます。この頃は、木は大事って言ったって、木のことをみんな知らない。落ち葉はこの時期でも落ちます。落ちると汚いつて言いますでしょ。

熊：え、言いますか？

前：邪魔でしょ、側溝に溜まって。

熊：んー。

前：昔から、ずっと掃いて、それから近所の子ども達も集まって、落ち葉焚きをする。それは、薫りを嗅いで欲しいっていうのがあって。

熊：そうですねえ。火とか、その薫りとかって、今じゃなかなかねえ。

前：そういう体感が、だんだんだんだん、今はもう削っていつちゃっているでしょ。そういうことが、どんどんどんどん、虫にしてもそうでしょ。

熊：そうですね。なにかこう人間として大切な何かから離れていってしまう怖さというのは感じています。火や木や虫というのも、本当にそうですね。

それぞれが手が届く範囲をより良くしていくこと

前：いつもわがままだって言われるけども、まずは拠点の部分を良い関係にしたい。小金井市全部のことは手に余ります。この頃は、あそこの自治会は良いよなとかなんとか言われるのね。でも、自分たちがそれをつくれば良いことで。

熊：わがままというよりも、その態度にむしろ誠実さを感じます。

前：わたしの言い方が強いこともあるかもしれませんが、周りには「聞いてくる方にも、自分たちの能力があるはずなんだから言っちゃ駄目」って言うんです。

熊：言っちゃ駄目。

前：言いたくなるでしょ、こんなふうになりました、あんなふうになりましたって。一切そういうことを言いなさんなって。

熊：ああ、先回りしたアドバイスをすることによって、相手の考える力を奪うことにもなるということですか。

前：それもあるけど、何をもって良いつていうことを言われたら、これこれこういうわけですからちゃんと応えればいいけど、ただ良いですねっていうのは、本当にどうかしようとしている人は言わないでしょう。

熊：おっしゃる通りのような気がします。ちょっと話が戻っちゃうんですが、障害をもつ方々をそれこそ除外するんじゃないくて、そういう人たちと共にみんなで、その場をつくるべきというお話だったじゃないですか。

前：ごめんなさい、「あるべき」じゃなくて、それは「わたしのスタンス」だから。

熊：スタンス。

前：あの、まず木に対しても尊敬の念を持ちたいと思うから。それで黙って掃いている。でも歳になってきたからつらいんですよ、毎日やるのが。でも、それを淡々とやるの。たくさん落ち葉があると、朝4時くらいに起きて掃いてるわけね。

熊：夜明け前の4時。

前：トイレの公園だって行政が綺麗にしてくださったから、せめてこちらまでできる範囲でっていうことでやるわけです。でも、できるときに、できることしかやりませんから。全部行政に任せるっていうのは、もう時代でもないし無理です。今の人たちは、汚くなるとすぐ警察に行く、行政に行く。段階を踏んでいかないですね。すぐ教育長だとか、支店長だとか。それは、今なぜなんだろうと疑問に思います。

熊：前田さんにお話をうかがっていると、時折、修行僧と話をしているような気がしてくるんですね。それは恐らく、背中に寄せられた重荷のようなものを感じるからでもあるんですね。だって株とかならいいざ知らず、先祖代々の土地というものはなかなか重いわけですよ。いろんな地権者の方とお話をすると、生産緑地などの畑にもゴミを投げ入れられたりして、心が折れそうになるっていう話はよく聞きます。おいそれと羨ましいなんて言える状況

でもないんですよね。そういう重荷を背負いたくてその土地に居るというよりも、背負わされちゃったと言った方が近いと思うんですよね。だからある意味、大手不動産会社に土地を売って、自分は都心のタワマンにでも暮らしていたほうが、色々と楽ではあるはずなんです。と言うか、そういう方もたくさんいらっしゃいます。

前：そうせざるを得ないところもあるんです。

熊：「三代で財産がなくなる」なんて良く言いますもんね。仕組み的には、都市の農地や緑地なども減っていくように出来ていると言ってもよい状況であるとも思います。小金井なんて、都心からアクセスも良い分、地価もかつてよりも上がっていく。そうすると、相続税なんてものはとんでもない額になるけど、一方でそれを払うためには結局キャッシュが必要で、つまり土地を手放すしかない。でも、そういう土地がそれこそハケの湧水にとって地形的に大切だったり、動植物の保全に必要だったりする。地域の共有財産として維持していくのは並大抵ではないんですよね。そういったことは、地域の共通理解にすべき、重要な話だとは思うんですよね。

人として付き合い、役割を活かす

熊：それでえっと、修行僧とついつい呼んでしまいましたし、記事に書きづらいこともたくさんお話を頂きましたけども。

前：そう？後で、録音データをくださらない？ちゃんと責任を取れることを言えていたか確認しますから。

熊：いえ、それは無責任な話があったというわけでは全くなく。お酒でいうと原液のようなお話も多かったので炭酸で割りたくなるというか、とにかく、こちらもお話をお聞きした責任として、ちゃんと編集します。

前：あなたの主観が入るじゃない。

熊：なにかを表す以上、主観は入りますし、むしろ入れますけど、でもちゃんと頑張りますってば。いやなんと言いますか、感じていたのが、その背負うものが多いと言いますか、その背負わされたものと向き合いを続けていくと、否定すべきは否定し、肯定すべきは肯定するっていう、つまり何が悪いことなのかっていう、まさにおっしゃる「分別」みたいなものが根幹にあるということなんですね。それは、警察署とか役所とか、まあいろいろな方々との関係を前田さんはお持ちではあるんですが、その肩書の前に人間同士の付き合いをするということなんだなとも感じるんです。

前：うん。

熊：で、その人間同士の付き合いを前提として、その上でももちろん状況をより良くしていくためにも、それぞれの立場や肩書も活用していくという。

前：そうじゃないとねえ。

熊：はい。それで、さらに思うのは、めっちゃ背負ってる人からすると、ちゃんと背負ってはないことが、ずるくも見えるし、道理が通らなく見える。その感覚は今、とても必要な気もしています。僕たちはやっぱり機械じゃなくて、人間として生きているわけです。なんかさらに思うのは、誰が、その土地を守ってきたか、ということな

んですよね。結局、地域の労働力みたいなものは、都心の会社に吸い上げられていく中で、そうなるとその土地を維持したり、それこそ消防団みたいに、もしものときに備えて活動しているのは、農家さんや地主さんやずっとそこで商いをしている人だったりするじゃないですか。で、その土地に根付いているという意味では、子どもたちや、その子どもたちの面倒をみている特に結局お母さんとかも、そうじゃないですか。農家さんや地主さんたちと同じように、子どもたちもなかなか地元から離れられない。気軽に遠くに移動できない。だから、土着性が高いとも言える。なにか病気や怪我のときだって、家から離れた病院には簡単にいきませんからね。だから、自分たちのからだを預けている地元というのは、やっぱりインターネットやオンラインというものがこれだけ活発になっても結局は、生活や暮らしの基盤なんだと思うんです。じゃあ、その基盤をこれからどうしていくんだ、ということとを考えるとなかなか難しいんです。そもそも、そういう基盤が必要という認識もまた変わってきていますし。

前：それは、いい人となつなぎ合うこと。自分一人じゃできないから。このことはこの人に、このことはこっちについて。で、そうだよねっていうような互いの理解の仕方。

熊：ああ。

前：そういうことをやっていくには、時間がかかります。あとはもう、こんなうちですから仏間と神棚がございます。そこで毎朝いっつも振り返って、ごめんなさいって。

熊：ごめんなさい。

前：それを忘れたら自分は駄目だと思っているから。それでも上手く行かない。でも不思議なことに、何かのときには、わざわざコンタクト取らずとも、偶然の出会いが訪れる。そういうことは、よく与えられる。それで事が進む。

熊：神様が見てくれている。

前：今、宗教もいっぱい色々ありますでしょ。うちにも隙間をつくように勧誘は来ます。

熊：隙間をつくような勧誘。

前：でも、ピンポンされたらどんな人でも必ず出ていきます。そして、お話をします。もしもの時に相談できる、信頼できる人がいるから出来ていることですけども。それで、わたしはお天道様、お月様、お星様、それから大きな空を信じてますって言うの。

祈るような想いと行動で、より良い状況を願う

熊：んー、いろいろと僕のなかでつながってきているんですが、これはもうほとんど「祈りの話」だなんて。というのも、先ほどの自治会が上手くいっているということで、不用意に尋ねられてもアドバイスをすることが良いことではないということや。

前：アドバイスはしません。

熊：はい。あと、僕がすっかり「そうあるべき」みたいな言い回しをしたときに、「べきではなくって、わたしのスタンスです」と訂正をなさったりとか、そういったことも全部ひっくるめて、祈りだなんて。というのも、良い悪いといった道理というか分別も持ちながらも、他人様を操作したりコントロールしようとはしてないじゃないですか。

前：できない。

熊：はい。そうした時に、「操作やコントロールをしないけども、何かしら幸せを願う」って考えたら、もうそこに残っているのは、「祈りみたいなもの」で。朝4時起き、人知らずの掃き掃除も、もはやそういうものの類の一つのような気がするんですね。

前：それはわたしの勝手だから。

熊：そうですね。冒頭でも、僕が「子どものために」と言ったら、「ためにではありません」と即答されたように、とにかくスタンスがこれでもかってくらい首尾一貫なさっている。で、確かに、「誰か個人の勝手というものが、ひるがえってみんなのためになる」というのが一番良いような気もするんですね。子どもやみんなを前にして、子どもたちのためにとかみんなのためにつて強調されてしまうと、萎縮してしまいそうですし。うまく言えないんですが、「みんなのための場所であるからこそ、自分自身でいること」ということはとても大切なような気がしています。政治学者の宇野重規さんという方が「＜私＞時代のデモクラシー」という書籍で、「＜私＞を排除した＜私たち＞にはグロテスクなものがありますが、＜私たち＞のいない＜私＞は絶望にほかなりません」なんてことを言っているんですが、それに近いものを感じます。それでまあ、なにかを代々守ってきたような人が持ち得る美学や倫理観のようなことってやっぱりあるんだなあ。えっと、もう少し喋ります。僕は教育の仕事をずっとしてきているんですが、一般的な教育の定義のようなものからはちょっと離れているんですね。

前：うん。

熊：どういうことかと言うと、新しいアイデアや人を迎え入れていくような、「歓待の営みとしての教育」というものを考えているんです。それで、その「歓待」ということを調べていくと、要は旅人のような人たちを迎え入れていくような人類の古来からの営みの様子をみていくと、「歓待」というのはやっぱりその村の「主（あるじ）」の仕事だったんですね。今日は、なんかそういうことも頭に浮かんでいました。

前：そういうもんだったんですよ。

熊：みんながみんな「主（あるじ）」であって欲しいと、思わなくもないんですが、えっと、今日もなんだか聞き手と言いつつ、たくさん喋っちゃってました。えっと、でまあ、このプロジェクトでは、本当の意味での「みんなにひらかれた公園」というものをとらえて実現していきたいと考えているんですね。

前：来づらい人がいるんじゃ、道理が通らないじゃない。

熊：ああ、その通りだなと感じ入る次第です。道理を通していきたいです。



亀井寛之さん

生きることは愉しいよって背中であらうたい

取材日：2024年7月19日



学校は無理だけだ公園になら行けるということなら、それを後押ししたい

亀：僕の娘が不登校だったりしたので、その話をすると、中学1年生のときに不登校になり始めたんですけど、小学生から中学生になって頑張ろうみたいな気持ちと、でもなんか他の友達はどんどん友達ができたり、いろんなことができていくけど私は何もできないみたいな気持ちになっていって、だんだん行きづらくなって、そのまま行かなくなったんですね。それから2年の最後まで全然行かなかった。うちはまあ、家で自分が好きなことをできるならそれでいいよねみたいな感じだったし、農業もやっているんですけど、その手伝いは自分からやり始めたりしてくれるんですね。それはもう実際すごく助かるし、おじいちゃんおばあちゃんからも、ありがとうって言われるとちょっと元気になったりするんですけど、逆に、ちょっと外に出ようかっていうときは、なんかみんな勉強してる時間に出ていいのかなって、やっぱりなる。

熊：ああ。

亀：本人が気にするっていうことだけじゃなくて、僕とか熊井さんみたいなタイプだと、いいじゃん大丈夫だよって言えるけど、そう思えない親御さんも結構多かったりする。今、ちょうど不登校の支援員をしているときも…。

熊：小金井の中学校で不登校支援員をされていますもんね。

亀：そうそう。そこで親御さんと話すと、せっかく家族で家にいるし、お昼にレストランに行く？平日だから空いてるしさ、みたいなことを言っても、え、外に出ていいの？ってなっているらしいんですよね。やっぱ、そんなふうに思わせる社会はまずい。

熊：ああ、子どもたちに思わせてしまっているんですよね。

亀：そう。でも、実際うちの親も小学校の先生をしていたのでわかるんですけど、それこそ僕らの世代とかは学校に行かないっていう発想や選択肢がなかったと思うので、だから孫がそうなったときに、もっとちゃんと行かせなさいみたいな感じになるわけですよ。

熊：現在、小中の不登校が約29万人という統計上の数字も出ていて、数字にあがっていないものも含めると40万を超えるとも言われているそうなんです。その実態は、なかなかこれまでの世代には飲み込みづらいんですよね。

亀：そう。でも、その娘のことを考えると、彼女の可能性を育むことが目的なので、そう考えると無理くり学校に行かせることだけが唯一の手段でもないわけだし、まずはその孫の心と向き合うことが大事なんじゃないかなみたいな話をして、ようやくわかってもらえたりして。そういうこともあって、娘はだんだん外に出られるようになって、じゃあ映画を見に行こうかなって言うようなことも言えるようになって。

熊：ああ、そうか。学校に行かない、でも気まずいから家からも出られない。となると、もう家に籠もるしかなくなるし、それこそいろんな体験の機会がなくなりますよね。

亀：ねえ。それで、こちらが忙しかったりする時に、おじいちゃんかおばあちゃんと出かけておいでよってなると、今度は、おじいちゃんたちの方が、昼間に連れ出していいのかなみたいなことを言い始めたりするわけですよ。

熊：行動に移す時の躊躇ですよ。にしても、なんかちゃんと家族のなかで会話をされていますよね。感じたことを表し合うことができて良いなって。

亀：話さないことにはね。それで、結局、外に出かけてみて、なんか本人が楽しそうにしているのを見たら、これでいいんだよねってなったんですよね。ずっと家にいる方がきついじゃんって。でもなんかこう、散歩しておいでよとか、虫好きならちょっと捕まえておいでよっていうのが、できないような空気が、やっぱ、あるなっていうのも感じるんですよね。

熊：それは確かにありますよね。

亀：その不登校支援員の仕事をする時に、いつも梶野公園の前を通って、朝は犬の散歩の人とか、おじいちゃんやおばあちゃんが来てるけど、昼間に娘のような子たちが来たら良いのになって思うんですね。公園に来ている小さい子たちと、そういう子たちが遊べるようになって、遊んでくれてありがとうございますなんて言われて、ちょっと元気が出るみたいなことが起きるだろうし。実際、うちの娘がそういう感じで元気になっていったのもあるので、そういうことが公園で起きたらいいなとは思うんですよ。

熊：まさにそう思います。関係の中で、生活の張り合いが生まれることはたくさんあると思います。というか、関係の中でしか育まれないとも思います。

亀：だから、その関係の繋がりから外しちゃいけないような気がして。登校の時間に、1年生の黄色い帽子をかぶってる子が、学校と逆方向に歩いてたらちょっと心配になるけど、いろんな過ごし方もあるんだなっていう空気が広がっていけば良いなって常々思っているところなんです。でも、まだ、なかなか難しいですよ。だから、少なくとも公園はそういう場所になって行って欲しいなって。今日、それだけは言っておきたいと思ってたんですよ。

熊：本当にそうですよね。法制度上も、公園って「誰にもひらかれている場所」であるにも関わらず、その「みんな」という範疇から漏れてしまう人がたくさんいらっしゃるんだなっていうことを、このプロジェクトを通して強く実感している次第なんですよ。

亀：不登校の子たちも、やっぱり学区域の公園には特に行きづらい空気ってありますよね。

建築も教育も、かたいものから呼応するやわらかいものに

熊：自分のことを棚に上げて言うんですけど、亀井さんって、二足三足以上のわらじを履いているじゃないですか。児童館でも働きつつ、ファミリーサポートのサポーターもやって、保育園でも働いている。さらには、もともと建築畑で、今も、多摩美術大学で建築の先生をやってますけど、で、農業もやっているし、地元のいろんな委員会の役員も。

亀：百姓って、「百の仕事」があるから、そう呼ぶようなんですけど、そんな感じ。

熊：なんか納得しちゃいますけど、一方で、建築といっても亀井さんがやっていたことって、いわゆるメディアアートのようなもののはしりだったじゃないですか。建築をハード、つまり固いものとして捉えるんじゃなく、やわらかいものとして考えられないかっていうのを、1990年代に東京大学とかにも出入りしながらやられていましたよね。

亀：「Responsive Environment」ですね。

熊：そうですね。今じゃなんかチームラボ的な感じが世間では一般化してますけど、「Responsive Environment」って、日本の建築史やメディアアート史において、その実験性をちゃんと記述されるべきものだと思うんですよね。でも、亀井さんたちって、セルフブランディングとか興味ないから。

亀：あはは。いろいろやらせてもらって、今では、ご縁があって不登校支援員も。

熊：さすがの現代版百姓って感じがしますが、不登校支援員はいつからでしたっけ。

亀：去年の9月からですね。不登校支援って、学校によって形が違うんですけど、今行ってるところに関しては、「不登校によって学習が心配な子たちが、個別で学習ができるような場所を学校内に」ってことでつくられていて、だからそれぞれ個人にマンツーマンで関わって支援をしていく形で始まったんですね。子どもたちと関係を築いていきながら感じられるのは、やっぱり勉強だけをしたいわけじゃないよなっていうことで。

熊：うん、それは、まあそうですね。というか、不登校じゃないにしても、よし勉強だけするぞっていう気持ちで学校に行っている生徒も少ないように思います。

亀：だからまあ、ある意味渋々、学校のそのスペースに来ているわけですけど、いろんなゲームも用意しておいて、ちょっと休憩のタイミングとかでゲームやってみる？とか言うと、のってきてくれます。楽しくなってきて、それで通ってくれるようになる子もいる。

熊：そっか。そもそも行くまでが気が重いですもんね。足が向く。聞く耳になる。そういうところが、まずは肝心なはずですよね。どうやったら行きたくなる場所になるのか？話を聞きたくなるのか？という問いは案外大切にされていないのかもしれないですね。

亀：なんか僕のこの風貌も含めて、ヤバいけど面白そうな人ってことで、近づいてきてくれる子もいるんですよね。

熊：お団子ヘアで、ヒゲで、柄シャツ着ている大人って、学校にあんまりいないですもんね。

亀：なんかまあ、もともと勉強をやらなきゃっていう気持ちがあるからでしょうけども、そうやって興味を持って接してくれる子たちといろいろと雑談をしつつも勉強してるんですよ。もうね、ずっと一生懸命やってくれる子もたくさんいます。それで、まあ、それぞれが、それぞれのやり方で元気が出てきたので、ちょっとグループでいろいろやれるようにしていった方が、もしかしたらいいかもしれないっていうんで、グループの時間を作ったり、この子とこの子がちょっと一緒に勉強できるようにしてみようとかをしてみたら、やっぱり、1人のときとはまた違う元気が出てくるんですよね。お互いに影響し合うのもそうだし、2〜3人くらいの規模感だったら安心して話せるなっていう空気が少しずつ出てくる。

熊：活動を共にすることで生まれる安心感。

亀：今ねえ、うち、「大富豪」っていうトランプのゲームがものすごい流行ってて、よくみんなでやっているんですね。いきなり一番強いカードをまとめて出したりとかして、え、その後で大丈夫？みたいになるんですけど、それを3人とかで、わちゃわちゃやっていると、なんかその場で、あれ違った？みたいなことも感じて、楽しく学んでいくという気がついていくというか。さらには、いつも寡黙で特に積極的に参加してくるわけでもない子が、その様子を楽しそうに眺めていたりとか、なんかそういうことがだんだん見えてくる。

熊：他人の存在に対して安心ができると、そういう失敗のようなものも楽しめたり、そこから学べたりする。参加するかしないかの二択ではなくて、眺めてみたい、そういうグラデーションがあるのも良いですね。

亀：なんか、やっぱ、ひとりで学んでいくっていうのとはまたちょっと違う空気が生まれるんですよね。クラスの30～40人といった大人数は無理だけど、このぐらいの規模ならやっぱ楽しいなって思えると、そこがスタートになってくる。今、そのグループの時間がすごく盛り上がってて、昨日はちょうどその中のひとりの子が、1学期の間にゲーム大会をやりたいっていうんで、その大富豪を決勝戦までやるのと、そのトーナメントで負けた子たちはUNOをやるというのを、5、6時間目に丸々やってて、なんか全然計画通りに終わらない。だから、もうすげえ延長しながらやっちゃって、結局、優勝者は決まらなかったけど。

熊：かなり熱中できていたんですね。

亀：みんな、ここ1、2ヶ月ずっと大富豪を一生懸命やってて、さすがにこの2週間ぐらいは飽き始めてたんですけど、4人ずつに分かれて、それぞれ得点が高かった人が決勝に行けますよってなったら、ちょっと緊張しながらまた前のめりになったりする。それで、これまで強かった子が、「ああ、カード運が〜」なんて言いながら負けていくのを見るのも、多分すごく良くて。少しずつ学校に来られるようになるってところから、ちょっとずつ関係性を持って、お互いがどんなことを考えているかっていうところまで、ちょっと踏み込んでいくような空気ができたときに、すげえいいなって思いながら、その空気を大切にしているんですよね。

熊：大富豪とかUNOとかっていうのも、あくまでも手段ですもんね。子どもたちがやってみようと思えたり、他の人と関わってみようと思えたり、それこそ、その延長線上で、トーナメント大会のようなイベントを立案してみたり。外から見ているとただ遊んでいるようにしか見えないかもしれないけど、そこで生まれていることの意味は結構豊かなんだろうなって感じます。

亀：ただ、こういうのって学校の仕組み上、個別の学習の時間としてってことになっているので、それを越えすぎると、ちょっとマズいよねとかっていうのも出てきちゃうので、そこはちょっと悲しいところだなと思っています。

熊：越えるというのは？

亀：たとえば、個人学習の時間だとしても、その子たちの気持ちが向かえば、一緒に何かをやろうっていうのもOKにしたいなっていうふうにしてたんだけど、それはどうなのかってなる。

熊：ああ、あらかじめ決められた時間の使い方というものがあって、その場の判断でそこからはみ出ることは、なかなか許されないという。

亀：そうなんですよ。その子たちが、どうやっていきたいかということによって、時間の使い方を変えて良いんだと思うんですけど、そうなっちゃうとちょっと全体の流れが崩れちゃいますよねっていう視点もあるわけです。でも、なんか、崩れるっていうか、その方がいいってみんなで思えたなら、それでいいんじゃないかなと思うんですよね。僕の考えとしては、良いようになるんだったら、どんどん良いようにしてっちゃえばいいじゃんって思うけど、でも、最初に決めたこととずれることが、なかなか許されない。その必要性をどうやって周りに説明をしていこうかなって。

熊：んー、そうですね。なんか、僕も教育の仕事をしていて、もう15年以上も前の話ですけど、その道で尊敬している人が「don't marriage curriculum」って言っていたのが、ずっと残っているんですね。今や、文科省や教育委員会も「個別最適化」というキーワードを挙げつつ個々の状況に即した教育を、というビジョンを掲げていますが、今の話はまさにそういう議論につながっていくなと感じました。本来、カリキュラムや計画を完璧に遂行することが目的ではなくて、本当の目的は子どもたちのモチベーションや可能性を育むことなんですよ。だからまあ、「don't marriage curriculum」というフレーズはつまりそういうことを意味していたと思っているんです。

亀：良くなる兆しがあるのであれば、そっちに舵をとっていきたいんですよね。

熊：現場における、そういう良い予感というのは大切にされるべきだと思います。思い出したのが、それも15年くらい前ですけど、プログラミング教育を実践していて、亀井さんともそれで、ご一緒したりもしていましたが、プログラミング教育って、今じゃもう当たり前になって、学校でも必修化されていますよね。で、まあその一般化する前のことですけど、プログラミングをして自分で遊ぶゲームを自分でつくるみたいな授業をしていると、まあ、楽しいんで、子どもたちも笑い声や歓声がよく上がるんです。それで、ゲームのなかでモグラ叩きみたいなものをつくるとしたら、乱数とか必要になってくるし、シューティングゲームのようなものをつくらうとすると座標みたいなことも出てくる。だからまあ、外から見ているとただ楽しそうに遊んでいるだけなんですけど、結構ハイレベルなことも体験を通して学んではいるわけです。

亀：つくりたいってなると、自ずと学びたくなっちゃうんですよね。

熊：はい。で、その様子を見ていた大人から、こんな楽しそうにしている大丈夫ですか？って心配そうに言われたことがあるんです。で、なるほどなあって。あの、ロダンの「考える人」の像がなんか陰しい感じであるように、なにかこう苦しみ抜いていることがセットじゃないと、なにかを学んだってこととして実感できないってことがあるんだなって。昔のスポ根漫画じゃないですけど、汗水たらして吐きながら練習しないと上達しないみたいな。今では、さすがにその感覚は減ってきていると思いますけど。

亀：あははは。だと良いですけどね。

熊：それでまあ、なんかここまでの話で、亀井さんがジャンルは違えど、ずっと同じようなことをやられていたんだなということを感じてしまったんですね。というのも、建築を「固いもの」ではなく「やわらかい」ものとして捉えるという実験的な試みをしていた人が、教育の制度やカリキュラムのような「固いもの」を同じように臨機応変なものとして捉えようとしているという。すべてを「responsive」なものにしようとしているというか。

亀：「Responsive Environment」の「responsive」って、「応答」とか「呼応」ということで、人の動きとか、音とか、いろんなことに対して形が変わったり、場そのものが変わっていくような場所を、ということだったんです。

熊：うん。それを教育の領域に置き換えたらこうなっちゃった、みたいな感じだなって。子どもたちの、その時の気持ちや興味関心に呼応するという。

亀：そうですね。そのつもりでね、動きたいなと思いつつも、なかなか難しいなっていうところも、今感じているところですね。熊井さんも、かたい雰囲気の会議にずっといると、ゲップが止まらなくなっちゃいますもんね。

熊：あー、それは、なんか身体が反応しちゃうんですよね。だからまあ、理想を口にするのはまあできたとしても、それを現場で、今の制度の中で具現化していくのはやっぱり本当に大変ですよね。でも、その「個別最適化」みたいな話で言えば、亀井さん、自転車が好きで生徒さんにねえ。

変化の原因になることができるという感覚を育む

亀：その不登校支援のスペースに来た子に一番最初に、なにか一緒にやりたいことある？って聞いたら、サイクリングって言われて…。それ、俺もやりたいけどねえと思いつつ、一応学校に確認してみたら、まあ当然駄目ってなって、そうですねって。

熊：あはははは。その子の意見を聞いたからには、ちゃんと確認するんですね。

亀：そこはねえ、やっぱしますね。その彼は、家族旅行でサイクリングロードを自転車で巡ったのがすごく楽しかったそうなんですよ。なので、そこが彼のスタート。旅をきっかけに彼もそういうのに乗りたくなってきたっていうんで、ようやく手に入れたところだったみたいなんですよ。じゃあ、まあサイクリングと一緒にやるのは難しいけど、その整備を自分でできるようにしようかって話をしていて、そういえば熊井さんの知り合いで自転車屋さんのお兄さんがいたなっていうのを思い出したんですよ。

熊：後から本人に聞いたら、そういう中学生との出会いは、とてもよい体験だったって言ってましたよ。

亀：ありがたいです。パンクの修理とかは、やっぱ自分でできた方がいいよねって、2時限まるまる教えてもらってね。普通のママチャリみたいな自転車だったらまだ修理しやすいんですけど、彼のはタイヤがめっちゃくちゃ細いロードバイク。タイヤを車輪のリールから外して、また装着して元に戻すのも、細いと大変なんだよなと思いつつも、でもなんか「僕、やってみます」みたいになって。すごい必死になって、多分30分ぐらいずっと格闘しながら、最後のタイヤとリールを装着する作業をガコッて自分でやれて、僕も本人も自転車屋さんも一緒になって喜びましたね。

熊：おー。

亀：さらには、ちょっとしたギアのアズレミみたいなのもギアの段数が多いと起きやすいんですけど、その調整の仕方も教えてもらって、その後、自宅に帰って、お父さんとお母さんの自転車もちょっと直しましたみたいなことも言ってくれるぐらいすごいハマってくれて、学んだことを活かしてくれているんですよね。

熊：その彼の中で、自分自身の暮らしや興味関心の延長線上にあるというか、気持ち的にも必然性を感じられる体験だったんですよね。

亀：そう。それで、職業体験みたいなのがその学年であって、みんな体験させてもらった職場に感謝状みたいなのを書いていたので、その彼に書いてみる？って聞いてみたら、書きたいって言うんでやってもらって、学校にも提

出ができたんですね。そこまで含めてすごい良い体験をさせてもらったなって。彼にとっても、自転車の楽しみ方がすごい良かったので、元気になるきっかけでもあったんですね。

熊：嬉しかったでしょうねえ。

亀：僕も嬉しかったですからね。そういうふうにして道の大人を連れて来こともできるだろうし、それ以外にもいろいろなやり方で、その子たちの「やりたい」とか「できた」ということと向き合っているんですね。僕と一緒に支援をやってる方は、マンツーマンの会話をものすごいじっくり時間をかけてやっていて、僕にとっても勉強になるんですね。それで、小学校のときから校長室にしか行けなかったような子が、やってみたいことや将来こうなりたいという気持ちが出てきて、今では高校に行きたいっていうことで、数学の授業とか部活にも出たりしているんです。なんかその変化っぷりたるや、人間はきっかけさえあればずっと変わることができるなって、思わせてくれるんです。

熊：誰しものが、スイッチのようなものがあって、それを押せているかどうかみたいなところってありますよね。

亀：なんか、結構みんな諦めがちな空気があるので、いやこんなに変われるじゃんって、必ずそういうスイッチがあるんだよっていうことを伝えていきたいなって。最初は元気がなかった子たちが、なんかもうやる気がみなぎっていくような感じになっていくことを見ることができてる環境に、僕はいることができていますし、そういう変化が生まれていくのは、やっぱ、やってて良かったなっていうところではありますね。

熊：そうですねえ。えっと、諦めがちな空気って、何をやっても無駄でしょ、変わらないでしょ、みたいな感覚なんですかね。

亀：やっぱり最初はそうですね。

熊：発達心理学を専門とするキャロル・ドゥエックっていう、スタンフォード大学の先生がいるんですけど、その人が「グロースマインドセット (growth mindset)」と「フィックスドマインドセット (fixed mindset)」というものを、対比させた研究をしているんですね。後者の方は、それこそ、要は何をしても「変わらない」「どうせ無駄」と思ってしまうような心理的な傾向で、前者の方は自分自身を「変わっていく」存在として思っている心理的傾向を指すんですね。で、まあ、当然その前者の方が良いんですけど、なぜそうなれないか？というところと色々あると思うんですけど、自分自身が「変化の原因になれるという感覚」がないからだと思うんですよ。だから、自分の発案から大富豪の大会が行われるとか、自転車に関する特別授業が行われるということは、まさに、その「変化の原因になれるという感覚」を育てているはずなんですよ。

そこにいていいと思える感覚を育む

熊：ここまでの話って、その中学生たちが「自分がそこにいていい」と思える状況に学校がなっていくというストーリーでもあったと思うんですけど、それって公園にも当てはまるというか参考にすべき話だなとも感じていたんですね。その子たちから湧き出ているものと向き合ったり、ちょっと元気がなくなったとしても、湧き出るはずだって信じて見守って、で、湧き出るものを回復してきた時に、ちゃんと流していくという。つまり、やってみたくなっちゃったことがあるなら、どんどん試行錯誤しながらやってみようよ、ということをやっているわけで。学校

とか教室が、自分たちがやりたいことができる場所だよ、そのやりたいことを言っている場所だよっていうのが、メッセージとして含まれているわけですね。

亀：そこは意識しているし、もっと言うと、学校や教室に行けるようになるというのが目的ではなくって、やっぱり、本人が楽しめているかどうかには尽きると思うんですよ。もちろん3年生になるといろいろ考えることもあるだろうけれど、まずは言いたいことを言えるところじゃないとですよ。

熊：その言いたいことを言える状況というものを担保することに、注力をされているんだなということを感じます。そこが基盤というか。

亀：それこそ「親と喧嘩しちゃってさ」みたいなことを話し合ってるのを見ると、そういうことも含めて言える場所になってるのは、すごい嬉しいですね。胸の内を少しでも話せる場所があるだけで、結構違うじゃないですか。そういう場所がね、どんどん増えていくと、なんかちょっと頑張るかって思えるだろうし。それは、別に学校の中じゃなくても全然いいと思うんです。近所のおじさんやおばさんに吐き出せてもいいはずですよ。そうだ、僕ら、学校の校庭で焚き火しているじゃないですか。

熊：ああ、「にしみたか学園コミュニティ・スクール委員会」関連の取り組みのやつですよ。亀井さんが会長で、僕が副会長という。

亀：それぞれ。放課後の子たちが、なんかもうこのテストを家に持って帰りたくないっていうのがあれば、それを燃やして帰っていいよ！って言えちゃうような場所をつくりたいぐらいの気持ちがあって。極端な話ですけど、でも、それくらいの空気があっても良いなって思っていて。焚き火で、焼き芋をやって、0点のテスト用紙とかを焚べてみたら、あれ、芋が甘くなったね、とか。

亀・熊：なははは。

亀：でもまあ、冗談で終わらせたくないというか、なきにしもあらずかなとか思うのは、テストの点をすごい気にしてフリーズしちゃう子って結構いると思うんです。でも、もちろん点数の高い低いはあるかもしれないけど、でも大事なのは、自分が何が出来て何が得意とか、逆にここが苦手だからもう少しやった方が良さみたいなことを理解することじゃないですか。気にすべきなのは、点数じゃなくてそっちでしょうって。点数が気になって、本来向くべき方向に意識が行かないなら、そのテスト燃やしちゃって。それで次に進もうよって。

熊：なはははは。無茶苦茶なことを言っているようで、理屈が通ってるような気もしてきます。「自分がそこにいていい」という感覚を育むことってきつと、そういうことなんだろうなとも思います。まずは自分自身を抱きしめるじゃないですけど、受容する。その上で、自分自身や周囲の環境に働きかけていく。何かしらの変化の原因になっていく。それこそ亀井さんが言うような、「良いようになるんだったら、どんどん良いようにしてっちゃえばいいじゃん」というものをしていく。なんか素直に思うのは、そういうことの積み重ねで、「そこにいていい」という感覚が、「ああ、この社会に生まれてよかった」というものになっていくような気がします。

亀：そうですね。難しいのは、いつも僕自身が遊んじゃってるなっていうことで、なんか子どもたちや地域のための企画みたいなのを考えてやろうと思ってるんだけど、いつも自分が一番遊んじゃってて、ちゃんと進行してくだ

さいとかって言われながらも、でもまあ他の人がやってくれば、あとはなんかもうみんな楽しくいきたいと思います。

熊：それでいいというか、それがいいというか。思うんですけど、子どもたちは基本的には、大人に教わりたいというよりも、一緒に遊んだり、一緒に驚いたり楽しんだりしていたいと思うんですよ。

亀：あ、それはそうですね。

熊：一緒に遊んで、気づいたら教わっちゃってたぐらいのことが必要なのに、いきなり、さあ教えてあげますよみたいな感じて来られたりすると、その先にあるのは、「できたかどうか」「何点取れたか」みたいな評価にさらされることじゃないですか。一緒に遊びましょうだったら、「楽しめているかどうか」になる。

亀：俺、超悔しがってるもん。トランプとかも、「また負けたー」みたいな。

熊：それ、真剣に遊んでいるから、悔しいんですもんね。その真剣さがないと、子どもたちにも見抜かれると思います。

亀：まあ単純に楽しんじゃっているからなんですけど、でもその中でこそ、向こうもニヤッとできて、だんだん慰めてくれるようになりますからね。「先生、次はいけると思うよ」「先生、次は良いカードを引けるといいね」とか言って。でもなんかそういう関係ができると、やっぱ朝起きるのが苦手だよねっていう子も多いから…。

熊：体質で、努力ではどうにもならないパターンもありますからね。

亀：そう。それでやっぱ関係ができると、「また、遅れてきたなー」みたいなことを言っても、向こうも「テヘヘ」って言える感じになるんですよ。言われて、シュンってなりすぎると、また学校に来られなくなるし、関わりを持てなくなる。それはあんまり良くて、というか、それは悪いことってやっぱ思っちゃうんですね。こっちも遅刻そのものが譲れない大切な問題かと言うと、そうではないんで。「また、起きられなかったなー」とか言って、「テヘヘ」って言って、教室に入って来れるくらいが丁度良いんじゃないですかね。遅刻は遅刻だけど、それをほどよく受け止められたらそれで良いじゃないですか。きっと、自分でもちゃんと朝起きたいと思っているだろうし、遅刻しちゃうのは本人も嫌なはずじゃないですか。それはもうしょうがないことだよって話をしてるし、でも同時に「遅れてきちゃったけど、しょうがないよね」って言われて慰められ続けるのも、それもそれで嫌だろうし、だったらなんか「遅れてきたな〜」っていうふうに、ちょっと笑ってあげた方がいいこともあるよなって。

熊：かたくなっていくものを、やわらかく。重くなっていくことを、かるやかに。亀井さんって、色々と首尾一貫しているなって感じちゃうんですけど、なんというか、言葉や表情って、人間にとって個人的なものでもありつつ、結構パブリックなものでもあると思っているんですね。要するに、言葉や振る舞いを、贈り物のように扱っていく感じがありますよね。包丁のように突き刺すものではなくって。

亀：それは、ありますよね。もちろん厳しい言葉が必要なときもあるとは思いつつも、ある程度のことは、許されたいなあって。僕、児童館でも働いてるけど、大体5分ぐらい遅れていっちゃうんですよ。もちろん、良くないことだと思いつつも、1人のスタッフさんが、僕が遅れて行くと爆笑してくれるんですよ。「ま〜た、亀井さん」って。それで救われることが、結構ある。逆に2分早く着いたりすると、「ええ！どうしたの！」って、笑い

ながら驚いてくれる。いや、もちろん遅刻するのはいけないんですけど、そういうことのおかげで、ものすごい気持ちよく働くことができていますよね。

熊：やっぱりルールを守ることはいくまでも手段で、ルールを守ることによって得たかったのは、個人や組織や社会がより良くなることじゃないですか。その成果を手にすることができるのであればね、そのルールそのものは本来柔軟にしていきたい気持ちはあるし、なんならそのルールそのものをみんなで作っていききたい気持ちもあります。ところで、亀井さんって楽しそうじゃないですか。そういう気持ちって周りに伝播していくと思うんですよ。そういう舞台に公園がなったらいいなって思うし、なんなら、そういう許し合っているような大人の伸びやかな姿をみて、子どもたちにも、この社会で生きていくことが結構楽しいことだよなって感じてもらいたいです。

亀：やっぱ、それを背中で語っていききたいですね。

熊：それこそが、教育という営みでもあり、大人の務めなんじゃないかと思います。



田村利治さん、内田薫さん

医療的ケアが必要な子にも勧められる公園を

取材日：2024年7月19日



医療的ケアが必要な子どもたちにとって、公園はどうか

田：このインクルーシブ公園っていう話が来たときは、すごく興奮しましたね。そういうのは、やっぱりつくるべきだし、公園というのはターゲットという考え方自体があっちゃいけない場所だし。

熊：誰にもひらかれているということですね。

田：そうですね。ただ、ターゲットだったり対象というものを確定しちゃうのは絶対に良くないんですけど、とはいえ、どういう方が来るかっていうのは仮定しないと、本当の意味でのインクルーシブにはならないと思ってます。

熊：ああ、なるほど。

田：昨年度にもお話をしていたんですけど、遊具の整備についての検討っていうのは、結構簡単に終わっちゃうのかなと思うんですね。ただ、その周りの整備が一番お金が、というか工夫が、必要なのかなと思っていました。みんな公園に行きたいんだけど、行けない理由は、ほとんどがまずは移動手段の話ですよね。家の近くに、そういった公園があれば良いんですけど、そもそも行けなかったら意味がない。あとは、やっぱりトイレも大切ですよ。医療的ケアが必要な子もそうですけど、どんな子たちにでも対応をしないといけないですし。それに、小学校が終わってから、わーっと遊びに来る子たちのためにもっていうのも含めて考えると、結構配慮しなければいけないことが壮大になってくるのかなと。とはいえとにかく、インクルーシブっていう言葉だけが独り歩きする公園にならないと良いなとは思っていました。

熊：まさに、まさにというところです。

田：「だれでもトイレ」って街中にありますけど、寝られるようなベッドもないと駄目だし、車椅子がどんな方向からでも入れるような配置を考えないと駄目だし。

熊：そうですね。

田：訪問看護ステーション、児童発達支援事業所、相談支援事業所を運営しており、日ごろたくさんの方にお会いします。今日は医療的ケア児相談窓口「あいびー」として来ているので、その立場でお話をすると、医療的ケアを行う場所がない時点で、インクルーシブ公園ではなくなっちゃうのかなっていう思いがあります。

熊：ああ。医療的ケアが必要な方が、そのケアをするスペースがそもそも公園にない。

田：はい。そうですね。衛生的に外ではやってはならないものもあると思うので、そこはご家族や医師との話し合いだとは思いますが、でもそういう配慮がないと、医療的ケアが必要な子は、なかなか公園に遊びに行けない。

熊：あの、そのう、排泄行為という領域のケアを行う場所としては、満足いく状況になっているかどうかという問題はありますが、インクルーシブトイレというものはあるとはあるとして、それとは別に排泄行為以外のケアを行う場所がトイレ以外にも必要になってくるということですよね。

田：そこしかないからってなると、たとえば医療的ケアをトイレでやってくださいということになると思うんですけどね。ただ、それはトイレでやるものなのかっていうのは、また考えなきゃいけないんじゃないかなと思うんですね。

熊：そ、そうですね。

田：トイレでやるにしても、その中で個室っぽく使える状態になっていれば、処置室でちゃんとやれてるっていう感覚や考え方に少しはなるのかなと思うんです。

熊：あの、その、考え方ということで言うと、排泄行為というものが人間の生理現象である故に、公園とかの公共スペースにその必要性を満たす場所が必要であって、それが即ち「社会権」というか、まあ、その「人間らしい生活」を送るために欠かせないという社会的な了解がありますよね。で、それで言うならば、医療的ケアを必要とされている方のための処置スペースも同じようにして、その必要性が満たされるべきだっていう話ですよね。よくよく考えると、本当にそうだなって感じるんですけども、現状、図書館とかも含めて公共的なスペースでそういった配慮はなされているものなんでしょうか。

田：そうですね。そのためにあるという場所はないと思います。みなさん、どこでそれが可能かっていうのを探すしかないですね。

熊：ああ、広めのトイレとか、人目のつかない端っこのスペースとかを。

田：はい。それで、そういうところで処置をしていると、「何やっているの？」と寄ってきてくれる子ども達もいます。そういった機会に、ケアの必要性を伝えることで理解を得られる機会になれば良いのですけれど。そうなれば、それはそれで良いことと思うんですけどね。そういうことも、インクルーシブ公園で生まれる風景としてはすごく良いというか、必要だなって思うのは思います。ただ、そういうことが嫌だなって感じるご本人の方や、そのご家族もいらっしゃるって思うと、ちゃんと部屋があるといいなって。

熊：なるほどです。

田：別にすごい立派な部屋じゃなくて良いと思うんですよ。処置がちゃんとできれば良いし、そういうことをやって良い場所なんですっていうことが、しっかり位置付けられていれば、もう一気に、必要としている方々に広がっていくかなとは思いますが。

熊：まだまだ整備は追いついていないような気もしますが、それこそ授乳室が必要だよなってなったのも、ここ最近ですよね。

田：そうですね。お母さんが車の中まで戻っていくか、それこそトイレの中でっていうものでしたよね。授乳室の整備は少しずつ進んでいますけど、医療的ケアに関しては、まだまだというか、無いんですよね。ただ、そこまで言うと、話が壮大になっていってプロジェクトとしては多分動けなくなるだろうなとも思いますし、一方で、「医療的ケアの方たちのための公園を」みたいになっていっちゃうのもちょっと違うかなとは思っていたんですね。

熊：冒頭におっしゃられていた、公園は「ターゲットという考え方自体があっちゃいけない場所」という話ですよね。

田：そうですね。考え方をしっかり深めつつ、どうやって裾野が広いものにしていくのかっていうところは工夫が必要なんだろうなって考えていたんですね。そうしたなかで、医療的ケア児の子たちに対してどうしたらいいかなって言われたら、専門的な立場としてアドバイスはできるかなと思ったんですけど、それ以外の領域の方々の知識や知恵も集めていって、それを全部ガツとまとめていくと、みんなが行けるところになるのかなとは思っていたんですけど。

熊：まさに、それをちゃんとやりたいです。

地域の資源を有効活用すること

熊：医療や福祉などの社会的資源を、医療的ケアを必要としているお子さんや家庭につないでいくというコーディネーターを田村さんされているじゃないですか。

田：そうですね。

熊：なんと言いか、その延長線上の話にもなってくるかと思うんですが、「医療的ケアを行う処置室をどうするか？」という課題に対して、「既存の社会的資源をどのように上手に活用できるか？」という視点があると思っっているんですね。

田：あると思います。

熊：新設でつくると、それはそれで費用が積み上がっていく。でも、たとえば、まだ仮説段階なんですけど、公園の近くにある「集会所」をそういった場所として使えないかなっていうものがあるんです。地域の自治会や町内会の方々が管理されているものなんですけども、そのスタイルも素敵だなと感じるんですね。そういった方々に協力を頂けないかなって。そういうところって、和室があるんで寝っ転がれたり、トイレがインクルーシブデザインに改修されていたりもしているんです。ただ、利用申請とか鍵の開け閉めの手続きが必要なので、そのハードルはあるんですが、理想を絵に描いた餅にしないために、そういうことも踏み込んで考えられないかなって。

田：それ、実現できたら良いと思います。公園の中じゃなくても、その隣の施設に入って行ってできる場所があれば、もうそれで、そこはある意味インクルーシブな場所になると。

熊：なんかそんな感じで、うまくマッチングが成されることで状況が前進することってある気がするんですよね。おそらく行政の中での縦割りを越えたり、市民や民間同士の協力も欠かせないことではあると思うんですが。

「みんなのために」が曖昧になると、みんなのためにならない

熊：今日、田村さんのお話を伺っていて、「どういう方が来るかっていうのは仮定しないと、本当の意味でのインクルーシブにはならない」というご指摘も、深く強く印象付けられているんですね。というのも、要はその「仮定」というものに、想定されていない方々がいたということじゃないですか。

田：そうですね。

熊：それと、ご本人や保護者の方のご意向ももちろん踏まえながらですが、医療的ケアの処置の様子を知るということも大切な機会であると、おっしゃっていたじゃないですか。思い出されるのが、地元の小学校に、医療的ケアが必要なお子さんが入学されてですね、今じゃ、酸素ボンベを持ちながら、子どもたちと鬼ごっことかしているんですよ。それが普通の景色になっている。授業中も、隣に看護師さんかな、ケアされる方がいらっやって授業を

受けることができています。なんかその子にとってもきつと良かったと思うんですけど、その周りにとっても大切なことだなんて思っていたんです。公園が、そういう交流というか学び合いの場になると素敵だなとも感じます。

田：僕らが今携わっている医療的ケア児のコーディネートは、どうやったら一緒に過ごせるか、受け入れていけるかをご家族の方とともに探っていくという支援をしています。無理だとはじめから考えず、どうすればできるかを一緒に考えています。

熊：ああ、みんなでどうにかしていくっていうことは、社会の基本であって欲しいです。

田：熊井さんのおっしゃった小学校でも、みんなで過ごすことでお互いを知り、助けてくれる。良い状況が生まれていくのは僕らも見えています。公園でもそれが生まれるはずなんですよ。やっぱり子どもたちは障害があってもなくても結構みんな仲良くやっているんですよ。

熊：親御さんの感触として、子どもたち同志のそういった障壁のないコミュニケーションによって救われる感覚があるというお話も伺いました。

田：そうなんですよ。大人が勝手に壁をつくっているという部分はあったりするなっていうのは、この仕事をさせて頂いている中で感じているところです。

熊：大人側の問題っていうのが多いんでしょうね。

田：プロジェクトの責任の所在はもちろん大切なんですけど、未来を見据えて、みんなが来れて、みんなが遊べてっていうところをちゃんと目指そうよっていうことをしないと、動けなくなっちゃうのが怖い。

熊：少しずつでも動いていきたいです。なんか、理想を目指すっていうことを忘れちゃうと、何を成し遂げたいのかっていう話をちゃんと具体的にイメージするまえに、大変そうだからやめておくとか、予算がないからやめておくとか、動かない理由ばかりに目についちゃうことって多い気がします。

「私たちのことを私たち抜きで決めないで」

熊：あの、その、「医療的ケア児」のような言い方って、今では結構一般化してきている気もしますが、昔からある言葉だったんでしょうか。

田：いや、昔は「医療的なケアが必要な子」っていう感じで呼んでいましたけど、「医療的ケア児」っていうのは、ここ最近のことだと思います。2006年に、国連で「障害者の権利に関する条約」というのが採択されたんですけど、多分その辺りから「医療的ケア児」という言葉が広まってきたのかもしれない。

熊：「障害者の権利に関する条約」って、「私たちのことを私たち抜きで決めないで（Nothing About us without us）」を合言葉に世界中の当事者の方々が参加して作成されたというものですよね。日本は、その条約に批准はしたものの進みが遅いっていうことで国連から勧告を受けているんですよ。

田：そうですね。弊社が市から委託を受けている「小金井市医療的ケア児相談窓口あいびー」は2023年7月から相談受付を始めました。医療的ケア児コーディネーターを配置し相談にあたっています。もともと、私たちは、医療的ケア児と関わる機会が多かったので相談や支援の体制整備にかかわることができ良かったと思っています。「医療的ケア児コーディネーター」って、専門の研修を受けて修了する必要があるんですけど、そういう人材がいる相談窓口が整備されているのって、あまり多くはないのではないですかね。そういった意味で小金井市は早期に取り組むことができていると思います。

熊：そうかあ。医療的ケアが必要で在宅で生活している子どもたちが日本で推定2万人という数字をニュース記事で見たんですけど、気軽に相談できたり、医療や福祉や教育の社会的な資源とのつながりをコーディネーションをしてくれる役割を担っている人がいるというのは、めっちゃ必要なんだろうなって思います。気にかけておく必要がある事がたくさんある状態が常に続いているというのも大変だと思うので、親御さんへのそういう負荷が社会の中で分散されていった方が良いはずですよ。

利用者の方にお勧めできるようになるという、明確なゴール

田：たとえば、「play here」で目指している公園が、本当にできたらあったら勧められるんですよね。ご家族で遊びに行ったらどうですか。 「あいびー」では、小金井市の医療的ケアが必要な0から18歳までの方の全員とお話をさせて頂きたいというのを目標としてやっているんですけど、そこで話題にすることもできるし。小金井市にお住まいじゃない方にも、もちろん勧められるんですけど、今、本当に勧めたくなる場所って、なかなかないですからね。

熊：あー、なんかプロジェクトの目標の持ち方って結構大切だなって、常々感じているんですが、田村さんたちが勧められるような公園にするというのは、明快だし、持つべき目標な気がしました。

田：あそこなら医療的なケアがあっても安心となったら、私たちも安心して勧められますよね。

熊：内田さんはどうですか。

内：私は、医療的ケア児の兄弟や姉妹も一緒に来ても楽しめる公園になったらインクルーシブの始まりになるかなって思っていて。後は、公園に遊具だけ設置するよりは、やっぱり人がいないと難しいのかなって。

熊：人。

内：医療的ケアならあそこで出来ますよとか、この遊具はこうやって遊ぶと面白いよって、現地で声かけてくれる人です。公園の看板や張り紙に案内が書いてあるかもしれないけれど、自分も自由に使っていきたいんだ、受け入れられているんだって思えるためには、そういう話をしやすい人がいる環境が良いなって思いますね。

地域は本来、人が育つ場所

田：人員を置く予定ってあるんですか？

熊：それ、めちゃくちゃ重要な論点だと考えています。もっと言うと、3つのポイントで重要だと思っているんですね。まずは、「利用者の方々にとっての利用のしやすさ」というところ。次に「福祉サービスといった社会的資源へのつながりやすさ」というところ。更には「地域で人が成長していく仕組み」ということなんです。一つ目は、内田さんと同じようなことをイメージしてまして、二つ目もまさに、あいびーさんのような相談窓口やコーディネートの話になってくるんですけど、要は「相談しに來れない人や声をあげることが難しいけど、本来とても必要としているという方」との接点をつくる機会ということなんです。そのためにも公園が良い舞台になるのではないかって思うんです。今ちょっと仮説的に考えているのが、毎日は難しいにしても、ゴザのような敷物や、シャボン玉や虫眼鏡やフラフープや床に絵を描けるチョークとか、そういったツールを貸し出すような、移動式の屋台のようなものと良いのでは？というものなんです。で、そっからが肝心で、その屋台は無人じゃなくて人がちゃんといて、その人って言うのも、それこそ田村さんとか内田さんのような専門性が高かったり相談窓口の方だったり、理学療法士や作業療法士のための学校である社会医学技術学院さんが市内にありますけど、その学生だったり、教育を学ぶ学芸大学の学生だったり、なんなら役所の方も、そこに居たら良いような気がしているんですよ。

田：面白いですね。

熊：ですよ。喫茶店でもBARでも、日替わり店長とかあってあるじゃないですか。あんな感じで、地域のそういった方々が代わりばんこに、そこに居るっていう。ちょっとした雑談とかも含めて、会話がしやすくなると思うんですね。

田：相談をしに行くというよりは、ものを借りに行った時についでに話せるということですよ。良いかもしれませんね。

熊：そうです、そうです。なんか、その「ついで」というのが、すごい重要な気がするんですよ。そういった日常的な営みの中にどうやって落とし込んでいけるのかっていうことを、インクルーシブ遊具の整備だけでなくできたら良いなあって。ただ、まだ、あくまでも僕が勝手に喋っているみたいな段階ではありまして、こうやって田村さんたちとお話することを通して、イメージを膨らましたり手応えを掴むことができています。それに、結局、今回のプロジェクトの予算根拠である東京都の補助金も期間的な制限もあるんで、そういった「人が稼働するところ」に、どうやって財源的な紐付けをするかというところは、考えていかないといけないことではあるんです。

田：理想を目指していきたいですよ。

熊：本当に。こうやってお話をしていると、より一層、そう思うことが出来ます。やっぱり、人手がかからないようにすればするほど、一方で、人が育つ機会がどんどん減っていくという側面もあると思うんですね。さっきの、おもちゃなどの貸出をする屋台の話も、そこにいる事で、地域や当事者の方々の実情に触れることができたりすると思うんです。なので、人手を減らしても良いところと同時に、ちゃんと人手をあえてかけるところのメリハリを意識しないと、地域というものが人が育つ場所じゃなくなっちゃう。

田：そういう場にしていましょーよ、公園を。

102

小金井市医療的ケア児相談窓口



山脇弘美さん

やさしい日本語を、やさしいまちから

取材日：2024年7月29日



外国の方を受け入れる準備がないという問題

山：小金井市って、外国人の相談件数がゼロなんです。

熊：そうなんですか。知らなかったです。

山：外国人は市内に3500人ぐらい住んでいてニーズがないわけがないんですが、市内に外国人専用の窓口がないんです。外国人相談も「随時」になっていて、予約をしないとイケない。

熊：そこまでのハードルが高そうですね。

山：そう、多分そこまでとり着けないんだなって。だからだと思うんですが、相談件数がここ数年ずっとゼロの状態。そんなわけないだろうって。

熊：外国ルーツの方がそれなりに暮らしているけども相談件数がゼロというのは、相談する必要があるからということでもないような気がしますね。ちょっと正直、不勉強で、僕自身が知らないことがたくさんありそうです。今日はそのあたりを勉強するきっかけにもしたいのですが、そもそも山脇さんはどういった経緯で、外国ルーツの方の支援をされ始めたんですか。

山：うちの家族は息子が小学2年のころから4年あまり、アメリカで暮らしていたんです。息子ははじめは英語がまったくできず、学校に行きたくないと泣いてばかりいたんですが、アメリカの公立小学校には外国から来た子どもが英語をイチから学べる仕組みがしっかりあって、友人や地域の人にもたくさん助けてもらいました。日本に戻ってから、今度は自分が外国人向けのボランティアができないかと思ったんです。息子が小金井市内の高校に入学したので、**2021年**に横浜から小金井に引っ越してきたんですが、何か活動をはじめたいと思って社会福祉協議会に電話したら、「**KISSA**（小金井国際支援協会）さんがありますよ」って教えてもらって。**KISSA**って、もともとは外国人の小学生の日本語・学習支援がこの地域に無いつていうことで、その時は貫井北センター（公民館貫井北分館）で、月に1回そのための集まりをやっていたり、夏休みの宿題サポートをしていたんです。ぜひ参加したいと思って**22年6月**に入会したら、わたしが「入門・やさしい日本語」認定講師でもあったんで、他の支援者向けにその講座もやることになって。

熊：ああ、「やさしい日本語」。届けるべき情報も、その言葉の選び方で届き方が全然変わっていくんだよなって思っていました。

山：そうです。ただ、講座だけを何回もやり続けるんじゃなくて、小金井市や周辺の自治体の状況もお伝えしていこうと思って、調べてみたら驚くことの連続で。近隣の自治体には外国人の支援を担う多文化共生の部署や自治体と連携した国際交流協会があって、外国人住民がいつでも生活や子どものことなどを相談できる仕組みがあるんです。だから、小金井に暮らす外国人はどうしているんだろうって。市内のいろんな方々とお話をするようになったら、あちこちでそういったことが話題になるんですよ。ということは、やっぱり困っている人がいないというわけじゃなくて、外国人のニーズとして集約しているところがどこにもないんだろうなっていうことがだんだんわかってきて。

熊：現場での肌感とリサーチの結果が重なって、危機感が募るというやつですね。

山：実は、「**EDAS**（イーダス）」という団体にも参加していたんです。キャッチコピーが「来た時よりも、もっと日本を好きに」なんですけど、そこには、日本語学校の代表とか日本語教育の専門家とか司法書士さんとかいろんな分野で外国人とかかわっている方々が集まっていたんですね。教育とか法律とか就労とか、もっとジャンルを越えて情報共有や政策提言もしていこうって。そこで定期的に開かれていた勉強会や視察会に参加して、政策的な課題をたくさん知り、別の専門講座で「やさしい日本語」も学んだんですが、実際に現場に出るのは小金井が初めてで。活動したり調べたりすればするほど、小金井市はこれで大丈夫なのかなって。それでまずは、地域のことをもっと知りたいと思って、市内の公園で開かれている「道草市」に行ったりしたんです。

熊：おお。道草市の立ち上げに関わっていたので、とても嬉しいです。山脇さんは、その道草市で小金井市の小林さんと出会ったんですって。

実際のところを知るところから、既にそこにある可能性を知るところから

小：その場で1時間半くらいお喋りさせて頂いて、そこで少しでも状況を改善させたいと感じまして、こうやって今回の施策にも外国の方向けの配慮を入れようとしている次第です。山脇さんのおかげです。

山：ちゃんと耳を傾けてくれて、「なにかできませんかね」って真剣に言ってくれた、初めての市の職員の方だったんです。それで思わずガーッと話しちゃって、その後1年ぐらい音沙汰がなかったんですけど、突然、今回の「play here」の話をいただいて驚いたんですけど。

熊：どう芽が出るかわからないですし時間もかかりますけど、やっぱりそうやって地域の実情のようなことは、行政サイドには、どんどんインプットしてもらったほうが良いですね。逆に、地域サイドも行政の実情を知らないとはありますが。

山：そうですね。地域の実情でいうと、市内のお店やイベントに外国の方々が結構いらっしゃるようなんですよ。観光とかではなくって、地域にお住まいの方々で。お店の方から「英語ができないし、どうしたらいいかわからない」という声も届くんですけど、実は日本に住んでいる外国人の8割ぐらいは「やさしい日本語」だったら通じるんですね。

熊：あ、そうか。そうなんですね。

山：みなさん、なかなか知らないですね。英語を話さないといけないってなって壁をつくりがちなんですけど、実際のところそうでもないんです。だから、そういうところも伝えていかないとですね。

熊：そんな気がしてきました。

山：なので、道草市に出店して「やさしい日本語クイズ」をしたり、自分たちの家にある外国のグッズのフリーマーケットをやったりもして、そういう機会を広げていきたいと思ってきました。昨秋は梶野公園のお祭りにも出ましたし、今年も出店する予定です。

熊：山脇さんがKISSAに参加されて、まだ2年くらいだと思うんですが、なんか短期間で動きが怒涛な感じがありますね。

山：外国人住民が参加したり、交流できる場を地域で増やしたいっていう話をしていたので、今年3月にKISSAの中に多文化交流部っていうのができて、取りまとめ役になりました。

熊：おお。

山：日本の唯一のネパール人学校が荻窪にあって、そこの初代理事長が小金井に住んでいるんです。親しくさせてもらっていたというのもあるんですが、市内にそういう方がいらっしゃるのに、話を聞く機会がないっていうのはもったいないって思って今年の春、「多文化まなびの会」という講座をしたんです。

熊：人に対して資源という言葉もなんか違う気もしますが、地域に既にいらっしゃる方の知見をもっと活かしていくことができるっていうのは、とても重要な気がします。そういうことの積み重ねで、地域がより活性化していく感じも受けます。

山：そうなんですよ。それと、東京学芸大学の先生からご紹介いただいたトルコからの留学生がいるんですが、トルコと日本の能登半島の両方で災害ボランティアをされていて、そのことを話してもらいたいなって思って、7月にも2回目の講座をしました。トルコのお茶やお菓子も取り寄せて、みんなで味わいました。市内には70カ国以上の国から来ている方がいるので、さまざまな文化や食べ物を紹介してもらって、いろんな形で続くといいな、と思っています。

熊：なんかスゲえっす。ワクワクします。

「申請主義」という困難

山：外国人の子どもの教育支援は深刻で、もう自治体によって教育委員会の支援体制が全然違うんですよ。武蔵野市は教育委員会の中に専門の部署があって、外国人の子どもが転入してくると、担当者が本人に会ってどんな支援が必要かを確認するんです。たとえば日本語がまったくできず、日本の学校の習慣もわからない状況で通うことになると、もうトイレも行けないわけです。なので、そういう場合はまずは母語通訳をつけて、落ち着いてきたら学校に日本語指導員を派遣して、学校生活に必要な最低限の「サバイバル日本語」を個別に教える。放課後の日本語教室というものも市内に3箇所あるんですけど、そこに通うこともできる。

熊：サバイバル。そうかあ、そうですね。それくらいのケアがないと、学校での授業もそうですが、生きていくことに支障があるということですよ。小金井市は、そこまでの仕組みがないということなんですよ。

山：ないんです。

熊：知らない意識しないんですが、知り出すと、とたんに心配になってきます。

山：わたし、小金井市東町の友愛会館で開かれている子ども食堂のボランティアにも参加しているんですけど。

熊：おお。

山：そこでは、食堂とは別に週に2回、勉強会という形で学習支援をもう何年もずっと続けているんです。子ども食堂に来ていた中学生のリクエストで始まったそうです。その時間帯は友愛会館の2階が空いているとわかり、KISSAの現代表で、日本語教師の佐久間久美子さんに相談して、外国人の子どもの日本語・学習支援教室をやってみようってことで、去年の4月から毎週1回のペースではじめてみたんです。最初は子どもが2人だけでしたが、あっという間に10人ぐらいに増えて、今年4月から、もっと広いスペースが使える東センター（公民館東分館）に場所が変わりました。やっぱりニーズがあるよねって。

熊：おお。

山：それだけじゃなくって、学校と連携をしないとわかんないことがあるって思って、たとえば、海外から日本に来たばかりの子が去年の4月に市内の小学校に入ってくるって聞いたんで、知り合いのお母さん経由で学校の副校長先生に連絡をとって。

熊：おお。

山：「ボランティアで外国ルーツの子の支援をしているんですけど、サポート必要ですか？」って聞いたら、是非来てくださって言われたんです。

熊：え、それって、山脇さんがそうやってアプローチをしないとどうなっていたんですか？

山：その子は、日本語がまったくわからない状態だったんですけど、通訳もなかったし、担任の先生も困っていました。自分の言いたいことがなにも言えない、もうほんとゼロの状態。教育委員会としては様子を見てからということだったようですが、武蔵野市だったら母語通訳が入るような状況だし、学校が教育委員会に専門の日本語指導員の派遣をお願いして、結局その日本語支援が入ったのは12月だったんです。

熊：4月の入学だから、それまでの8ヶ月はどうしていたんですか？

山：週に1回、KISSAでやっている日本語支援の教室に来てもらって、それとは別に週に1回、わたしが学校に行って、授業中、隣に座するというサポートをしていました。

熊：なるほど。

山：そんなのじゃ全然足りなんですけど、なにもないよりはマシかなって。途中で東京学芸大の学生がわたしの代わりに入ってくれて、12月によやくっていう。そんな状況なんです。

熊：セーフティーネットが万全じゃないのは、しょうがないことだとは思いますが、そこから漏れてしまうような方や状況をどうしていくべきかっていうことは、考えないといけないことですよね。よく自治体サービスは「申請主義」だって言われますけど、つまり自分で申請しないと、そのサービスを享受できないわけですよね。原則としては、それで良いような気がするんですが、そもそも声を上げることが出来ない、つまり申請ができない方がいるっていうことを忘れちゃいけないはずですよね。だから、声が上がらないことや申請がされないことが、そこにニーズがないという判断には直結しないはずということだと思いませんか。その意味でいうと、「こういう方が市内に転入してきたら自動的にこういう対応をする」みたいな初期設定にしておかないと、今回のその子のように、アンテナを張り続けて目を凝らし続けて、ぐいぐいと入り込むようなことをしないと、必要としている方のところに支援が届かないことになりますよね。

山：そうなんです。おっしゃる通り、初期設定になってない。じゃあどうするかっていうのが去年のわたしたちの大きな課題で、それでKISSAとして小金井市に協働事業を提案したんです。「外国ルーツの子どもの教育支援」に関するシンポジウム開催、多言語の「外国人保護者のための小学校・中学校ガイドブック」の作成と配布、外国語人保護者向け入学準備相談会という3本セットで。ガイドブックでは、学校生活の説明や入学の準備の仕方や相談できるところを紹介しているんですけど、そういうものがあれば、それこそ初期設定として、小金井市に転居してきた外国人保護者に配れるじゃないですか。学校や教育員委員会とつながるためにも、そういうところから始める

のが良いかなって思っただけ。予算は講師やデザイナーさんへの謝金や印刷費などの実費で消えるし、ボランティアでやるには思った以上にヘビーな内容だったんですけど。

熊：ボランティア。

山：日本語教師の資格を取るために養成講座を受けていたんで、それが幸いというか、ちょうど時間があつたので、ほとんど仕事を入れずに、このことに費やしていました。

熊：いやはや、いろいろと考えさせられます。

外国ルーツの子も地域で育つものだから

熊：なんと言いますか、山脇さんたちの課題意識として、外国の方を受け入れる準備というものが小金井市にほとんど無いと言っても良い状況をどうするのか、困っている方々が顕在的にも潜在的にもたくさんいるんだからどうかしないってというものがあるじゃないですか。小金井市に、他の自治体のように包括的にみていく公的な機関がないとなると、教育のことなら教育委員会で、福祉のことなら地域福祉課で、仕事のことなら経済課で、みたいな感じで既存の部局がそれぞれの持場で意識を向けていくしかないと思うんですね。それで言うと、公園というの、制度的にも「公共の福祉」の増進というものを目指すわけですから、その観点もありつつ、小金井市の小林さんが山脇さんとの出会いと雑談を受けて、乗り出しているというのが実際のところだと思うんです。なにが言いたいかというと、公園の可能性という話題にも触れておきたくって。

山：公園から入っていくのはすごくいいと思います。意識っていうことで言うと、小金井の行政の中では、多文化共生の地域づくりの視点が無いんですよ。この地域は外国の方が少ないのかなって思ったら、全人口に占める外国人の割合は武蔵野市とほぼ同じなんです。にもかかわらず、こっちではなにもなくって、隣にいったら外国の方向けの施策や情報が溢れている。すごい不公平だし、あまりにも差があるから、そこはなんとかしなきゃなって。このままだと、なにも知らずに小金井市に引っ越してきた外国人がアンラッキーですよ。無い無い尽くしのなかで、やっぱり優先順位が高いのは、親の事情で日本に連れて来られた子どもの教育支援だと思います。とはいえ結局、子どもって学校だけじゃなくて、家庭や地域のなかで育つから、地域とのつながりが欠かせないんですよ。

熊：地域とのつながりという意味でも、公園は舞台として良いということですか。

山：公園は地域の拠点になりますよね。身近な公園で道草市のようなイベントがあつて、そこで欲しい情報が手に入るっていうこともあるだろうし、地域の防災情報だって届けられます。地震がない国から来た方もいるし。他の自治体では、外国人の方向けの防災講習会が活発に行われているところがいっぱいあるんですよ。小金井市では見かけないですね。小金井市が昨年、「災害時に役立つ『やさしい日本語』」っていうイベントをやって外国人にも呼びかけたんですけど、集まらない。もっとわかりやすい形で必要な情報を届けていかないといけないと思います。

熊：やっぱり基盤というか習慣にしていけないとですよ。「あのWEBサイトや冊子を見ればわかる」「あのイベントに行くとかわかる」「あのひとが口コミで教えてくれる」って、情報が届いていくためのメディア環境や人間関係の基盤だったり、行動の習慣というものが確立されないことにはって感じがします。僕は、出身小学校が武蔵野市の境南小学校なんですけど、通勤で今でもそのそばを通っていて、地域の掲示板みたいなのが、そのあたりにあ

るんですね。つまり、いろんな人が目にするところなんですけど、そこに外国の方向けのチラシもしょっちゅう貼ってあって、あと、交流イベントのようなもののお知らせもあって、それこそしょっちゅう目にしているので、非常に身近に感じる事ができていました。

山：そういうことですよね。小金井市のホームページも「やさしい日本語」の対応ができると良いんですけどね。ただ、そこまで大がかりなことが難しければ、みんなが意識するだけで、ちょっとずつ変えていけることもたくさんあると思います。地域のさまざまな案内や行政からの情報なども「やさしい日本語」を使えば、外国人だけでなく、お年寄りも障害のある方もぐっとわかりやすく、身近な情報になるですよ。「ことばのバリアフリー」とも言われますが、「やさしい日本語」を使わないのはもったいないです。

「支援」のその先

山：外国人も支援される側だけでなく、やっぱりなにか主体となって関わっていくようなことができたらいいなって思っています。支援する・されるではなくって、彼・彼女たちが自分たちでいろんなことを考えたり、得意なことや好きなことで「こういうことやりたい」っていえる場所がいろんな地域にあるのが理想だと思っているんです。何時に始まって何時に終わりますみたいになかったりしたものではなくって、公園のようなオープンな場でいつ来ても帰っても良いような感じで雑談できるような場所があって、そこからなんかやりたいってことが生まれるっていうのもいいなあ、と。

熊：その考え方も、すごい大切にしたいと思っていまして、障害がある方々だって、常に支援を受け続ける側の人というポジションに固定してしまうのは間違っていると感じていて、そこにある立場を越えた相互作用というか一緒に企んじゃうような関係が重要だと思うんですよね。あと、まさに無目的に集まることのできる機会っていうのも。

山：そう。だって、わたしたちが教えてもらうこともたくさんあるんですよ。なんて言うんだらう、自分の問題意識もあるけど、すごい勉強になる。日本ならではの暗黙のルールに気がついたりして、自分たちを見つめ直すきっかけになる発見がたくさんあります。

熊：発見。

山：たとえば、「外国人保護者のための小学校・中学校ガイドブック」をつくったときに、中学生の「制服」の表記を「標準服」に変えてほしい、と教育委員会から言われたんです。

熊：「制服」か「標準服」か。

山：「制服」は必ずそれを着る必要があるんだけど、「標準服」は推奨している服装ということで、着用義務がないということでした。ただ、推奨であっても実質みんなそれを着ないといけない感じだから、つまり実態は「制服」なんです。

熊：文化人類学者のエスノグラフィー研究みたいです。

山：靴下も色が決まっているって聞いたから、校則なのかと思って調べてもらったら、学校の書類に「標準服に合うもの」って書いてあって。つまり学校には、明文化されていない暗黙のルールがあるってことなんです。外国人向けのガイドブックにどこまで説明を入れたらいいんだろうって、悩みました。

熊：日本の習慣を、別の文化からの視点でみると、当たり前と思っていることが、そうじゃなくなっていくという。

山：そう、日本特有のルールがたくさんあることがわかって、本当に勉強になりました。異文化に触れると、楽しいこともたくさんありますよ。就学支援をきっかけに知り合ったご家庭にお邪魔したら、どうしてもってご飯をご一緒させてもらって、初めて口にするようなバングラディッシュの料理やデザートがいっぱい出てきたりとか、これはもう、わたし一人で味わうのはもったいないなって思うぐらい。だから、外国の料理教室とかももっとやってみたいなって。

熊：それ超楽しそうです。

山：多文化共生って、文化や慣習の違いからやっぱりいろんな摩擦やストレスが生まれるんですが、そういうことをひとつひとつ理解して乗り越えて、到達できる場所だと思うんですね。そこの大変なところを経ずして、綺麗ごとや楽しいだけですむ話じゃないと思っています。ただ、日本人だっていろんな人がいるように、外国の人もいろんな人がいるので、どここの国の人ってだけじゃなくて、なににさんっていうように、人でみていかないといけないはずなんです。子どもたちの方がむしろ、そういうバイアスがなくて、国籍じゃなくて、なににちゃんって、その子そのものをみて一緒に遊んでいたりすると思うんですよ。むしろ大人の方がね、頭でっかちのステレオタイプになってしまっていたりする。それを取っ払えばいいのになって思います。そう、だから公園ね。公園は、その意味でも良いと思います。

熊：公園を、その舞台にしていきたいです。

変わるきっかけ、わかりづらさが持つ意味

熊：暗黙のルールということ言えば、暗黙ということ、上手くいってたくさんあるような気もしているんですね。というのも、明解なルールにすることで、それは絶対的なものになりますけど、暗黙にしておくことで、本来、その場で柔軟な対応ができることだってあると思うんです。ただ、そこでは、自分でちゃんと感じたり考えたりするという習慣がセットではあったはずなんです。ルールってある意味、考えないで済ますための仕組みとも言えちゃうと思うんですよ。で、まあ、約束したつもりはないけど、守らないといけないルールのようなものがたくさんあって、それで上手くいっているうちは良いかと思うんだけど、それがそうでもなくなってくると、そもそものところから考え直す必要が出てくる。今って、そういう時代なのかもしれないですねって思います。

山：日本がインクルーシブ社会に向かっていくには、既存のものを問い直す必要があると思います。そういうプロセスのなかで、わたしたち自身が学んで、地域がより豊かに、暮らしやすくなるためのきっかけをもらっているんですね。ただ、「インクルーシブ」みたいな横文字を使うの、本当は好きじゃないんですけどね。

熊：あれ、アメリカに住んでいたんですね。

山：そうなんですけど、なにか他に日本独自の良い言葉ないかなって。

熊：SDGsもそうなんですけど、なにかそういう横文字のキーワードにするっていう風潮はありますよね。

山：そうですね。そうすることで、ばっと広がることはあるんですけどね。

熊：そこにあるモヤモヤって、多分、さっきの「ステレオタイプを避けたい」という気持ちや「ルールをそのそもそもから考えたい」という気持ちとも重なっていくと思うんですね。というのも、一つのキーワードやイメージとか、ルールをどかっと決めちゃったほうが広がっていきやすいのはもちろんあるんだけど、そこから抜け落ちてしまうことがたくさんあるという話じゃないですか。なんて言うのか喩えるならば、パソコンで大容量のデータを送る時に、データをZIPとかに圧縮するじゃないですか、そんな感じ。圧縮された方がデータ容量も小さくなるし、広がりやすい。でも、重要なのは、その圧縮データをちゃんと解凍できるかどうかっていうところなんですよ。なので、このプロジェクトではいったん圧縮することなく、膨大なものを膨大なままに留めようとしています。なかには公開NGな方もいらっしゃるんですが、そうではない場合は、こういったヒアリングをインタビュー記事にして公開しているんですけど、だいたいお一人で1万字くらいなんで、20人になると20万字になるんです。膨大ではあるんですが、人の存在って、そう簡単に一つのイメージで括られるものではないし、それこそステレオタイプにしちゃいけないって。とはいえもちろん多くの方に知って頂きたいので、その工夫はそれはそれで手尽くしていければと。

山：なんかわかる気がします。もうね、一つずつ積み上げていくしかないかなとも思います。

熊：はい。大雑把なことだけをして満足しないで、具体的なことを積み重ねて、じっくりことを大きくしたいという気持ちがあります。あのう、それで聞き手と言いつつ、お話ししながら気持ちが浮かび上がってきているんで、もっと喋っちゃうんですけど。

山：どうぞどうぞ。

熊：ありがとうございます。誰かの困りごとを解決したり、より良い兆しを後押ししたりするということを、社会の基盤としたいという気持ちがあるんですね。ただ、一方で、それこそ「困っている人」というカテゴリーに誰かを押し込めるということもしたくないと考えているんです。だって、むしろ環境的な要因で、困る状況に追い込まれているということでもあるし、支援をしていると思っている側だって困り事を抱えていたり、これから抱えることになったりしますし。それに、その困っている内容が、すなわちその人を表すものでもないような気がします。

山：それもなんかわかる気がします。

当事者に話を聞いたということで正当性を安易に担保しようとはしてはいけない

山：わたしよりも、それこそ直接ネパールの方に話を聞いたほうが、当事者の方々の気持ちを理解するということでは良かったんじゃないですか。

熊：それもそうですし、そのお話もめちゃくちゃ気になるんですが、なんと言いますか、当事者の方のお話を聞いたことでプロジェクトの正当性がすぐ担保されるということでもないと思っていて、山脇さんのように、いろんな人の間を行き来して、精力的に動いている方のお話も、めちゃくちゃ重要だと思っているんですよ。

山：どんなことをしていけたら良いですかねえ。

熊：全部を急いで決める必要はないかなって思っています。小金井市の小林さんとの雑談から1年後にこういった動きとして反映されているように、ちゃんとお互いの存在を認識できていれば、その時が来た時に顔が浮かぶと思うんですね。まずはそこからだよなって。ただ、今日お話をうかがった現状が、ある程度もっと地域で知られたほうが良いであろうと思いますし、そのためにこのプロジェクトが一助になることができればとも考えました。あと、「やさしい日本語」を取り入れるという発想を持って進めていかないと。

山：なにかあれば声かけてくださいね。

熊：ありがとうございます、とても嬉しいです。

こがねいし 小金井市 しょうがっこう 小学校 ちゅうがっこう 中学校 がいこくじんほごしや 外国人保護者のための **ガイドブック**

小金井市 面向外国人家长的中小学指南
 Koganei City
 Elementary & Junior High School Guidebook
 for Non-Japanese Parents



ここから
 ダウンロード
 できます

こがねいし 小金井市の しょうがっこう 小学校 と ちゅうがっこう 中学校 に入る がいこくじん 外国人の こ 子ども と おや 親のために、
がっこう 学校の せつめい 説明や にゅうがく 入学の じゅんび 準備、そうだん 相談できるところを しょうかい 紹介する
 ガイドブックを つく 作りました。(2024 年1月)

This guidebook has been created for foreign children and their parents entering elementary and junior high schools in Koganei City for the first time. It compiles information on the characteristics of Japanese schools and the necessary preparations for entering school.

这本指南是为第一次在小金井市上小学或初中的外国孩子及其家长而编写的。在这本指南中，您将了解到入学前的准备工作、对学校的介绍以及遇到问题时的处理方法等内容。



編集・発行: 小金井国際支援協会 Koganei International Support Service Association
 問い合わせ先: 協働事業担当・山脇 ☎080-6505-1818 ✉hiromiyk0106@gmail.com
 協力: 小金井市教育委員会 Koganei City Board of Education *2023年度小金井市 協働事業



木本茜さん

安心と挑戦の拠り所としての公園

取材日：2024年7月31日



プロセスを大切にすれば、心が羽ばたく

熊：元々、僕自身が、ずっと子どもたち向けワークショップの実践をしていたんですね。小金井でいうと、丸田ストアという寄り合い商店の2階で場所を持ったりもしていて、あまり現場にはいれなかったんですけど…。

木：「とをが」さんですよ。私は、野外保育「りんごっこ」という自然保育の森のようちえん・保育園で保育士をしていて、その子たちが結構通っていたんですよ。

熊：そうか、そうだったんですね。ありがとうございます。今日は木本さんのお子さんと一緒にインタビューに参加してもらえて嬉しいです。

木：子どもに関わる活動に参加し始めた時に、所属している団体の人達から「うちは子どもの遊びのことをやるNPOなんだから連れてきなさいよ」みたいな感じで言ってもらえたのがきっかけで、もうずっと連れ回してて…。

熊：NPOって、「こがねい子ども遊パーク」ですね。

木：そうですそうです。連れて行く時は、本人に嫌かどうかは聞くんです。今日も、その「遊パーク」がもともと立ち上げた梶野公園のプレーパーク、今はお母さん仲間と引継いで「ちびっこプレーパークつくし」として活動しているのですが、わたしがそこにいるので、午前中はプレーパークで遊んでいました。このインタビューの時間になったら家に帰るって、昨日までは言っていたんですけどね。さっき聞いたら、一緒に行くって言うんで。

熊：その感じめっちゃ良いですね。社会全体がそういうことになったら良いのになと思うくらいです。

木：お母さん、何するんだろう？みたいのもあるかもしれないですね。旦那も引きずり出して、地域の遊びイベントのお手伝いとか、家の前で地域交流のための遊び場をつくるのに、ちょっとこの係やっておいてよって色々動いてもらったりもしているの。みんな、お母さんに振り回されているよね？

皆：ふふふふふ。

熊：なんか、清々しく振り回したり振り回されたりといったことがないと、物事が広がっていかないですよね。だから、ちょっとおいでよとか、ちょっとやっておいてよみたいな、ちょっとした無茶振りって、結構大切なことだと思っています。

木：ここ数年、子ども関係のイベントがとて増えましたよね。主催者側がサービスを提供して、その他の人はお客さんとして参加する。そういう企画物が、わたしはあまり好きになれないんですよね。もちろん、参加したら色々な体験ができて楽しい時間も過ごせるので、全てを否定する訳ではないのですが、地域の中に限って言えばサービスの提供側と享受側に分けられる感じが、人の繋がりをうみにくいんじゃないかな…って感じていて。自分が開催する側のときには、お父さんお母さんに遠慮なしにお手伝いをお願いしたり、さっき話に出てたようにちょっとした無茶振り、他のお子さんの遊びのフォローをお願いしたり子どもたちと簡単なゲームで関わってもらったり、巻き込んでいくってことを意識しています。

熊：地域の中で、人を受け身なだけの消費者的な立場に押し込めたくないということですよね。

木：はい。子どもの遊び・育ちを中心にして地域の人達が繋がっていくことに関して、わたしのなかでビジョンのようなものはすごい湧き上がるけれど、1人じゃできないってことがたくさんあるから、やっぱり人とつながって、助けてもらえる関係づくりが大切だなと思っています。

熊：湧き上がるビジョン。

木：はい。

熊：すごい気になりますけども、ここでそこに飛びついて、そのビジョンって何ですかってという質問を投げかけるのもなんか違う気がするんで、今日は、木本さんのお子さんも一緒に雑談気分でおしゃべりさせてもらえたらって思います。

木：プレーパークに関しても他のアプローチについてもどんどん湧いてくるんですが、言葉にすることの怖さというのもあるので、その感じがありがたいです。

熊：心を掴むっていう表現があるじゃないですか、惹きつけられるみたいな意味で使いますが。良いことではあると思うんですけど、軽やかに躍動しまくっている心の立場になって考えてみるとですね。

木：心の立場。

熊：そう、まあ、なんか野生動物みたいなイメージなんですけど、心を掴むっていうけど、そう簡単に掴まれたくないって思いますよね。

皆：ふふふふふ。

木：雑談みたいな会話の中で言葉を拾ってもらえるのは、それこそ心が軽くなります。

熊：やっぱり心を羽ばたかせてほしいですよね。さっき、「遊パーク」は子どもの遊びのことをやっているんだから、自分の子どもも連れておいでよって言ってもらえたという話があったじゃないですか。スタンスに筋が通ってて素敵だなって思うんです。それと同じような話で、今回のこのプロジェクトでは、そういう何気ないけど大切にしたい雑談のような会話が公園で育まれたらいいなってことが目的の一つなんですけど、とするならば、このインタビューもその目的と同じような会話を重ねていきたいんです。プロセスも大切にしないと、なんかそこに悪い意味での嘘が入り込んでくる感じがして嫌なんです。だって、自分や自分の子どものことをおごなりにしてまで、プレーパークや野外保育みたいな仕事できないですよね。プレーパークや野外保育に来る子どもたちもそれを望んでないと思いますし。

忘れちゃっていた感覚を教えてくれる

木：お子さんがすごい活発で、ずっと止まらずに動き回っててなんか疲れちゃうんですって言ってプレーパークに来るお母さんも結構多かったんですね。それで、お子さんの興味があることを一緒に遊んでやってみたりするんですけど。

熊：一緒に。

木：梶野公園には井戸があるんです。

熊：ありますね。手動で汲み上げるやつ。

木：そう。水も好きだし、やってみたいってなるんで、一緒に井戸水を汲んで触ったり、流れ出てくる水に2人で顔を近づけてキラキラ太陽の光が反射するのを一緒に綺麗だねって驚き合ったりしました。それで、こんなにキラ

キラしていたのを教えてくれていたのかって、その子の見ている世界を少しのぞかせてもらえた気持ちになるんです。忘れちゃっていた感覚を思い出せたりもして、ありがとうって。

熊：ああ。

木：私や他のメンバーだけじゃなくて、顔見知りになった参加者のみんなも特別扱いとかじゃなく、ただただ温かいまなざしでその子に話しかけるんですね。たまに誰かのおもちゃを取っちゃったりもするんですけど、それに興味があるんだねって、その子のありのままを受け止めて見守っているそういう感じなんです。そういうなかで、お母さんとも話をしますし、困りごとを言ってもらえる関係性にもなれたりして。

熊：困りごと。

木：たとえば、幼稚園に断られちゃって行く場所がなくて困っているって。

熊：幼稚園に断られる。

木：なので、うちのNPOは保育もやっていて、野外保育で外遊びメインだし、カリキュラムが組まれてこれを今必ずやらなきゃいけないってことじゃないから、そういうところもあるよって。それに、うちじゃなくても、大きな幼稚園で受け入れてくれるところもあるよって知っている限りの情報を伝えたりしました。

熊：そういう会話を、公園でできているということですよ。

木：そうです。困りごとを話せるような機会って日常になかなかないですよ。だから、心をひらける場所であれたらいいなって常々思っていますし、なにかちょっとでも手助けになることがあれば、やっててよかったなって思えます。それがインクルーシブなんだろうなっていうのも思っていて、一人ひとりの子と関わって、「やりたい」という気持ちを聴いて受けとめて、その場をその子と一緒に変えていくっていう。

熊：一緒に変えていく。

場を変えていけるという感覚を育む

木：公園に遊具を整備したからといって、たとえば、足が不自由の子のやりたいことが全部できるかというと、そうじゃないじゃないですか。ブランコに乗りたいとか、芝生に入りたいとか、虫取りをしたい、あれをやってみたい、これをやってみたいって、色々あるじゃないですか。

熊：ああ。公園はいろんなことをやりたくなる場所だし、遊びにも色々あるから、インクルーシブな遊具をつくったとしても、諦めなければいけないことが出てきちゃうよねっていうことですか。

木：はい。ただ、だとしても、その子の「やりたい」に対して、こうだったらできるかなと一緒に方法を考えたり、やってみただけちょっと難しいねってうまくいかなかったことを共有して再チャレンジしたり、一緒に場を変えていける人がいるのが大事じゃないかなって、常々思っていて。

熊：ああ。

木：場を自分に合わせて、変えていけるってすごい大きくないですか。今の社会では、作られた・与えられた環境に合わせられなければそこで受入れられないような雰囲気が強くあると感じているんです。子どもの遊びも窮屈。決められた時間や範囲の中で与えられた遊びをやるんじゃないくて、自分で選んで、それを実現するために動ける余白。たとえば、遊びの1つでロープのブランコをつくるんですけど、あえて先に作らずに無い状態にしておく日もあって。子ども達から「今日ブランコないの？ブランコつくって」って声をかけられたら、「あなたが言うならつくるか！」って場を動かす。その後も、「一緒につくりたい」ってなったら、「つくりたいんだね、じゃあ」って言って、一緒にできるところをやってもらいます。完成して他の子はそのロープブランコに乗りにくると、はじめに私に声かけに来た子も、一緒に作った子もすごく誇らしげな顔をしているんですよね。「自分がこの場をつくったよ」という気持ちが、その子達の自信にもその場所を大切にしていける気持ちにもつながるから、大事にしたいと思っています。

熊：まさにまさに、という感じです。まず「何かをやってみたいと思うことができる気持ち」が育まれるということと、それを見守りや支えの中で試行錯誤することで生まれる「自分がこの場所の変化の原因になれたという気持ち」が育まれるということの両面で、とても重要だと考えています。専門用語だと、「自己原因性感覚」って言うんですけど、そういうものが育まれないと、自分が社会に対して無力だなんていう諦めを生んじゃうし、「どうせダメでしょ」みたいな感じになっちゃうんですよね。なんで、本音というか、本当の理想としては、「play here」というプロジェクトの中ではインクルーシブ遊具の設置というのが、具体的な業務の一つの項目であるにはあるんですけど、それを、子どもたちや保護者や関係者の方々と一緒に作りたいという気持ちがあるんです。子どものことや建築のことなど、色々な専門性や知見を持った方がこれだけ地域にいるんだから、みんなで力を合わせたらできるはずでしょって。というか、力を合わせて何かを成し遂げる機会にすべきでしょって。

木：それぞれの立場から色々な意見を出しながら、遊具をみんなで作れたら面白そうですね。

熊：そうなんですよ。ただ、常設の遊具となると、やっぱり安全管理上の色々な基準やルールがあるので、遊具メーカーのものでないと制度上は難しそうなんです。とはいえ逆にいうと、そうじゃないものはある程度、実現可能性もあるんじゃないかなって考えています。プロセスも大切にするって、つまりそういうことだよなって。

木：本当に思います。公園の遊具の安全基準については聞いたことがありますね。遊具の設置に関しても、望む人や戸惑う人など色々な思いがあると思うので、是非今回のプロジェクトで行政の皆さんが出会った方達を繋いで話ができる環境をつくってほしいと思います。遊具以外でも、みんなで一緒にその場において、顔を合わせておくことができれば、変に拒絶することなくお互いを思いながら答えを探していけるようになるだろうなって。

熊：お互いに顔を合わせる機会がやっぱり必要ですよ。

挨拶は、人のあいだにある壁を越える

木：公園に大人の男性が一人でいると、みんなジロってなるんですけど…。

熊：それ、あれですね、僕の可能性もありますね。このプロジェクトに参加したということもあって、いろんな公園の様子を見たり、遊具とか花壇の撮影もしていたりするんですけど、多分、怪しい人って思われてんだろうなって感じる時はあります。梶野公園もたまにいましたよ。

木：え、ニット帽とか被ってました？

熊：え、被ってますけど、ニット帽を被る季節ではなかったの、木本さんが頭に浮かべている人物ではないような気がします、その人と近いものを感じもします。

木：なんか、怪しんでいるくらいなら話しかけてみたらいいよねって思うんです。こんにちわって。それで本当に怪しかったら逃げればいいじゃんって。

熊：木本さん、足が速そうですね。

木：いや、速くはないんですけど、とりあえず、そうやってコミュニケーション取ってから判断することも大切だろうなって思ったりはします。

熊：ああ、誰かのことを断定する前に、コミュニケーションをとってみるというのは、今、この社会で失われつつあるものの一つな気がします。あの人はああいう人だっていうことを思い込んでいたら、会話する必要がないですからね。会話って、考えを確かなものにするためのものでもあるし、同時に、凝り固まった考えをほぐすためのものでもあるような気がします。

木：そうですね。実際、気になって声をかけた男性から、子ども達のがびのび遊んでいるプレーパークへの共感の気持ちや感謝の言葉をもらったこともありました。そんな風に肯定的に見てくれてたのか、と。話してみないと分からないですね。だから、すぐ市役所とかに苦情を入れるんじゃなくてね、同じ地域の大人同士なんだから、うまいこと話そうよって。

熊：そう思います。なんと言いますか、日本全国を見渡してみれば公園で不審者による事件が起きているのも事実ではあって、だからこそ「何かが起きてしまったらどうするんだ」「責任の所在はどうなっているんだ」ということももちろん大切ではあると思うんですが、やっぱり、そこで思うのは、「どういう社会や地域にしていきたいか」というそもそものところを大切にすることを起点に置くことを忘れちゃいけないってということなんですね。そうやって、考えると、公園を使うご近所さん同士が会話をほとんどせずに、何かトラブルがあったときに、すぐ市役所や警察に電話をする地域にしたいのかって言うと、必ずしもそうでもない気もしてきます。

木：うん。声をかけることで、あなたのこと見てますよ。変なことしようとしても気付く人がいますよ。というメッセージとして抑止力になったら良いなと思ったりもします。

熊：地域の防災や防犯関連の議論でもよく出てきますが、人の目があつたり、活発で晴れやかな雰囲気になっている場所って、人の邪心というか、変な事件が起きづらくなるって良く言われていますけど、実際そうだろうなって思います。

居てもいいよって言われた気がした

熊：木本さんは、もともと、初対面の人に挨拶ができるような性格だったんですか。

木：違うんですよ。本当にねえ、今では、信じられないって言われるんですけどね。子育てするまでは、わたしと関わらないでくださいって思っていました。

熊：子育てがきっかけ。

木：子どもが生まれて、一歳になるかならないくらいになって外に連れ出して、梶野公園で「遊パーク」がプレーパークをやったときに出会ったのが転機。

熊：そうか、最初は利用者側だったんですね。

木：はい。子どもといえるのはすごい楽しかったから、子育てはわたし一人で大丈夫って思っていたし、ママ友も、わたしなんかと話をしても楽しくないだろうって自分の中ですごく厚い壁を作っていました。だから、毎日違う公園に行っていたんです。

熊：毎日違う公園。

木：同じ公園に行くと、同じ人と会っちゃうじゃないですか。だから、知らない人でいたいって。でも、子どもは外には連れ出したいし、五感で感じることも大切にしたいって。声をかけられる隙間がないくらいに、子どもと一心不乱に遊んでるような人だったんです。そんなときプレーパークで一人のお母さんに声をかけてもらって、なんか、ちょっと緩んだんでしょうね。この人、私を受け止めてくれるって。それで、通うようになったら、外遊びは自分の中で元々楽しかったっていうのもあるし、あとなんか、公園って「来てもいいよ」っていう場所じゃないですか。それだけじゃなくて、プレーパークだったから「居てもいいよ」って言われた気がして。

熊：居てもいいよ。

木：プレーパークって、子どもの遊びの中での育ちを応援するところですけど、親のわたしも、わたし自身で居てもいいよって言ってもらった気がしたんです。そこから、ね、心が軽くなって、人とつながってみようかなみたいな気持ちになって、今に至るみたいな感じなんですよ。

熊：今回、公園を舞台とした遊び場環境の整備というのがプロジェクトの内容ではあるんですけど、結局ハード整備だけではなくて、まさに「居てもいいよ」と思える状況を生み出すことができないと、来れないし、居れないですよ。じゃあ、どうやったらそう思えるのかっていうのは難しい気もしますが、少なくともそこを目指し続けなといけな。い。「みんなのための場所」ということで、抽象的な「みんなのため」ということを追い求め過ぎて、具体的な顔が見える人と向き合うことも忘れちゃって、結果的に誰のためにもなっていないみたいなことってあるなって思うんですね。

木：そうそうそう。平等に、とか、みんなの、って言うけれど、みんな違うのに何を基準にして言っているんだろう...みたいな。

熊：その意味でも、障害のあるなしに関わらず、個々のそれぞれの顔を浮かばせながら、「居てもいいよ」っていうメッセージを感じられる場所にしていける必要があると思うんですけど、そのためには、木本さんにとっては話しかけてくれたお母さんがいたように、やっぱり人の存在が欠かせないんですかね。

木：そうですね。親子で公園に行って二人きりで遊んでいたら、その二人の存在に気付く人ってあまりいないと思うんです。ましてや、声をかけたり関わろうとする人はもっと少ないはず。そんな中で、自分の存在を見つけて歓迎してくれる人がいたら、その場所に対する安心感なんかが全然違うだろうなと。自分がそうだったなと感じているんです。その時は、たまたま息子が違う子のボールを触りに行ったんですよね。やめてくれよって心で思いながら…。

熊：人と関わりたくないモードの時ですもんね。行っちゃったら、関わらないといけなくなるって身構えちゃいつつ、でも子どもの自由な遊びも大切にしたいというジレンマ。

木：そうそう。それで、スイッチ入れて「すいませえん、ありがとうございますうう」とかやったんだけど、その時のお母さんがすごい自然体だったんですよね。あれ！？、そんなにスイッチを入れなくても良いかも！？って思えて、今もずっと付き合いが続いているんです。

熊：バリアを張られている感じがしなかったんですかね。

木：そうそうそう。自分のことも話をしてくれるし、わたしが答えやすい質問もしてくれるから、この人とだったら居ることができるなって。そこからですかね。もし、その出会いがなかったら、子どもと一緒に倒れていたんじゃないかなって思うくらいです。人と関わるのが嫌いだったし。

熊：ふとしたことで変わるというか、大きな影響を受けるような出会いってありますよねえ。そういう舞台に公園がなかったらいいなって願います。表情も結構、変わったんじゃないですか。

木：子どもとは笑うけど、大人と話をしていて、こんなに笑ってなかったですね。

熊：これ、インタビュー記事にするとその辺りがなかなか表現しづらいんですが、さっきからずっと、みんなで笑ってますもんね。

木：15年前の自分が見たら信じられないと思います。

失敗してもいいよって言ってもらいたかった

熊：気づいたら、プレーパークを利用する側から運営する側に行っていたという感じなんでしょうか。

木：そうなんですよ。『遊パーク』の理事の人が児童館職員でもあったので、その児童館でもお世話になって、なんかこの人たちと子どもたちを見守っていくことが、わたし好きだなあって。自分にできることがあるなら、『遊パーク』の一員になって恩返ししたいと思ったんです。

熊：そう思うことができたというか、思えちゃったというか。

木：わたし自身の育ちの中で、失敗してもいいよって言ってもらいたかったなっていうのに気づいたのかもしれないです。いつも間違えないようにって、周りの大人から大切にはされていたんですけど、わたしは、間違ってみたかったんだわって。プレーパークに通う中で、失敗してもいいよって言ってもらったような気がしたんですよね。やってみたい人は、やってみなさいよって。

熊：のびのびと試行錯誤することの大切さってありますよねえ。その大切さをちゃんと握れていれば、むしろ試行錯誤しないことの方が失敗なはずですよ。僕も教育の現場にずっといて、絵の具を使う図工の授業で、空気を表現したくて、絵の具を使わずに水だけでやっていたら怒られちゃってとか、彫刻刀を使う授業で作品を作らずに削りカスの匂いをずっと嗅いでいたら怒られちゃってとかで、図工が嫌いになっちゃったみたいなお子さんと時間を共にしていたんですよね。で、授業のカリキュラムからは外れるかもしれないけど、「水で塗る」って素晴らしい発想だし、木の匂いに関心があるんだったら、いろんな樹木の匂いの違いを調べてみるという活動につながっていいはずなんですけど、そういうことが「失敗」っていうことになっちゃうんですよ。それって一体なんなんだろうって。狭いゴールしか設定されていないと、そこからズレたらすぐ失敗になっちゃう。だから、「やってみたいことは、やってみていいんだよ」っていうことは、とてもシンプルで当たり前なようでいて、きっととても深いし、広げていくべきメッセージだし、地域社会で実現すべきことなんだろうなって感じました。

原っぱのような社会を

熊：梶野公園でのプレーパークは、「遊パーク」が元々運営していて、今は「梶野公園サポーター会議・遊び場の会」に運営が移行しているんですよね。

木：そうです。

熊：それで、木本さんは「遊パーク」が運営している野外保育の「りんごっこ」でも働きつつ、梶野公園のプレーパークでも働かれているわけですよ。

木：そうです。梶野公園のプレーパークが「遊パーク」の手から離れるから、誰かが引き継がないと無くなっちゃうよって話が出た時に、子どもも私も育ててもらった大切な場所を守りたかったので「遊び場の会」のメンバーにも入れてもらいました。毎週水曜日は、保育のシフトに絶対入れないでってお願いをして、「遊び場の会」として梶野公園のプレーパークに居れるようにしています。昔の私みたいに生きるのが不器用な人はそうそういないかもしれないけれど、「ここに居ればいいよ」って言ってもらえて救われるお子さんやお母さんが少しでもいるなら、この場所に立っていたいなって。恩送りって感じです。

熊：そこにこだわりたいというお気持ちがあるわけですね。

木：やっぱり、子どもたちが行きやすいところに、自分の居場所だったり、自分が帰って行ける場があるっていうのは、本当に必要なことだと思うんですよね。小金井市のプレーパークの事業としては、西側には学芸大学のキャンパス内でやっているのと、南側には武蔵野公園でやっているものがあって、東側となると梶野公園になるんですよね。

熊：梶野公園に関わる多くの方々から、大きな遊具が何もないのが良いっていう話を聞きます。だから、それを守りたいって。

木：何もないからこそ、子どもたちが生み出す遊びもあるじゃないですか。

熊：「play here」の資料でも、「ハード整備で終わらせてはいけない」ということと「子どもたちは何もないところから遊びを生み出す創造性を発揮する存在であるはず」っていうことを明記しています。

木：そうなんですよ。ただ寝転がるだけでもね、風を感じているだけでも、遊びだし。だから、何もないことの素敵さとか、何もないから生まれる子どもたちのワクワクがある場所だなんて思うし、梶野公園が好きなんです。

熊：今の梶野公園が好きで、守り育みたいという気持ちを注いでいる人がこんなにもたくさんいらっしゃるんだということを感じているんですが、それってつまり、そういうワクワクやそういう営みを守っていききたいということですね。

木：そうです。今の梶野公園が好きなんです。

熊：なんかあまり参考文献の紹介みたいになり過ぎてもアレなんですけど、とても大切な議論だなんて感じていて、なので話すんですけど、建築家の青木淳という人が、「原っぱと遊園地: 建築にとってその場の質とは何か」という本を書いているんですね。遊園地は決められた遊びを、決められた形で遊ぶ場所だけど、一方で、原っぱは、自分たちで遊びを生み出していくような場所だっていう対比が分かりやすいんですが、彼はその原っぱ的な建築がいかにか可能かという課題意識があるんです。で、公園の話に接続すると、遊園地にしたいのか原っぱにしたいのか？という僕たちが求める場所の質の話になってくるし、そもそも遊びとは？という話でいうと、誰かに提供される遊びに黙って従うよりも、「遊びを生み出す遊び」ということの大切さだったり、そこにある学びだったり喜びって計り知れないよねっていう話になってくるんですよ。

木：それで言うと、普段、その原っぱのような場所で遊び慣れていないと、梶野公園に来てものなをして遊べばいいのって立ち尽くしちゃうんです。でも、遊んでいる子を見て、あんなふうに遊びができるだっとなるんです。泥団子をつくっていたり、虫取りをしていたり、木に登っていたり、もうね、じいっと見るんです。遊びをインプットしていくみたいに。

熊：「いてもいいんだよ」だったり「やりたいことをやってみていいんだよ」ということと同時に、そこに居ると、そもそも「やりたいことがムクムクと湧いてくる」ということですよ。

木：なにもない、といっても風や木や光やにおい、花に虫にとたくさんのものが目の前に広がっているんですけど、その中で自分が何したいか何にワクワクするかをいっぱい考えないと、感じないと遊べないじゃないですか。自分を見つめることになる。そういうのって、与えられ過ぎちゃうとわからなくなる。だから、自分の好きを見つけるためにもすごい必要なことだよなって感じています。

熊：ああ、そうですね。ちなみに、橋本治という人が「『原っぱ』という社会がほしい」という本を書いているんですね。つまり、そういうふうに関わる人たちがいて、お互いに影響を受け合ったり、助け合ったり、学び合ったり

して、自分が自分のままで、自分たちとしてのルールを生み出したり、そのルールを調整していくような場所としての原っぱがあって、社会がそもそもそういうことであるべきなんじゃないのっていうことなんですけど。

木：まさにプレーパークのことですね。だから、梶野公園のプレーパークを守っていきたいんです。

話しやすさを生み出すもの

熊：えっとストレートに言うと、今回のこのプロジェクトが立ち上がった時に、日頃から梶野公園で活動をなさっている地域の方々の心がザワザワしたんじゃないかなって思うんです。みなさんが、大切にして育んで守ってきたようなことが、おぎなりになっちゃうんじゃないかって。

木：はい。最初は不安でした。活動の中で、丁寧に人と関わっていくことで生まれる繋がりや信頼関係や安心感を大切にしてきたので。インクルーシブって言葉を知らない頃から、考え方や目指しているところは「インクルーシブな場」だったわけです。それがプロジェクトのお話を聞いた当初は、インクルーシブ遊具ができれば、インクルーシブな社会になるでしょ？というようにハード整備で十分だと言われてしまった感じがして、プレーパークの活動が理解してもらえてなかったのか...と悲しい気持ちになりました。と同時に、絶対にハード面だけ整えてもインクルーシブな社会にはならないでしょ！という確信に近い感覚もありました。

熊：そうですね。「障害がある子も気軽に遊びに来れる公園を」というところでは、大賛成なわけですね。

木：もちろん、そうです。今まではあまり出会うことができていないのですが、でもプレーパークに来たいと思ってもらえるならばウエルカムな気持ちはいつでもありましたから。それぞれの子が遊びに行きたいと思える公園に気兼ねなく行けるようになることは大賛成です。

熊：ですよ。まず、その目的をぶらさずに、それぞれの持ち場で、どうやったらそれを叶えられるかっていう知恵をみんなで絞り合えたらって思うんです。

木：最初はインクルーシブ遊具の設置ありきって感じだったので困惑していたんですけど、プレーパークだけでなく色々な特徴の公園があって、その多様な選択肢の中で行きたいところ、それぞれに合っているところを選びとれるようにする、そういう会話は続けていきたいです。

熊：このプロジェクトを推進している小金井市の小林さんや山崎さんも、そういうわけでもなかったんですけど、そのコミュニケーションにつまずきがあったんじゃないかなって、プロジェクトに途中から入って感じたんです。インクルーシブ遊具が必要かどうかで言えば、必要だと感じているんです。当事者の方々にヒアリングを重ねていくなかで、「インクルーシブ遊具を体験して、こんな楽しそうに笑うんだって思えた」みたいな声にもたくさん触れて、その想いを強くしているのも事実です。

木：それはそうですね。必要としている方がいるのもプロジェクトに関わらせていただいて感じています。

熊：そうなんです。なので、「インクルーシブな公園を実現するために、インクルーシブ遊具の設置が有効な手段ではあるが、唯一絶対の解決方法かと言うと、そうではない」っていうことをみんなで確認しておくということが重要だよなって思っ、このプロジェクトに参加して最初に、そういったことを表す資料作成をやたらと頑張った

んですね。それで、調査を進めれば進めるほど、そもそもトイレといった基本的な設備の問題であるとか、公園に辿り着くまでの移動の困難をどうするかであるとか、「心のバリアフリー」と呼ばれるような障害がある方々への理解の必要性というか、僕たちの無自覚な加害性みたいなところへの理解の必要性といったことが浮かび上がってくるんです。だからまあ、とにかく「ただインクルーシブ遊具を置いて、公園がインクルーシブになりました」なんて簡単に言えることではないっていうことで。一方で、インクルーシブ遊具もそれぞれの公園の特性や歴史を考えながら、その設置を検討したりする必要が当たり前にあるし、老朽化した遊具の交換等の際にももちろんインクルーシブ対応ということも検討した方が良いでしょうしと思うわけです。つまり、そんな感じで、小金井市における考え方というものをしっかり持つておかないとだよねって思うんです。だし、そういう考え方をみんなで作っていかないとだよねって。

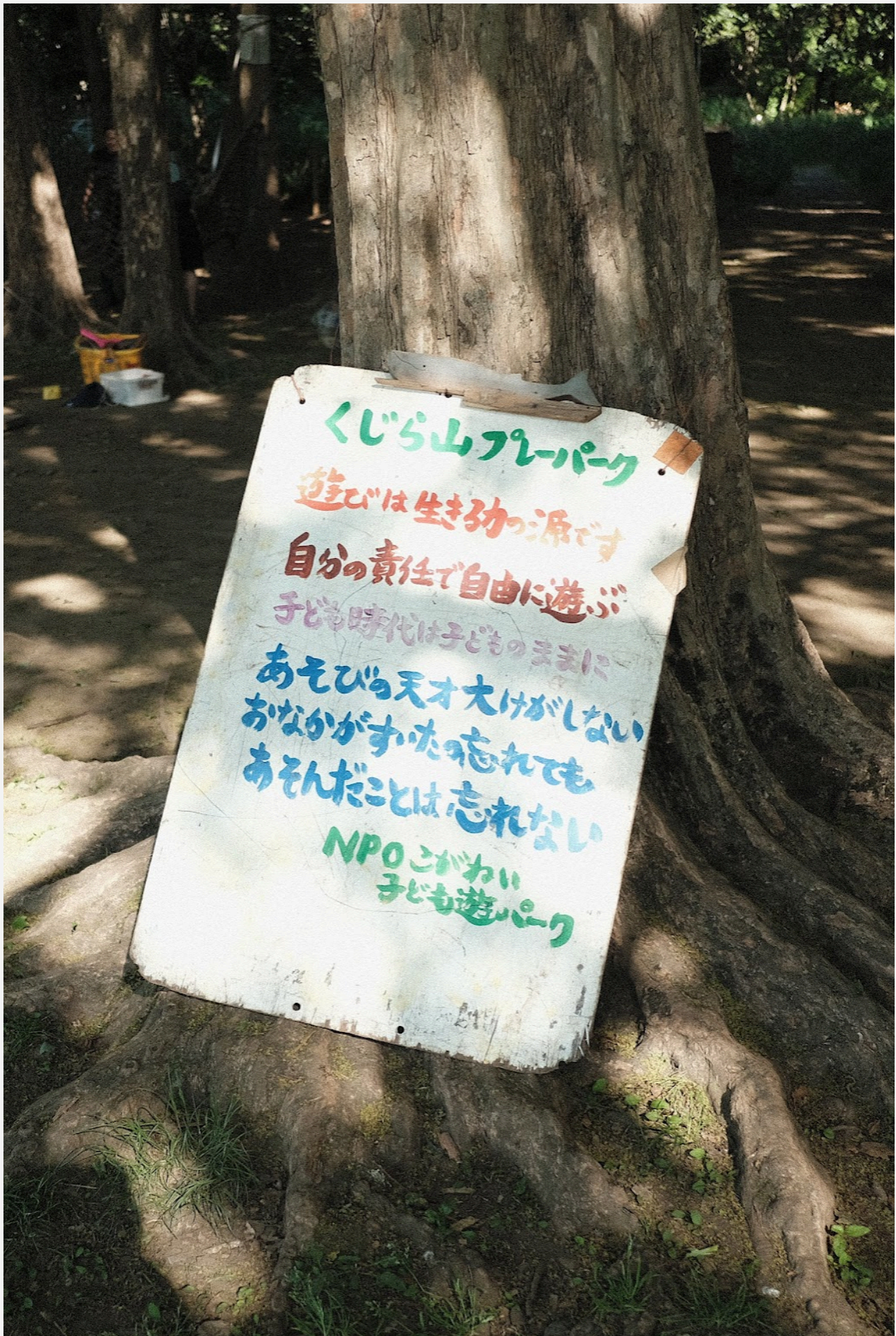
木：みんなの共通理解や共通目標がそういう感じだと話がしやすいです。

熊：「話しやすさ」というものを生み出すものって結構大切なんだろうなって思っていて、その意味でも、人と関わりを持ちたくなかった木本さんが、ふとした人との関わり合いの中で、今では実践する側に行っているという感じとか、やっぱり人の存在って大きくなって今回改めて思いました。プレーパークって、やっぱり人との関わりの場でもありますもんね。

木：ついこの間受けたプレーリーダー研修でも「インクルーシブな居場所」についての話題が出ていました。その時の講師の言葉で「この場所をインクルーシブな場にしたいと思うことが大事。そう思っていない人の場所にインクルーシブな場所は訪れない」というのがあったんです。その言葉に強く心惹かれて。わたし自身、技術や知識や経験は誇れるものがないけれど思う力ならありますって言える気がして。なんなら梶野公園にずっと常駐してプレーパークやりたいくらいですもん。

熊：そういう思いをみんなで持ち寄りたいです。インクルーシブの観点でも「遊具に頼らない遊びのあり方」というのも検討していたので、ちょっとまた会話させてください。

木：是非是非。



くじら山フリーパーク

遊びは生きる力の源です

自分の責任で自由に遊ぶ

子ども時代は子どものままに

あそびは天才大けがしない

おなかがすいた忘れても

あそんだことは忘れない

NPO かがわい
子ども遊びパーク

加藤さやかさん

怖くて公園に行けない人、たくさんいます

取材日：2024年9月3日



まず、発達支援センターにいけない

加：熊井さんのお子さんは、その後大丈夫ですか。

熊：ああ、覚えていてくださって、ありがとうございます。たまたま姉夫婦が二人とも理学療法士だったというところもあって病気ということがわかって、とりあえず、それがよかったです。

加：理学療法士さんって、すごいですよね。

熊：ねえ。

加：うちの子、歩くのが遅かったんで、寝返りで移動してたんですよ、2歳近くまで。そこから月3回くらい、理学療法士さんにみてもらったら、あれよあれよという間に、ハイハイできるようになって、立って歩けるようになったんですよ。やっぱりみてもらえるとねえ。

熊：そうかあ、そうだったんですね。色々と気にかけくださってありがとうございます。

加：いえいえ。

熊：ありがとうございますですし、本当にすみません。前回のヒアリングでたくさんお話をしてくださったのに録音できてなくて、かなりの大失態でした…。

加：それね！あはははは。

熊：文字起こしをしようと思って、録音機材を確認したらデータがなくて冷や汗が出ました。どうやら、話をお聞きすることに集中し過ぎて、機材の電源は入れていたんですけど録音ボタンを押してなかったみたいです。

加：あはははは。前回と同じ話をしなくても良いですよ。

熊：もちろんです。メモはたくさん取っていたので、前回のお話のキーワードは結構おさえることができていますけど、今日はせっかくなので、せっかくという言い方もなんかスゴく失礼なんですけども、会話は一期一会なのでプロジェクトの進捗も織り交ぜなら、また新しいお話をできればと。

加：うんうん。

熊：それで言うと、理学療法士で、小金井の「社会医学技術学院」の先生でもあり、児童発達支援センター「きらり」でも支援にあたられている中山先生にもヒアリングをさせて頂いたんですが、最終的には「地域のおじさん」になりたいということをおっしゃっているんです。つまり、理学療法士や作業療法士の知見をもった人が、生活や暮らしのなかで身近にいる状況が理想だと。公園がそのための舞台になっても良いよねという議論をしていました。一緒に遊びながら、日常的にアドバイスをくれる存在が地域にたくさんいるというのは確かに良いなって。

加：そうなのといいですよ。やっぱり、まず、支援センターに行くにもハードルがあるんですよ。自分の子に障害があるっていうのを認めたり、そうじゃないかって思うのが怖かったり。

熊：僕自身、そういうことで小児科医に行くときに、かなり気力を使ったので、わかる気がします。病院の予約フォームに、子どもの症状についての文章を打つときに何回も書き直したりして。

加：そうですね。あとは周りの家族の反対があって行けないという。

僕：家族の反対。

加：はい。「やればできるんだから、お前の教え方が悪いんだよ」みたいなことを言われたり。

熊：....。

加：立たないし、歩かないし、ハイハイもできないし、反応も薄いし、喋りもしないし、指差しもしない。普通じゃないんじゃないかなあって、わたしがもう泣きながら言っても「子どものことを信じなよ」って返されたりもして。

熊：....。

加：向こうには、向こうりの葛藤があるんでしょうけど。

熊：その葛藤を飲み込めないから、消化する前に吐き戻しちゃうというか、ぶつけちゃう。

加：でしょうね。

熊：身につまされます。

早朝にしか公園にいけないという声、地域の人に知ってもらいたいという声

熊：このプロジェクトって、「障害のあるなしに関わらず、公園を誰もが自由に遊べる場所にもっとしていきたい」というものなんですけど、「そのためには、インクルーシブ遊具を整備するだけでは不十分だ」というものが基本的な主張なんです。けど、「じゃあ、なにをすれば、その不十分さを少しでも改善できるんだろうか」というものを、踏み込んで具体的なところまで落としていかないと、なんか掛け声だけになってしまうんです。

加：うんうん。

熊：それでまあ、いろいろとヒアリングを重ねているんですが、当たり前と言えそうですが、僕自身が知らなかったり、実感が湧いてなかったようなことがたくさんあるという現実を目のあたりにしている次第なんです。たとえば、「早朝にしか公園にいけません」という声が、障害のあるお子さんをお持ちの保護者の方々のなかではいたって普通にある。

加：そうそう。

熊：自分の子どもが公園で遊びたそうにしている。それに、遊ばせたいとも思う。でも、周囲の眼差しも気になる。だから、もう朝の5時とかに公園で遊んでます、みたいな。

加：そうそう。

熊：そうそうって、そうなんですよね。当事者の方々のなかでは、もういたってよくある話なんですよね。でも、そこまでの現実が地域にあるということを、僕がそうだったように多くの人が知らないと思うんですよ。知らないし、見えていない。

加：そうですね。

熊：「心のバリアフリー」という言葉もありますが、まずは知るという機会を創出していくことの必要性も感じて、今度、当事者のお母さんとお子さんと僕とで一緒に、小学校に授業としてお話をしに行くことを予定しています。いろいろと試行錯誤や調整をしながらですが、来年度は、小金井市内の全部の小学校でお話をできたらいいねという議論もしています。やっぱり面的な取り組みにしていくことも必要だよなって。

加：それで言うと、今度の秋から「復籍交流」が始まるんで、どうなるかなって思っているんです。

熊：復籍交流？

加：うちの子は支援学校に在籍してるんですけど、自分の地域の学校にも在籍しているっていう扱いになるようで、その地域の学校にも参加できるんですよね。

熊：お子さんは、今、一年生でしたよね。

加：そうです。ちょうど明日なんですけど、うちの子の特性だったり、どういうことだったら一緒にできるかということをお話と話すんですね。

熊：そうやって話し合いながら、その子その子に応じた交流級のあり方を決めていくんですね。

加：子どもが制作した美術作品を飾るだけというのもあるんですけど、そういういろいろな交流活動の選択肢の中から本人と保護者で決めることができるんです。わたしのように、これだけがつつり交流級をやろうとしているのは、多くはないと思います。子どもにとってみたら、慣れないところに行くことになりますからね。ただ、作品を飾るとか、お手紙のやりとりをするといった間接的な交流でもしたくないっていう人もたくさんいます。

熊：なんか深く傷つく経験があるとやっぱり....。

加：怖くなりますよね、もういいやって。難しいところですよ。専門家のなかには、障害児が普通級にいることは、障害児にとってはなんのメリットもないって言う方もいるんですよね。普通級の子たちのための、ただの教材になるだけだって。だから、ちょっとやってみて、難しそうだなと思ったらやめればいいのかって。

熊：加藤さんが、違和感を手放さないままに、でも踏み込んでみようと思えたのにはなにがあるんですかね。

加：嫌だったらいつでもやめられるっていうふうに思ってるから。やっぱり、心無いことを言われたりすることもあるし、そういうちょっと怖いところもあるんだけど、うちの子が小さいうちじゃないと厳しいかなって。復籍交流で行く先の学校って、つまり地元の近所の人っていうことじゃないですか。だから、地元の方々に、こういう子がいるんだっていうことや、この子はこういう特性があるんだっていうことを少しでも理解してもらえればいいのかっていう気持ちがあります。

熊：自分たちが暮らす地域に知ってもらいたいという。

加：やっぱり地元の方々に理解してもらいたいんですけど、支援学校ってどうしても自宅から遠くなりますから、そうすると、そのための方法が交流級以外にほとんどないんですよね。

熊：言われてみると、そうだなってことばかりです。

そこに心の触れ合いがあるのか

熊：それで、その、復籍交流というものがこれから始まっていくと。

加：そうです。うちの子、喋れないし、どういうふうにやっていくのかっていうのを考えるところからです。最初は、親も一緒に行って自己紹介みたいなことをすることが多いらしいんですけど、きっと本人は、どこ？誰？みたいになると思います。わたしたちが突然異国に送り込まれたような気持ちですよ。それって、「大丈夫だよ、怖くないよ」って言われてもね、怖いじゃないですか。だから、少しでも楽しいと思ってくれたらいいなって。

熊：そこですよ。さっき「障害児は教材じゃない」という話があったじゃないですか。それは、言い方を変えると、「人を手段化してはいけない」ということだと思ったんですね。さらに言うと、復籍交流の「交流」と言っても、「そこに心の触れ合いのような時間が訪れるのだろうか」という不安がそこにある気がするんです。なんかうまく言えないんですけど、そこに心の触れ合いというものがあれば「教材扱い」ではなくなる気がするんです。

加：そうですね。お世話とか、奉仕の心みたいな感じで来られてもちょっと違うよなって。だから「みんなよりは苦手なことがあるんだっていうことは知っててね」っていうくらいなんです。そういうことを自己紹介カードみたいなのに書いて、多分教室に貼ってくれているんですけど。

熊：それって、確かにケアは必要なんだけど、だからといって、うちの子はかわいそうな存在ではないということですよ。僕も実体験として、よく分かる感じがします。

加：ですよ。困ってる人を助けるっていうのは、普通のことだから、転んだ人がいれば大丈夫？っていうし、物を探してる人がいたら、一緒に探しましょうか？っていうのと同じようなことのはずなんですよ。

絶対的な正解がないから、喋り続けることをゴールにしたい

熊：公園をインクルーシブなものにっていう理想を持って色々とリサーチしたりヒアリングを重ねていくと、まあ、すべてが不足しているということを目の当たりにしていくことになるんですけど、いわゆる精神・知的の障害がある方が遊びやすくなるための工夫っていうものもかなり不足しているということがわかってきたんですね。それこそ「障害の社会モデル」で言うと、社会の側にそういった解消すべき障壁があるという。

加：こういうところが困ってますとか、こうしたいですっていうのが、なかなか表に出しづらいというところがありますよね。あくまでこっちも、多分こういうことであろうという予測でしか言えないところもあって、どうしたらいいんでしょうね。

熊：そもそも絶対的な正解というものがないことではあると思うんですけど、だからこそ、一緒に居たり、会話をし続けたいといけないんだらうなってことを考えているんですね。逆に言うと絶対的な正解というものがどかつとあるならば、それは会話を終わらせちゃうことになるんだなって感じたんです。じゃあもう、立場を超えて喋らなくていいやっとなる。

加：なるほど。

熊：補助金事業ですし、仕事のにはもちろん区切りはあるんですけど、地域の暮らしのなかでは、ああでもない、こうでもないって、おしゃべりをし続けていくことが大事なんだらうなって。

加：おしゃべりね。

熊：議論とか対話とか、まあいろいろあるんですけど、雑談を含めて、ただただしゃべり続ける。しゃべらないにしても、同じ空間に一緒に居るという。そうこうしているうちに、なんかこう浮かび上がってくることがあると思うんですよね。人間同士の付き合いって、そういうことじゃないですか。だからまあ、これさえやれば一挙解決みたいな簡単な解決策はないっていうことそのものも、広めていかないとなんだらうなって思います。

加：そうですね。よくわかります。当事者の中でも、「インクルーシブ公園ができたって言うけど、完璧じゃない」って言う人も出てくると思います。だから、「今回はここまでなんですけど、またみんなで考えながらブラッシュアップしていきましょうね」というスタンスを明確にしておく必要はあるのかなとは思います。

熊：ありがとうございます、ほんとそうですね。まさに、まずはそういうステップや論点を仮説だとしても明確にしていく作業をしていければ、「今ここです」と言えますもんね。それこそ、一緒におしゃべりしやすくなる。まずは、そういうところまでたどり着きたいなって思います。

楽しい雰囲気という、共にいるための呼び水

熊：加藤さんのご家庭にとって、公園はどうですか。利用されていますか。

加：ちょっと前まで、土曜日に障害児のためのリトミックを習っていたというのもあって、日曜日くらいしかオフがなかったんですけど、天気の良い日は、ご飯を食べたあとに今日はいつてみようかって公園に行ったりしましたね。

熊：どこの公園に行っていましたか。

加：それこそ、栗山公園とか。

熊：そっか、そっか。栗山公園で言うと、トイレの改修工事の計画があったり、公園の中に健康運動センターっていう建物があるんですが、そこの医務室なども必要に応じて、ケアが必要な子が多目的に使えるようにしたりしたいねっていう議論を進めています。あとは、それこそインクルーシブ遊具の設置予定があったり、理学療法士や作業療法士になるための学校である社医学さんも隣なんで、そこの連携も議論が進められています。と、盛りだくさんなんですけど、遊び場環境で言うと、やっぱり水遊びをしたいという声が多いんですよね。なので、栗山公園

で、水遊びができる環境をつくれなかつていう検証もなされています。どうやら、建設と維持に費用がかなりかかりそうなので、そこも含めた議論が必要なんです。

加：水遊びをしたいという声は、めっちゃ多いです。オムツとれなくて、プール行けないというのもあったりして。

熊：そうなんですよね。

加：はい。そう言えば、あそこの公園ってよく大人がサッカーやってますけど、うちの子がよく、ひょいひょいひょいって、入っていくんですよね。

熊：楽しそうな雰囲気に惹かれて。

加：うん、多分そうだと思います。大人がボール遊びしてるから、わたしもボール遊びするわみたいな。

熊：そういう楽しそうな雰囲気っていうのは、形のあるものじゃないかもしれませんが、すごい大切なもののような気がするんですよ。

加：そう、重要だと思います。わたしの姉が工場をやっているから広いスペースがあるんですけど、そこで先日、みんなでBBQをしたんですね。そこで、他の子のママに水風船をぶつけようっていう遊びが始まったんですけど、一緒に遊んでいるんですよ。娘にはやろうとしていることがわかっていないかもしれないけど、なんかわちゃわちゃしながらみんなで楽しめているんです。うちの子は、なんか楽しそうな雰囲気があると、交ざろうとしますね。

熊：楽しそうな気持ちって、伝播していくというか、そういう感情の発信力というか巻き込み力というものがある気がするんですよ。同時に、そこには受信力とか巻き込まれ力というものがあるような気がします。なんで、お子さんは、受信力がビンビンだから、ひょいひょいひょいって入っていく。結局、そういう思わず一緒にわちゃわちゃしちゃうような営みが、日常的に増えていったらいいなっていう気持ちがありますし、公園が、その舞台になったらなとも思います。

加：そういうのでいいと思います。そういう感じがいいと思います。

公園づくりを、社会づくりにつなげたい

熊：で、さらに考えていくと、楽しそうな雰囲気というものが、どのようにして生まれるかということ、楽しそうな遊具があるからということだけでなく、そこに楽しそうにしている人がいるということだと思うんですね。なので、やっぱり突き詰めていくと、結局ハード整備だけでなく、どのような人がそこにいるのかってことの重要性を感じていくんです。スポーツでは、ムードメーカーという役割が結構認知されているじゃないですか。社会というか、公園でも、そういう役割を担うような人が、同じ場所で毎日じゃないにしても、ある意味仕事として居れるようになったら、状況が前進するような気がするんですよ。

加：いいと思います。「ファミリー・サポート」のサポーターのような有償ボランティアという形でもいいと思うんですね。社会復帰ができないっていうお母さんたちもたくさんいらっしゃるんです。仕事を辞めて、もうほぼ介護みたいな生活をしてるっていう。

熊：ああ。

加：たとえば、子どもが夜に寝なくて夜通し付き合ってるから、昼間は寝ておかないと身体がもたないっていうことが結構あるんです。

熊：「結構ある」と言うのは、そういうケースが割と多いということですか。

加：そうです。うちの子も、なにかが変わったりするタイミングで寝なくなったりします。

熊：なにかが変わるタイミング。

加：環境が変わったりとか、本人がちょっと精神的にも肉体的にも成長したりするときに、バランスが崩れちゃって、興奮状態になってなかなか寝れなかったりとか。

熊：ああ。

加：もう本当に、「もう寝てくれ」「マジで寝てくれ」ってなります。

熊：うちの子も、おそらく「夜驚症」というもので、夜に寝れない時期が続いたんですけど、その切羽詰まる感じが少しわかる感じがあります。毎日続くと、ちょっとどうにかなりそうになりますよね。

加：うん、はい。もう本当に。ただそのとき、わたしが仕事しながら資格の勉強もしていて、あまりかまえなかったことの影響じゃないかなって個人的には思ってた。ママがいるのに、ママの気持ちが向いてないっていう状態だったので。

熊：そこまで背負いますか。

加：それは、やっぱりねえ。

熊：とはいえ、仕事も資格の勉強も、生きていくためには必要なことなわけですよね。やっぱり資格があったほうが働きやすいと思われてのことなんですよね。

加：うちの子って、一回、発達支援センター「きらり」の通園クラスに落ちたんですよ。だから入れると思ってなかった。なんで、保育園に6歳まで行って、小学校はどうなるかわかんないけど、そのタイミングで転職して、在宅勤務とかができるような仕事に就こうかなって、そのときに思っていたんですね。長く細く働くことができる資格を、って。

熊：ああ。

加：って考えていたんですけど、まさかまさかで「きらり」に入れることになったので、そっちの仕事には就けず。

熊：え、「きらり」に入ると仕事に就けなくなる？

加：あ、前の仕事を続けながら、資格の勉強を一緒にやっていこうかなと思っていたんですけど、「きらり」は14時までなんですよ。

熊：ああ、そうか。知らないことだらけです。

加：前の仕事は出社しないといけなかったもので、続けられない。

熊：そうすると、仕事を続けたりすることと、「きらり」に通わせることの二者択一みたいになるということですか。

加：そうなんです。すごい葛藤はありましたけど、ちょっとでも長く療育させてあげたいっていうことで「きらり」を選ぶかたちになりました。職場の方は一瞬困るぐらいで死ぬわけじゃないって。ただ、仕事を辞めるときは、もう二度と働けなくなるかもしれないっていう気持ちでした。介護離職しちゃう人もきっとそうだと思います。

熊：それまで自分自身が積み重ねてやってきたことがある。でも、その積み重ねの連続性がそう簡単には担保されない。そうすると、引き受けなければならない気持ちというものが膨大というか、引き裂かれそうになる感じがあります。

加：子どもの癇癪がひどい時期は、「ここまでママは尽くしてるんだからね」って大声を上げたくくなります。

熊：無理もないと言うか、なんと言うか、言葉も出ません。ただ、このプロジェクトで、公開できるものもできないものもありますが、多くの方にお話をお伺いするなかで、強く思うのは、それぞれもちろん別々の状況ではあるんですが、一人では背負いきれないものを背負わされている人がこんなにもいるんだということなんですね。で、よい社会ってなんだろうってことを考えると、やっぱり人と人のつながりのなかで、そういうものを分け合っていくようなことだと思うんですよ。同時に、嬉しいことも喜びあえたらなって。昔の言葉で、互恵とか互助って、そういうことだと思うんですね。それで、もっと言うと「会社」という言葉って反対にしたら「社会」ですけど、とにかく仕事をするということと、社会をより良くするということって、やっぱり本来つながっていくことだと思うているんですね。だからまあ、風呂敷を広げた言い方になりますけど、より良い公園をつくるということが、より良い社会をつくるということに重なっていったらなと、なんだか素直に強く思います。

社会を、「人間交際」と言うならば

加：人と人からでしか生まれないことってありますよね。それに、人で傷ついた心は、花でも動物でもいいけど、やっぱり人でしか癒せないこともあるって、わたしはすごく思っていて。やっぱり、人と人とのつながりって本当に大事だなと思っているし、わたしは別にあんまりつながりのない人間だけど、そういうつながりを持って活動す

る人たちってすごいなってやっぱり思うんですね。仕事が、次の誰かの仕事を生むみたいなことって本当にあるじゃないですか。

熊：ええ、はい、うん。もう、はい、うん。えっと、社会って、**society**の訳語なわけですけど、福沢諭吉はそれを「人間交際（じんかんこうさい）」って訳していたそうなんです。良い社会をつくろうって言ってもイメージが曖昧な感じがするんですが、良い人間交際をつくろうってなると、なんだか具体的になっていく感じもあるんですよね。で、まあ、繰り返しになっちゃうんですけど、なんかそういうニュアンスも込めながら、より良い公園づくりというものを、より良い社会づくりというものにつなげていきたいと思う次第です。

加：ですねえ。

熊：ところで、ちょっとストレートな質問をしちゃうんですけど、加藤さんとして、このプロジェクトへのご期待を持ってくださるとしたら、それはどのようなものになりますか。

加：なにかを一つやったから全部がうまくいくってことはないので、いきなり完璧なものとは思っているし、それを理解はしているんですけど、やっぱり公園に行くことが怖いって思ってる人たちがたくさんいるので、その気持ちがなくなること。

熊：もう...はい...うん。僕も含めて、公園に行くことの怖さを感じたことがない人からすると、全く想像できなかったことのように思うんですね。公園に行くこと、なんなら街に出かけること自体に、恐怖や不安を感じる方が、こんなにもたくさんいらっしゃるんだって。

加：そう、います。早朝にしか公園に行けない人は、要は他の人に会わないようにしているわけですよね。だから、他の人がいても行ける場所であったり、他の人がいても参加できるイベントであったり、そういうことができる場所であつたらいいなとは思っています。

熊：そうですね。以前のお話で、最近増えてきている「ゼロ歳からのコンサート」のようなイベントのチラシには「泣いてもOK」「大きな声を出してもOK」みたいなフレーズがあって、安心するということをおっしゃっていたじゃないですか。なるほどなって、お話を聞いた後、結構反芻していたんです。つまり、インクルーシブ公園というものは、公園をつくるだけじゃなくて、公園との出会い方もつくっていかないと、目指す姿にならないなって思ったんです。そういう出会い方ができていれば、公園に行きやすくなるかもしれないと。

加：そうですね。なると思います。

熊：そこを意識することで、少しでも状況が良い方向に向かえばなあと。

見返りをもとめない会話

加：公園に限らないんですけど、「こんなところで叫んでるあの子、気持ち悪い」みたいな声がやっぱり一番怖いんですね。

熊：ああ。

加：とはいえ、子どもが何かにびっくりしたりしてワッと泣いちゃったりするときに、声をかけてくださるのは嬉しいんですけど、「何歳？」「お名前は？」って言われても、うちの子は喋れないから応えられないんですね。ましてやパニックになっているんで。

熊：ああ。

加：そこで言ってほしいのは、「びっくりしちゃったね、今の音」、「怖かったよね、大丈夫だよ」とかなんですね。からだが動いちゃう子の場合は、「すごいね、そんなジャンプがいっぱいできるんだね」みたいなことで。

熊：ああ。って、さっきから、頷いてばかりですけど、白い目で見られるのは当たり前には怖いんですけど、なんと言うか見返りってわけじゃないけど、反応が来て当然となるような言葉を送られても、それはそれで辛いというのも、ああ、確かにとなりました。

加：あとは、他の子が、「なんであの子、ジャンプずっとしてるの？」って言ったときに、「そんなこと言っちゃだめでしょ」って大人の声が聞こえると、すっごく行きづらくなる。「あの子はジャンプが好きな子なんだよ」「ジャンプが上手だね」「えー、どのくらいジャンプするんだろう」みたいな会話が聞こえてくる分には微笑ましいくらいなんですけど、「そんなこと言っちゃダメでしょ」とか「見ちゃダメでしょ」みたいになると、なんかもう来ちゃいけなかったんだ、うちの子は連れてきちゃいけなかったんだ、ここには居ることができないんだみたいな気持ちになっちゃう。なんか褒め称えてほしいわけじゃなくて、あの子はそういう子なんだよっていうのをやっぱりわかってほしい。音に敏感なので、うちの子は耳を塞いで歩いたりもするんですけど、「うるさくないのに、なんで？」みたいなふとした疑問があがった時に、「あの子にはうるさく聞こえるかもしれないよ」とか言ってくると、「ふうん」で終わると思うんです。けどなんか「見ちゃダメ」とか「そんなこと言わないの」ってなると存在を否定されてるっていうか、なんか切り捨てられたっていう感じがするんですよね。

熊：すうー。

加：すうーって。

熊：思わず深呼吸せずにはいられなかったんですけども…。

加：あはははは。

熊：極端に言ってしまうと、全部が全部を、理解や共感して欲しいっていうことでもなく、ただただみんなと同じようにこの場所で生きて暮らしているというシンプルな事実を共有できたらなって。更には、なにかこう、その生きて暮らす方法というかスタイルが、みんながみんな同じとは限らないということも同じようにシンプルな事実だよっていう。

加：そうなんですよ。

差別することなく排除されることなく、安心安全な場であってほしい

熊：人とのつながりということで言うと、「移動支援」という福祉サービスを、もちろん文字通り移動の支援ということで利用はするものの、同時にお子さんと人との出会いの機会としても捉えているというお話があったじゃないですか。録音ボタンを押し忘れて記録には残っていないんですが、そこも心に刻まれているんですね。そういう深いところにあるニーズというか想いみたいなものをしっかりと認識しておく必要があるんじゃないかなって。

加：うちの子のような状況で言うと、「自分でできることは自分でやるけど、自分でできないことは困ってますって言えるようになる」というのが、ゴールなんですよね。つまりそういう自立なんですよね。

熊：ああ、どんな人にも重要な気がしますけど。

加：まあ、そうなんですけど、わたしは、うちの子が「んっ」と一言口をひらけば、これが欲しいのかな、あそこに行きたいのかなってすぐわかつちゃうんですよね。

熊：汲み取れちゃう。

加：はい。でも将来的には、わたし以外の人にもわかってもらう必要がある。もちろん、こういう特性がありますというのは説明する資料をお渡しするし、お話もするんだけど、それだけじゃなくて、日常の暮らしのなかで、こっちに行きたい、あっちに行きたい、あれがしたい、これがしたい、これはできません、あれはやりたくありませんっていうのを、本人がただ「んっ」って言うだけじゃなくて、指を指すとか、なにかものを持って行くとか、そういうことで表せるようになるためには、やっぱり本人がいろんな人と関わっていくしかない。どうしても障害のある人っていうのは、関わり合える人がすごく少ないので、そのためにもやっぱり少しでも移動支援などの福祉サービスを使っていきたいっていうのはありますね。

熊：関わり合える人が限定されてしまうことへの不安が、将来の不安とも結びつくという。

加：たとえば、わたしが明日死んでしまったときに、うちの子は路頭に迷うわけではないけど、心が路頭に迷うと思う。

熊：心が路頭に迷う。

加：自分のやりたいことをわかってくれる人がいなくなってしまうっていう意味では、そうですね。やっぱりいろんな人に関わって慣れてもらって、そこで自分の気持ちを伝えていく機会が必要だなって思います。

熊：まずは困ってることを表せるようにということなんですかね。

加：楽しいときは、やっぱり楽しいってすごくアピールしてくれるのでわかりやすいんです。

熊：そうかあ。困りごとはわかりづらい。

加：喋れないから、わたしでもわからないことはもちろんあります。まず、暑いのか寒いのかすらわからない。お腹が痛いかもしれないし、痛くないかもしれないし、ただ眠いだけかもしれない。もしかしたら、さっき足をぶつけたのかもしれないって。突然怒り出したように見えても、本人にはもちろん理由があってやってるんで。

熊：そういったことを、いろんな人との関わりの中で、伝えていく機会が増えるといいであろうと。

加：最近では本人が、わたしとは違う相手には、自分で伝えなきゃ伝わらないんだっていうのがわかるみたいで、痛いところを見せてきたりとか、指をさすようになったんですね。なにか欲しいときは、声を出すようになったりとかするんですよ。

熊：だから、いろんな人と関わる経験が大切という。

加：はい。そういうチャンスが少ないんです、すごく。

熊：親として、自分がいなくなった後の、その子の人生を考えるというのは、ごくごく当然のことだと思うんですね。

加：そうなんです。最近、そういう動画を見ちゃうと…。

熊：そういう、動画。

加：親が、自分亡き後の、重度の自閉症の子どものための終の棲家探しをするというもので。

熊：ああ。

加：もう施設しかないのもう、はあって、泣いている。そういう立場のみんながそういう気持ちになっているんだろうなって。だから、そういう施設でも、人との関わりがあればいいなって思います。

熊：「地域包括ケア」と呼ばれるあり方も浸透してきているように思いますが、どのような状況であれ、人が施設に閉じ込められるようなことにはならない方がいいと思うので、地域が、人が生きる舞台としてちゃんと機能するようになったらなと思います。

加：うちの子が学校に入学するときに、この地域がどうあって欲しいかということを資料に記入する欄があって、わたしは「差別することなく排除されることなく、安心安全な場であってほしい」ってコメントしたんです。手助けをしてほしいというよりも、排除されたりとかそっちの方が怖いから。「ああ、こういう人がいるんだな、ふうん」って思ってくればいいなっていうだけなんです。もちろん行政として必要な支援というのは必ずあると思うので、その部分を削ってくださってわけじゃないけど、なんて言うか、「大の字に寝て、お願いします」ってやっているわけでは全然なくて、こちらからも必要なことがあればやりますし、話し合いの場にも出ますし、資料にまとめる必要があればやりますし、そういうことはするから、一緒にどうやったらいいかを考えていきたいなっていうだけなんです。

熊：もう、ほんと、それを当たり前のこととして、ただただ、それを、やっていきたいです。



富永美和さん

共生社会を本当に願うなら

取材日：2024年10月21日



伝え合いの、メディアのような場としての公園

熊：公園を障害の有無に関わらず誰もが自由に遊べる場所にもっとしていきたい。それがこのプロジェクトの願いなんですけども、いわゆるインクルーシブ遊具というものを設置することが唯一絶対の方法ではない。と、そう考えているんですね。でも、それを鬼の首を取ったかのように喧伝するのではなく、じゃあ何をするべきか？というところが重要で、こうやって当事者や関係者、専門家の方々を尋ねているという状況です。で、これまでのヒアリングでもアドバイスを頂いていたのですが、公園がメディアのような機能を担保できたら良いよねって。

富：公園がメディア、良いですね。

熊：はい。伝わるべき知識や情報が地域の方々に渡っていくためのきっかけということなんですけど、具体的に言えば、たとえば看板やチラシラックを公園に置くという方法があると思うんですね。で、更に、じゃあ、そこにど

のようなものが置かれたら良いのか？ということを踏み込んでいかないといけない。としたときに、小金井特別支援学校の廊下に掲示されていた「おみこしかるいな」のポスターが頭に浮かんでいたんです。

富：ありがとうございます。「おみこしかるいな」は、以前小金井特支のPTA会長さんだった方が作ってくださったそうです。その後、学校と相談して外部でも使えるようになったようです。この「おみこしかるいな」を小金井特別支援学校だけではなく多くの方に使っていただき、障害児者の理解を深めていただきたいと願っています。

熊：それはとてもありがたいです。なんと言いますか、プロジェクトの進め方としても、地域社会の既存の資産というものをしっかりと認識していくことが大切な局面であろうと感じているんですね。なんでもかんでもゼロから新しくつくるということにしてしまうと、下手をすると、当事者の方々が既にやられていることを無下にしてしまうことになってしまう。それは、なんだか失礼な気がしますし、そもそも合理的じゃないと思うんです。

共生社会を願う「おみこしかるいな」

熊：「おみこしかるいな」をここで確認しておきます。「おどろかないでね」「みんなそれぞれ違うんだ」「こだわりが強いんだ」「しらんぷりしないでね」「かんたんなことばで話してね」「る一を教えてね」「いやなことばもわかるんだ」「なかよくしてくれるとうれしいな」のそれぞれ頭文字がとられた標語なわけですけど、「障害を持っている方々が楽しく地域で暮らしていけるよう、障害の理解を深めるために作成しました」とされています。それに加えて、「これからも一緒に担いでいけたら」という想いが添えられていました。

富：そうですね。

熊：こういった理解が地域に浸透すれば、もっと地域で暮らしやすくなるということなんですよ。富永さんから見て、この標語の特にここが良いというポイントを引き続き教えて頂けますでしょうか。

富：具体的に端的にわかりやすく書いてくれているんですよね。「おどろかないでね」というところでは、「不安な時に自分自身を落ち着かせるために声を出したり、歌ったり、独り言をしゃべったり、はねたりします」ってありますが、それが「ゲームをしたり、お友達と遊んで楽しい時間を過ごしているときと一緒に心が休まる時なんです」と話を展開してくれている。それを知っていると、驚いたり怖がったりしないで「はいはい」って思える。

熊：何事も理由があるということをまず理解できれば、変わってきますよね。

富：うん、そうなんです。コミュニケーションの取り方をちゃんと教えてくれているんですよね。それに、「みんなそれぞれ違うんだ」というところでは、いろいろな性格な人がいてみんな違うように、障害のある人も同じように、みんな違うということも改めて書いてくれています。それも重要。

熊：障害者ということで人をいっしょくたにはいけないというのは、あたりまえではあるんですが、心がけないと、「みんなそれぞれ違う」という前提を忘れてしまいそうな気がします。

富：改めて確認するというのが大切なんですよ。『しらんぷりしないでね』のところでは、「コミュニケーションが苦手だから人との距離感が分かりません。突然話しかけてきたりすることもあります。びっくりせず返事をしてくださいね」「逆に突然話しかけられても答えることができないときがあります。決して無視しているわけで

「おみこしかるいざ」



おどろかないでね

不安な時に自分自身を落ち着かせるために声を出したり、歌ったり、独り言をしゃべったり、はねたりします。でもこれは、みんなが言葉を聴いたり、ゲームをしたり、お友達と遊んで楽しい時間を通しているときと一緒にわが休まる時なんです。

みんな それぞれ 違うんだ

私たちの周りには、いろいろな性格の人がいて、みんな違います。積極的な人もいれば、内気な人もいます。障がいのある人も、いろいろな人がいて、みんな違います。

こたわりが 強いんだ

『こたわり』は1つの物事や出来事に執着してしまうこと。同じ道をいつも通ったり、好きなことを何度でも繰り返してしまふことがあるけど、本人にとっては安心できて心地よい。そんな時は優しく見守ってくださいね。

しらんぷり しないでね

コミュニケーションが苦手だから、人との距離感が分かりません。突然話しかけてきたりすることもありますが、びっくりせず返事をしてくださいね。逆に突然話しかけられたり答えることができないときがあります。決して無視している訳ではありません。

かんたん な ことばで話してね

一方的に話をしたり、又うまく話せない子どもが沢山います。言葉のキャッチボールが苦手。2,3才の小さな子どもに話しかける程度の簡単な言葉を使って、優しい口調で話しかけてね。

るーるを 教えてね

迷惑な事、危険な時は、突然どなったり、怒ったり、無理にやめさせるのではなく、優しく、静かに教えてね。大きな声や音は苦手です。

いやな ことばもわかるんだ

嫌な言葉を言われたと聞きます。みんなと同じで悲しいです。

なやよくしてくれと うれしいな

僕たちの事を知ってくれととても嬉しいですよ。僕たちは生まれた時から、おみこしを担いでいるけれど、家族や先生、地域の人たちと一緒に担いでいるから嬉しいよ。

はありません」とありますけど、これも本当にそう。物理的にも距離感が取れないんで、たとえばエスカレーターに乗るときも人と接近して立ってしまったりする。わたしも息子に「もう一つ下の段のほうが良いな」って教えたりしています。

熊：お互いに理解し合うということですね。話しかけられるのが唐突に感じられたとしても、本人的には脈絡があつてのことですものね。

冨：うん、声のボリュームやトーンなんですよ。慣れている方は対応してくださるんですけども、慣れてらっしゃらないとやっぱりちょっとびっくりしちゃう。だからまずは知っていただくことが重要ですよ。

熊：そのとおりに思います。

冨：「かんたんなことばで話してね」ってありますけど、わたしたちって、結構複雑な言葉の使い方をしているんですよ。うちの息子にも、「これをこうしてください」ってシンプルに伝えたほうが伝わる。

熊：自分たちの普段のコミュニケーションが照らし返されるようです。

冨：そう、「優しい口調で話しかけてね」ってありますけど、結構、定型の人は打ち消しで話すんです。これをしないでください、あれをしないでくださいって。しちゃいけないことを言うんじゃなくて、して欲しいことを言っていたきたいんですよ。たとえば「そこで走らないでください」じゃなくて、「そこは歩きます」って。あとは、「大きな声を出しません」じゃなくて、「静かにします」とか。

熊：ああ。否定とか打ち消す言葉だと、語調も強くなりがちですよ。

冨：そうですね。怒った口調で伝えられると、彼らにとってマイナスの刺激になってしまうんですね。すごく不安になったり、癇癪に繋がってしまったりするので、そういうことは落ち着いて、安定した声で伝える必要がある。

熊：なんかまあ、それって、障害の有無に関わらず、人間全般に必要なことな気がします。

冨：ねえ。「いやなことばもわかるんだ」、これも、わたしは本当にうなずきました。全部わかってます。うちの子どもに関しても、インプットは100以上だと思います。100以上のことをインプットできてアウトプットが数%っていうアンバランスさがあるんですけど、周りが自分のことを悪く言ってるのもすぐわかります。むしろわたしたちよりも敏感に感じてしまうために、わたしたちが感じ取れていなかったり意識できていないこともわかっていて、ちょっと不穏になってしまうということもあります。アウトプットが少ないということで、「いやなことばもわかる」ということが、なかなか理解されないんですよ。

熊：アウトプットの量が少ないからといって、インプットが少ないとは限らない。

冨：その通りです。

熊：それもハッとさせられます。

約束したつもりがないけど、守らないといけないルール

冨：案外、そういう空気は読めちゃうんですね。公園でもいろんなルールがあると思うんですが、それが理解できないと、やっぱりヒソヒソ言われたりもしますよね。そうすると、「やっぱり僕はいつちゃいけないのかな」って自分なりに感じ取って、遊びに行かなくなります。

熊：ああ、約束したつもりがないけど、守らないといけないルールというものが、結構あるんですね。

冨：それで言うと、わたし、去年、ある会報に寄せた挨拶の中で、お話しさせていただいたのですが....。

熊：ある会報に寄せた挨拶？

冨：まあ、はい、それは「見えないルール」っていうタイトルにしていたんですね。というのも、日本に戻ってきてほぼ3年になるんですけど、14年間海外で生活してまして、子どもたちはみんなヨーロッパで育ってる感じなんですね。日本が大好きで帰ってきたんですけど、「見えないルール」がすごいことに、私も改めて気づくことがいっぱいある。そして、指摘を受けるとき大体怒られるんですね。

熊：ああ、「教える」が「怒る」になっちゃう。

冨：そう。

熊：「おみこしかるいな」の「る」は、「るーるを教えてね」ですけど、「迷惑な事、危険な時は、突然どなったり、怒ったり、無理にやめさせるのではなく、優しく、静かに教えてね。大きな声や音は苦手です」ってありますね。

冨：本当にそうなんです。「見えないルール」を知っているという前提で、怒られるんです。優しく静かに教えてはもらえない。長いこと海外で生活してる子であれば、たとえばエスカレーターだったら自然と真ん中に乗りますよ。

熊：ああ。

冨：端っこに乗るってことは、そもそも危ないし怖いですからね。

熊：エスカレーターを長持ちさせるためには、メーカーとしては本当は真ん中に乗ってもらいたいそうなんですよね。みんなが端っこに乗って重力が偏るから故障の原因になるらしいんです。でも、「見えないルール」って、一旦定着すると、それ以外の選択肢が吟味されることがあまりないですよね。それを疑わずに守って当然となってしまう。

冨：やっぱり障害を持っていたり、弱い立場にいる人たちにとってはすごく怖い。優しく教えてもらえないし、怒られるし、舌打ちされるし。エスカレーターに限らず、「見えないルール」に気づいた時には、「～しないように」とは伝えず、「すること」を伝えています。都度、教えてあげないといけない。最初が肝心なんで。

熊：言われてみたら、かなり難易度というか負荷が高い気がしてきます。

富：「メルトダウン」と言うんですが、一種のパニックのような状態で、本当に手がつけられないほどになることがあるんですね。何時間も自傷したり、他害したり、ものを壊したりとか。癩癩とは違って、本人も原因がわからない。もうわけわからなくなっちゃってる感じですね。そのメルトダウンというものを、コップの水にいつも喩えているんです。

熊：コップの水。

富：不安な気持ちなどのマイナスなことがずっと積み重なって溜まって行って、最後の一滴がなんなのかっていうのは関係がないんです。でもその一滴でこぼれてしまう。

熊：こぼれちゃう。

富：そう。最後の一滴によってコップの水が溢れると、どんどん溢れ出してしまって、癩癩、自傷、他害、大きな声を出してしまうこともあります。

熊：コップの水が溜まりやすい社会なのか、そうではない社会なのか。そうやって考えると、「見えないルール」が前提となって、教わるというより怒られるということが多いと、キツイですね。

富：そうなんです。禁止事項が多いっていうのは、親にとっても本当に生きづらい。「あれも駄目らしいよ、これも駄目らしいよ」っていうのを子どもに通訳する感じですかね。ダメとは言えないので、ダメを使わずにしてほしいことを伝えます。

公園に行って、泣いて帰って来る

富：知的障害があると、重複して自閉スペクトラム症があったりもするんですけど、やっぱり親が安心して外に連れ出すことができない。子どもが小さい時期は特に公園が必要だと思うんですけど、もう本当にハラハラして落ち着いて遊ばせることなんかできません。時には親子で泣いて帰ってくるようなことの連続。

熊：公園に行くと、泣いて帰って来る。

富：そうなんですよね。大体つらい思いをして帰ってこなくちゃいけない。ルールを守れないし、人との距離感がつかみづらいから子どもの輪のなかにスッと入って行って、「変な子が来たよ」ってされちゃう。定型発達の一般のお子さんたちと遊ぶことってすごく良いんですけど、やっぱり仲間外れにされるところを見なくちゃいけないし、やっぱりこうなるんだっていう現実を見させられる。だから公園って、つらい場所でもあるんですね。親にとっては、突き付けられます。比較をしちゃいけないし、そうするつもりもないんだけど、目の前でそういう状況が展開されているので。

熊：つらい場所としての公園。

富：公園が必要な時期って、子どもの年齢が2、3歳から小学校低学年くらいですよね。そのタイミングは、親の「受容」の時期と重なるんですよね。

熊：ああ。

冨：本当は違うんじゃないかと思いたいじゃないですか。障害なんてないって。けれどもやっぱり比べると明らかに違う。親も結構傷つきやすい時期なんですよ。なので、公園のことを考えるとそこはちょっと複雑だなんて思いながら、でもやっぱり、公園は安心して遊べる場所であって欲しいですし、やっぱり私もいろいろ活動をしていて感じる、何が一番大事かって言うと、人との繋がりがだっていうのはもう本当に思います。繋がっていくことと、障害を知ってもらって、理解してもらうことですね。

人との繋がりと、理解を育む

冨：たとえば知的障害とか自閉スペクトラム症って、目に見える障害ではないこともあって、知ってもらうことに時間がかかる。だから、こういう子がいるよってということで、わたしは息子を連れ回します。耳にはイヤーマフって言うある程度の音を遮断するものをつけて歩いてたりとか、首振りとか声を上げたりとかを繰り返すチックっぽい行動もします。今のような季節の変わり目の時期って、うち子に限らず、そういった癖が強くなるみたいですね。

熊：季節とコンディションがつながっているんですか。

冨：みんなそうだと思うんですけど、うちの子に限らず、難しさが表面化しやすい時期かなと感じています。

熊：さっきの「コップの水」の話で言うと、季節の変わり目は、かなり水が溜まっている状況ということになるんですかね。

冨：そうですね。なので、親がそれを理解できているといいんですけど、そうじゃないとその「最後の1滴」のところだけを見てしまうんですね。でも違うんですよ、いっぱいあるんです。全てが積み重ねなので、学校での出来事かもしれないし、登下校の何かかもしれないし、スーパーに行ったときの何かかもしれないし、テレビで見た印象的なものだったかもしれない。「これだ」っていうのがないんですよ。なので、一番いいのは、切り替えができるように育ててあげるっていうことなんですけど、なかなかそれも簡単なことではありません。だから、たとえば「茶話会」という形でお母さん、お父さんたちで情報交換ができたり、グチを言い合えたりする場所があると本当は良いんですよ。

熊：まずは親自身が、人との繋がりと理解を贈り合えるような機会。

冨：わたしは日本に帰る前にロンドンで子育てをしていたんですけど、向こうにはそういう場所がいっぱいあるんですね。自分でも「ケセラの会」というのを立ち上げて、日本からの駐在員とか、旦那さんがイギリスの方でっていう人が利用してくれていて、日本語で喋れるよってところがポイントなんですけれども、そこで情報交換とか、困りごととか話してちょっとスッキリしようっていう。

熊：そうか、母語で話せるというのも結構貴重なんですね。

冨：そうです。

熊：ケセラ？

冨：「なるようになるさ」のケセラセラですね。

熊：ああ。

冨：なるようになる、大丈夫。そうやって寄り添っていたいという。

ロンドンの学校の、コーヒーモーニングという自然な寄り合い

熊：心理的なところも含めて支えがないと、倒れてしまう。ロンドンでは、そうやって支え合える集まりがたくさんあるんですか。

冨：学校では、「コーヒーモーニング」っていうのがあってですね。もう言葉のままなんですけど、お国柄、安全上、向こうでは子どもを親が学校に送らなくちゃいけないですよ、特別支援学校はスクールバスが来ますけど。それで、子どもを学校に送った流れで一緒にコーヒーや紅茶でも飲みながらグチを言いませんかっていう、コーヒーモーニングという名のグチ・情報交換大会。でも、それが大事なんですよ。その中に特別支援教育が必要な子どものお母さんもいたり。

熊：そうかあ。日常的な生活動線のなかに、そういった機会が埋め込まれているのは、なんだか理にかなっている気がします。学校も、そのためにスペースを提供してくれているわけですよね。今回の公園の話に置き換えて考えてみても、示唆的な感じがします。

冨：そうですね。わたしも、英語の練習にもなるし、ママ友づくりということで行ってたんですけど。ただ、どうしても日本人のお母さんがいらっしやらなかったんで、日本語で喋るところが必要だっていうことで、「ケセラの会」をつくったんです。

熊：まず、親がケセラセラになれるように。

冨：はい、「親の心の拠り所」っていうのがメインテーマです。

公園にいと、「ねばならない」を手放せる

冨：子どもが小さい頃は、本当に手が出てしまうんじゃないかっていうことが、何回もあって。その度に、主人に「ごめん、ちょっと早く帰ってきて、今、精神的にちょっと良くない」って。

熊：「助けて」というシグナルを出せたんですね。

冨：はい、それが言える相手ですし、もう、近所の人にも、みんなにヘルプって言っていました。息子の成長のなかで、想像しきれないことも出てくると思っていますから、周りに味方だったり、逃げられる先っていうのがないって。でも、多分、わたしの性格もあるんじゃないかな。助けてサインを出していくのは簡単なことではないで

すよね。あと、公園って外の目があるじゃないですか。そういうところだと、精神的な追い込まれを逃がすことができるという部分もあると思うんですよね。

熊：公園だと、精神的な追い込まれを逃がすことができる。

冨：まず、公園が安心して行ける場所になっていれば、たくさん行けると思うんですね。

熊：その状態を目指したいです。今、そうっていないので。

冨：はい。その上での話なんですけど、わたしの経験として、外で自分の子どもをみることで可愛いなって思い返せる時期があって、わざと外に出るようにしていました。

熊：外に連れて出るのが大変なのにも関わらずですか。

冨：大変なんですけどね、皆さんそうかはわからないんですけど。

熊：それは、お子さんが楽しそうに遊んでいる様子を眺められるからというニュアンスなんでしょうか。

冨：いや、家の中でも遊んでいるじゃないですか。

熊：たしかに。

冨：家の中だと、自分が掃除したり、綺麗にしているところを汚されたり、壊されたりすると腹が立つじゃないですか。自分の思い通りにいかないと怒りに変わってしまう。でも外だと、そういう苛立ちは起きないし、少し客観的に見ることができて、子どもをかわいいと思える本来の感情が蘇ってきた気がしていました。

熊：ええっと、非常に、公園の本質的な可能性に関する深い議論であるように感じます。

学びを、プロジェクトとして捉えると

冨：日本でも「フルインクルーシブ」の議論がありますけど、そもそもの教育観を考え直す時期に来ているんですよね。

熊：フルインクルーシブって、障害のあるなしに関わらず子どもたちが同じ教室で学んで一緒に生活することをめざす教育の考え方ですよね。

冨：そうですね。その環境を求める希望者に対してのことなのか、完全に全員がフルインクルーシブなのかとか、いざ導入のことを考えると、色々考えないといけないことがたくさんあるんですけど、そもそも、特別支援学校が持っている専門性や安全性というものは残して言っているんだと思います。

熊：いずれにしても、そこにある知見は大切にすべき社会的な資源である、と。

冨：わたし、イギリスの学校で障害のある子どもたちのサポートをしていたんですけど。

熊：え、そうなんですね。

冨：はい。イタリアはフルインクルーシブと言われていますけど、同じように専門的な資格を持った支援員がちゃんと入っていて、一人ひとりに付いているんだそうです。それで、そのイタリアに住んでいる友人に、障害のある子もない子どもどうやって一緒に勉強してるのって訊いたら、教科書を覚えるようなことではなくって、プロジェクト型で進めていくっていうことなんです。

熊：ああ、そうか。それこそ教育観そのものが違う。

冨：プロジェクトだから何かテーマを決めて協力して遂行していくわけですけど、一緒に生活する中で障害のある子も含めてお互いの、何ができるかとか、何に興味関心をもっているのかっていうのをわかっている。だから、それぞれどういう役割にしていっていかっていうことを自分たちで考えていくそうなんですね。

熊：へー、良いな。役割があることで居場所が生まれるし、プロジェクトチーム全員のそれを考えるところからが、もう学びですね。

冨：そうなんですよ。たとえば、運動会のリレーで競争する時に、足の遅い子がお荷物扱いされたり、嫌な顔をされたりしてしまうじゃないですか。

熊：一斉に、同じことを、同じようにやる。そういう仕組のなかでは、自ずと、みんなと同じじゃないとダメってなりますよね。

冨：なので、そうじゃなくって、いろんな子がいた方が良くなるっていう仕組みにしていける必要があるわけですよ。誰も答えを持っていないような事柄に対して、どうやって協力し合いながら自分たちなりの考えを導き出していくのか。それって、そのプロセスを重視するということだと思うんですよ。

熊：現に、今の社会がそうになっていますし、このプロジェクトそのものが、まさにそれですし、そうありたいところです。

冨：そういうことなんですよ。



阿部裕太朗さん

迎え入れることを備え続ける公園的な地域へ

取材日：2024年11月21日



名前のついていない遊びが生まれる、かつての駄菓子屋のような場所

熊：阿部さんが館長になってから、地域で「環境楽習館」のことが話題になることが増えている感じがしますよね。実際に子どもたちを中心に、たくさんの人で賑わっているし、地域の居場所としてとても機能しているように感じます。

阿：ありがたいですね。特に特別なことをしているつもりもないけど、なんか、なんだろう、多分それって、他のところが「駄目」が多すぎるということもあるだろうなって。

熊：駄目が多すぎる。

小：そういえば天井の方に上がって挟まったボールとれました？

阿：あ、はい、とれました。

熊：ん、ここ室内ですけど、子どもたちがボール遊びをしてたんですか？

阿：柔らかい軽めのボールで、玉入れみたいにして遊んでて、そうしたら、ぶわあー、うわーあ、みたいになって、え、そんな遊び方あるの？って。斬新な遊びが日々更新されていくんですよ。

熊：名前のついていない遊びが生まれる場所。

阿：そう、怪我しないで、壊さないでいてくれたら、まあ良いかなって。

熊：まさしく「駄目」とすぐ言わない。

阿：さすがに、という時は言いますけどね、「ちょっと待って、こっちならどうぞ」って。

熊：ん、でも、頭ごなしに否定はしないんですね。

阿：これならどうぞって言えることはあるんで。

熊：なるほど。夏休みにお邪魔したときに、たくさんの子どもたちが、雑談したり、勉強したり思い思いのくつろいだ過ごし方をしていてビックリしたんですね。人数の多さもそうですし、そのバラバラで気ままな具合にも。

阿：人数で言うと、夏休みを明けて最近の方がむしろ多くって、放課後の時間に20人くらい来てくれるんですよ、学年もバラバラで。それで、幼稚園や保育園が一緒だった子同士が、ここで再会して、「あ、誰々」って名前を呼び合うみたいなの。

熊：あー、地元の関係が結び直される場所。

阿：大人でもそういうことあるなって。

熊：たしかに。そして、それは豊かな地域社会のあり様な気がします。

子どもが、一人の人として対応をしてもらえる場所

熊：にしても「環境学習館」って、小金井市の環境学習の拠点と言いますか教育施設ではあると思うんですけど、子どもたちって、ここのことを何だと思っているんですかね。

小：昔の駄菓子屋っぽいですよね。実際にここで駄菓子を売っているというのもあるんですが、集まれるし、遊べるし、くつろげるし。それに、トイレもあるし、お水も飲める。

阿：子どもがちゃんと「お客さん」になれる場所って、そんなになくって、やっぱ親の付属みたいな感じの「お子様」としてしか扱われないことが多いので、なんだろう、うん、子どもたちが一人称を持っている一人の人としてちゃんと扱われるみたいな所かなと思ってます。

熊：素敵です。具体的な質問なんですけど、それで言うと、ここに訪れる子どもたちが入口から入って来たらなんて声をかけるんですか。

阿：「おかえり」とか「おつかれさま」とか。

熊：あー、お客さんとしてという対応もありつつ、そこは「いらっしゃいませ」ではないんですね。

阿：「ただいま」って言ってくれた子がいて、なるほどって思っ。

小：「おかえり」って、嬉しいですね。

熊：敬意の現れとしての「お客さん対応」。親しみの現れとしての「おかえり」。子どもたちが駄菓子を買ったり、ドリンクを注文している様子は見てましたけど、極端なことを言ってしまうと、何も買わなくても、お金を使わなくてもここに居て良いんですよね。

阿：うん。おもちゃもあるんでね、好きにしてって。

熊：好きにして。

阿：基本的にこっちでなにか遊びをすることはないので、自分で決めて自分でやってねって。例えば、「人が足りないから人生ゲームと一緒にやって」とかだったらやりますけど、仕事が暇なときはね。そういう感じで頭数で必要なときは手伝うけど、基本的には自分たちで何かやったらいいんじゃない？って。そこで、あれがない、これがないって、例えば「ハサミある？」って訊かれたら、はいどうぞって。

間に立つ人

熊：「好きにして」というのが、突き放しているわけではなく、お互いに好きに過ごしていく中で、何か重なるところがあったり、できることがあれば、もちろん助け合うよってというのは、子どもや大人に関わらず、自立した人間同士が共に居るといこと、基本原則なような気がします。

阿：「具体的にこういう人がいるからこうしよう」みたいな形で、一緒にこの場をつくっているという感覚があつて。

熊：顔が見える関係性のなかで、場を育んでいきたいということですね。

阿：はい。だから、今かなり子どもに寄ってるんですよ。

熊：子どもたちがたくさん来てくれるから、というね。

阿：自分は、「調整役」みたいなものと思って。だから、今後、シニアの方とか、それこそ今回のplay hereのようにインクルーシブな公園を必要とされている方などと出会えていけば、伸ばしていくべきものも変わってくるし、変えていきたいこともあるし。

熊：阿部さんの出会いが豊かになればなるほどに、ここが豊かに変化していくということですよね。それは、当然だけど珍しいことだとも思いますし、そういった出会いを受け止めているからこそ言える言葉だな、とも。え、で、阿部さんは、ご自身でもともとケータリングなどのフードの仕事もされてますし、ここでは飲食を出したりもしているけど、ここでは自分のことをある種の調整役として捉えているんですか。

阿：なんか、それがあるからどうとでも形づくれる、みたいな触媒というか。なので、なんか別に食べ物を作りたいわけでもないしって言うと、語弊があるんですけど、用が足りれば十分かなって。いきなり腕まくりして料理を出す場所でもここはないよねっていう話なので、もちろん必要になったら出しますが、求められるものに合わせてやっていく、みたいなことのほうが大事。

熊：なるほどです。自分自身を、場所だったり他者に押し付けることはしたくないということですよね。そうなってくると、どんな化学反応を起こすべき触媒なのか、どんな変化をもたらすべき調整なのか、という倫理観というかビジョンの話にもなってくるような気もするんですね。それで言うと、そもそも、この「環境楽習館」って、元々はなんなんでしたっけ？小金井市における位置づけはどういう形になっているんですか？

小：元々は、いろんな環境に配慮した設備を体感するっていうことで、太陽光発電システムや床下暖房を取り入れている「住宅型研修施設」です。

熊：環境により良い暮らしを、家を通して伝えていくと。より広く多くの市民に、この施設をひらいていくために、今の形がとられているということだと思うんですが、日比谷アメニスさんの指定管理のもと、地域で活動をされていた阿部さんが館長として運営をやり始めたのは、2024年度からでしたよね。

小：はい。直接的な環境教育につながる使い方ができなかったのが、地域の交流の場としても使えるようにするために条例を改正したことによって、いろんなイベントもできるようになったという経緯です。

熊：まさに「交流」が生まれているし、「公園的」になってきてるっていう印象を受けますけど。

小：そうですね。

熊：でもまあ、環境に関するポスターや展示もあって、僕自身もそうでしたが、なんとなく訪れて、「へー、そうなんだ」みたいに、学ぶ機会にはなっているわけで、当初の志が同時に叶っているような気がします。

小：来てもらわないと、伝えられないんで、まずは来てもらうってことを今年は目指してるっていうところがあります。半年終わった時点で、既に去年の2倍の来場があるんです。

熊：え、このペースで行くと、昨年度の4倍の来場者を記録すると。

小：はい。

熊：もちろん、いわゆる来場者数だけで成果を測るわけではないものの、とはいえ、僕もたまに来ると雰囲気が良いなどは感じていて、その来場者数はその結果でもあるわけですね。

人が地域を育む、地域が人を育む、その両方

熊：阿部さんにお話をお伺いしたかった理由の一つとして、この半年で環境学習館で起こっていることは、一つの成功事例として、この地域や社会で広げていくべきものがあるんじゃないか？という想いがあるからなんです。素直な言い方をすれば、「真似すべきを真似すべき」と思うんです。なんだけど、「じゃあ、何を真似すべきなのか？」というところをしっかりと吟味しないと、ただのコピー&ペーストになっちゃうんで、たとえばカフェをやれば良いとか、フリマをやれば良いとか、安易なコピーになっちゃう。

阿：そう。

熊：お話を始めて、ここまでまだ15分くらいしか経ってないですけど、子どもや仕事や地域に対する考え方や観点に関する話がたくさん出てますよね。おそらく安易なコピーにしないためには、そういった哲学のようなところをみんなで磨いていくようなことが欠かせないと思うんです。でも、それは時間がかかるから、みんなそれにあまり時間を割かない。急がば回れって言いますが、まさに、そうしたい気持ちもありまして。

阿：ぜひ。

熊：あと、あらかじめ言っておきたいんですけど、良い事例が生まれると、「あれは、あの人だから、できた」「あそこだからできた」と、批判されることが自ずと増えていくんですね。つまり、属人的だとか、再現性がないとか。

阿：うん。

熊：ただ、「再現性がない」という批判フレーズは、安易にも使えるので、地域社会で良い事例の芽を潰しちゃうというか、そのための土壌を貧しいものにしちゃうと思ってるんですね。で、議論すべきは、「まず、再現すべきと思うか？」なんですよ。「再現すべき良い事例だ」とみんなで思えたなら、「その再現の確率を上げていくためには、どんな工夫をすれば良いんだろうか？」ということをみんなで考えるという、事の進め方を選びたいなって。

阿：好きに振る舞える環境を整えてもらってるので、そこはデカイかなと思ってて。

熊：ああ、そうそう、ある意味、小金井市という行政、日比谷アメニスという指定管理者、阿部さんという地域の実践者が協働しながら成果を出していくためには、どのような制度設計が必要か？みたいな検証や議論になっていくようにも思っています。まず、確認なんですが、日比谷アメニスさんが、阿部さんを雇い入れている形ですよね？

阿：そう、契約社員という形です。よく雇ってくれたなと思って。こんな、ちょっと前までフリーターみたいな、履歴書だけを見たら、よくわかんない人だし。

熊：いやでも、それは、素晴らしい状況だなと思うんですよね。地域の方々との関係性づくりみたいなのは、地域と縁のなかった日比谷アメニスさんが満足にやるには、なかなか骨が折れると思うんですよ。そうしたときに、もともと地域でといろいろと活動をしていた阿部さんが、小金井の公園や緑地の指定管理という業務の一員を担っているということは、注目すべき事実だな、と。その上でなんですが、「好きに振る舞えている」と思えているという。

阿：数値化できるものが全てじゃないけど、利用者とかリピーター率とか、一応、数字で表せる成果は残っているので、自分が好きでやれて、アクセル踏むべきところはどんどん踏んでいこうって。そのなかで、苦手なところは、会社側がやってくれているんです。

熊：持ちつ持たれつ、と。たとえば、行政側は、阿部さんのような地域の個人の実践者には、そうしたくても、仕組み上、なかなか発注や契約ができないんですよね。一方で、日比谷アメニスさんは、小金井市立の公園の管理を網羅的になさっていますけど、そういった面的なことも、個人ではなかなか担えない。

阿：そうですね。

熊：このplay hereにおいても、パシフィックコンサルタンツという大きな会社さんと小金井市さんと、地域で実践していた僕という枠組みがあるんですが、ほとんど同じ話なんです。まあ、僕も怪しく見えると思うんですけど、それは置いておいても、目利き力と寛容性は問われますよね。そして、どういうフォーメーションを組めば、地域に成果を落とし込んでいけるのか？という議論は、環境楽習館の成功事例をもとに、もっと考えていくべき話題ではあるであろうと思っています。そうやって、特に若い人が、地域で挑戦して成長していくことによって、その地域も成長していくみたいな話は、本来のあるべき姿であるようにも思います。今って、個人の成長と、地域の成長が切り離され過ぎなんです。

誰かの困りごとを、みんなでどうにかすること

熊：インクルーシブ遊具を置いて終わりではないという話は、何回も繰り返して強調していくべきだと思って。トイレの整備も必要だし、移動手段のケアも必要だし、心のバリアフリーという人々の理解や認識という側面も欠かせないし、当然のように考えるべきことがたくさんある。さらには、あらかじめ準備したチェックリストを完了させて終わりにするのではなくって、そのチェックリストそのものを更新し続けていくようなコミュニティとかコミットメントが必要だし、そのようなスタンスでプロジェクトを構えておくことの方が大切だようになってきているんです。阿部さんが言うような、出会いによって、その場も可変的に豊かにしていくという感じで。

阿：そうですね。

熊：僕もやりながら学んでいるんですが、「摂食嚥下（えんげ）障害」がある子どもたちの保護者の方々と話をしていたら、食事をブレンダーでペースト状にするわけですけど、夏だと腐りやすいから気にして出掛けづらい、と。レストランとかでブレンダー使っていると怪訝な顔をされることがある、と。だから、公園のインクルーシブ化というものを考えるときに、食のインクルーシブという観点もあるんだなって。

阿：これ美味しいよねって、感じ合いたいし、言い合いたいよねっていう。

熊：ほんと、まさに、それです。

阿：ハードルが多すぎますよね。

熊：いきなり完璧にはできないにしても、ある程度見通しというか論点をしっかり見据えておかないと、仕事したことにならないなと感じるんですね。とはいえ、わりとちょっとしたことでも、状況が良くなることってある気がしてて、例えば、マイボトルをスターバックスとかに持っていくと洗ってくれるじゃないですか、あんな感じで、「ブレンダー、洗つときますか？」みたいに、お店で自然に声がかかる環境になったら良い気もするんですよ。それって、そんなに難しいことでもないような気がしてます。

阿：そうですね。なんか同じところまでに行くハードルが高いと本当に全部諦めたくなくなるじゃないですか。

熊：全部諦めたくなる。

阿：「うー、なんで普通というものを当然のように享受してんだよ」「普通の側にいるの、うらやましい」ってなるのが結構あるんですけど、まあ、それはそれなんですけど、そういうところの想像はできるんで。

熊：「普通」というものからはみ出る、「生きづらさ」みたいなものって、みんな大なり小なりあって、たとえそれを感じずに暮らせているとしても、それってずっと続くわけじゃないとも思うんですよ。あくまでも、暫定的な「普通」状態。そういうことを、改めてみんなで認識する必要があるんじゃないかなと思います。その上で、誰かの困りごとや生きづらさを、みんなでどうにか解消していくというところが、社会や国家というものがあることの大義名分だったはずだよねと思うんですよ。

制度が追いついていない存在

熊：play hereでインタビューを続けていると、皆さんの言葉に自分自身がとても突き動かされている感覚があるんですね。だから、こちらもいろいろと頑張れるというところがあります。同時に、言葉を紡がざるを得ないというか、沈黙も含む言葉というものに向き合わざるを得なかった時間や状況の蓄積というものも感じます。

阿：ある意味、うちもそういう時期が長いことあって、20代のときに家庭が欲しいなっていうところにすごい執着してて。

熊：家庭が欲しい。

阿：ただ日本の制度だとちょっと無理っていう。

熊：ああ。

阿：だから、養育里親みたいなことをすごい調べたり、そういうお話会とかにも参加したりしてたんですけど、あ、駄目なんだ、みたいな。どこまでも社会の、その「正しい」とされている形から排除されていくみたいな。

熊：自分自身が「普通」というカテゴリーに入っていない上に、社会の制度にも入っていない。

阿：そうそう。なんて言うの、このままいくと独居男性の孤独死みたいな感じで終わる人生だなと思って、それ、絶対嫌と思って。

熊：それこそ、先程おっしゃっていた、「普通になるための、ハードルが高いと本当に全部諦めたくなる」という。

阿：そうそう。

熊：いま笑いながらお話をされていますけど、それって、この社会が生きるに値すると思えないという、強い言葉でいってしまえば、希望を感じることができないということでもあるわけですね。

阿：そうそう。今日のヒアリングの趣旨と離れちゃってるかもしれませんが。

熊：いや、離れても全く問題ないんですけど、かといって離れている感じもしなくて。というのも、宮崎駿さんが、「子どもたちに『この世は生きるに値するんだ』ということを伝える」という心構えを先人から受け継ぎつつアニメ制作に臨んでいると語ったというニュース記事が、ずっと頭にあったんですね。で、「公園を障害のあるなしにも関わらず、誰もが遊べるインクルーシブなものにしたい」という、このプロジェクトが目指すべきところは、つまり、それなんだと思ってたんですよ。だからこそ、良い兆しという希望を持ち寄って、分かち合っていきたい気持ちがすごくあります。

阿：普通にも色んなパターンがあるし、今、それが増えてきていると思うんですけど、最初から自分自身がフィットするパターンが社会のなかに存在していないことに、ずっと腹が立ってて、「外国ならそれあるよ」って言われても、「それって、ここから出ていけってこと？」ってなるんで。だから、ここで生きていくためのロールモデルがないことにずっと悩んで。ただ、それがなくても、働くことの楽しさや、賑わいを自分の周りに構成していくのはできるから、ご近所付き合いが気薄なこの社会のなかで、なんかちょっとなるべくいろんなところで、「よろしくお願いします」ってやってます。環境楽習館みたいなところで働いていたら、孤独死も避けられるだろうから、80代まで働ける施設をつくるしかない。

熊：あー、それは希望がありますね。なんというか、公園って、法的にも公共の福祉であったり、人々の健康の増進というところがその存在根拠でもあるわけですね。イギリスは2018年に、孤独が国を挙げて取り組む社会問題であるということで、「孤独担当大臣」というものを設けたわけですけど、公園を、そういう意味での心身ともに健康を醸成する場所として活用していくポテンシャルはまだまだあるんじゃないかなとは思っています。

託し、託されることのネットワークと生活の張り合い

阿：自分が死んだ後に、「あとは任せた」ってやりたいんですよね。思い出したのが、数年前に、お世話になってた料理家の先生がお亡くなりになってしまって、形見分けをみんなでしてたんですよ。先生独身だったんですけど、「これだ」って思っただけ。受け取ってもらえるように、うちの形見にすごい価値がでるようにがんばろうって。

熊：受け取ってもらえるように、ですか。その先生は、心の師匠でもあったんですか？

阿：そうそう。

熊：なんか、血縁とか地縁とか、人と人の縁のつくられ方ってありますけど、そういう血や地の繋がり以外で、人と人はどのように縁を切り結ぶことができるのか？というのは、今の社会の大きな問いであるようにも思います。お墓とか町内会とかPTAとか、これまで強制力のあった縁のあり方が、問い直されてますもんね。ちょっと話が飛びますが、できれば、地域の公園で結婚式やお葬式ができれば良いなとは思っています。

阿：結婚式、楽しそう。

熊：冠婚葬祭を地域ごととして営み直すというのは、必要な気もしているんですよね。

阿：お葬式はどうでしょう。公園で散骨？

熊：なははは。法律や制度の話はありますが、樹木葬も流行っていますし、それができると地元への感情も変わってきます。文字通り、骨を埋めたくなくなるくらい、地元が好きという。半分冗談ですが、自分の身も心も預けなくなる地域であるためにはどうしたらよいのか？ということは、結構重要な議論ではあろうかと本気で思っているんですよね。あと、例えば、友人や家族が埋葬されている公園では、ゴミのポイ捨てとかは絶対しなくなるとか。

阿：そういう妄想って、いいですよね。

熊：そういう感じに社会がなっていったら、阿部さんがおっしゃる「あとは任せた」ということがしやすくなる気がします。

パッケージをを買うだけで出来上がる公園にしないために

阿：それぞれの場所に特色がある地域になるのも面白いかなって思うんですよね。今、ここは、子どもの居場所みたいなことになっているから、その部分が強いけど。

熊：うん、国立公園とかならいざ知らず、市の管轄の公園の話になってくると、一箇所で全てをまかなうということは、そもそも無理なので、その人らしさというものを大切にするように、その場所らしさを大切にしたい公園というものがあつたほうが本当は良いはずなんですよ。だから、ある程度の共通の水準はあるにしても、それぞれの公園の特色をどうとらえるか、という議論は大切であろうと思います。極端な言い方をしちゃうと、なんとなく出来上がった公園も多いと思うんですよね。遊具メーカーが、遊具をパッケージ化してくれているから、それを選んで設置するだけという。

小：宅地造成でつくられる公園では、あらかじめ整備の要項みたいなものをつくるんですけど、そこで例えば、ブランコ、滑り台、砂場ってあって、こっちがパッケージ化しすぎちゃっているところがありますね。

熊：そのほうがつくりやすいですもんね。ただ、つくりやすいことが、すなわち良いものになるという確約はないし、そこで立ち上げるべき議論は、「何が欲しいか？」というものよりも、「わたしたちは、この場所でどういう暮らしを営んでいきたいのか？」みたいなところだったりもするはずなんですよ。とはいえ、じゃあ、そういう議論をどういう枠組みでやっていくのか？ということを実際的に考えるのはかなり難しい。なんで、ある程度は、あらかじめの論点の整理であつたりとかの、実りのある議論をするための下地が重要であろうと思うんですが、そこはもうホントに試行錯誤をしていきながらやるしかない社会状況だなとも思っています。パッケージ化されたものを置いただけみたいなことだと、梶野公園のような「遊具がないからこそその意味や価値を、みんなで積極的に見出していく」というような現在の状況は訪れていないと思うので、そういう地域に既にある良い事例における知見を、地域でしっかり蓄積していけると良いはずですよ。

小：3,000平米以上の敷地の開発の場合、事業者が、その面積の6%以上の公園などをつくることが義務付けられていたんですけど、事業者側もより良いものにしていくために、地域と向き合ってコンセプトをしっかりと考えてくれたりもしているんです。

熊：そっか、なるほど。

小：事業者側も、その場所の価値をあげていくことのミッションがあるので、行政側が変にその可能性を狭めてしまうよりも、パッケージにあるものを安易に置いて終わりじゃないという方向性に上手にナビゲーションをしていながら、意味のある提案を受け止めていけたら良いなとは思いました。

熊：なるほど。良い仕事ができるように、お互いに励まし合うような関係性を育んでいきたいです。

公園の潜在的な可能性は、ネットワークの中で発揮される

熊：環境楽習館からも近い、三楽公園も今回の整備対象なわけですけど、その整備プランなどを見て、どう思われました？

阿：自分が小さい頃に学校をサボっていたので、あ、いいな、こんな公園があつたらって。

熊：え、サボって、どこにいったんですか？

阿：よく考えたら、公園だなんて。

熊：いつくらいの頃ですか？

阿：中学生。個人個人はいいんですよ。集団になると何か得体の知れないでかい意識がバーンって、「無理！」みたいな。おばあちゃんが近所に住んでたので、家に確認しに来るんですよ、「ちゃん行ったか」って。だから、息を潜めるか、公園に行ってウロウロする。

熊：そのウロウロ時間も濃厚ですね。

阿：「みんなよくやって偉いわねっ」って思いながら、「ちゃんとやるって大変」って。もっとシリアスだったと思うんですけど、そのときはね。

熊：今、振り返っているから言えること。

阿：そうそう。でも、なんか学校はあんまり行ってなかったんですけど、年取って、全然違うところでそんときの同級生とかとばったり再会して、趣味でやっているケータリングとかも毎回手伝ってもらったりして、人生のボーナスタイムが来た、みたいになりました。

熊：良いですね。まあ、趣味のケータリングでなかなかゴールドマン・サックスとかに出向く機会もないと思うんで、趣味とは何かということもありますけど。それで言うと、障害がある子どもたちの保護者の方々が、みんなおっしゃるのが、外食に行けないということだったんですね。それで思っちゃったんですけど、インクルーシブ化を検討している三楽公園の隣には、立派な家屋の集会所がありますけど、つまり、公園で遊んだあと、その集会所に阿部さんのケータリングを頼んで食事をするという、なんか幸せな地元体験ができるんじゃないかと。

阿：全然やりますけど。

熊：その集会所って、トイレも誰でもトイレになっているし、建物も老舗旅館みたいな風情があるし、障子をあけると日本庭園の眺めが広がるという、なんと言うか、惨めな気持ちにもならないし、貸し切れるから大きな声が出ても大丈夫だし、大広間もあるから横にもなれる、医療的ケアをするスペースもつくれる、みたいな。阿部さんのその趣味のケータリングも含めて、地元で発揮されるべき資源というか可能性というものが、まだまだある気がするんですよね。お金をたくさん掛ける整備ではなくって、そういう地域資源を改めて見直して紐づけていくようなことができればって。

小：集会所が使えるということを知らない人も多いんですよね。

熊：ですよ。集会所って、営利活動はNGなんでしたっけ？

小：どう整理するかですね、可能性がゼロではないと思います。

熊：今ちょっと考えているのが、公共性とか公益性というものを、誰がどのように担保し続けられるんだろうかっていうことで、例えば、公益的な場所でお金を稼いじゃいけませんってなると、その公益的な場所で公益的な活動をする人は、公的に助成金とかを獲得した人やお金に余裕がある人だけになるなとは思ったんです。例えば、阿部さんみたいに、お金だけが欲しいわけじゃないけど、とはいえやっぱり生活もしていかなきゃいけない、けども、なんか自分の腹落ちしないことはやりたくないっていうか、やれないという人たちが集まり、個人がその個人の信念のまま、公益性を担保するってことっていうのは、あり得る状況だと思っているんですね。ただ、制度や社会習慣がそこに追いついていない。それは、公園にグローバルチェーンのカフェを誘致してバンザイ！とかじゃない意味での、民間と行政のより良い連携を考える議論にはなってくるだろうなと。環境楽習館に、阿部さんのような人

が居てくれているということの意味や価値を捉えた時に、同じようにして、公園にそのような方が居続けられる仕組みはいかにして可能か？、という話にはなってくる気もしています。

阿：なんか自己犠牲になりすぎない設計が前提としてあるっていうのが、やる側も安心できるので。なんか「うわー大変」っていうのと、「楽しい！」っていうのの塩梅がね、ちゃんと自分の中で帳尻が合うようにできて、それをちゃんと公的なところがいいよって言うってくれるってすごいデカくて。やっぱ、個人でやってると続かないけど、なんかバックアップがあるので、本当に安心してできるなと思います。

熊：うん、それと、バックアップって、もちろん資金的なものもありつつ、とはいえその資金になるもの、つまり税金の限界もあるじゃないですか。

阿：そうですね。

熊：もちろん、税という形で、社会の中で富の再配分をして、あるところから必要なところへ資金を流していくことは必要だと思っていて、最近思うのは、それと同時に「これは意味や意義がある」っていうことを公的に見出ししていくことの必要性なんですね。資金的な根拠がないと頑張りづらいですけど、同時に、もちろん個々の信念でやっていることだとしても「お前の活動は意味がない」となっても頑張れない。

阿：なるほど。

熊：「まだ珍しい事例かもしれないけど、これにはこういう意味や意義があるよね」って語る力っていうものを、地域社会が失いつつあると思っていて、なのでplay hereでは、こうやってやたらと語り合うということをしている気がします。地域社会でボキャブラリーをみんなで育んでいくということをしないとなって。ヒアリングの聞き手でありながら、阿部さんに触発されてたくさん話しをして、それを聞いてもらっているという。

阿：全然、良いですよ。

熊：ありがとうございます。

言葉の積み重ねで、人もプロジェクトもできあがる

熊：机の上に置いてある書籍が、ずっと、気になっていたんですけども。

阿：なんか、なんとなく今回のヒアリングにつながるかもしれないと思って。キーワードを仕入れるために、本を買うことが多くて、でも5ページぐらい読んで、はい次みたいな読み方してて、多分普通に読書する人からするとお前は邪道だなみたいな感じなんですけど、たまにピンとくる部分があったりするので。

熊：それこそボキャブラリーを豊かにしていく行為ですよ。なんとなく、表紙を味わうだけでも、ぐっとくるものがありますね。例えば、「ペアレントネーション～親と保護者だけに子育てを押し付けない社会の作り方」もまさにですし。

阿：うちは子育てしたかった側なんですけどできないから、代わりにできることがあったらなんでもやるよって思っているわけです。

熊：まさにみんなで子育てできる社会が望ましいなと思います。次が「遊びと利他」で、これは帯も読み上げたくなるもので「コスパと管理から自由になるために、公園と遊具から考える！」っていう。

阿：これは、もう、みんなに配布したいなと思って。ひと目見て、わっ、これ、我々の本だ！と思って。

熊：コスパが良い、管理がしやすいというのが、良い公園の定義ではないというね。3冊目が、「アルベール・カミュ 生きることへの愛」。

阿：本の裏側に書いてある言葉が良くて。

熊：「それぞれの世代はおそらく世界を作り直すことが自分たちの義務であると信じています。しかし、私の世代は世界を作り直すことはあるまいと知っています。ただ、その任務はもっと大きなものでしょう。それは世界が崩壊するのを防ぐことなのです」、と。

阿：それを読んで、これは買わなきゃって思ったんですよ。変えれなくても、防ぐ程度の防波堤にはなろうと思って。

熊：なるほど。変えられたかどうかだけで考えないモノサシは確かに必要な気がしています。

阿：みんなでせき止めましょ。

熊：防波堤という言葉が胸に置くだけで、またインスピレーションが広がりますね。

阿：いろんな言葉の積み重ねで人格形成されると思ってるんで、インストール、インストールって。

熊：一人の人格もそうですし、プロジェクトも、そういった言葉の積み重ねで出来上がっていくと思います。防波堤で言ったら、公園がそうであるというのもありますよね。

阿：自分が中学の時に公園がなかったら、多分、今、生きてないかも。それにも増して、今って、本当にお金を払わないとどこにも居られないじゃないですか。駅前なんか特にそうだし、だからやっぱ、何もしなくていい場所っていうのは本当に誰にとっても大事だと思って。ちょっと外出ると、何かにつけてただ居るだけでお金がかかるから本当に嫌だなと思って、みんな「モモ」読んでよって。

熊：ミヒヤエル・エンデのね。まさに「コスパと管理」が強まっていくことの様子が童話的に描かれていますよね。コスパと管理を求めれば求めるほどに、大切なものを気が付かないうちに失っているという。

阿：それが今じゃ童話じゃなくて、現実の世界で。なんだろう、お金がないと存在意義がない客体として扱われている腹立たしさみたいなの。なんか出掛ける度に、「ここに居ていいよ」という承認を、現金と交換している感じがあって、それはある意味買い物の楽しさでもあるんですけど、なんかやっぱり、お金がないときだったらしんど

い。子どもって基本的にはそもそもそこにアクセスできないので、こういう「何してもいいし、何もしなくてもいいし、お金もあれば、ちょっとおやつぐらいは買えるけど、でも必要以上は別にいいよ」みたいな場所であり続けるのは大事だよなって。大人は多少選べますけど、子どもは選べないから本当に肝に銘じておこうって。だから、今、そこで吊り下げている干し柿だって、美味しいかわかんないけど、「そこで取れた柿だし、タダで食べていいよ」って。

熊：貨幣経済と自給自足を行き来して。

阿：春先には、そこに生えているフキを茹でて子どもたちと食べてます。金柑も実っているから、甘露煮でもつくろうかなって。

熊：袋菓子よりも、断然、健康的ですし、嬉しい。

阿：なんかまとまりのない話でしたけど、大丈夫ですかね。

熊：いや、子どもたちを迎え入れ続けていくという営みの大切さをずっと感じていました。それが、公園にも必要だよなとも。

阿：ねえ。



倉石篤さん

地域の植栽から考える、これからのインフラ

取材日：2024年11月21日



緑を大切にしてきた街の樹はいろんな形をしている

倉：小金井は植物が大きくて、緑が濃いですよ。

小：「緑が濃い」って言うんですね。

熊：え、それって、いろんな地域の植栽管理の仕事をしているから感じとることができることですよね。他の街と比べても、小金井は緑が多いということですか？

倉：多いし、植物が大きいですよ。

熊：へー。

倉：他の地域だと、もともと樹が生えていたような場所を造成して土地をならしてから、建物をつくる開発をしているから、樹が大きくないし、道路や敷地のへりなどの境目に樹が生えていないんですよ。多分、小金井は、緑を

残したまま、隙間隙間で開発をされてきたんじゃないかな。だから、敷地の境界に生えている大きな樹がすごいたくさんあるんですよ。

熊：えー、言われてみれば、そんな気もしてきます。その当時の、この土地の人たちの心構えが伺い知れて非常に興味深いです。

倉：広場の中に大きい木が1本だけある広場が、結構あるじゃないですか。

小：既存の樹木を意識的に残して、周りを開発しているんですよね。

熊：武蔵小金井駅前の広場に、立派なメタセコイヤが残されていますけど、維持管理という側面では大変だと思いますが、それを地域のプライドだったり、暮らがいというものに繋げていくようなことができたらな、とは感じています。大体、そもそも、この辺りは、武蔵野の森だったわけですね。

倉：そうですね。それが切り拓かれて出来ている街ですよ。都市部って全部開発した後に、緑を増やさなきゃいけないということで、改めて植えたところが多いんですよ。だから、一回、植物を無くした後に、また植えていることになる。

熊：あー、面白いですね。一方で、この地域では、根こそぎ植物を無くすということではなく、むしろ人間が隙間を縫うように開発をしていたという。

倉：都市部では、武蔵野の森って言って、逆にこっちの森を真似たものをそのまま移設するっていうのがちょっと昔から流行ってて。植木畑で育った樹って、まっすぐ生えて同じ形になっていくんですけど、こっちって、自然の形が残ってて、斜めに生えていたり、曲がっていたり、片側だけに枝が残っていたりする。だから、そういう風景をつくりたいっていう声も多いんですね。

熊：うわー、なるほど、非常に重要な示唆がそこにあるような気がします。

地元の公園の管理を誰がどうしていくべきか？という問い

熊：その土地の緑のことをどう考えていくか？ということは、やっぱりかなり深い話になってくるなと思いました。で、植物も生き物ですから当然ケアが必要なわけですけど、誰がそのケアを担うか？というのも同じように深い話ではあると思っているんですよ。現在の社会状況で言うと、公園の指定管理者制度がどんどん広がってきているわけですよ。ここ小金井市でも、まさにすごい小さな公園もひっくるめて、全部の公園を一元的に民間事業者が管理する形を取り始めたところだと思います。そこに、倉石さんが所属されている日比谷アメニスさんが担い手としていてくれているという。一元管理ということで、効率化や合理化が計れるよねっていうことで、予算が潤沢にあるわけではない。効率化や合理化を進めていきながら、同時に、地域らしさを磨いたり、地元地域との連携を深めていく。そういうことがどこでも求められ始めてはいますが、言うは易しというもので、その知見を社会的に醸成していく必要があるんだろうな、と感じています。日比谷アメニスさんが、小金井市全域の公園の指定管理を始めたのは、ここ半年くらいですよ？

倉：そうですね。

熊：管理している公園の数で言うと、どのくらいなんでしたっけ？

倉：今、221ですね。

熊：うわー、かなりの規模ですね。たまに報道もされていますが、倒木や枝の落下による事故もあるにはありますから、そういった事故防止も仕事の範疇に入ってくるわけですね。

倉：はい、基本はもう見回りですね。そして、掃除。

熊：221もあつたら、そういった基本的なメンテナンスだけで、かなり時間がかかりますよね。

倉：行政だけでやっていたら、こまめに回ることもなかなか難しいわけですから、もう見て回るのが主みたいにはなりますね。倒れたり落ちてきそうな樹や枝がないか、公園にゴミが落ちてないか、フェンスが倒れそうじゃないかとか、挙げていくとたくさんあるんですけど。

熊：そうですね。ここ数年「グリーンインフラ」と言う言葉が出てきているじゃないですか。インフラというと、社会の基盤として当然の如くあるもんだから、普段はあまり感謝されないんだけど、なにかトラブルがあると怒られるという宿命を背負っているわけですけど、蛇口をひねれば水が出てくるという水道インフラというもの、日々のメンテナンスの賜物なわけですね。電気やガスなどのエネルギーや道路もそうだと思うんですよ。そして、グリーンインフラと言うように、地域の公園や植物のメンテナンスやケアも同じようなことだよなと思うんです。

倉：うん、うん。

挨拶が持つ、インフラの性質

熊：で、ここからplay hereの話に展開していくんですけど、行政の仕事というのは、基本的にインフラ的な領域を豊かにしていくようなことであるとは考えているんですね。で、じゃあ、インフラって何か？って言うと、「モノ」が不足していた時代は、住宅や電気や水道などを含めたモノが行き届くようなことが一つの公共的なインフラ事業だったと思うんですけど、それはそれでありつつも、何かに参加する「機会」だったり、人と人との繋がりという「関係」ということが、公共的なインフラ事業に求められて久しいと思うんですね。

倉：はい、はい。

熊：「公園を、障害のあるなしにも関わらず誰もが自由に遊べる場所にもっとしていききたい」というこのプロジェクトの話に置き換えると、いわゆるインクルーシブ遊具という「モノ」を設置して終わりではなく、地域社会に参加する「機会」だったり、いろんな人との「関係」というところも豊かにしていかないといけない。

倉：そうですね。

熊：で、ですね、倉石さんたちに、「じゃあ、ということで新しくインクルーシブ社会の実現に向けたイベントなどの新しい業務をバンバン実施してください」というオーダーを投げるのも、キツイはずなんです。ただ、その221の公園の見回りをしている時に、障害のある方々を見かけたら気にかけて欲しい。とはいえ、障害と一口に言っても、色々なコンディションもありますし、一目見て分かるということだけでもないですし、そもそも、挨拶をするとかしないとかに、障害の有無は関係ないので、とにかく、挨拶やちょっとした会話が生まれている状況がスタートでもあるし、同時に、ある意味目指すべきゴールだなとも感じるんですね。まずは、そういう「インフラとしての挨拶」みたいなところが担保されるだけでも、結構、状況が変わるんじゃないかと思うんです。と言うのも、当事者の方々が口を揃えておっしゃるのが、公園が「自分たちが居て良いと思えない」ということなんです。「声をかけてもらえるだけで、結構行きやすくなる」とも。「で、具体的にどうしたら良いの？」というところは、その人間関係の基盤さえあれば、あとはまあ、みんなで考えたり、知見を深めていけば良いなって。どうですかねえ。新規業務として捉えるよりも、基礎業務の延長線上で捉えていけないか？という話なんです。

倉：それは全然大丈夫ですね。もともと、我々もスタッフには挨拶をするように言ってますし、実際、やっぱりユニフォーム着て地域を回っていると、いろんな話を聞くことになります。それに、「ちょっと、これが気になる」みたいなコミュニケーションがとれていれば、大きなアクシデントや、それこそ苦情にまで発展する前に解決することができるんですよね。公園の見回りに行くと全然帰ってこれない、顔が知られているスタッフもいます。

熊：おー。

公園を見回りしてくれているという営みが持つ、インフラの性質

熊：社員の労働力や時間をどこにどのように当てるのかというのは、業務管理的なお立場からするといろいろとあろうかと思うんですが、その「雑談も含めて話に花が咲いて、外回りから帰ってこれない」というのは、好ましいし、可能性がある状況だなと感じます。「公民館のしあさって」という地域の自治や社会教育のあり方を探求する書籍を編集執筆したんですけど、そのときの取材で体感したんですが、活躍されている公民館職員と一緒に街を歩くと、あっちこっちで話しかけられて、数百メートル進むだけでも、ものすごい時間がかかる。でも、そういう立ち話や井戸端会議のような機会こそが重要であろうという気もしていました。

倉：話ができる人がいるだけでも、だいぶ助かると思うので、多分それと同じですよ、きっと。

熊：ですね。もっと言うと「話に花が咲いた雑談」を情報源としてしっかり吸い上げると言うか受け止めて、そこから何かを見出して、実際のアクションにつなげるというサイクルを回していくということが、その両輪として重要なはずなんです。それができていれば、「地域の人と雑談も含めた会話をする」ということが、仕事の一環として位置づけしやすくなる。逆に考えると、そのサイクルが回らないと、極端な話、それが「仕事をさぼっている」ということになりかねない。好循環の芽が既に生まれているのであれば、それを広げて深めていけば良いだけと言っちゃえるきもしてます。やっぱり「地域住民の話を聞こう」という公的な機会を設定することも大切ではあるんですが、偶然というか非公式的な、公園や路上での会話からわかることは結構多い気がするんですよね。となると、もちろん植栽管理という実業務を邪魔しすぎないという常識を踏まえつつ、「ジャンパーとか着て作業をしているなかでも話しかけたりしてもOK」というスタンスをうまいこと情報発信していけば良いんだなという気になってくるんですよね。

倉：市内を回ってる中でどうしても何度も顔を合わせてるから、だんだん何か話すようになってきたりとかもしますしね。

熊：あー、そういうことだと思います。そういう顔見知り生まれる習慣が地域にぽこぽこ生まれる状況が理想だな、と。

倉：そういう方から、逆にいろいろと教えて頂くことがあるんですよね。

熊：素敵です。いわゆる「市民参加型のグリーンインフラの維持や発展」みたいな話っていうのは、今の社会的にも、そういう方向でことは動いてるし、議論が活発化しつつあるように思います。なので、あえて大げさに言っちゃえば、「地域のグリーンや、公民連携に関する最先端の挑戦を、小金井でしている」と捉えちゃったほうが、見通しがつくこともあるよなと感じています。

地域の共有地を共につくるといこと

熊：「市民参加型のグリーンインフラの維持や発展」という話を、具体的に展開するんですが、栗山公園の池が、今、汲み取りのポンプが故障したということもあり、枯れている面積が多い上に、安全管理のために立入禁止のガムテープが張り巡らされていて、見た目としては非常にさみしい感じになっているんです。で、一方で、**play here**の話にも接続するんですが、当事者の方々にヒアリングやアンケートをしたところ、「水遊びをしたい」という声が非常に多い。ということもあり、当初、新しく水遊び場の整備を検討したんですが、数千万のコストがかかる上に、その維持管理費もかなり発生するということがわかり、断念した経緯があります。そうした時に、既にある池をしっかりとメンテナンスして、障害のある方も親しめるような水辺空間にしていくことが、そもそものこの公園の魅力を維持向上させていくことなんじゃないかとも感じたんです。現状は、雨水が溜まったりして、たまたま鴨が居着いてくれたというものはあるんですが、もう少し動植物にとって居心地の良い状況ができれば、それこそトンボなんかが育つコンディションに持っていければ、夏の蚊対策にもなるであろうという見込みもあります。あそこは、夏は蚊が結構スゴイんです。で、そのビオトープ化というプロセスそのものを、障害がある方々、近隣の方々、**play here**で開催したイベント「栗山公園のんびりデー」にも来てくれた不登校の中学生も含めて、みんなで取り組めたら楽しいだろうなって。で、ですね、「市民参加型のグリーンインフラの維持や発展」ならぬ、「市民参加型のビオトープづくり」なるものを、その立ち上げからメンテナンスまで、その全部を、「小金井市の公園を網羅的に管理されているんだから、日比谷アメニスさんお願いします」とするの、無理があるじゃないですか。とはいえ、市民側だけだと不安もある。それに、なにか市内に面的に広げていく意義や意味を見出させたらそうすべきでもある。となると、市民側と日比谷アメニスさんという民間と小金井市という行政が、どんな形で手を組めたら良いんだろう？って。お互いのことを、知らぬ存ぜぬで、バラバラとしてしまうのも良くないというか、もったいないじゃないですか。すみません、一息でたくさん喋っちゃったんですが、どうですかね。

倉：いえ、ビオトープに関わらず、どなたか熱い想いを持ってリーダーシップをとってくださる方がいればなんとなかなだろうって。ただ、そういった方を探すのが我々は外から来たから難しくて、かといって自分たちで育てるのも難しくて。指定管理だと期間限定なので、短いと5年で終わってしまう。なので、我々が始めてしまうというよりは、市民の中からそういう声が上がって、どなたか続けられる熱い想いを持った方がいれば、サポートするのは全然やぶさかではないです。

熊：おー、心強い。今日の議論の本質は多分そこだと思っていて、地域側だけだとできないことが、もちろんある。そこを日比谷アメニスさんが担保する。同時に、日比谷アメニスさんだけではできないことがあるなら、それを地域側が担保する。っていう、健康な関係をどうやったら作れるのか？というのを考えているんですね。「環境楽習館」で働く阿部さんと、話してきたんですけど、まさに地域で活動をしていた阿部さんを、もちろんそれだけが理由ではないかと思いますが、日比谷アメニスさんが雇い入れることで、館長というポジションを得て、地域のネットワークを醸成しながら素敵に動いている。まさに理想的なあり方だなとは感じるんですね。で、そういう方を、地域側のコーディネーションが無い状態で、日比谷アメニスさんのような民間が地元で発掘していくのは結構大変だとは思うんですね。

倉：うん、外から来た我々には到底見つけられないですね。

熊：そうですね。外から来た人に見つけなさいっていうふうな仕様にするのもちよっときつい気がしてるんですよ。だからまあ、持ちつ持たれつで、「共に、良い地域にしていこうね」ということを目指していくためには、どんな仕組みが望ましいか？ということが問われている状況ではあるので、環境楽習館も含めて、地域内外の事例を参考にしつつ、**play here**でその実績を重ねていければと考えています。阿部さんのケースは、ほんと大切にすべきだし、注目すべきことだと思います。

倉：うちも結構手広く指定管理をやらせていただいているんですけども、阿部みたいな、あそこまで地域に密着した人材は会社で多分初めてじゃないかな。

熊：指定管理にまつわる予算というものに上限はあるし、そもそも、その財源が潤沢ではないので、そこはどうしても制度上、無理がある気がするんですね。一方で、副業的に地域で少しでも稼げるような道を担保していくという考え方もあると思うんですね。公園にグローバルチェーンのカフェを誘致して「稼げる公園です」とすると、それが地域経済を活性化しているのか？という疑念が出てくるんですが、地域のいろんな人のスモールビジネスを後押ししていくことには、結構可能性はあるはず、とは思うんです。具体的に言うと、阿部さんであれば、ケータリングなどの食の仕事を個人的にもされているじゃないですか。例えば、休館日の環境楽習館で、貸し切りパーティができるようにしてあげるというスモールビジネスのメニューが立ち上がることで、阿部さんの雇用条件にエクストラが生じる、みたいなことだって議論できる気がするんですね。実際に、**play here**でも、当事者の方から「外食に行きたくても行けない」という声が多く寄せられています。ニーズと、それを叶えることができる人と場所のマッチングの精度を、地域で上げていくことはもっとできるような気もしています。

倉：なるほど。今までは、こちらがお願いした業務をやってもらおうということが、働き方だったわけですけど、阿部はいろんなことができるので、お願いした以上のことができるし、お願いをしていること以外のこともやるっていうところを、どう整理していくのが良いのかっていうところは、課題といえば課題ですね。

熊：阿部さんがアクセルを踏める状況というのは、地域としては望ましいわけですが、それが阿部さん個人と、日比谷アメニスさんという会社と、管轄する行政それぞれのメリットとして受け止められるような仕組みとはどのようなものか？ということ、かなり重要な議論な気がします。良いことがたくさん起こりつつある現場だからこそ、そのあたりの環境や仕組みの構築ということは同時に検討を進めていくべきだろうなって。そのあたりの議論、引き続きまたさせて頂いても良いでしょうか。

倉：もちろん。



星郁子さん

それぞれの経験が持ち寄られる地域を目指して

取材日：2024年12月9日



なにが叶えば、話を聞けたと言えるのか

星：うちの息子は支援学校の小学2年生なんですけれども、そのPTA会員向けにplay hereのチラシが配られて、一気に読めなかったんですけど、インタビュー記事もじっくり読んでたんですね。「ただインクルーシブ公園をつくればオッケー」みたいな感じではないところに共感して、こういう活動もあるんだって凄く感動して。

熊：嬉しいです。

星：周りのお母さんも読んで、「分かり過ぎて、涙が出て読み進められない」という方もいらっしゃったんですね。そういう感動の熱が冷めやらないうちに、インタビュー記事にも登場されている冨永さんが、小金井市役所の小林さんを連れてきてくれて。

熊：おお。

星：富永さんは学校の先輩ママでもあるので、この1年、よく顔を合わせることがあって、その富永さんが「低学年のお母さんって、小学校に入学したからやれやれって思っている頃だと思うけど、今のうちに将来のことを見据えたり、学年や地域に関係なくネットワークを広げておくといいと思うよ」っておっしゃっていたんですよ。

熊：息をつく間もなくって感じですが、リアルです。

星：富永さんは海外で子育てをされて、そこでご自身でコミュニティをつくって、それによって救われたお母さんがいるというご経験があるので、そういうことをここでもやりましょうって。

熊：おお。

星：でも、別に大げさに「来て！来て！」ってやるよりも、自分たちの知っている範囲のお母さんに声をかけて、ちょっと集まって雑談ができればいいよねっていう会なんですね。そこで思ったのは、そういう場があって普段から困りごとなどを取りまとめて、何かの機会があったときに、「わたしたちは、こういうふうに思ってるんです」ってすぐ出せるとか、そういうことができたらどうなのかなってことなんですね。

熊：おお。長くなっちゃうかもしれないんですけど、ここ最近考えていたこととシンクロしているので、ちょっとお話をさせてください。まず、えっと、何か困り事があるとして、それを解決しようとした場合に、その困っている当事者の方の存在に意識を向けないと、その解決が叶わないというのは、ごく当然なことだと思うんですね。

星：はい。

熊：でも、その当然のことが長らく無視されてきた。だからこそ、2006年に国連で採択された「障害者の権利に関する条約」のキャッチフレーズが、「私たちのことを私たち抜きで決めないで（Nothing About us without us）」だったわけですし、そのフレーズであることの意味や意義が非常にあったんだろうなと感じています。そして、その重要性は今でも全く色褪せてないとも。

星：ええ。

熊：で、そうした時に、重要だなと思うのは、「本音のようなものが、そう簡単に語られるとは思ってはいけない」ということだと感じているんですね。「それでは、今から本音トークをしましょう」って、いきなり言われても、胸の内を語るのは結構つらいじゃないですか。それと、困りごとの多くが、「本人がその困りごとの渦中にいるということを認識しづらい」という側面も考えておいたほうが良いとも思っています。

星：はい。

熊：何が言いたいかといいますと、だからこそ、今おっしゃったような、日常的な井戸端会議のような雑談の機会は非常に大切なんだろうな、と強く思うんです。行政施策である今回のプロジェクトを推進する立場から言えば、アンケートを取るだけだったり、短時間のヒアリングだけだったりすると、こぼれ落ちることがたくさんあるって感じているんですね。もっと言うと、「意見や話を聞きました」という証拠残しのためにだけ使われる参加型ワークショップのようなものはしっちゃいけないとも考えているんです。ただ、じゃあ、どうしたら良いんだろうか？

ていうのは、絶対的な正解はないかと思うんですが、地域の日常的な会話を育んでいくということと、そこと行政施策をつなげていくことが、かなり重要だろうなという感覚があります。なので、まさにまさにです。

「役所仕事」が褒め言葉になる日は来るのか

熊：「**play here**の取り組みに感動した」ということをおっしゃって頂いて、励みになるし、こちらが感動するんですが、具体的にどういうポイントにグッと来たというのはあるんでしょうか？

星：やっぱり、「**The行政**」みたいな感じではないところ。「公園つくって終わりです」という役所仕事じゃないところ。そういうところですかね。

熊：それは、これは本気なんだなって感じる事ができたということですか？

星：そうですね。

熊：本気だからこそ、話を聞く姿勢があるんだなとも感じ取れて、実情を伝えたくもなるという。

星：ええ。

熊：「役所仕事」という言葉って、褒め言葉としてはあまり使われませんよね。それって、「仕事におけるプロジェクトや、言っちゃえば自分自身というものを変える気がない」というニュアンスだよなって思っているんですね。

星：そう、結論や答えありき。

熊：小金井市役所の小林さんとも良く話をしているんですが、結論ありきで、プロジェクトに変更を加えるつもりがないのに、当事者の方々の話を伺うのは失礼だよねって。なので、こうやってヒアリングを重ねながら、結構ダイナミックにプロジェクトのあり方を軌道修正したり、検証項目を増やしたりしていますし、自分たち自身が深まっている感覚にもなっています。

星：そういうことも、インビュー記事で書かれてましたよね。それも良くなって思っていました。

熊：ああ、ありがとうございます。

星：それこそ、いろんなママの声とかを取りまとめてメールしようかと思ったぐらいです。

熊：めっちゃ嬉しいです。というのも、やっぱりジレンマみたいなのがあって、こうやって、ゆっくりじっくりお話をお聞きしたり議論したりするという機会を増やしていきたいんですが、それはそれで使える時間の限界はあるわけですね。で、**play here**の仕事は果たしてどういう仕事なのか？ということを考えると、当事者や地域の方々の代弁をしたり代理をすることだとは思っているんです。公共的な仕事の本質はそこだよな、と。となると、良い仕事ができたということの尺度は、ちゃんと代弁ができていたり、代理ができていますか？また、それ以上のことができたか？ということになるわけですけど、ただそれはそもそも、めちゃくちゃ難しいことでもあるはずなんで

す。お前に代弁して欲しくないみたいな声だって当然あるでしょうし。とはいえと言うか、だからこそ、そうやって、いろんなところから声が届く状況が訪れるというのは、とても有り難いし必要なことだと感じています。

星：そういうことをしたいなって、勝手に思っていました。

熊：めっちゃ嬉しいです。星さんの後ろ側に何人もの保護者の方や子どもたちがいるということになるじゃないですか。本人じゃない限り、完全な代理や代弁は不可能ではあるんですが、少なくとも、そういうことを目指して考えていかないと、公共性というものは担保されないと思うんですよね。その上で、予算の上限はあるわけですから、いろんな判断基準やそのプロセスもできるだけ全て公開して、やれることや、やれないこともしっかり共有していく。なんかそういうこととして、**play here**を進めたかったんですよね。そうでもしないと、代理や代弁をして良いという存在になれないと思うんですよね。

簡単に訪れる絶望

星：個人的な話なんですけど。

熊：個人的な話の積み重ねが、社会的な話になるので、ご無理ない範囲でお聞きしたいです。

星：まだ自分の子どもの障害っていうことにピンときてなかったり、そもそもこれって障害なの？みたいな、あやふやな時期に、幼稚園のプレに行った時に、一番泣きそうになって。

熊：泣きそうになる。

星：自分の子どもと、他の子どもとの違いが凄すぎて、このぐらいの年の子って、こんなにできるんだと思って。「お母さんと一緒にお絵かきとかやってみましょう」ってなると、みんなワーンとできるわけですよね。でも、うちの息子はもう全然違うところに行って、椅子の下に潜ったり、もう、ぐるぐるぐるぐるってなったり。その時が初めて。

熊：初めて。

星：世に言う定型発達の子と自分の子の違いっていうのを初めて知って、もうちょっとその場から居なくなりたいっていう。ただ、児童発達支援センターに行ったら「無理しなくていいから」って言われて、すごく安堵できたんですね。なので、今、通っている支援学校でも、幼稚園とか保育園から来ましたっていう人と、療育園から来ましたっていう人は、やっぱり違ってくるんですね。

熊：療育園。

星：発達支援のための専門家がいますよね。だから、そういう先生方だったり、お母さん同士だったりのネットワークや情報交換があるところからの小学校進学なので、「もう、わたし無理」みたいな感じの方は少なめなんです。でもやっぱり、幼稚園とか保育園から来たお母さんというのは...

熊：ギリギリであると。

星：例えばお遊戯会のようなものがあると、どうしたって右へ倣えでみんな同じふうにはやらないといけないから、その子も頑張ってるんだけど、一生懸命やっても他の子と違って来る。これも、直接お母さんから聞いた話ですけども、運動会にしても、もう一番最後でチョロチョロチョロと頑張っている我が子に対して「頑張れ頑張れ」って応援されるのも、それが辛いつて。もう何も言わないでつて。うちの子だけがなんかもう晒されて、もうほっといてくれ、もう頑張ってるからつて。どうしてもそうなるつて。私もそういうのがあったし、幼稚園や保育園に通わせていた方はさらに押しつぶされそうな想いをしながらだったりするんですよね。ママさんで、なんかもう疲れすぎちゃつて、自転車の後ろに子どもを乗せながら、このままトラックとかにぶつかった方が楽なんじゃないかってなつていた方もいて。そのママはすごくユニークな方で、そのときのことを「棺桶時代」つて。いやあ、あのときは方っぽの足を突っ込んでたねつて。

熊：本当に、今でこそ、やつと言えることな気がします。

星：そのときは、もう将来は真っ暗じゃんと思えない。

熊：光が見えない絶望というものが、気を張らないと簡単に訪れるけど、一人で気を張り続けることは、限りなく不可能。

星：ですね。年を重ねればこういうときつてこうしたらいいよねつていう、その知識が、親も少なからずついてくるので、子どもがワーッと癪癪になつても、こうしたらいいんじゃないとか、知恵があるんですけど、やっぱり小さければ小さいほど情報もないし、経験もないし、ネットワークもない。だから本当に無理みたいな感じになつちゃうんじゃないかなつて。

会話を失わないために、相互理解の糸口を失わないために

熊：雑な質問になつちゃうんですが、どうしたら良いんですかね。絶望がもの凄いい身近にある時に、せめてもの糸口みたいなことが少しでも見つければなつて。

星：やっぱりもうね、会話が大切だとすごく思つてて。

熊：会話。

星：同じ境遇のママさんとかと話してるからこそ、あるある話ができる会話。これが普通の幼稚園に行つてママさんだと「？」になつちゃうんですよね。同じ境遇のママさんだと「そうだよね、そうだよね。そんなことできないよね、そのうちできるよね」なんだけど、そうじゃないと「そんなこともできないの？」みたいになつちゃう。言われたことはないですけど…。

熊：話題を出す前に、そういうリアクションが返される未来が見えて、話を持ち出すことが不可能になる、と。言われたことがないにしても、似たような経験が蓄積されているわけですよね。

星：まあ、そういうことに一つずつ傷ついてきているんですよね。仕方がないっちゃ仕方がないんですけども。

熊：うーん。

星：とはいえ、そういう深い悲しみにあるお母さんに対して、同じ境遇の私が「もう大丈夫だよ」って言っても、なんかもう、目が上の空だったり…。

熊：そういう言葉を受け取るコンディションにないというか、気持ちを分かち合う機会がなさ過ぎると、分かち合えると思うことができないというか。

星：うん、同じ環境があればみんながハッピーかと言われると、そうとも言い切れないんですけど、でも、やっぱり発散するところ、聞いてくれるところ、教えてくれるところがないと余計に悪い方向にいつちゃいがちな感じがしますから、できるだけ早くそういう機会があればなって。これは、今、小学2年生の子のお母さんに聞いた話なんですけど、子どもが外で乱れちゃって、こう、よしよしってなだめて抱っこかしていると、わざと聞こえるように「あら、あんなに大きい子が抱っこしてもらっちゃって」って、全然見ず知らずの人に嫌味を言われたりとか。

熊：それも、心が削られますね。

星：できるだけ溜め込まないように機会をつくっておかないとですよ。目が見えない方が困っている時に、支援をしようとしたとしても、手や服を急に引っ張ると、逆に不安にさせてしまうというのがあるじゃないですか。一緒に歩くという感じで、肘や肩を持ってもらう方が良いつて。

熊：そうですね。足並みを揃える方が安心して歩ける。

星：例えばうちの子も興奮しちゃうとワーッってなっちゃうので、おかしな子って見られちゃうんですけども、同じ境遇だったり、理解があるお母さんから見ると、「あらあら、楽しいのね」とか「そうだよ、そうだよ、頑張ったよね」とかってなる。そういう、ちょっとわかってもらえる機会があったらいいなっていうふうに思ったんです。

熊：インクルーシブ公園の話をするならば、そういう理解が浸透しない限り、やっぱり公園に行くということのハードルが解消されてないことになるんだろうなと考えています。だから、先ほどの目の不自由な方が困って、いそうな時の声の掛け方が少しずつ広まっているのと同じように、そういった理解が、当たり前になっていく必要があるはずなんですよ。ちょっと深堀りしていく話になっちゃうんですが、同じ「頑張る」という言葉でも、受け取り方が変わってくるということは結構重要な気がしています。先ほどの、保育園の運動会とかで障害がある我が子が「頑張れ、頑張れ」と周りから言われる時のしんどさ。一方で、街なかで、我が子がパニックっぽくなった時に、「頑張ったね」と言われることの救い。その違いはなんなんだろう？って。と、今、喋りながら気がついたんですが、後者は過去形だから、常に既に、頑張っているということが前提になっているんですね。で、実際にそうしないと、生きていけない、生活がまもらない。にも関わらず、「頑張れ」と言われると、「もう、ギリギリになるまで頑張っている、ずっと」と返したくなる。

星：うん。なんででしょうね、療育園でも「頑張れ、頑張れ」って言うんですけど、それって、もう「走っているだけで、そこに居てくれるだけで天才」という感じ。

熊：ああ。そういう、そもそもの存在の肯定感というものは障害の有無にも関係なく、すべての子どもたちが感知できる環境が望ましいはずだと思います。きっと、先程おっしゃっていた「右へ倣えでみんな同じふうにはやらなきゃいけない」という環境そのものから見直していかないといけないんでしょうね。

集まる機会も場所も必要

熊：会話の大切さというものをとおっしゃっていましたが、当事者の方々に集まる機会をつくってみてどうでした？
どんな感じだったんですかね？

星：まあ、自己紹介と、ちょっとこういうことが困っているんですけど、みなさんどうされてます？とかっていう話をして、あとは、子どものことだけで話を終わるより、自分のことも話そうよって、冨永さんが言ってくれて。

熊：あー。

星：それでその冨永さんって、お子さんの学年が上というのもあるんですが、もう学校の中では信望されていて。

熊：いろんな会長やっついていらっしゃいますもんね。

星：その冨永さんが、「こんな失敗しちゃった」ということを結構話してくれたんですね。だから、しっかりしてる冨永さんでさえこういうことがあるんだみたいな感じで、なんかちょっと救われるじゃないですけども、良かったなって思える。あとは、学校の管轄とか、PTAとかじゃなくって、本当に何のくくりもない会だったんで、なんかこういうふうにあつて来て話せるのっていいよねって言ってくれたお母さんもいらっしゃったんで、やっぱり継続して続けていけたらいいなって思っています。

熊：わー。ちなみに、集まる場所はどうされていたんですか？

星：支援学校の近くに、地域の集会場があつて、そこの鍵を管理している方と仲良しになったお母さんがいたんですね。そのお母さんのお子さんも支援学校に入学したし、そこが本当に学校から徒歩1分ぐらいのところなので、子どものお迎えのついでに行けたり、話の途中でも、お迎えに行くから帰るわっていうのもしやすいし、無料で借りられるし。管理されている方からも「どうぞ」って言ってもらえたんですね。

熊：そういう「ついで」ができる場所があると結構変わってきますよね。保護者の方々は、分刻みで行動されている印象があるんですけど、集まる場所の立地で、集まれるかどうかというところが大きく変わっていく気がします。

星：そうなんですよ。

熊：集会所は、僕らも結構注目していて、誰でもトイレに改修されているところもあるので、必要とされている方が利用しやすい状況をつくれなかなって感じています。現状は、申請や鍵の受け渡しは、ちょっと大変なんですよ。そういうところこそ、デジタルが上手く使えたらと思うんですけど、とにかく集まりやすい場所があることで、集まる機会が生まれやすくなるのはありますよね。

星：そうですね。別にかしこまった場所にしたいわけじゃないので、お茶飲みながらお菓子食べながら、世間話ができたら良いですね。一応、支援学校に通ってる保護者限定ってということで、知ってる範囲で声をかけて、出欠席とか全然いらないから、もう来れたら来てくださいって。一人でも来てくれたら良いし、来れなくても良いし。

熊：軽やかというか、気軽さというものを、どうやって担保し続けるかって、本当に大切な気がします。集客というか動員というか、そこだけが目的になってしまうと、どんどん重苦しくなる気がします。精神分析や現象学が専門の村上靖彦さんという方の「すき間の哲学」という書籍を読んでいたら、とある自助会の主催者である発達障害当事者の発言が紹介されていて、とても印象的でした。それは、「参加者がいなくていいっていうよりも、参加者が会場にいなくてもいい。参加者はすでにいるんですよね。社会のどこかに。どこかにいるんですけど、その人たちがたまたま会場にいなかったというだけで。その参加者は、別に会場にいる必要はない」というものだったんですけど、要するに行けないにしても、それがこの社会に「ある」ということで、分かち合える希望というものがある気はするんですよね。

希望を持ち寄ることの必要

熊：play hereって、公共的な仕事なので、やっぱりどこかで仕組みや制度だったりするものに落とし込んでいかないと仕事したことにならないんじゃないかと考えているんですよね。そうでもしないと、小林さんのような熱量のある公務員がいなくなったとたんに、終わってしまう。ただ、仕組みができれば、自動的に回っていくというわけでもないの、結局のところ人の存在も重要。とはいえ、誰かのやる気や思いやりという気持ちに依存する状況は避けたい。と、いろんなジレンマを感じながら、ぐるぐる考えているわけなんですけど、結局のところ、当事者の方々や地域や行政との関係性を広げたり深めたりしつつ、それを一歩ずつ育んでいくことが大切なんだろうなとは感じているんです。そのなかで、より良い地域社会の構想力や実現力をみんなで磨いていくことが大切だよなって。素直に言っちゃえば、それを希望につなげていきたいという。そうじゃないと、先程の話で言うと、絶望の「棺桶時代」にすぐ戻っちゃうじゃないですか。

星：いつでもやってくるというね。

星・熊：なはははははは。

熊：ですよねえ。今、小学校に入って、海で言うと一時の風かもしれないけど、その後の就労とか、自分が先に天国に行った後のこととかを考えると心が荒れてしまうという話も、これまでたくさんお聞きしてきました。

星：たまに考えると不安になりますよね。だから、なんかもう、玄関開けたら棺桶時代。

熊：「玄関開けたら二分でご飯」って、昔のCMがありましたよね。

星・熊：なはははははは。

熊：まさに玄関開けたら棺桶時代なわけですから、ささやかでも良い兆しだったりするものを、みんなで持ち寄って絶やさないようにすることを、意識的に自覚的にやっていかないといけないんじゃないかなって思います。より

良い地域社会の構想力や実現力ということを考えていくと、その土台には「共に生きていくための作法のようなもの」がある気もしているんです。

星：やっぱり理解が促進されていくとねえ。立場が変わればね、障害者に縁がない方からすると、全く関係ない話かもしれないんですけど、やっぱり突き刺さる目線というものがあるかないかだけでも、親としてはかなり変わってくるんですよね。それって、助けてくださいというわけじゃなくて、もう少し優しい目を向けてくださいっていうことで、理解ということまでいかないにしても…。

熊：理解までは求めないというのも、なんか上手く言えませんが、いろいろと感ずるところがあります。地元の公園で言うと、遊んでいる人同士の地元が一緒だったりするわけですし、少なくともそういった作法が育まれる場としての公園の機能ということは、もう少し考えていかないとなんだろうなと思います。

「迷惑をかけてごめんなさい」という気持ちが生まれる根のところ

星：いつもそばにいて「ああ、危ない危ない」みたいな、そういう先回りが、私の中でもう癖がついちゃってたんで、極力、他の子に迷惑かけないために、あんまり混んでる公園には行きたくないとか、休みの日はどうしても混むんで行かないようにするとか、行ったとしても遊具では遊ばないようにして散歩だけするとか。公園で言うと、そういう感覚なんですよ。

熊：play hereっぽく言えば、「あそこで、遊ぼう」「ここで、遊ぼう」という、ある意味当たり前のことが、当たり前ではなく、そう簡単には叶わない。

星：はい。なので、「そういう子どもが居て良いよ」「居たくなる」という場所が地域の中であれば、親としても、そういう先回りをしないで、ちょっと遠巻きに見て見守ってみようかなっていう気持ちがきつと働くんですけど、やっぱりどうしても迷惑かけないようにする必要があります。

熊：気をつけないと「迷惑かけて、ごめんなさい」という感情がデフォルトになってしまうという話は、保護者の方々からたくさんお聞きしています。それって、「棺桶時代」に一直線なコースですよ。この世より、棺桶の中のほうが幸せにすら思えてくる。もうこれ以上は頑張れませんって。常に既に頑張りを続けていますって。

星：そう。

熊：教育の領域では「個別最適化」というキーワードも上がってきていて、みんながみんな同じことをやらないといけないという一斉授業ではないスタイルも模索されてきてはいます。そういうふうに制度だったり社会習慣が変わっていけば、そのような生きづらさも少しずつ是正されていくような気もしています。「足並み揃わなくてごめんなさい」と思わないで済むという。そうあって欲しいんですが、とはいえ、いきなりは変わらない。

星：ええ。

熊：根本的な課題は何なんだろう？ということも考えるんですよね。整体とかで言うと、ほぐした方が良いコリのようなものはどこにあるんだろう？って。多分なんですけど、「人は、迷惑かけちゃいけないし、失敗してもいけない」という人間観をゆるやかにしたほうが良いだろうなと感じています。先程、冨永さんの失敗談のような話を聞

けて良かったというエピソードもありましたが、つまり、そこには、そういう社会のコリをほぐすマッサージ効果もあるよなって思います。

星：そうかもしれません。

熊：僕らって、みんな迷惑をかけたりかけられたり、失敗を許してもらったり許したりとかしながら生きているじゃないですか。それを忘れちゃうとなんか良くない気がするんですよね。

本当に欲しいのは、心のインクルーシブ

熊：話は尽きないし、尽きない方が良くと思っていますし、結局、僕がたくさん喋りまくっているのですが...

星：いえいえ。

熊：一旦の最後の質問として、**play here**というプロジェクトへの期待感のようなものを改めてお聞きしたいです。

星：心のインクルーシブ。それがないと、インクルーシブ公園ができたとしても、「迷惑かけちゃうから」ってなって子どもを連れて行けない。あと、子どもが大きくなると運動量も上がっていくから、囲いがある公園だったらいいんですけど、果てしなくどっかに行っちゃたりして、「やばいどっかに行っちゃった」みたいな感じになるのも怖いです。もちろん、普通の公園よりは絶対利用はしやすいでしょうけれども、やっぱり「インクルーシブ公園ができました」っていうことで、手放して「やった！」とはいかないだろうなって。

熊：おっしゃるとおりに思います。

星：でも、そういう公園で、みんなが少しずつお互いのことを知るっていう風潮が生まれてきてくれば、親としては、自分の子どものことを先回りしすぎないで見守ってみようかなってできるかもなって。わたし、子どもには極力自由に育ててもらいたいなって思ってるんですけど、結局道を歩いてても「危ないから」って引っ張っちゃったりするんですね。以前、わたしの兄弟が「ちょっと面倒みるよ」「ゆっくりしてなよ」ということで、来てくれたんですけど、わたしだったら「迷惑になるから」「危ないから」ってやっちゃうようなところで、本当に見守ってたんですよね。そのときにふと、わたしって、息子のためと思ってやっているけど、実は自由を奪ってたんだって思ったんですよね。

熊：んー、とはいえ、あまりご自身を責めてほしくないですけども。

星：紙一重のところですし、やっぱり危険なものは危険だって教えてあげなきゃいけないし、あまりにも人に迷惑かけちゃう行為は止めなきゃいけない部分もあるんですけど、それが当たり前になりすぎちゃってたなって。実は息子はできることかもしれないのに、先回りをして、なんか自由を奪ってたなって。最近は少しずつですけども、いつもこう先回りをしていたところを、ちょっと見守ろうかなって思えるようになってきたんですよね。自分の兄弟を通して気づけました。けど、やっぱりどうしても障害のある子のお母さん方って、「やめなさい」「危ないから」って言う場面が多いと思うんです。我が子は電車に乗りたいたんだろうけど、電車に乗ると騒いじゃうから、絶対乗らせられないって言う知り合いのお母さんもいるし、本当だったら、電車に乗ればすぐなのに、乗せた

くないっていうのもある。なぜならば、騒ぐのが目に見えてるから、もう親がしんどい。だから、我が子の気持ちはわかっているんだけど、叶えてあげられない。

熊：うん、はい、そうっすよね。目の前にそれがあるのに、それができない。そういう当たり前が当たり前じゃない方がいるということを、**play here**では重みをもって受け止めています。で、ですね、なんか当事者の方々は、常に自分自身のことを振り返りながら、ある意味で言うと反省しているっていうことが非常に多い気がしているんですね。ちょっと抽象的な言い方をすると、物事に、原因と結果というものがあるとして、その全てを1人で受け止めている感じが凄いするんですね。今、起こっているあらゆることの原因は自分であるって。それって美しくもあるけども、あまりにも背負いすぎているということでもあるし、そうさせている社会があるとも感じます。我が子の命を守るためには、へその緒が必要であったように、先回りするような手綱を引いておくというのは、ある意味でいうと当然というか必然だったわけですね。その手綱を緩めることを可能にするのは、そのお母さんの心構えだけでなく、社会側の工夫も必要だと思っています。社会側にもその原因があるわけですから。例えば、公園にフェンスのようなものがあれば、道路に急に飛び出て轢かれちゃう心配がなくなり、見守れるということであれば、それが用意された社会にすれば良いはずという。電車も例えば、一つの車両は、時間の限定があっても良いかもしれませんが、「大きな声が出て、泣いちゃっても、全然OKっす」みたいになっていけば、しんどい気持ちが軽減されそうですね。人口減少社会って、原理的には、人が少なくなる分、一人ひとりが大切にされる社会に転じていくチャンスとして捉えることができると思うんですよ。だから、そういう議論を社会に巻き起こしたい気持ちがあるんですよね。そういう話、またさせてもらっても良いでしょうか？

星：もちろん。

熊：正確に言うと、議論を巻き起こしたいというより、みんなで解釈を豊かにしていきたいんですね。あ、公園のフェンスで言えば栗山公園では、まさにそのような理由でフェンスが整備される予定です。それって、安心安全を生み出すためのものではあるんですけど、そういう事情を知らない場合は、極端な話をしてしまえば、人々を分断する壁に見えてしまうかもしれない。とはいえ、その同じ壁も、表現やコミュニケーションを育むキャンバスとして捉えることもできる。そのようにして、とにかく、できるだけポジティブな解釈や運用に持っていきたいんですよね。



鞍田愛希子さん

こころとからだと環境は切り離せないから

取材日：2024年12月23日



健康を捉え直すことの必要

鞍：梶野公園も栗山公園も近いので、どちらも外出プログラムで行くことがあって、ストレッチをやったり、もしものときの避難所にもなっているのので、防災訓練としてみんなで確認しながら巡ったりとか。その時に、栗山公園の池が枯れててもったいないねって、なんかバリケードみたいになってるねって、ちょうどみんなで話をしてました。

熊：そう、なんか黄色いテープが張り巡らされてて、事件現場みたいになっててね。

鞍：そうそうそう、なんか悲しいねって話していました。丘もあるし、良い使い方ができそうなのになと。なので、このplay hereのプロジェクトが立ち上がったので、良くなったらいいなって。

熊：ねえ、あそこがビオトープみたいになって、人にも生き物にも良い形になったらなと。みんなで良くしていきましょ。

鞍：ぜひぜひ。めちゃくちゃありがたいです。

熊：こちらこそ、ありがたいです。みんなで足元の環境をより良くしていきたいんですよね。

鞍：わたしたちの「こらだ環境研究所」の「こらだ」っていうのは、中井久夫先生という精神科医の造語で、心と体を合体させた言葉なんですね。例えば心の問題からくる身体症状や、トラウマだったりするものも含めて、コントロールの利かない形になっている「こらだ」を、自分たちで色々と分析をして分解していくということを大切にしています。心と体が分けられないように、「こらだ」と環境も混ざり合っているものですよ。というのも、環境からの影響や変化は、いつの間にか個人の中に入り込んでくるので、それが自分なのか環境なのかって意外と分からない。環境を変えたら、一気に変わるみたいなこともありますよね。

熊：なるほど。それぞれ切り離せない、心と体と環境。それぞれの捉え方がなんか豊かになる感じがします。

鞍：そうなんですよ。その分析の過程で、自分たちに必要なパーツを見つけていく。環境であれば、生育環境もあったり、自然環境もあったり、教育環境もあったりと、いろいろな切り口があると思うんですけど、自分に合った環境を見つけたり、生み出すことで、「こらだ」をコントロールできるものにしていく。そういうことを「こらだ環境研究所」のコンセプトにしています。なので、そうやって環境を整えていくとか、自分たちの手で、自分たちが欲しい環境をつくっていくみたいなことは、まさに、わたしたちもやりたいことなんですよ。

熊：めちゃくちゃ、やりたいし、やって欲しい。ですし、公園の話をするならば、公園って、人々の健康に寄与することが法的にも、その存在根拠だったりするじゃないですか。そうしたときに、その健康の定義を捉え直すと言いますか、豊かにしていくということが、今、めちゃくちゃ必要とされている気がするんですよ。まさに、心と体と環境が不可分なものとしての健康。

鞍：そうそうそう。

今を、傷を、大切にすることが裏打ちする

熊：鞍田さんが、小金井で最初に立ち上げたのは「ムジナの庭」で、就労継続支援B型事業所。その次に、今日お邪魔させて頂いている「こらだ環境研究所」を立ち上げられて、ここは自立訓練（生活訓練）事業所。制度的にはどういう形なんですかね？

鞍：障害福祉サービスでは段階が設定されていて、医療から福祉、福祉から企業みたいな感じに、就労への階段がつくられていたりするんですよ。医療っていうと、一番大変なときは入院じゃないですか。入院からもう少し安定して退院に移っていくときに、いくつかのサービスがあるんですよ。そのサービスと似た感じなんです。自立訓練って。それを医療側でやるか福祉側でやるかっていう感じです。例えば脳梗塞とかで、手や足が身体的に不自由になった場合には、医療ではリハビリ、福祉では「機能訓練」ということになって、理学療法士さんとか、作業療法士さんが入られる。一方で、心のコントロールや生活リズムを自分で作るのが難しいとか、外出できず日中活動を思うように送れないとか、精神的なサポートを含む場合には、医療ではデイケア、福祉ではうちのようない「生活訓練」というのもあって。まずは2年の期限の中で、精神保健福祉士や社会福祉士と一緒に、訓練を重ねて生活を作っていく。そこから就労支援に繋がっていく。なので、B型の手前ですね。

熊：なるほど、わかりやすい。「ムジナの庭」に加えて「こらだ環境研究所」もやることで、できるだけ視座を広くとっておきたいという感じだったんですか？

鞍：もともと「ムジナの庭」で目指してたものっていうのが、就労とケアの両立だったんですよね。働きながらケアされるような場所をつくるっていう。それは環境からのケアも含まれていて「ムジナの庭」も、窓からいつも金蔵院さんの四季折々の風景が見えるので、目からケアされるものもあれば、鳥の声とか、風の音とか聞こえてくるので耳から癒される部分もあったり。働きながらお金を稼ぐっていうことで自尊心を回復させつつ、こころ・からだプログラムに参加しながら、同時に環境からもケアされる場作りを実践したんですよね。ただ、3年にわたる実践の中で、就労にどんどん向かいたいという方もいれば、ゆっくりと自分が回復することに時間を使いたっていう方もいて、それぞれに特化した方がより効果が発揮しやすいということもあり、一旦、その就労とケアの機能を分けてみようっていうことでつくったのが「こらだ環境研究所」ですね。

熊：急ぎたい人はそうできるし、ゆっくりしたい人もそうできる、と。

鞍：そう。「こらだ環境研究所」がケアの要素を持っていて、「ムジナの庭」が以前よりも就労の方向を強めるっていう形でちょっと役割分担をさせてみたんですよね。「こらだ環境研究所」は午前中2時間、午後2時間、全てプログラムで回っていて、例えば、からだプログラム、こころプログラム、あと調理。で、自分自身のことを深掘りして、分析してみたり、自分たちが経験してきたことを言葉にまとめたり、漫画にしたり、そういう「こらだ環境研究」というものもやってます。「生活とは生きること」がスローガンなので、必ずしも症状や障害のことを考える必要はなくて。生活するための訓練とか就労するための訓練とかっていうふうに、すぐくまっすぐに1本道を作っちゃうと、その間のいろんな豊かな要素が抜け落ちてしまう。それがもったいないなってずっと思ってたんです。いろんな「暮らし方」「働き方」があるはずですし。訓練ではあるんだけど、でも自分たちが本当に心が動くプログラムだったりとか、自分なりの生活の仕方みたいなのを見つけていけたら、それがそのまま、生きる喜びとか生きる幸せとか、生きる意欲だったりに繋がるんじゃないかって思っています。

熊：何かができるようになるための訓練ではあるものの、そうすると、できたかどうか？だけが問われる感じががあるけども、その結果の前に、プロセスそのものも大切なんじゃないか、と。

鞍：そうですね。その傷のようなものや、何かできないことをカバーするとか、できるようにするとか以外に、もうちょっと味わい尽くしたいみたいな感じですかね。

熊：いやあ、うん、はい、もう、はい。

鞍：なんかそういう場所がないなと思って。自立や就労に向かっていくっていうことは、もちろんみんなも目指したいし、わたしたちもそれをサポートしたいっていうのは同じなんですけど、なんか、もう少しその過程を寄り道したりとか、小道を探してみたりとかしながら、一緒に向かっていけるといいなっていうふうに思っていて。その余白をもつことでその人の「生きる力」っていうのをさらに発掘できるんじゃないかなと考えているんです。就労のための生活スキルって言われるような、例えば自炊ができるとか、早く起きられるとか、そういうのって、その人の中に何か本当にやりたいことの動機が生まれてきたら、自ずと達成されていくものだったりもするんで。

熊：生活スキルというものだけを取り出して考えない。

鞍：そうです。わたし、もともと植木屋だったんですね。

熊：そこがユニークではあるんですけど、なんとなく必然性も感じる場所ですね。当時の植木屋さんって、今よりも更に、女性が働き先として飛び込む先という雰囲気はあまりなかったと思うんですね。

鞍：ええ。でも、大学のように不眠で、自分は眠れないタイプだと思い込んでいて、気持ちも鬱々としやすかったんですけど、植木屋に入って毎日朝5時に起きて手押し車とかで鍛えられて、外でお弁当を食べてって過ごしていたら、もうぐっすり寝てて、そりゃそうだよねって。

熊：なははは。

鞍：自分自身の経験もあって、そういう単純な方法で回復できる、生きていけるっていうのを大事に考えてるんですね。だから、ね、やっぱり人の輪にもまれるとか、思いつき走るとか、汗をかくみたいところで、人間としての本能的な動物的な力が蘇ってくるっていうことを、ちょっといろいろ試したいなあって思っています。

一緒に探求していくこと、経験が他の誰かの糧になること

熊：鞍田さんが言うプログラムって、学校のカリキュラムというニュアンスよりも、一緒に生活の色々なシーンを大切にするという感じがするんですね。生活のなかで、いろんなことにおっしゃるように寄り道しながら、迂回しながら、ふとした出会いも味方につけながら、なにかをやってみたいというエネルギーが湧いてきたりもする。

鞍：うん、うん、うん。あとなんか例えば症状や障害っていうことを考えるにしても、それを真ん中に置くんじゃなくて、「ネガティブ感情ってなんで湧いて来るんだろう」「環境ってどうやって自分の中に入り込んでくるんだろう」みたいな問いを大切にしたいなと。そうすることで、病気や障害の有無に関係なく一緒に議論ができる。そういう仲間として、ここに集まった人と一緒に探求していきたいんですね。なので、研究所っていう名前にしたんです。みんなのことを研究員って呼んで、そういう意味では研究の先輩だったりして。

熊：サービス受給者というよりも、研究員だし、先輩。

鞍：やっぱり障害の受容ってものすごく難しい。先天的なものだったとしても、自覚されるのって、もっと大人になってからだったりもするので、大人になってから自分の障害を受け入れようとするってすごいことですね。だから、みんな自分のことをものすごく考えたり調べたりしている。

熊：まさしく先輩研究員。

鞍：そう。健常者の人であったとしても生きづらさを持って、だけど自己理解がなかなか難しかったりする中で、やっぱりここにたどり着いてサービスを使いたいっていうふうになんか来てくださいる方は、そこが一步先を行ってるんですね。その意味でもすごい尊敬があって、自分の弱い部分とか、なにかこう助けてほしい部分っていうのをさらけ出して、サービスを受けるというところまで気持ちを持っていくのってみんなできることじゃないかと常々感じています。

熊：そうですね。ジョアン・C・トロントという人の「ケアリング・デモクラシー」という書籍を読んでいたら、「市民が踏み出すべき第一歩であり、かつかなりの勇気を要するのは、各人が人間の傷つきやすさを認めるということである」とあって、かなり腑に落ちる感覚があったんですよね。なのでまさに、みんながすべきところを、勇気を持って既に踏み出してくれている先輩方なわけですよね。

鞍：社会から醸し出す空気とか、わたしたちが作り出している環境が、その勇気を持つのを難しくしているとも思えます。やっぱり、誰よりも人を優先してきた人だったりとか、誰よりも優しくったり真面目な人が精神疾患になりやすかったりもして。過酷な生育環境にある中でも、親のことを否定できなかったりとか、何か自分が我慢すれば何とかするっていうふうに環境に適応しようとしてきた人たちだったりもするんで、誰よりも優しい人っていうふうに捉えることができると思っていますよね。みんな、今まで自分がしてきたつらい経験っていうのを無駄にしたくないとか、誰かの役に立てたいとかっていうふうによく言ってくれるんですけど、ここでやっていることをもう少し一般向けに広げていけたときには、みんなが講師。

熊：そういうことになったら、めちゃくちゃ良いですね。希望を感じます。

「多」で「疎」な人間関係の豊かさ

鞍：福祉の領域にも居なかった人にもケアに関わってもらおうっていうことを大事にしてて。

熊：関わりの幅を広げて緩くしていくことは、これからの時代、かなり重要な気がしています。

鞍：うん、そうですね。それで言うと、評論家の宇野常寛さんがやられている「庭プロジェクト」に参加しているんですが...

熊：建築から文化人類学まで幅広い専門家や実践者が集まって、これからのまちづくりを深めていて、面白いなって思っていました。

鞍：ありがとうございます。そのプロジェクトのイベントで、「これからの都市に必要なものは何か？」っていうテーマで、それぞれがフリップを書いて出すっていう機会があって、わたしが出したのは、「多で疎」。

熊：「多で疎」。

鞍：多いけど、まばらっていう。精神科医の森川すいめい先生が、自殺希少地域をリサーチされたときに「その島のひとたちは、ひとの話をきかない」という本を書かれていて、そこで出てくるんですね。よく言われるのは「少ない関係で密が良い」ということじゃないですか。親友が欲しい、恋人が欲しい、そうじゃないと自分は幸せじゃないっていうふうに日本では考えられやすく、みんなそれを目指す。けれども、毎日のように挨拶だけはする、顔は見てるから安否確認はできているみたいな、そういう関係性も必要なんじゃないかなっていう話をしてて。

熊：あー。

鞍：「庭プロジェクト」でも、SNSが実空間を奪っていったみたいな話をしているんですね。例えばSNSの人間関係だけで人が精神を病んでしまったり、自殺をしてしまったりとかする中で、実際の、この実空間の中に、インターネットの掲示板のようなものをつくれなかなって話をしてて、例えばアメリカのポートランドには、もう読まなくなった本を入れておいて、それを誰かが持っていけるような箱が街なかにあったり、詩のための掲示板があって、それを読む人がいたり、書き加える人がいたりする。そういうリアルなコミュニケーションが生まれるための仕掛けが点在しているんですよね。一緒に密な時間をずっと過ごすわけじゃないんだけど、点と点で関わった何かが少し自分の生活の中に入っていく。これだけ人口の多い東京の中では、「少で密」ではなく、「多で疎」な関係性ってすごく可能性がある気がしているんです。例えば、植物の種とか苗を持ち寄って置いておける箱があったり、育てることができる畑があって、次に来た時には、花が咲いているのを見られたとか。顔が見えなくても気配は感じられる間接的なコミュニケーション。そういう機会を街のなかにつくれなかなって。

熊：「疎」のまま、ゆるやかな関係を維持できるっていうね。都市生活の喜びというか可能性をそこに見い出すことができるかも、ということですよね。なるほどです。なんかコミュニティという言葉からは、前のめりで「密」な印象を感じやすい気がして、それに気後れする気持ちも湧くんですが、「多で疎」ということでコミュニティというものを捉え直すと、また変わってきそうな気がします。

鞍：宇野さんも、「自分のような『陰キャ』は、コミュニティなんてものに入れるわけがない」という話をされるんですよね。うちに来られる方も、やっぱり「一般的なワークショップや教室には入れない」ってみんな言うんです。やっぱりコミュニケーションのスピード感も違うし、生きてる世界も違うし、行っても引け目に感じてしまっただけじゃないとか、距離感がわからずクタクタになるとか。だけど、さっきの種や苗の仕組みがあったら、多分、ハードルが少し下がると思うんですよね。人と面と向かって話さなきゃいけないということだけじゃないコミュニケーションのあり方っていうのを、模索していきたいなと。

熊：その議論も、非常に興味があります。北山修という精神科医が、「共視論」という書籍を出していて、まさに人が向き合うコミュニケーションではなくって、同じものに注意を向けながら育まれるコミュニケーションのあり様を、浮世絵などを分析することで日本文化に見ているんですね。おそらく、そういったコミュニケーションモードが、社会を成り立たせるためには必要だという共通認識がかつてはもう少し豊かにあったんだろうなと考えているんです。play hereの話で言えば、公園がそういうことを模索する場になったらと思いますし、一緒に探求してほしいです。

鞍：ぜひぜひぜひ。

本来あるべき、愛着形成の多様なバリエーション

鞍：「庭プロジェクト」で上がるキーワードに、「愛着」というのがあって。母子の愛着もそうですし、土地に対する愛着もそう、物に対する愛着もある。いろいろとあると思うんです。「こらだ環境研究所」でも、愛着を含めた心の安定の土台をつくるということを大切にしているんですけど、心の問題となると家族関係だけが着目されやすいんですよね。それも大事なことで続けていく必要があると思うんですけど、それ以外のことも大切にしていきたい。例えば、動物のアニマルセラピーは良く知られていると思いますが、植物もグルーミングすると、オキシトシンっていう愛情ホルモンや、セロトニンっていう幸せホルモンと呼ばれているものが放出されるみたいなんですよ。

熊：へええええええ。

鞍：例えば、栗山公園で、みんなでビオトープをつくるっていうことの経験が、土地との愛着形成を生んでいくと思うし、自分の変化とともに、土地も変化していく様子を見届ける経験のなかに、環境から個を変えていく作用っていうのがすごくあると思うんです。

熊：めちゃくちゃ興味あります。

鞍：「多で疎」みたいな形の関わりしろが、そういうところにもあるのかなって思うんです。

熊：そういうこととして、考えていきたいです。なんか話をお聞きしながら、頭の中でつながる感覚があるんですが、先ほど話題にあがった「ケアリング・デモクラシー」という書籍は、その中心に、民主主義というものが「ケア責任の分配に関わるもの」というモチーフがあるんですね。で、おそらくやっぱり「少で密」といった人のつながりが成り立っていたことの裏側には、女性の過剰なケア責任という「シャドウ・ワーク（影の労働）」的な状況があったと思うんですよ。鞍田さんがおっしゃっていた「福祉の領域にも居なかった人にもケアに関わってもらっていうことを大事に」ということも繋げながら考えていくと、やっぱりこれからの社会のあり方の構想に直結していくな、と。そういった見通しのようなことも大切にしつつ、具体的に、じゃあ、公園のビオトープづくりをどのように進めていけばよいのか？というところはかなり手探り状況なんですけども。

鞍：いろんなやり方があると思うし、宇野さんは「わたしたちの実践が失敗ってなっても面白いですよ」って言ってくれたんですね。もちろん、人の人生を預かっているので、そこは、きちんと責任を持っているんですけど、例えば、当初は「就労とケアの両立」というものを考えていましたけど、利用してくださる方が変わっていくに従って、動いていくものなんですよ。

熊：想いはまっすぐ、歩みはジグザクという。そう思うと、いろいろと動きやすくなる感覚があります。

目標や計画という考え方と上手に付き合う方法

鞍：「庭プロジェクト」の参考図書の一つに、ジル・クレマンの「動いている庭」があります。最初から計画された庭ではなく、風とか地形とか、いろんなものによってどんどん変遷していく庭のありようを紹介している本なんですけど、「ムジナの庭」も「こらだ環境研究所」も、まさしく計画をバチッとつくるっていうよりは、ちょっとずつ変遷していくと面白いなと思って始めた場なんですよ。人は、学校であれ、仕事であれ、計画やルールの中で生活をしてきているから、計画がないと不安になりやすいらしいです。でも、今って「VUCA時代（Volatility／変動性、Uncertainty／不確実性、Complexity／複雑性、Ambiguity／曖昧性の頭文字を取った言葉でブーカと読む）」で、何が起きるか分からないって言われていたり、それこそ昨日まで価値があると言われていたものが突然、無価値になってしまったりする。だから、そもそも期待通りには進まないことを前提として、不確定な要素を面白がれたり、遊べたりすると、ストレスを感じにくくなるはずなんですよ。計画ありきで、それが予定通りにいかないと、何かが折れたりしやすい。

熊：そうですね。庭でいうと「ハプニングツリー」と呼ばれているものが好きなんですけど、鳥とか虫が運んできた種が大きくなった樹とかで、「おや、これは植えたつもりはないぞ」というものが生えてくるというハプニング。でも、そういうハプニングのようなものをどう受け止めるか？というのは面白い話なんですよ。ハプニングを全て排除していると、庭として面白くならない。それこそ「動いている」ことにならない。それって、この仕事

もそうで、向かうべき方向性は変わってないと思うんですが、誰に会うかによって少しずつ変わっていく、確かなものになっていく。逆に、変わらないことのほうが会おう方に対して失礼なような気がしています。そうやって考えていくと、「PDCAサイクル（Plan／計画、Do／実行、Check／評価、Action／改善の頭文字を取った言葉で、目標達成のために使われる考え方）」でガチガチに固めちゃうと、ハプニングというものを受け取れるすき間が生まれなくなってしまう。

鞍：めちゃくちゃわかります。うちの法人名のアトリエミショーも、「実生（みしょう）」という日本語が由来で、まさしく鳥のフンから芽が出た樹のことを指してます。福祉もPDCAが原則で、それがハマる方はトントンと乗っていけるんですよね。「職業準備性ピラミッド」って言われるような、安定した就労という目標に向けて、どんな準備が必要かっていう要素を示す図があって、土台の最初のところから順番に、次のスキルへ進んでいくっていう。それが得意な方は良いんですけど、そうじゃない方ももちろんいるんですよね。

熊：職業準備性ピラミッドというステップがあるんですね。

鞍：いろんな書き方や呼ばれ方があるんですが、土台が健康管理で、次に日常生活管理、それで対人スキル、その次に労働習慣で、最後に職業適性って。

熊：なるほど。

鞍：最近、それを提唱された相澤欽一先生の研修を受ける機会があってお話を伺ったら、「本人にハードルを課すということではない」とおっしゃっていて、「どのような配慮が必要か」という視点でとらえる必要があるって。福祉の業界では、ハードルの代表のように語られることが多いので、目からウロコでした。それと、働きたい意欲だったり、その先に実現したい目標があることによって、就労がケアにもなるということもおっしゃるんですね。就労とケアというのは、まさしくテーマではあったんですけど、現場の感覚で言うと、目標設定をすると、途端にそれが強迫性を持って実現せねばならない何かになって、わくわくするものではなくなる。逆に不安を抱かせることにもなるんですよね。

熊：わかります。会社経営者と良く話すのは、「PDCAを強固に回しすぎると、社員が達成できそうな目標しか掲げなくなる」ということだったりするんですが、それと似ています。教育の現場で言うと、「目標を掲げたのは、あなたなんだから、自分で選んだんだから、決めたんだから、ちゃんと頑張らなさい」と言質を取られるみたいなことが起こるのは良くないなって感じているんですが、総じて自己責任論みたいになりがちで、苦しくなるといえる。

鞍：そうですね、自分の中にどういいう変化があるのか？ということ振り返る意味では、PDCAサイクルの考え方は良いんですけどね。そうやって苦しくなる先の未来が見えてしまうと、あれしたい、これしたいという肝心の希望を口に出しづらくなっていくんですよね。

熊：その欲望というか気持ちというかエネルギーを形成していくことが、まさに大切ですものね。

鞍：どうしたら良いんだろう？っていろいろと調べた時に、PDCAに代わるVUCA時代のキーワードとして、ビジネス用語なんですけど、「OODA（Observe／観察、Orient／方向づけ、Decide／意思決定、Act／行動）の頭文字を取った言葉で、意思決定と実行の流れを表す考え方）」というものがあって、問いを立てるところから始めるの

が重要とされているんですね。目標設定が苦しくても、問いを立てるのは大丈夫だったりする。そういう方たちは、言葉をもう、たくさん、なんて言うか抱えたまま生きてきて、外に出さないまま溜めて溜めていることが多い。そういう場合は、書くことじゃなくて、話すってことがとても必要で。

熊：目標設定だと、書くことが求められることが多いと思うので、話し言葉が大切にされていくのは、とても対照的に感じます。これは喩え話ですけど、同じ山を登るにしても、いろんな登り方もあるし、なんなら登らずに、遠くから眺めながら楽しむみたいなこともあるという感じで、いろんなスタイルがあるということを確認していく作業なんですかね。

鞍：そうなんですよね。わたしたちのできることがもしあるとしたら、いろんな選択肢を増やすために、いろんな考え方に触れてもらう、いろんな環境に触れてもらうってということだけかなっていうふうに思います。

熊：ホント、なるほどです。play hereを進めていきながら、自分自身が当事者でもあったりするわけなので、いろいろ考えるわけですが、なんか上手く表現できている気もしないんですけど、障害というものをどう捉えるかということで言うと、「同じこの世に生きている、ただ、他の人と別の方法で、というだけ」というニュアンスもあるなと思っていて、となると、「生き方には、いろんな方法があるんだよ」ということを、みんなで認識したり、その方法を豊かにしていくことが大事なんだろうなって。

鞍：そうだと思います。

熊：play hereで言うと、公園を、そういうことの舞台にしていくことが重要な気がしています。小林さん、どうですかね？なんか、毎回思いますが、今日もこう、深まっていく感じがありますよね。

小：はい。いろんな気付きがあって、わたしの想いとしてもですが、障害に対する認識を変えられるんじゃないかって思えてきています。そういう想いを持った方とたくさん出会えてきているので、行政としても、そういう方々が動きやすい環境をつくっていければ良いんだなっていうことを素直に思えるというか。愛着という言葉で言うと、この街に愛着を持って暮らしていきたいとちゃんと思える場所にしていきたいですし、そのための拠点に公園になるんじゃないかなって。今、本当にたくさんの方に注目頂きつつあって、機運は高まってきているので、ここから何ができるかっていうことが問われているなって。

鞍：これからですね。

熊・小：ですね。



2. 3 公園での取組み

令和7年度にインクルーシブデザインに配慮した遊び場、菜園・子どもの居場所空間等の整備を予定する、栗山公園・梶野公園・三楽公園において、以下の取組みを行った。

2.1 多様な遊びイベント（栗山公園）

令和7年度に、インクルーシブデザインに配慮した遊び場を整備予定の栗山公園において、障がいの有無や年齢・性別、言語の違いなどに関わらず、誰もが多様な遊びが楽しめるイベントを、地域と協働しながら企画し、実施した。また、あわせて同時期に、インクルーシブ遊具の試験設置を行った。

2.1.1 栗山公園のんびりデー

(1) 実施概要

日程：令和6年12月1日（日）11時～15時

場所：栗山公園 運動広場・遊具広場周辺

主な内容：インクルーシブ遊具体験、遊び道具貸し出しスタンド、ポッチャ体験、駄菓子屋スタンド、マイペースカフェ、フードトラック、焚き火とマシュマロ、「play here」活動報告



作成したチラシ

(2) 当日の様子



運動広場の様子



焚き火を囲んで焼きマシュマロ作り



インクルーシブ遊具の試験設置

(3) 実施結果

栗山公園のんびりデーにおいて、参加したあらゆる子どもやその保護者にアンケートを実施し、インクルーシブな遊び場に関する意見・意向等を把握した。

1) 紙面アンケートの実施

参加者の公園利用の実態を把握するとともに、本事業を通じて検討した、一人でも多くの子どもたちとその保護者の方が公園に行きやすくなるための取組みの有効性を確認することを目的に、紙面アンケートを実施した。なお、アンケートはWEBでの回答も可能とした。

① 調査票

作成した調査票を次頁以降に示す。

栗山公園のんびりデー アンケート

本日は「栗山公園のんびりデー」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

小金井みんなの公園プロジェクト「play here」では、小金井市の公園を、誰もが自由に遊べる場所にしていくことを目指し、様々な取組みを進めています。

その一環として今回、「栗山公園のんびりデー」にご参加いただいたみなさまにもご意見をお伺いしたく、アンケートを実施致します。ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

問 1. お住まいの地域を教えてください。

1. 東町 2. 梶野町 3. 関野町 4. 緑町 5. 中町
6. 前原町 7. 本町 8. 桜町 9. 貫井北町 10. 貫井南町
11. 近隣市（小平市・国分寺市・府中市・三鷹市・武蔵野市・西東京市）
12. その他の市町村（ ）

問2. 本イベントを何で知りましたか？（あてはまるもの全て）

1. 学校等配布のチラシ 2. 店舗等のチラシ 3. 小金井市報
4. 小金井市公式 SNS 5. 「play here」公式 Instagram 6. 特別支援学校
7. 特別支援学級 8. 児童発達センター 9. 療育施設
10. 放課後等デイサービス 11. 友人・知人の紹介 12. その他（ ）

問3. お子さんがいらっしゃる場合は、お子さんの年齢を教えてください。

1. 未就学児 2. 小学校1～3年生 3. 小学校4～6年生
4. 中学生 5. 高校生以上 6. 該当しない
→問8にお進みください

問4. 障がいをお持ちのお子さんがいらっしゃる場合は、お子さんがお持ちの障がいについて、差支えない範囲で教えてください。(あてはまるもの全て)

1. 視覚障がい 2. 聴覚障がい 3. 肢体不自由 4. 知的障がい
5. 発達障がい 6. 精神障がい 7. その他（ ） 8. 該当しない

問5. 普段、親子で一緒に公園を利用されていますか？（学校・支援施設等での利用は除く）

1. ほぼ毎日利用している 2. 週に数回利用している 3. 月に数回利用している
4. 年に数回利用している 5. それ以下 6. 利用していない
7. その他（ ） →問8にお進みください

※普段、親子で一緒に公園を利用している方のみお答えください。

問6. 普段、お子さんとどのような時間帯や曜日に利用されていますか？（学校・支援施設等での利用は除く）

- 【時間帯】 1. 早朝 2. 午前中 3. 午後 4. 夕方 5. 夜間 6. その他 ()
【曜 日】 1. 平日 2. 土曜日 3. 日曜・祝日 4. その他 ()

※公園を利用している方のみお答えください。

問7. 普段、お子さんとよく利用する公園への移動手段と、ご自宅からの所要時間を教えてください。

1. 徒歩 2. 車 3. 自転車 4. その他（ ）

⇒上記の移動手段を使って、ご自宅からよく利用する公園まで 約（ ）分

裏面に続きます⇒

※ここからは、みなさんにお尋ねします。

問8. 本イベントでは、障がいのあるお子さんと保護者の方の公園への行きづらさの原因を、

“①困難な眼差し（心のバリアフリー）”

“②ルールの困難さ（見えない暗黙のルール）”

“③移動の困難（物理的なアクセシビリティ）”

の3つと考え、その困難さを少しでも取り除きたいという想いで以下について取り組みました。

一人でも多くの子どもたちとその保護者の方が公園に行きやすくなるために、以下の取り組みは有効であると感じましたか？最も当てはまる数字に○をつけてください。

項目		とても有効である	どちらかという有効である	どちらかという有効でない	有効でない	わからない・利用していない
1	障がいの有無に関係なく、のんびりできる空間の創出	1	2	3	4	5
2	気軽に会話・相談できる環境の創出	1	2	3	4	5
3	インクルーシブな場であることの情報発信（看板の設置など）	1	2	3	4	5
4	インクルーシブ遊具の設置	1	2	3	4	5
5	遊具の順番待ちマークや、出入口の表示の明確化	1	2	3	4	5
6	障がいの有無に関わらず遊べる、遊具以外の遊びの提供	1	2	3	4	5
7	駐車場の確保	1	2	3	4	5
8	バリアフリー対応のトイレや屋内休憩スペースの確保	1	2	3	4	5
9	インクルーシブフード（えん下配慮食）の提供	1	2	3	4	5

問9. 上記以外で、一人でも多くの子どもたちとその保護者の方が公園に行きやすくなるためのアイデア等ございましたら、教えてください。

問10. あなたにとっての「のんびり」を教えてください。

問11. 本イベントや、小金井みんなの公園プロジェクト「play here」の取り組みについて、ご意見・ご感想をお聞かせください。

今後、小金井みんなの公園プロジェクト「play here」の取り組みに関する情報をご希望の方は、ご連絡先（メールアドレス）を教えてください。

☐ 希望する

E-mail：

☐ 希望しない

※記載いただいたご連絡先は、小金井市環境政策課及び本イベントの委託事業者（パシフィックコンサルタンツ（株））が管理し、「play here」に関する情報配信のみでの使用として、他の目的で使用することはありません。

アンケートは以上です。ご回答いただきありがとうございました。

②調査結果

回収数：44 件（紙：30 件、WEB：14 件）

主な内容：（１）基本情報

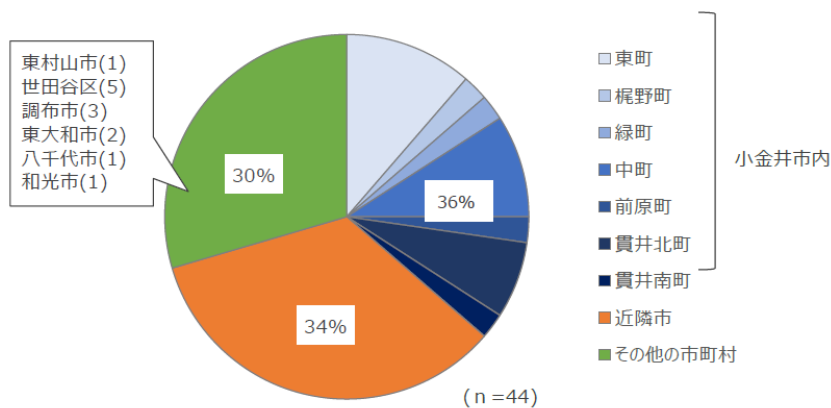
（２）公園利用について

（３）のんびりデーについて

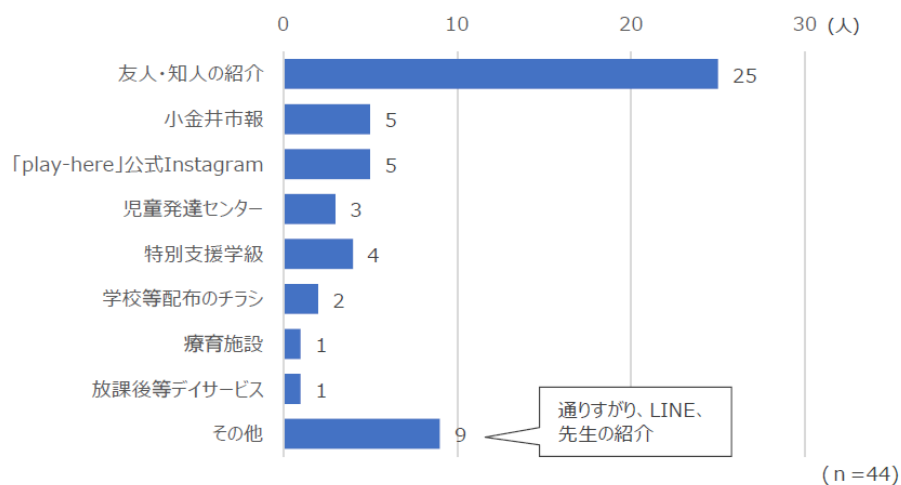
（４）「play here」の取組みについて

（１）基本情報

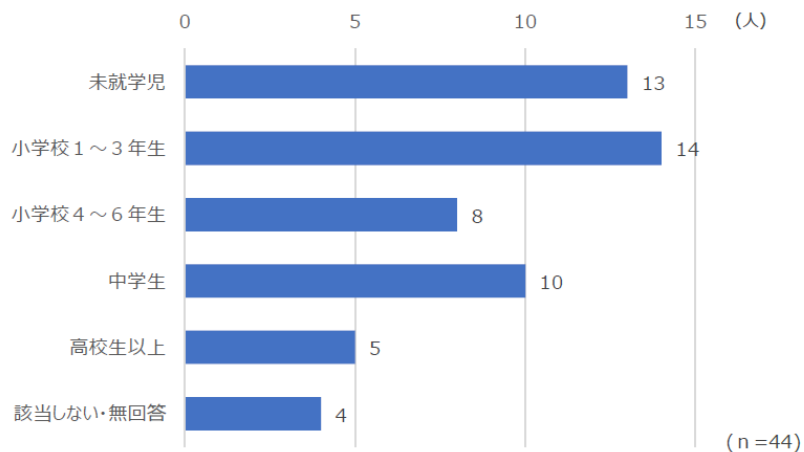
<居住地>



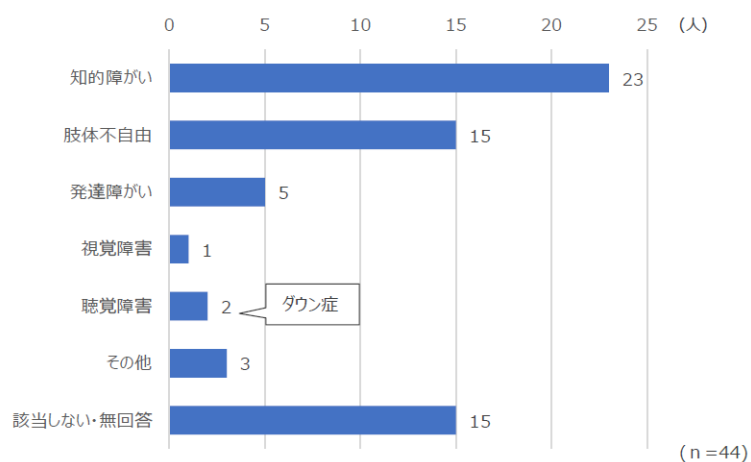
<イベントを知ったきっかけ>



<お子さんの年齢>

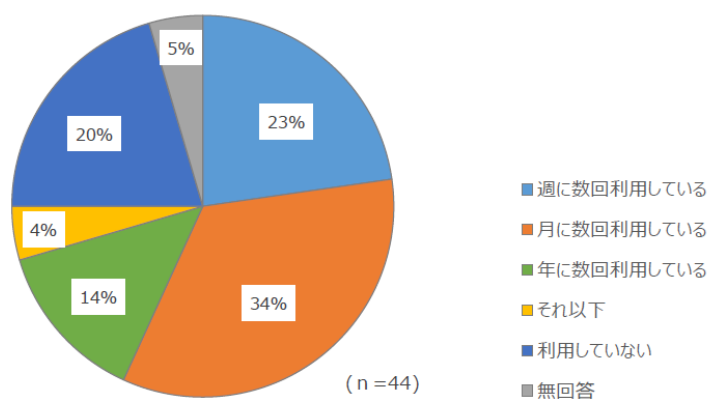


＜お子さんをお持ちの障がい＞

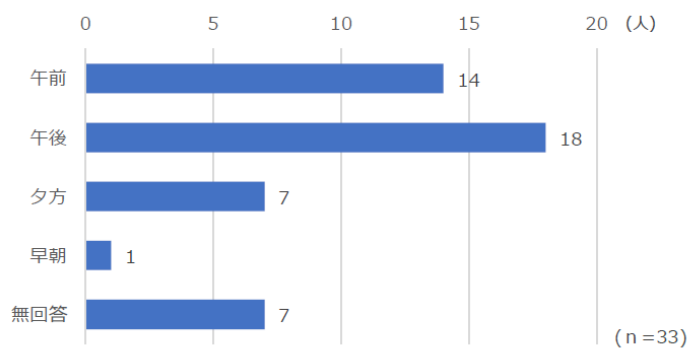


(2) 公園利用について

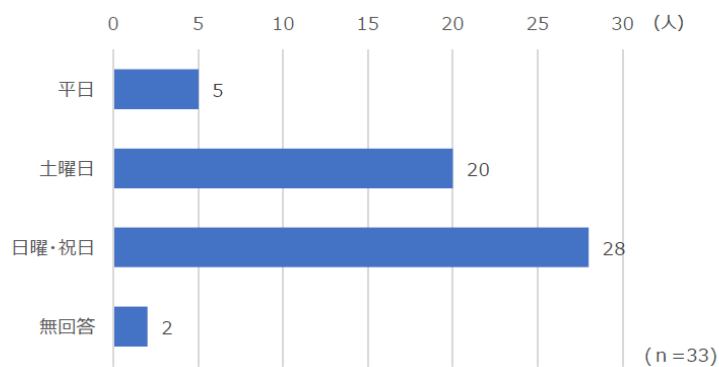
＜親子での利用頻度＞



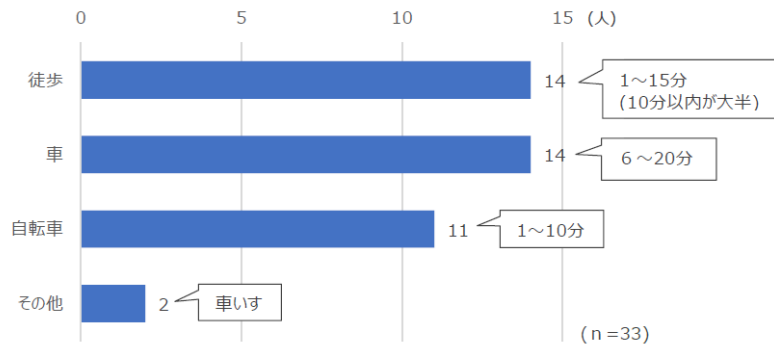
＜利用する時間帯＞



＜利用する時間帯＞

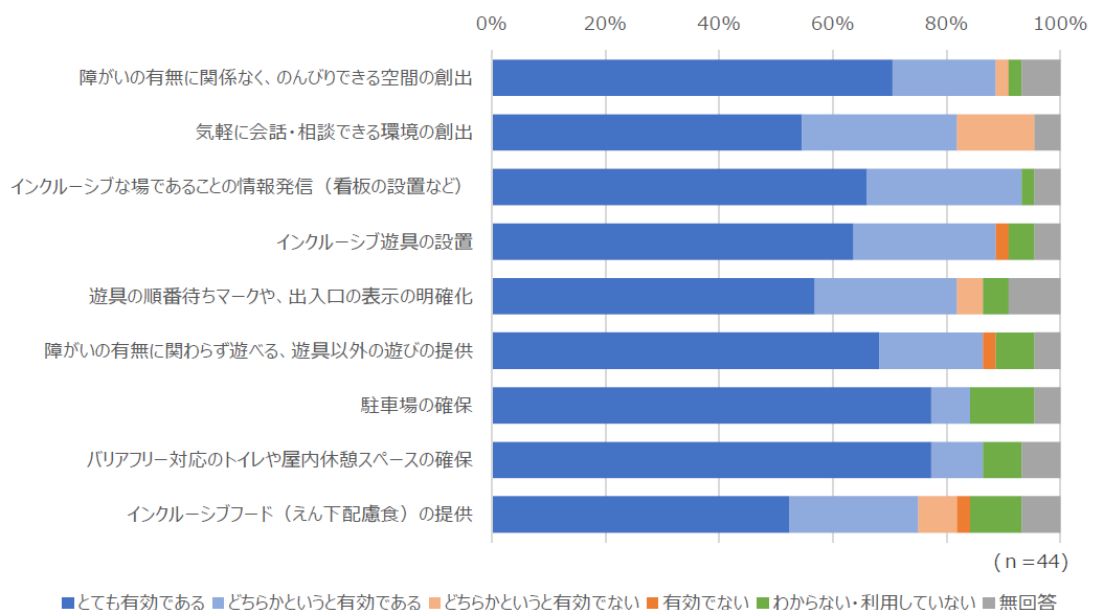


<公園への移動手段と所要時間>



(3) のんびりデーについて

<各取組みの有効性>



<その他のアイデア>

- 理解のある大人が1人、全体を見てトラブルがあったとき、対応してほしい (土、日などや平日夕方)。
- このようなイベントが時々あれば足を運びやすい。
- 障がいへの理解が進み、心のバリアフリーがどんどん進んでほしい。
- 第三の大人の存在
- 安全性
- トイレの整備 (きれい、使いやすい、子ども用)
- イベントやワークショップ
- 心も含めてバリアフリー、特性の正しい認識の共有
- 子ども一人、子ども同士だけで参加できるようなアクティビティ (ポッチャがありましたね) や、キッチンカーが増えるといいですね。
- とにかく心のバリアフリーです。インクルーシブ遊具設置ありきの進め方は疑問です。まず小金井市の教育委員会、現場が差別・分離的なので、そこが変わらないと無理。ソフト面対策を公園課だけで取り込むことではないです。
- トイレにおむつ台などがほしい。
- 障がいのある子専用の時間を設けるなどがあると利用出来る方が増える気がします。
- 世代を超えて交を流持てるような企画。様々な催しを実施する。
- バギーでも動きやすいスペースの確保

- 他人から特に子どもからジッと見られるのが苦手です。
- 遊具の設置
- ベンチとテーブルがあるといい。屋根のある場所があるといい。
- 安全安心の徹底
- 誰でも利用できる遊具、トイレ（駐車場も）設備。荷物をおけるところもあるといいです。
- 1 時間でも預かって貰えるサービスがあれば公園遊びのついでに買い物や外出のついでに済ませたい仕事が一気に済んで嬉しい。
- たくさん荷物から離れてしまうことになるので、遊具で遊べません。見守りの方がいらっしやると安心です。多くのおむつ替えの台はベビーシートなので、大きなシートが設置してあるかどうか重要です。
- 日差しや雨がしのげる場所
- 障害児が小さい頃は公園に「行くまで」にお尻が上らない保護者が多かったように思います。外に出られるような仲間が 1 番必要だと感じます。
- 車椅子からおりてリラックスできるごろ寝スペースがほしい
- イベントをやる場合、その場所と施設にはケアができる場所がどのくらいの広さで何ができるかなど知れたら想像しやすく行きやすいです。
- 公園内の道が通りやすいこと。日陰があること。

<「のんびり」とは>

- 家族で過ごす
- カフェで娘とお茶をする
- 障がい児を持つ保護者にとって「奇異な目」が一番怖いので、その視線のない空間で過ごすこと。
- あまり人がガヤガヤしていない所でボーッとする。自然の中で過ごす。
- 椅子に座って本を読むこと
- 時間を忘れてゆっくり出来る
- ゆっくり何も考えず過ごす
- きれいなものを見る。
- みんなで一緒に笑顔でおだやかな気持ちで過ごす。
- 時間を気にせず過ごせること。
- コーヒーなどを飲みながら日向でゆっくりと。
- 何も考えずにボーッとすごすこと。
- 喫煙、読書
- 何の心配もなくゆっくり過ごすこと。
- 何も考えずにぼんやりすること。
- お友達と一緒に話をしてのんびりすること
- 天気のよい日に散歩、本を読む。
- 車椅子でも気軽に行ける空間、くつろげる場所
- けがの心配をせず、子どもを放置できること。
- 何も考えずにゆっくりすること。
- マイペースに動けること。
- 自分の為にぼーっとできて、何もしなくても許される
- お喋り
- 時間を気にせず過ごせること（嚥下食なので外食が難しく、持参しない場合は時間が気になります。持参する場合は朝からバタバタ）
- 通信完全オフ
- 人が作ってくれたご飯を食べるとかコーヒーを飲むとか
- 時間や日常を忘れる
- 美味しいものを飲んで食べてる時
- 気兼ねない。何も考えなくて良い。

- 何も考えないでいられること
- 遠慮なく子供を車椅子から下ろして休憩できる。
- 公園で、子どもにおやつを食べさせられて私はコーヒーを飲める。緑がたくさんある。

(4)「play here」の取組みについて

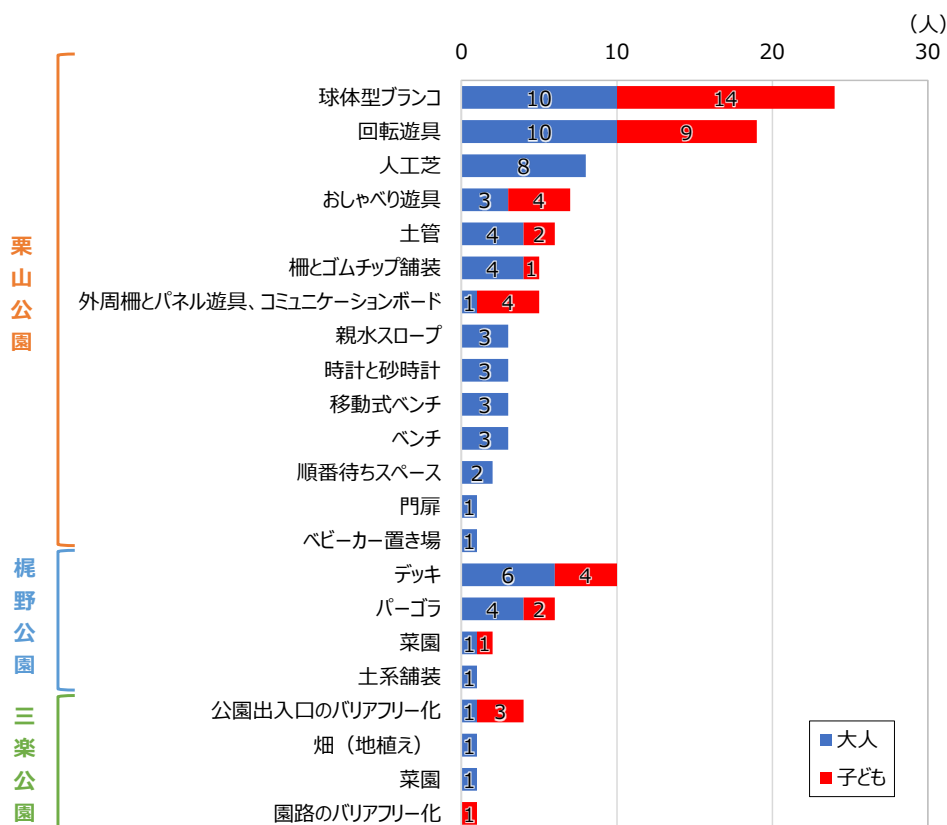
- いろいろな場所でやってほしい。
- とてもよいと思う。
- とても居心地がよく、素晴らしいプロジェクトだと思いました。
- 本当にステキなイベントでよかったです。
- 素敵な取り組みです。
- どんどん進めて下さい。応援・協力したいです。
- 小金井に事務局をもと NGO（一社）WITHPEER をしているので、アフリカ体験できるような形で協力ができるかも。
- SpecialNeeds の子しかいなかった。すでにインクルーシブでない気がした。でもイベント自体は楽しかった。
- 非常に良いことだと思う。
- 障がいのある子たちが、地域で普通に暮らすことができる仕組みの一歩となるよう期待しています！
- 公園より魅力的なものにするうえでも、とても有意義に感じました。
- たき火がすごくよかったです。普段外で火を使って、何かすることなんてないので、火のあたたかさや煙のにおいなどとても懐かしかったです。障がいのある息子にとっては遊具はかなり難しかったです。サポートがないと歩けないのでインクルーシブ遊具だともっと楽しめたと思います。
- 素晴らしいことだと思います。小金井市いいなと思いました。
- 今日はステキな機会をありがとうございました。ミキサーを貸して下さり、一緒のものを食べることができました。
- バリアフリーな感じがよい。大人も楽しめました。公園でコーヒーが飲めるのがよい。子どもが楽しめるイベントも楽しかったです。
- 今日はありがとうございました。
- キッチンカーなど楽しめる場所が複数あって親子で楽しめた。
- とてもよい取り組みだと思いました。
- どんな人もここにいて良いとわかる場所だった。
- 取り組んでくださった方々の雰囲気が温かくて居心地の良い場でした。また次回あれば是非参加したいです。
- 公園が誰にとっても開かれた場である、あって欲しいと心から思えた時間でした
- 施設のような場所に行くには勇気がいるが公園のイベントだとふらっと様子を見に行けるので何かに悩みがある親御さんにはいいと思いました。初めての子育てだとしていいのか、相談場所もわからないという人にもキッカケになるのかなって思いました。
- 今回、参加して本当に楽しかったです！
- マシュマロ焼きがめちゃくちゃ良かったです。幼少期に公園で遊びすぎて、新鮮さがなくなっていた我が子にヒットでした！
- 私はインクルージョンが有効なのは時と場合によると思ってます。でも、遊びの場はインクルージョンであって欲しいです。別に仲良くなくても良いので、お互いに「私はこんな、あなたはこんななんだね。」って認識する場であってほしいです。その場を作ろうとしてくださって嬉しいです。
- 地元にもこういうイベントがあればいいと考えているので参加して勉強させてもらいたいです。
- このような活動があると知ることができて今後の生活に希望が見えた。考えて行動を起こす人達がいるのだと嬉しかった。
- 多方面の皆さんと一緒に地域を盛り上げていく取り組みで、素晴らしいと思います。周辺の地域にも良い影響になると期待しています！

2) シールアンケートの実施

令和6・7年度 整備計画（案）について、良いと思った内容に、大人と子どもで色分けしたシールを貼ってもらった（複数貼付け可）。

① 調査結果

栗山公園はインクルーシブ遊具、梶野公園はデッキ、三楽公園は出入口のバリアフリー化などが特に好評であった。



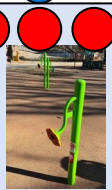
② 結果詳細

結果の詳細を次頁以降に示す。

※写真や舗装などの色は、あくまでも現時点のイメージとして掲載しています。

◆整備イメージ

おしゃべり遊具：
音を楽しむ要素として、フェンスを挟んでおしゃべりができる遊具を整備します。



時計と砂時計：
遊具を待つ時間や遊んだ時間が分かるように時計塔や砂時計を整備します。

移動式ベンチ：
子どもを近くで見守れるよう、移動式のベンチを配置します。

門扉：
外周の柵の出入口は子どもが勝手に出ていけないように門を設置します。

ベビーカー置き場：
子どもが安全に遊べるよう、ベビーカー置き場を設けます。

親水スロープ：
水面を目線で近い位置で眺められる池へのアプローチを整備します。

人工芝：
舗装を人工芝とすることで、遊具でなくても、ねそべる・はうことができます。



ベンチ：
大人の休憩・見守りスペースとして、樹木の下にベンチや縁台を整備します。

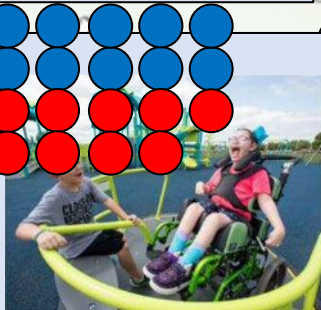
柵とゴムチップ舗装：
回転遊具とブランコの周りに柵を設置して、入口と出口を作ります。遊具の周りは柔らかいゴムチップ舗装にします。



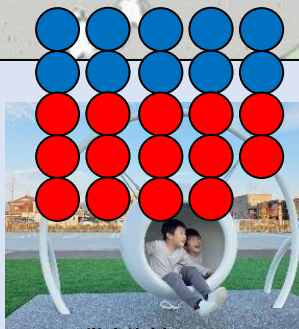
土管：
低木や高木で区切られた範囲に静的な遊びとしてクールダウンゾーンを設けます。製品を用いず、土管を用います。



回転遊具：
車いすのまま乗ることができるシンボリックな遊具としてエリアの中央に近い場所に回転遊具を整備します。



球体型ブランコ：
身体を支えることが難しい子どもでも安定した姿勢で乗ることができる、球体のブランコを整備します。

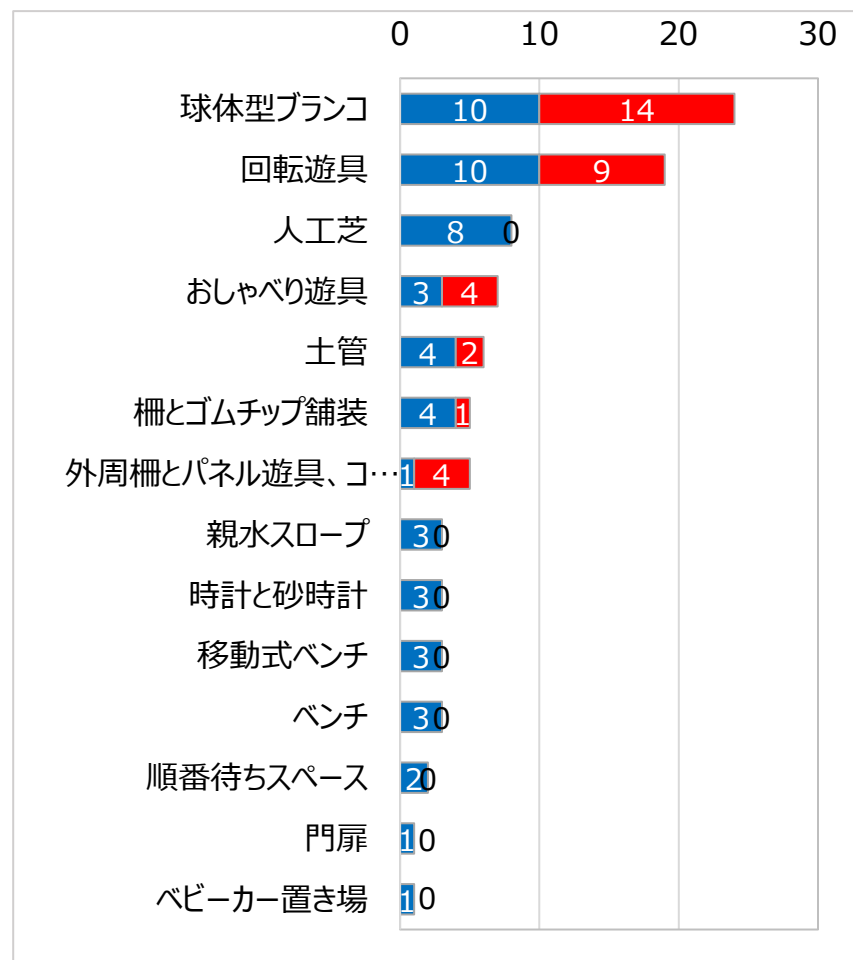


巻末資料2-11

外周柵とパネル遊具、コミュニケーションボード
エリアの外周には飛び出し防止のためフェンスを整備し、一部に遊べるパネルやイラストやメッセージを伝えるためのコミュニケーションボードを配置します。



栗山公園	大人	子ども	計
おしゃべり遊具	3	4	7
親水スロープ	3	0	3
人工芝	8	0	8
土管	4	2	6
回転遊具	10	9	19
球体型ブランコ	10	14	24
時計と砂時計	3	0	3
門扉	1	0	1
移動式ベンチ	3	0	3
ベビーカー置き場	1	0	1
ベンチ	3	0	3
柵とゴムチップ舗装	4	1	5
順番待ちスペース	2	0	2
外周柵とパネル遊具、コミュニケーションボード	1	4	5



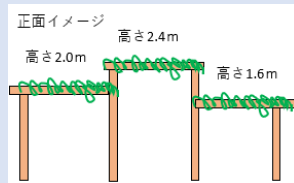
※写真や舗装などの色は、あくまでも現時点のイメージとして掲載しています。

◆整備イメージ（詳細）



こども

パーゴラ：【快適に過ごせる日陰づくり】
パーゴラを設置し、植物で覆うことで快適に過ごせる日陰をつくれます。
園路のカーブに合わせて整備するとともに、パーゴラの柵を園路側に長くし、歩行者と一体感を演出します。また、高さを変えることで、子どもでもパーゴラに実った作物を収穫できます。



菜園：
菜園を整備し、作物や日陰をつくる植物を育てることで、子ども達が土や農とふれあう機会をつくれます。
車いすでも利用できます。



土系舗装

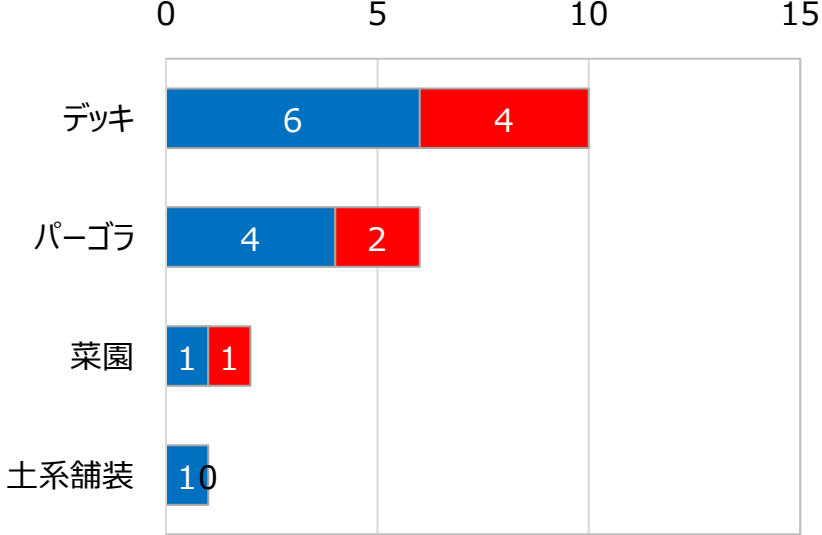
菜園の周りは自然な土系舗装とし、車いすでも移動しやすくします。

デッキ：

パーゴラの下はデッキを整備し、座ったり、寝転んだりできます。デッキに立って、パーゴラに実った作物を収穫できます。



梶野公園	大人	子ども	計
パーゴラ	4	2	6
菜園	1	1	2
デッキ	6	4	10
土系舗装	1	0	1



◆整備イメージ（詳細）

● おとな

● こども

木柵（ラティス）：
住宅への目隠しとします。

木柵（ネット）：
広場で野球やサッカーで遊んでも安心して移動できるようにネットの木柵を整備します。

畑（地植え）：
土の上ののって栽培を体験できる畑を整備します。●

土管の築山：
障がいの有無に関わらず遊べる、土管の築山を整備します。築山の舗装はゴムチップ舗装とすることで、登ったりはったりできます。築山の周りの平坦部もゴムチップ舗装とします。



公園出入口のバリアフリー化：
出入口の勾配を緩やかにし、車いすやベビーカーでも入りやすくします。●●●●

ベンチ：
大人の休憩・見守りスペースとして、樹木の下にベンチを整備します。

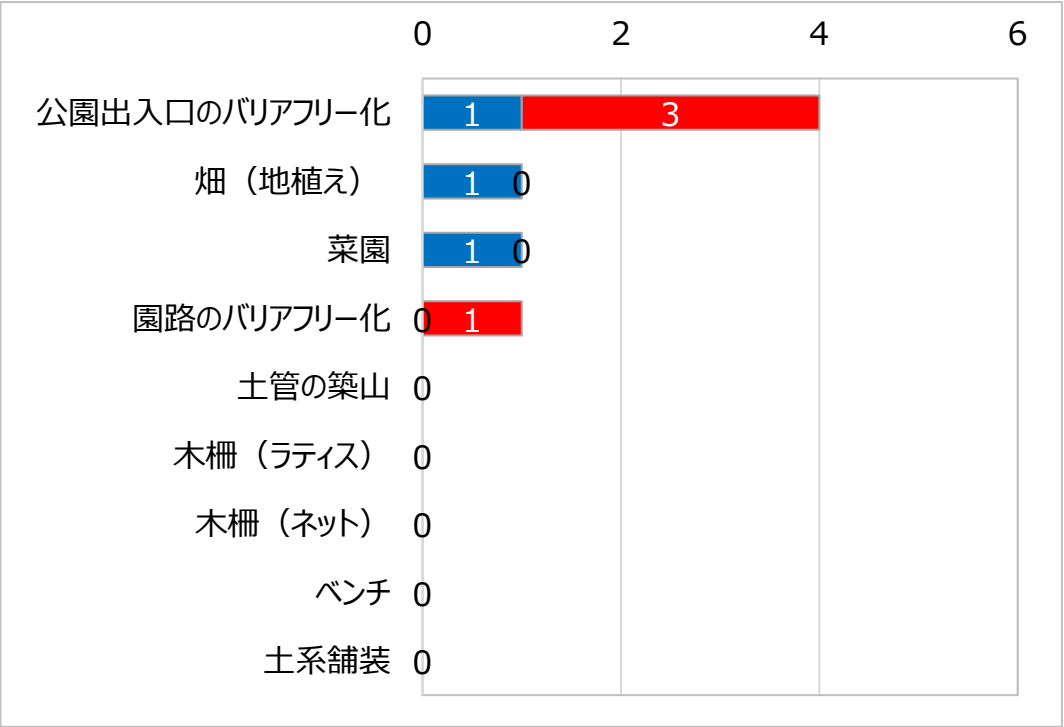
土系舗装
菜園の周りは自然な土系舗装とし、車いすでも移動しやすくします。

菜園：●
住宅が近いので、静かに利用できる菜園を整備します。
車いすで利用できる菜園や、果樹や野菜が栽培できる複数の形状の菜園とします。



園路のバリアフリー化：●
広場の範囲を変えないで、園路を整備し、車いすやベビーカーでも移動しやすくします。

三楽公園	大人	子ども	計
畑（地植え）	1	0	1
土管の築山	0	0	0
菜園	1	0	1
木柵（ラティス）	0	0	0
木柵（ネット）	0	0	0
ベンチ	0	0	0
土系舗装	0	0	0
園路のバリアフリー化	0	1	1
公園出入口のバリアフリー化	1	3	4



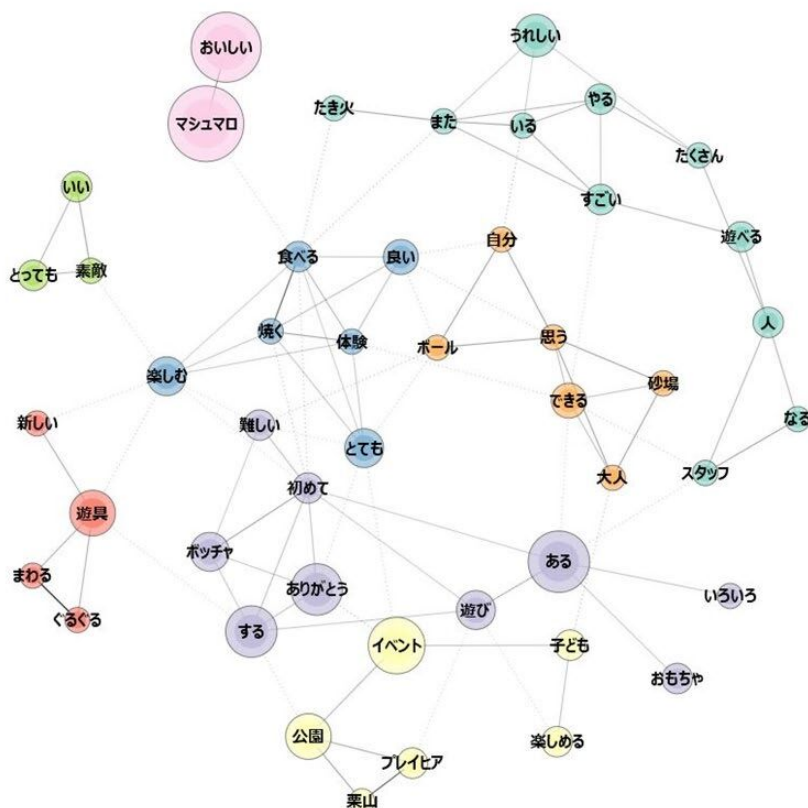
3) 付箋アンケートの実施

栗山公園のんびりデーに参加した感想を、大人から子どもまで、自由に付箋に書いて貼ってもらった。

①調査結果

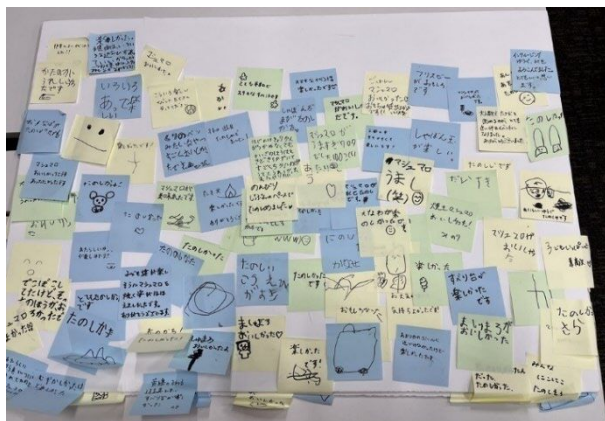
焚き火とマシュマロやポッチャ体験などに関する感想が多くあがった。また、“楽しい”、“ありがとう”などの、栗山公園のんびりデーに対する肯定的な感想が多くあがった。

	頻出ワード	出現数
1	楽しい	70
2	マシュマロ	20
3	イベント	11
4	ありがとう	9
5	シャボン	7
6	公園	7
7	遊具	7
8	ポッチャ	5
9	楽しむ	5
10	遊び	5



感想で多くあがったワードとその相関性

②結果詳細



1. 全体的にゆったりしていて楽しい
2. おにいちゃんからもらったガム、自分でもらったうまい棒がおいしかったです
3. すてきなイベント企画をありがとうございます！子どものびのびです！
4. 楽しかったです、次回もぜひ！！
5. マシュマロが楽しかったです
6. 滑り台楽しかった、シャボン玉も楽しかった
7. たくさんの人に会えてうれしいです！！
8. たのしいとってもとっても大好き！！
9. 手足が不自由な私も一緒に子供と楽しめる公園、イベントに感謝

10. 誰もが集えて楽しめる場所がありました。
11. いつも出来ない体験ができて楽しかったです！
12. いろいろあって楽しかった！
13. マシュマロがおいしかったです
14. マシュマロ焼けてうれしかった
15. すべりだいが楽しかった
16. 楽しかった
17. ポッチャが楽しかった
18. ぐるぐる回る遊具楽しかった
19. マシュマロがしいたけになっておもしろかった
20. 自然の中で楽しいイベント孫もとても喜んでいました。ありがとうございます
21. ぐるぐる回る遊具楽しかったするやつうちに
22. たのしかった
23. プレイヒアーたのしいです、あそんだりして楽しかったです、楽しい遊びですね
24. 楽しかった
25. 竹トンボがあり道具あり、楽しかった！焼きマシュマロ初めて食べた！
26. 親子で遊べてすごく楽しいし、食べ物もおいしい！！
27. 前にお友達と栗山公園で約束したのが楽しかった
28. いろんな遊びやふれあいあいの場で楽しめそう！
29. シャボン玉がたのしかったです、ありがとうございました
30. いろんな遊びがあつてうれしい
31. マシュマロ売切れた
32. マシュマロ焼いて食べるのがとても楽しく、おいしく、良い体験でした！家族が楽しみました
33. ポッチャたのしいよ
34. たのしいです
35. たのしかった
36. 初めてポッチャをしました、意外と楽しかったです、楽しませていただいてありがとうございます
37. たのしいです。
38. たのしいくりやまこうえんのプレイヒアーたのしい
39. 大人も子供もみんな笑顔
40. いろんなおもちゃがあつて楽しい
41. マシュマロおいしかったです
42. マシュマロ
43. マシュマロがおいしかった
44. 楽しかった
45. 自分が思っていたところにボールがいて、よかったです
46. マシュマロがおいしかった
47. あったかくて、時にいい風が吹いて、いいにおいもしてとても素敵な時間でした
48. 食事おいしかったし、こんな公園だったんですね。良いイベントです！
49. マシュマロおいしかったです。大人もできて嬉しかった。高さのある砂場、なるほどと思いました
50. おもちゃがたのしかった
51. "スタッフさんへくり山公園のイベントを開いてくださりありがとうございます。また、イベントを開く時頑張ってくださいね。応援しています。イベントがなくても、くり山お公園で遊びますね！がんばってあきらめないで。"
52. たのしかった、ありがとうございます
53. マシュマロおいしかった、食べるたのしかった
54. ポッチャがあるのは知りませんでした、東京都小金井
55. しゃぼん玉が、すごく大きいのができて楽しかったです
56. しゃぼん玉が、楽しかった

57. なわとびがたのしかった
58. 遊具が楽しかった
59. 相手のボールにぶつけるのが難しかったけど、とても楽しかった
60. 少しの工夫で人が集まって楽しくなるのが分かった！（でも、スタッフの方たちのおかげですね）
61. 色々なおもちゃがあって、楽しかったです。エンバンが楽しかったです
62. すべり台がたのしかった、ありがとう
63. たき火でマシュマロを食べたりココアを飲んだりするのが楽しかった、また行ってみたい
64. 東小金井、素敵な街ですね！バリアフリーのイベント楽しめました！
65. ご飯おいしかったです！たき火サイコー！
66. シャボン玉が楽しかったです
67. シャボン玉たのしかったです
68. またやって下さい
69. 楽しかった
70. そういう「ゆうぐ」があればいいなとおもった
71. とても楽しかった、あたたかいイベントありがとう
72. いろんなあそべるものやひまな人もあそべる、たのしい。
73. マシュマロづくりとってもたのしかったです、こうちゃづくりあじがおもしろかったです
74. いろいろな遊びがあって楽しかった、はじめてポッチャした、ありがとう
75. 非常に楽しいイベントでした
76. かたのがうれしかったです
77. お砂場が楽しかったです
78. マシュマロおいしかったです、あたたかかったです
79. カフェラテを作ってもらってうれしかった
80. でこぼこしてたけどそっちの方がおもしろかったです
81. 新しい遊具が追加されたのと、マシュマロがおいしかった
82. 楽しかった、理由は色んな遊びがあっていいから。もう一つの理由はスタッフとながなわができた。
83. いろいろあって楽しい
84. 楽しかったです！
85. たのしかった
86. 楽しかった、おいしかった
87. マシュマロが良かった
88. 難しかったけど楽しかった
89. マシュマロおいしかった
90. 緑の遊具楽しんできました
91. くりのパンみたいなやつおいしかったです
92. たのしかった
93. 新しい遊具が楽しみです
94. とてもたのしかったです
95. 赤のかち！楽しかった！
96. こういう楽しいイベント、たくさんやってください
97. シャボン玉が楽しかった
98. はじめはきりかんがつかめなくても、さいごの方はときどき近づいて、すごく近いのが打ててうれしかった、またやりたい
99. マシュマロおいしかったです
100. たのしかった
101. 楽しかった
102. マシュマロおいしかったよ
103. とても平和で素敵なイベントです
104. マシュマロおいしかったです！

105. マシュマロがうますぎワロタでした、100 個食いたい
106. たき火、楽しかったです、ありがとうございました
107. たのしかった
108. 子ども達が楽しそうにマシュマロを焼く姿がほほえましかったです、ありがとうございます
109. 黄緑のまわる遊具と赤いすべり台が楽しかった
110. ステキなイベントたのしかったです。
111. ありがとう
112. のんびり、じぶんのペースで楽しめました
113. 楽しいこうえんがすき
114. マシュマロおいしかった
115. あかい
116. 大縄がいつとぶかわからなくて、おもしろかった
117. 楽しかったです
118. 楽しかったです！
119. マシュマロおいしかったよ！
120. ごはん、マシュマロおいしかった、おもちゃ貸し出しよかったです！
121. 公園の中歩きやすくて楽しいです！
122. マシュマロ焼くの楽しかった
123. 楽しかった
124. おもしろかった
125. 楽しかったです！
126. フリスビーがおもしろいです
127. シャボン玉が楽しい
128. マシュマロがやりやすくて楽しかったです
129. 楽しかった
130. 天気が気持ちよかったです！
131. あまり白のボールに近づけなかったけど楽しかったです！
132. マシュマロがおいしかったです！
133. 大人数でたき火を囲めるのがとてもよい休日イベントになりました
134. マシュマロうまし（笑）
135. 大なわが楽しかったです
136. すべり台が楽しかったです
137. マシュマロがおいしかった
138. たのしい
139. たのしかった
140. だいすき
141. 楽しい
142. マシュマロがおいしかった
143. 楽しかった
144. 思ったより簡単だった、楽しかった
145. インクルーシブ遊具とても喜んでました、とてもいいと思います
146. たのしいです
147. 焼きマシュマロおいしかった
148. マシュマロがこげました
149. みんなにここ楽しそうでした
150. 新しい遊具がたのしみです
151. マシュマロがおいしかった
152. 子どもいっぱい、素敵

2.1.2 栗山公園会議の実施

栗山公園のんびりデーを開催するにあたり、地域と協働しながら企画・準備を行うため、栗山公園会議を実施した。

議事概要を次頁以降に示す。

小金井みんなの公園プロジェクト 栗山公園会議 議事概要	
日時	2024 年 08 月 19 日（月） 10 時 00 分～11 時 45 分
方法・場所	社会医学技術学院 会議室
出席者	熊井氏、亀井氏、中山氏、清野氏、江頭氏 小金井市：小林係長・山崎氏 / PCKK：荒
◆主な打合せ内容 ①栗山公園・居心地会議について ②出張授業について ◆協議内容 ①栗山公園・居心地会議について ・ 開催時間は 11：00～17：00 に変更。 ・ イベント開催が目的ではないため、イベントを通して何を達成したいか、メンバー内で共通認識を持つておくことが重要。 ・ 本イベントはコミュニティの醸成が目的の一つであり、「居心地会議」には“ここに良い”というメッセージも込められている。当事者の方との会話も生みだしていきたい。 ・ 教育長が参加できなくなったため、焚火・マシュマロは亀井氏が担当。 →会話が生まれる場として、定期的に暖かい場所が必要であり、焚火が重要になる。 ・ 栗山公園は遊具に頼らない遊びも豊かにしていくことで、様々な遊びを体験できる公園であるべきと考える。 ・ 公園で活動報告をすることで、気軽に会話することができる。 ・ 本プロジェクトで検討している、社会的資源の活用モデルケースとして、健康運動センターのトイレや医務室の利用を検討している。 ・ イベントにあわせてインクルーシブ遊具の試験設置を行うが、並びやすさなど遊びのルールを検証していく場とする。 ・ インクルーシブ遊具は令和 7 年度に整備予定であり、整備前後にイベントを開催するなど、継続展開していけると良い。 ・ 障がいのある子どもの親にとって公園は、子どもを連れて行って遊ばせて、疲れてしまう場所でもあるが、マイペースカフェがあると一息できる場所になる。 ・ 障がいがある方の就労環境について、選択肢が少ないことに違和感があり、もっと選択肢があっても良いと思っている。マイペースカフェは障がいのある人が自発的に働いている良い例であると考えており、多くの人に知って、経験してほしいと考えている。 →流行りのカフェを入れていくのではなく、このようなカフェを公園に入れていくことで、就労支援にも公園の有効活用にもつながるのではないか。	

- ・ インクルーシブフードとして、地場野菜の豚汁とお惣菜の提供を考えている。テントとキッチンカーを置くスペースがあれば、実施可能である。
- ・ あわせて、流動食についてわかるパネルなどを設置したい。食のインクルーシブについてメッセージを発信することで、普及啓発につなげていけると良い。
→各ブースにメッセージが書ける黒板塗装の看板を設置し、メッセージを伝えていけると良い。
- ・ 保健所等に確認が必要だが、マイジャーの利用も考えられる。
- ・ 嚥下食は傷みやすいため持ち歩きが難しく、電子レンジもないため、外で美味しい食事を子どもに食べさせるのは実はハードルが高い。障がいのある子どもをもつ親にとって、公園利用のハードルの一つにもなっている。
- ・ イベントにあわせて栗山公園のマップを作成し、そこにメッセージを込めていきたい。清野氏に作成に協力いただきたい。
- ・ 小金井ひがし地域包括支援センターにも参加いただくのはどうか。包括支援センターとしては、存在を知ってもらい利用のハードルを下げたい、という思いがあるようである。関係者も巻き込みながらやっていると良い。
- ・ 栗山公園は、市が目指す公園のモデルになるのではないかと考えている。
- ・ その他のアイデア
 - ジャガイモ、サツマイモなどの食べ比べ
 - 音楽（亀井氏奥さん）

②出張授業について

- ・ 候補日：9/18（水）又は10/9（水）
- ・ 日程や内容の詳細等については今後学校と調整。清野氏のお子さんは体調により欠席の可能性もあることを予め伝える。駐車場は利用可。
- ・ 11/16（土）の公開講座については、予定が合わないためお断りする。
- ・ 今回取扱うテーマに答えはなく、子どもたちには自由に考えを声に出してほしい。
- ・ 資料があるとそちらに集中してしまうため、特に資料等は用意せず、対話を重視する。
- ・ 清野氏の手作り絵本について、何らかのかたちで発信していきたいと考える。方法等については今後検討。

◆今後のスケジュール・役割分担

- ・ 全体打合せ：10/7（月）10：00～社会医学技術学院
- ・ 次回全体打合せまでにそれぞれの内容で別途調整等行い、打合せではマップたたきをもとに、本イベントを通して達成したいもののすり合わせを行う。
- ・ 広報を実施日の1か月前、11/1から行えるようスケジュールを設定する。市の広報誌に載せるため、10月上旬には内容を確定させる。

- ・ 個別の案内は市内支援学校、近隣小学校に行う。
- ・ 役割分担は以下のとおり。

熊井氏	・ 全体調整
亀井氏 (焚火大好き亀井おじさん)	・ スタンドの設え検討 (イメージ参考：パーラー公民館)
中山先生 (遊び&駄菓子おじさん)	・ 遊具にたよらない遊びの検討(社医学備品で活用できるもの・新たに準備すべきものを整理)
清野氏	・ 栗山公園 MAP の作成(妹さんにも協力依頼) ・ マイペースカフェとのコンタクト
江頭氏	・ キッチンカー、インクルーシブフードの手配
小金井市(小林氏・山崎氏)	・ 小金井ひがし地域包括支援センターへのコンタクト
PCKK(荒)	・ 全体スケジュール管理

以 上

小金井みんなの公園プロジェクト 栗山公園会議② 議事概要	
日時	2024 年 10 月 7 日（月） 10 時 00 分～12 時 10 分
方法・場所	社会医学技術学院 会議室
出席者	熊井氏、中山氏、清野氏、江頭氏 社会福祉協議会：菊池氏・藤原氏 小金井ひがし地域包括支援センター：金子氏 小金井市：小林係長・山崎氏 / PCKK：荒
◆決定事項 ・ 当日は 10:30 に朝礼@インフォメーションセンターとする。それまでに準備できるよう各自集合とする（事務局 9 時、その他 10 時頃を想定）。 ・ 雨天の判断は前日の 17 時とする。その旨をチラシにも追記する。 ・ 雨天時は社会医学技術学院の 1・2 番教室を使用する。 ◆協議内容 ①イベント全体について ・ 当初、“居心地会議”としていたが、「会議」とすると少し身構えてしまう方もいるかと思い、“のんびりデー”に変更した。 ・ 本イベントは、イベントが目的ではなく、より良い小金井市にしていくためのきっかけになることが目的である。 ・ 立地や、健康運動センター、社医学など周辺施設などの面でも、栗山公園は市においても重要な場所になるのではないかと考えている。 →今回、屋内もあるということが、障がいのある子どもやその保護者にとって大きいと感じる。 ・ 食のインクルーシブについても、今回重要なテーマになるのではないかと考えている。 ・ 当日来てくれた人のためにも、来年・再来年と特別なイベントとして企画しなくても行われていくことが目標である。 ・ チラシを早めに作成し、身近な人に配ってもらいたい。来てもらいたい人の顔を思い浮かべながら準備していくことで、より良いイベントになっていくと思っている。 ・ 本イベントが、色々な人が一歩進むきっかけとなるのではないかと考える。 ②駐車場等について ・ 社医学の駐車場は 10 台程度駐車可能。中庭も利用できないか調整してみる。 →お借りできる場合、何台くらい止められるか要確認（福祉車両の大きさを考慮） ・ ネットでの予約制にすると良いと思う。チラシでも事前予約制であることを記載した方が良い。ナンバーは申込時の記載、当日のチェックは必要かと思う。 ・ 申込者には別途、駐車場所など事前にオペレーションできると良い。	

- ・ 申込・問合せ先は環境政策課として、フォームを作成する。当日は駐車場対応として、市の職員を2～3人配置する。
- ・ 申込がいっぱいになってしまった場合は、近くのコインパーキングを紹介するなどの対応を行う。つきみの園の駐車場も使用させていただけるとありがたい。
- ・ 関係者用駐車場2台分（石野氏、カメラマン）は公園内に準備する。

③イベント内容について

- ・ 配置はバーベキュー広場寄りにまとめて設置し、コンパクトにする。バックネット側は使いたい人が使えるようにする。
- ・ 雨天時もフードトラックの出店は可能である。
- ・ 社協、ひがし包括にて、駄菓子屋コーナーとあわせてポッチャ体験を検討している。
- ・ 相談コーナーとすると身構えてしまう人もいるため、社協・ひがし包括の方には、気軽に会話の中で相談できる雰囲気・スタンスでいていただきたい。
- ・ おむつ替えスペースとトイレは健康センター、社医学が利用可能。健康センターの2階も使用可能（現時点では関係者控室を想定）。
- ・ おしゃべりしやすい雰囲気をどのようにつくっていくかが重要と考える。関係者は養生テープに名前を書くなど、ラフな雰囲気の方が、参加者も接しやすいと思う。
- ・ 一方で、困った時などのために、インフォメーションセンターを設置することが必要である。

④備品等について

- ・ 現在、亀井氏が緑中学校の不登校の学生たちと一緒に看板を作成しており、当日も参加してくれる予定である。設置は当日になると想定している。
- ・ 看板は、吹き出しが両側に2つ出ており、真ん中に立つとその人がしゃべっているようなデザインとなっている。片側には本プロジェクトについて、もう片側にはチラシケースがついており、本プロジェクトのチラシや支援学校のPTAの方のメッセージをチラシ化したものを入れようと考えている。
- ・ フードトラックにも少し椅子があると良い。
- ・ 全体的に、貸してもらえると良いかもしれない。
- ・ →全体的に、貸してもらえると良いかもしれない。ゴザは裏がアルミのものが良いかと思う。クッションシートなども良いかもしれない（清野さんと熊井さんとで別途調整）。
- ・ 駄菓子はうまい棒やじゃがりこ、綿あめなどが人気と聞く。
- ・ 駄菓子をいれるハコが必要。テーブルの高さも低いものもあると良いかもしれない。→椅子で代用したり、手で箱をもってあげる方がかえって良いかもしれない。
- ・ 市の赤ちゃん休憩室を手配、清野氏のポップアップテントも予備用として当日準備いただく。
- ・ 薪は学芸大を通じて手配が可能と聞いている。チラシの協力クレジットに追加するか確認。

- ・ インクルーシブ遊具の柵替わりの三角コーン&紐は、入りづらい雰囲気になる可能性があるため、今回は不要。
- ・ 看板（各コーナーとインフォメーションセンター）は手書きが良いと思う。

⑤アンケートについて

- ・ アンケートは、事後は集まりにくいとため、紙での回答依頼を基本とし、WEBでの回答も可能なように、二次元コード記載のカードを用意・配布するのが良いかと思う。
- ・ 今後の情報発信ができるように、希望者は連絡先を記載できるようにしておくが良いと思う。
- ・ 子どもたちなど、みんなの声として、パネルアンケートを用意する。今日の感想を付箋にその場で書いてもらうこととし、回答したら駄菓子をプレゼントする。

⑥チラシについて

- ・ 学校への配布は支援施設のみとし、市経由で配布してもらう。
- ・ 雨天時の内容をもう少し詳細（子どものあそびコーナーもあるよ、など）に記載できると良い。
- ・ 室内も使えることを記載（中でもすごせるよ、など）できると良い。
- ・ 問合せ先をもう少しわかりやすくすると良いかもしれない。

◆今後のスケジュール・役割分担

- ・ 全体打合せ：11/11（月）10：00～社会医学技術学院
- ・ 11月頭にはチラシが手元に届くよう、10/15 チラシをFIXし、1,000部印刷。10/21頃メンバーに配布し、順次渡せるように手配。

【次回までの確認・作業事項】

熊井氏	・ チラシ修正
亀井氏	・ 看板作成
中山先生	・ 遊具にたよらない遊びの検討 ・ 中庭の駐車場利用確認
社協・ひがし包括	・ つきみの園駐車場利用の確認 ・ ボッチャ体験の詳細確認
小金井市（小林氏・山崎氏）	・ 駐車場申込みフォームの作成 ・ 赤ちゃん休憩室の借用手続き ・ 薪の確認 ・ アメニスへチラシ協力クレジット記載の確認
PCKK（荒）	・ 実施計画更新、詳細詰め ・ アンケート案の作成

以 上

小金井みんなの公園プロジェクト 栗山公園会議③ 議事概要	
日時	2024 年 11 月 11 日 (月) 10 時 00 分～12 時 00 分
方法・場所	社会医学技術学院 会議室
出席者	熊井氏、中山氏、清野氏、石野氏、菊池氏、藤原氏、金子氏、榎本氏 小金井市：小林係長 / PCKK：荒
◆協議内容	
①イベントの在り方について	
・ イベントは結果至上主義になりがちだが、今回はイベントが目的ではなく、イベントを通じて新たな気づき・議論が起きることが重要と考える。 ・ ニーズを受け止めていく場が必要であり、今回のイベントがそのような場になると良い。 ・ 一方で、ニーズを聞いて終わりではなく、聞く前と後とで変化がなければいけない。好事例を共有し、再現性を高めるためにはどうすれば良いかをみんなで話し合う場になると良い。参加者をお客さんではなく、パートナーとしていきたい。 ・ 再現性を高めていくことが社会に浸透していくことにつながる。 ・ いかにゆるく楽しくやるか、運営側がリラックスしていることが必要であると考え。運営側だけでつくりあげると地域が入れなくなる。すきまは常につくっておくべき。 ・ あるもので何かできないかという気持ち、専用の道具でなくても、あるもので工夫するアイデアが重要。これは日常でも活かせる考え方であり、インクルーシブ遊具に頼らない遊びなどにもつながる。インクルーシブな社会の実現には必要と考える。 ・ 「不便益」(不便によって得られる益)という考え方があるが、環境を整備しすぎると心のバリアフリーがなくなる。(点字ブロックの例：点字ブロックの整備によって会話・交流が減った) ・ 障がいのある子どもとその親だけでは、公共の場は厳しい。協力してくれる人が誰か一人いてくれるだけでも全く変わる。 ・ 障がいのある子は、会話にはならなくても、意外と伝わっている。コミュニケーションをとることが大事。 ・ 広報と集客は、顔が見える人を思い浮かべることが重要であり、その人たちのことを考えて環境を整えておくことが必要。 ・ まずは共感・理解してくれる人が集まり (ファーストサークル)、今後面的に広めていく形が良いと考える。 ・ 栗山公園の掲示板にもチラシを貼りだしておいてほしい。もちろん、いつも来れない人たちに来てほしいが、日常的に利用している人にも知らせて来てほしい。 →公園の掲示板と健康運動センターにチラシを貼りだせないか確認する。 ・ 15 日に駐車場の予約フォームをオープンにする。申込状況で当日の集客が予想できるかと思う。予約状況については共有する。	

②イベント当日の運用等について

- ・ 撮影 NG の方には、インフォメーションセンターまたは駐車場でシールを配布する。
- ・ パイプ椅子は社協からも持参する。その他、公園の既存のベンチを使ってもらったり、椅子やシートなどは各自持ち寄りにできると良い。
- ・ 手伝ってくれる社医学の学生は現在 13 名程度。もう少し増える可能性もある。
- ・ マイペースカフェで焼き菓子販売・物販も行う。新しく、なっちゃんも参加予定。
- ・ 市の赤ちゃん休憩室はフードトラックの裏あたりに設置する。
→赤ちゃん以外も使用するため、「赤ちゃん休憩室」とは掲げないでほしい。
- ・ 関係者用駐車場は社協・石野氏が使用する。
- ・ ケガ等の発生に備え、PCKK にて簡易的な救急セットを準備する。横になる必要が出た場合は、健康運動センターの医務室を利用する。
- ・ ボッチャで使えるスロープのようなものが社医学にないか、確認する。

◆今後のスケジュール

- ・ 当日は 10 時 30 分の朝礼に間に合うように各自準備を行う。(事務局は 9 時集合・設営開始予定)

【当日までの確認・作業事項】

亀井氏	・ 看板作成
中山先生	・ 遊具にたよらない遊びの準備 ・ ボッチャに使用できるスロープの有無確認
小金井市	・ 公園掲示板、健康運動センターへのチラシ貼りだしの調整 ・ 駐車場利用申込みの確認・調整
PCKK	・ 実施計画更新 ・ 備品等の準備 ・ アンケートの作成

以 上

2.1.3 インクルーシブ遊具の試験設置

(1) 実施概要

期間：令和6年12月1日（日）～12月15日（日）・計15日間

場所：栗山公園

目的：①インクルーシブ遊具について理解を広げる

②インクルーシブ遊具の実際の使われ方・遊び方を把握する

③導入に向けた配慮事項の有効性を確認する

設置遊具：①回転遊具、②砂場（車いす対応）、③コージードーム

設置遊具のイメージと配置場所は以下のとおり。



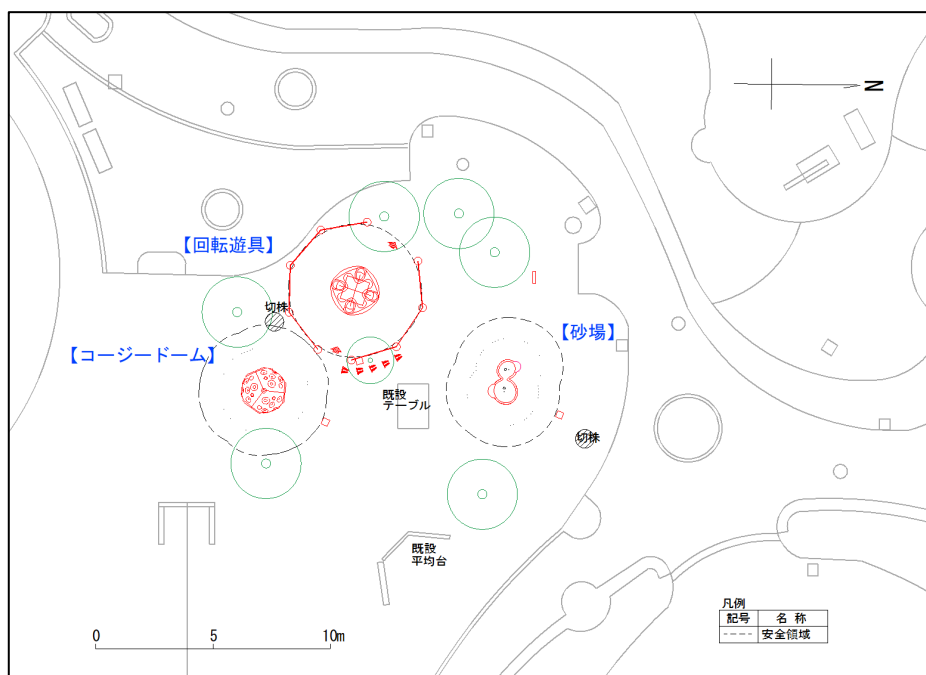
回転遊具



砂場（車いす対応）



コージードーム



遊具の配置位置図

(2) 検証内容

目的ごとに検証内容の調査方法と調査日を以下の通り整理した。

なお、調査については、以下の日程を調査日として設定した。

①イベント日（栗山公園のんびりデー開催時）：令和6年12月1日（日）

障がいのある子ども・一般の子ども共に、多くの利用が想定され、全調査内容について確認することが可能。

②休日：令和6年12月8日（日）

障害がある子（保護者）と一般の子どもの日常的な利用を把握することが可能。

③平日：令和6年12月5日（木）／12月12日（木）

障がい者支援団体等にも利用してもらい、障がい者の視点からインクルーシブ施設の利用性を確認してもらうことが可能。

目的	検証内容	調査方法	イベント日	休日	平日
インクルーシブ遊具の理解を上げる	インクルーシブ遊具の導入の賛同意志	➤ のんびりデーアンケート調査（問8の設問4）	○		
使われ方、遊び方の把握 ※遊具全般	子どもたちが皆一緒に遊んでいるか	➤ 目視観察 【チェック項目】 ・障がいがある子どもと一般の子どもが一緒に遊んでいるか ・未就学児と小学生と一緒に遊んでいるか	○	○	
	遊び方サインの有効性（遊び方を子どもが理解しているか）	➤ 目視観察 【チェック項目】 ・危険な遊び方をしていないか ・交代して遊んでいるか。	○	○	○
配慮事項の有効性の確認（順番を守る工夫） ※回転遊具	遊具の待機スペースに配置した足跡マークの有効性	➤ のんびりデーアンケート調査（問8の設問5） ➤ 目視観察 【チェック項目】	○	○	○
	入口、出口の矢印サインの有効性	・足跡マークに並んでいるか ・入口出口を守っているか	○	○	○

(3) 準備

検証にあたり、以下の用具等を現地に配置した。

目的	現地確認内容	設置するもの	材料
使われ方、遊び方の把握 ※遊具全般	遊び方サインの有効性（遊び方を子どもが理解しているか）	遊び方の案内サイン ※遊び方や注意点はメーカー標準の説明を用い、注意点はイラストでも内容を示す。	用紙をラミネート加工し、カラーコーンに吊るす。

(4) 検証結果

検証結果を以下に整理する。

目的	調査日			検証結果
	イベント日	休日	平日	
①インクルーシブ遊具の理解を広げる				
インクルーシブ遊具への理解	・ のんびりデーアンケート調査で、「インクルーシブ遊具の設置」について、とても有効であるが63%、どちらかというと有効であるが25%となった。	—	—	・ 合計で88%が肯定的な意見となり、インクルーシブ遊具の導入に肯定的であることが分かった。
②使われ方、遊び方の把握				
使われ方、遊び方の把握	・ 障がいがある子どもの順番となった際は、先に遊んでいる一般の子どもがそのまま一緒に遊んでいた。 ・ 回転遊具では、障がいがある子どもや未就学児が回転速度の速さに怖がった際は、その様子に気づいた子どもや大人がゆっくり回そうなどと注意して、楽しく遊んでいた。 ・ 順番を待っている子どもがいた際には、遊んでいる子どもがその様子に気づいて、他の子どもに伝え、遊具に乗っている子どももみんな待っていた子どもが座れるようにスペースを空けて一緒に遊んだり、遊具から降りて座るスペースを譲っていた。 ・ 回転遊具から降りたいと話す子どもがいた際には、回している子どもが回転を止めて降ろしてあげていた。	・ 複数の小学生（高学年）が回転遊具で遊んでいる際に、数人の未就学児が待っていたため、小学生がみな遊具から降りて、未就学児に遊具を譲っていた。	・ 障がい者支援団体が利用した際は、ほかの子どもがいなかった。 ・ 遊ぶ時間が短かったので、コージードームの中で休憩することはなかった。 ・ 外国ルーツの子どもと未就学児が回転遊具で一緒に遊んでいた。	・ 知らない子ども同士で一緒に遊んだり場所を譲ったりしており、インクルーシブ遊具では、みんなが一緒に遊ぶことが分かった。 ・ 他の子の様子を見たり声を聞いたりしながら、自分勝手な行動をせずに、みんなで遊べることが分かった。
遊び方サインの有効性	・ 遊具の入口に付けたサインは、少数ではあるが内容を確認する子供がおり、遊び方や注意事項を見て一緒にいた他の子どもに説明していた。	—	—	・ サインを置くことで子どもに遊び方や注意事項を説明できることが分かった。
③配慮事項の有効性の確認				
順番を守る工夫	・ 小学生、未就学児ともに、足跡マークに並んで順番を待つことが確認された。 ・ 順番に並ばない子どもがいる場合では、すでに並んでいる子どもが足跡マークに並ぶことを説明していた。	・ 順番待ちになることはほとんどなかった。	・ 障がいがある子どもは、サポートの大人と一緒に行動し大人が誘導して足跡マークに並んで順番を待っていた。 ※サポートの大人が常に一緒にいたため、障がいがある子ども一人で並ぶ様子は確認できなかった。	・ 足跡マークを見て順番に並んだり、順番に並んでいる子どもが後から来た子どもに並ぶことを説明することが分かった。

入口・出口 の設定	・ 回転遊具の周りを囲い、入口出口のみ開けていたので、入と出の矢印を見て、多くの子どもは入口から入り、出口から出ていた。 ・ 中には、入口から出る子どもが時々いたが、順番に並んでいたため混乱は生じなかった。	—	・ 障がいがある子どもは、サポートの大人と一緒に行動し大人が誘導して入口から入り、出口から出る様子が確認された。	・ 遊具の周囲を囲み入口出口だけを開け、入と出を示す矢印を示すことで、ほとんどの子どもが入口と出口を認識して利用することが分かった。
入口・出口 の矢印サインの有効性	・ のんびりデーアンケート調査で、「遊具の順番待ちマークや、出入口の表示の明確化」について、とても有効であるが 57%、どちらかというと有効であるが 25%であった。	—	—	・ 合計で 82%が肯定的な意見であり、順番待ちのマークなどの効果は肯定的であることが分かった。
その他	—	—	・ 精神的な障がいがある子どもは大人が常にサポートし、子どもが移動するとすぐに子どものそばに付いて移動していた。	・ 広場の外周に柵と門があると子どもが別の場所に行けないため、大人のサポートが軽減されると想定された。
	—	—	・ 精神的な障がいがある子どもはサポートする大人が終わりの時間を子どもに説明しながら遊んでいた。	・ 精神的な障がいがある子どもは、遊びの終わりの時間が事前に分かると、時間が来た時に遊びを終わりとやすくと想定された。

2.2 菜園整備に向けた協議およびプレイパーク連携推進（梶野公園）

2.2.1 菜園整備に向けた協議

来年度以降の菜園整備に向け、地域を交えた協議を行った。

(1) 第一回協議：令和7年3月4日（火）

- 都市農業のPRとしての位置づけも考えられる。
- 地域の農業事業者の方にも協力いただけると良い。
- 農業事業者のメリットをどう描くか、スキーム構築が必要。顔の見える化を深化・拡張するイメージで、地場野菜を買うことにつなげていけると良いかもしれない。
- 年々市内の農地は減っている状況。農を活用した学びができると良い。身近な場での農体験を通じて農業を応援してもらえると良い。
- （仮称）パークエリアマネージャーを制度化し、公園での野菜販売を通じて公園の見守り活動につなげられると良いかもしれない。
- まちおこし協会などの中間支援団体が関われると良い。
- インターネットに出てこない情報が地域だけで循環していくことで、シティープロモーションになり、シティブランディングにつながる。
- 何を作るかによって土づくりも変わってくる。

(2) 第二回協議：令和7年3月11日（火）

- 公園の活動をどう地域に紐づけるか。公園は社会実験の場、人の舞台であり、活用していくべき。
- 将来的には地域のボランティアに繋がることが良い。就労支援を利用されている方は、職員に認められるより、社会に認められることの体験が色々あると良い。
- 3年後の成果を想定する必要がある。
- 文化体験の畑の活用なども考えられる。
- ハーブを育ててかまどベンチを活用して蒸留したりするのも良いかもしれない。

2.2.2 プレイパーク連携推進

小金井市では平成27年から「冒険遊び場（プレーパーク）事業」が進められており、令和7年度に菜園・子どもの居場所空間の整備が予定されている梶野公園において、令和7年7月から活動が予定されている。

プレイパークの意義や目的が社会的処方にかわりつつあり、インクルーシブな地域社会の実現を目指すため、事業の運営を行うNPO「こがねい子ども遊パーク」と連携し、チラシの作成を行った。



2.3 子どもとの意見効果・普及啓発の実施（三楽公園）

共生社会やインクルーシブなどに関する意見交換・普及啓発を目的に、三楽公園に隣接する小金井市立の小学校において、市内在住の障がいを持つ子どもとその保護者を交えて、「みんなの公園」について考える出張事業を実施した。

(1) 実施概要

日程：令和6年9月18日（水）午前中

対象：小金井市立小金井第四小学校の4年生（約100名）

時間数：2コマ（90分）

場所：小金井市立小金井第四小学校 体育館

キーワード：共生社会、インクルーシブ、ユニバーサルデザイン、障害の社会モデル

プログラム：

1. まず、知ろう（45分）

●イントロ：対話型プロジェクト紹介

今日は「答え」をみなさんに教えに来たのではなくて、一緒に考えるために来ました。

「みんなの公園」の、その「みんな」に入りづらい人がいます。それはどのような方々でしょうか？

●清野さんに訊いてみよう：清野さんのお話を実際にお伺いします。

公園は行きづらいですか？子どもたちに救われたという経験とは？等

2. ふりかえって、話し合おう（45分）

●えほん「ぼくともりん」朗読

●どんなことが印象に残った？

●どんな公園になったら良い？していきたい？

●アウトロ：今後の予定紹介



(2) 当日の様子



■主な意見

- ・障がいがある人がいたら、助けてなるべく役に立ちたい。
- ・公園は誰もが安全に遊べると思っていて、でも障がいがあると安全じゃないから、障がいがあっても遊べる公園を作りたいと思った。
- ・障がいのある人でも楽しく遊べる公園にしたいというプロジェクトはとても素晴らしい考えだと思った。
- ・公園で遊べるのが当然じゃない人がいることを初めて知った。
- ・障がいがあって生きづらい人がたくさんいるから、僕たちの力が必要だから助け合って生きていきたい
- ・障がい者もみんな仲良くするためには、無視したり、じーと見たりしないで、助け合ったり、分かり合う方がいいと思う。それは自分たちにもできると思う。
- ・障がいがある子でも遊べる公園ができるといいなと思った。
- ・身体が不自由な人でもみんなが遊べて、みんながあいさつを交わす場所があるといいなと思った。

3. 菜園及び子どもたちの居場所の設置

3.1 ユニバーサルシートの設置

ヒアリング等を進めていく中で、障がいのある子どもをもつ保護者の方から、多目的トイレがあるだけでは不十分であり、ユニバーサルシート※がないとトイレを使えない人がいることが明らかとなった。

そのため、令和6年度事業において、梶野公園の誰でもトイレにユニバーサルシートを設置することとした。

※ユニバーサルシート：子どもから大人まで横になれる大型のシート。車椅子等から乗り移りやすい高さに設置し、障がい者や高齢者、赤ちゃんのおむつ交換等、多目的に利用できる。

(1) 既存ベビーベッドとの置き換えについて

梶野公園の誰でもトイレには、既にベビーベッドが設置されており、ユニバーサルシートの設置にあたっては、付け替えが必要となる。

東京都福祉のまちづくり条例では、公園トイレでのベビーベッドは「望ましい整備」に記載されているが、ベビーベッドが必須でなく、「ベビーベッドその他の乳幼児のおむつ交換ができる設備」を設けることとなっている。

ユニバーサルシートは乳幼児のおむつ交換に使用できるため、ベビーベッドからユニバーサルシートへの置き換えは可能である。

ただし、ユニバーサルシートは赤ちゃん専用でないため、ベルトをしてもずれ落ちる可能性があることから、利用時に注意が必要となる。そのため、本整備では、注意喚起として製品近くかつ見やすい位置に警告ステッカー（製品に付属）を示すこととする。

ベビーシートとユニバーサルシートの概要比較

	ベビーシート	ユニバーサルシート
目的	赤ちゃんのおむつの交換に利用できる	子どもから大人まで横になれる大型のシート。赤ちゃんのほか、障がい者や高齢者のおむつの交換等、多目的に利用できる
サイズ	長さ・幅：600～800mm 程度	長さ：1500～1800mm 幅：600～800mm 程度
整備・利用時の注意点	✓ 対象年齢・体重に留意 ✓ 赤ちゃんを立たせてはいけない	✓ ドア等の開閉時にもぶつからないようにスペースが必要 ✓ 脚が確実に床に接地していることを確認 ✓ 必要に応じてベルトを利用して体を固定 ✓ 縦型の場合、足をつっぱるなどして転落の恐れがあるため、足を壁側にむけて利用しない ✓ ベルトをしてもずれ落ちる可能性があるため、赤ちゃんの利用時は注意が必要

■望ましい整備 ◆全体		
有効幅	◎ 車椅子使用者が円滑に便房まで移動できるよう、出入口の有効幅を 90cm 以上とする。	
水洗器具	◎ 汚物流しを設置する場合、ペーパー等で腹部を洗うことを考慮して、温水が出る多目的流しを設ける。	
表示	◎ 出入口に男女別表示を分かりやすく（20cm 角以上で青・赤のピクトグラム等）表示する。 ◎ 便所の出入口や、 だれでもトイレ車椅子使用者用便房 の扉は、弱視者が視認しやすいように、コントラストをはっきりさせる、認識しやすい色を用いるなど配慮する。	
その他の 注意事項	◎ 手洗器には、光感知式又はレバー式の給水栓を設置する。 ◎ ペーパーホルダーは 2 連式又は補充式等を手の届きやすい位置に設ける。	
◆だれでもトイレ車椅子使用者用便房		
配置	◎ 便所内に だれでもトイレ車椅子使用者用便房 を複数設ける場合には、便器へのアプローチ方向が右からのものと左からのものの両方が設置されるようにする。 ◎ 公園内に複数の便所を設ける場合、全てに だれでもトイレ車椅子使用者用便房 を設置する。 ◎ 男女共用の だれでもトイレ車椅子使用者用便房 を設置した上で、簡易型車椅子使用者用便房を男女別に設置する。 ◎ 清掃や介助などのサービスが行き届くよう、有人施設と合築する。	
設備機器	◎ 大型ベッドを設ける。 ◎ 便器に背もたれを設置する。 ◎ 非常用呼出しボタンは、管理所等でも確認できるようにし、ボタンを押すスタイルと、ひもを引くスタイルの両方を設置する。また、点字表示を行う。	
◆一般便所		
戸	◎ 一般便房の戸は、開閉や施錠等について、誰もが使いやすいものとする。 ◎ 便房の戸は内開きとする。 ◎ 便房使用中の表示は見やすく、分かりやすい位置に設ける。又は、使用時以外は戸が開いているようにする。	
設備機器	◎ 便器洗浄ボタンは、JIS S 0026 によるものをつけた便器と、光感知式のものをつけた便器の両方を設置する。 ◎ ベビーチェア その他の乳幼児を座らせることができる設備を設けた便房を 1 以上設け、当該便房及び便所の出入口には、その旨の表示を行う。 ◎ ベビーベッド その他の乳幼児のおむつ交換ができる設備を 1 以上設け、当該便所の出入口には、その旨の表示を行う。 ◎ 視覚障害者の利用に配慮し、便所内の配置、設備の使い方などをできるだけ統一する。 ◎ 幼児用便座を設ける。	→ JIS S 0026 資料（各種規格等）参照

ベビーベッドに関する記載

出典：東京都福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル，p 350

※公表されている「福祉のまちづくり条例 施設整備マニュアル」は、変更箇所を赤字で示してある。

(2) ユニバーサルシートの設置

梶野公園において、ユニバーサルシートの設置を以下のとおり行った。

●施工日：令和6年9月12日（木）

・作業前（既設ベビーベッド）



・作業後（ユニバーサルシート設置）



3.2 菜園関連施設の設置

令和7年度に予定する、菜園・子どもの居場所空間の整備に先駆け、梶野公園および三楽公園に菜園関連施設を一部設置することとした。

(1) 菜園の設置（梶野公園）

①車いす対応の木製プランター

- 形状：長さ 3.0m、幅 1.0m、高さ 0.7m（支柱の高さ 0.4m）

障がいの有無に関係なく菜園を楽しめるよう、車いす対応の木製プランターを設置する。

車いすの背もたれから身体を起こしにくい子ども近づけるように、側面の一部を斜めとする。なお、整備例を参考にすると、支柱の高さは 40cm 程度であるため、作業しやすい高さは 70cm～75cm 程度と考えられる。

また、この形状でのプランターの土の深さは 30cm 程度となり、トマトやキュウリなどの作物が育てられる土の深さとなる。

②通常の木製プランター

- 形状：長さ 3.0m、幅 1.0m、高さ 0.6m

車いす対応の木製プランターは土の深さが 30cm 程度となり、栽培できる作物等が限られることから、さらに色々な作物を栽培できるように、土の深さが車いす対応より深い通常の箱型の木製プランターをあわせて整備する。

(2) 収納ボックスの設置（梶野公園・三楽公園）

スコップやホースなどの栽培に使用する備品を収納するため、収納ボックスを設置する。なお、建築物とならない形状とする。

(3) 菜園備品

あわせて、以下の菜園備品を手配した。

品物	個数			単価
	梶野	三楽	計	
ホースリール	1	1	2	4,998
移植ごて	7	12	19	249
角ショベル	—	1	1	1,998
ショベル	1	2	3	2,898
ほうき	2	2	4	459
ちりとり	1	1	2	179
てみ	2	3	5	399
じょうろ	2	2	4	800
軍手（大人）	—	—	0	609
軍手（子供）	2	3	5	1,398
合 計				

(4) 菜園関連施設の設置

梶野公園において、菜園関連施設の設置を以下のとおり行った。

●施工日：令和7年3月15日（土）

・作業後（菜園と収納ボックス）



4. 振返りの会の開催

本事業におけるこれまでの検討内容や、令和7年度の公園整備計画を報告し、インクルーシブな公園の実現に必要な心のバリアフリーや相互理解について参加者が考える場として、また、新たな会話・交流の機会を創出し、相互理解の促進・地域活性化などのきっかけづくりとするため、振返りの会を開催した。

(1) 実施概要

日程：令和7年3月2日（日）11時～14時

場所：三楽集会所

対象：「小金井みんなの公園プロジェクト“play here”」インタビュー協力者
栗山公園のんびりデー協力者

主な内容：

■第1部（11時～12時）

「小金井みんなの公園プロジェクト“play here” 令和6年度の振り返り」

- ・3公園における令和7年度整備内容の説明
- ・事業の取組みの進捗（インタビュー冊子・ガイドライン・動画の紹介）
- ・今後の取組みに向けて（意見交換）等

■第2部（12時～14時）

「小金井みんなの公園プロジェクト“play here” 交流会」

- ・飲食をしながら会話を楽しめる、地域交流の場

(2) 当日の様子

参加者：32名（市担当職員・関係課職員・事務局含む。うち子ども5名。）



■主な意見

- ・小金井市は地域で活動している福祉関係の方が非常に多い。
- ・住みやすくて、あたたかくて、いいまち。
- ・公園の花壇や菜園の活動の中で自然と日常会話できるといい。
- ・地域の環境をどのように変えたら、体や心を変えられるかを考えている。
- ・地域に行くことができる場所があると、心の持ちようが変わってくる。
- ・一人ひとりの意識が変化してくるとそれが渦となる。
- ・日々辛い思いをしているお母さんがたくさんいるので、協力していきたい。

5. 情報発信ツールの作成

本事業の取組みを広く発信するため、以下の情報発信ツールを作成した。

(1) チラシの作成

本事業を通じて始まった、「小金井みんなの公園プロジェクト play here」の取組みや、共生社会の実現に向けた広い認知訴求のツールとして、以下の4種類のチラシを作成した。

●Vol.1（2パターン）

令和七年度に、一部は令和六年度の着手や、実施確認を行います

三つの公園を舞台に環境整備を行います

祝野公園

- 「遊具がないこの豊かさ」を大切に、公園に関わっている方々との連携を深める「インクルーシブな状況」を創出します ●其の一端が公園利用者以外の自転車利用者を置きかねる問題を解決し、中核を整備します ●既存の自転車利用者のレベルを整備し、障害がある方の利用しやすい状況にします ●既存の広場でトイレに介助用ベッドを整備します ●栗葉の木陰や座れる場所を兼ねた菜園を整備します

三楽公園

- 球技広場といった動的な利用と、それ以外の利用が共存できるようにします ●車椅子利用の方の移動を確保します ●インクルーシブ遊具を設置します ●木陰で休める場所を増やします ●気候に土や植物に触れることができる庭園を整備します ●近隣の教育施設や社会福祉協議会等と連携し、教育機会や地域の居場所を創出します

栗山公園

- インクルーシブ遊具を設置します ●遊具の待ち列への並びやすさなども配慮した環境デザインを行います ●既存の池をポットホール化し、水辺の趣向遊びなども親しめる環境を整備します ●既存のトイレットの改修を計画します ●障害がある方の利用しやすい駐車場を整備します ●車椅子利用の方の移動を確保します ●国産の運動遊戯センターの民営化を障害がある方が多目的に利用できるようにします ●近隣の教育施設等と連携し、教育機会や地域の居場所を創出します

その他、「心のバリアフリー」に向けて、市内の小学校で出張授業を開催したり、「移動支援」といった福祉サービスとの連携も進めていきます 画にある地域資源を有効に活用したり組み合わせることによって効果を生み出します

インクルーシブな状況とは、多様な人々がともに安心して暮らすこと。障害のある子ども・高齢者・外国人・障がい者・生活困窮者など、あらゆる人々の暮らしを支えること。

インタビュー記事などのリサーチ成果や今後の予定などを公開しています

**小金井の公園をもっとインクルーシブに！
どうなる？ どうする？ どうすべき？**

play here

インクルーシブな状況とは、多様な人々がともに安心して暮らすこと。障害のある子ども・高齢者・外国人・障がい者・生活困窮者など、あらゆる人々の暮らしを支えること。

https://playhere.site/

Instagram

@play_here_koganei



playpark

小金井市では、2015年から「冒険遊び場（ブレーパーク）事業」が定められています。舞台は、東京女子大学キャンパス公園の地のほり、彫立武蔵野公園のくじら山、東小金井駅すぐの親野公園・あまのり公園です。運営は、市内のNPO「こがねい子ども遊べパーク」が担っています。

自然と融け合うことができます。様々な交流が生れます。安心して居ることができ、遊び環境を育むことは、子どもたちのみならず、地域社会を育むことでもあります。そのような遊びの重要性への着目から、ヨーロッパは、古くからブレーパークが街の中で大切にされてきた歴史があります。様々な特徴の中で、呼ばれる専門家が存在です。ブレーパークでは、ブレーリーダーという特別な専門家、そこに居てくれます。その存在は、環境や人との関係などのことで遊びや学びを育んでいくということの重要性を伝えてくれます。

小金井みんなの公園プロジェクト「play here」は、地域で20年の歴史を持つ「こがねい子ども遊べパーク」のブレイダーの方々と連携し、状況を前向きに変えていきたいと考えています。

とはいえ、3つのブレイカーの舞台のハード整備の状況はまだません。だからといってプレイはあるもの違ったり、古道具が続く場所もあります。ただ、「障害のあるなしに関わらず誰かが遊ぶことができる環境の創出をしていきたい」という想いを共にして進ぶことができ、変わりはありません。夢をしっかり持たながら、できることからコツコツと、まずは、地域でそのような想いが集まり広げていくことを願ひ、この手紙のようなチラシを作成しました。

市内のブレイカーの開催日はホームページ等で案内があります。また、気が付いたときもお気軽にお問い合わせを頂けますのでご了承ください。小金井をもっとインクループに！？となるべくどうする？どうすべき！？みんなの、経験や知恵を持ち寄って、より良い状況をつくつてくれるお願いです。

小金井みんなの公園プロジェクト「play here」



<https://playhere.net/>

<http://www.koganei-yunet.playpark>

●栗山公園のんびりデー



インクルーシブ遊具を体験しよう

障がいのある子どもたちののびのびと遊べるようにという願いのもと、栗山公園では令和7年度に「インクルーシブ遊具」の設置が予定されています。今秋のイベントでも体験型に遊べるようにします（実際に設置されるものとは異なります）。みなさんでよりよい遊び方を考えていければと思います。

遊びの道具箱でたくさん遊ぼう

シャボン玉、竹とんぼ、感覚遊びおもちゃ、動物たち、公園の遊びと移りゆく季節にするためのグッズを貸出するコーナーが出現します。貸し出してくれるのは、栗山公園のそばにある社会「社会医療学院病院」の先生や生徒の方。バリエーションやからみあがりを動かすことと専門的な、一緒に遊んでくれたり、ちょっとした相談にも応じてくれます。

マイベースカフェでのんびりしよう

特別支援学校高等部や在校生のみんなと、書生がいて待つ不登校のおみちゃんによるコーヒースタンド「マイベースカフェ」。わくわくしたりお休みください。

焚き火を囲んでマシュマロを食べよう

焚き火大好き鳥井さん（建築家・作家・不登校支援員等）が、みんなで暖をとるための場所をつくります。一緒に薪をくべたり、マシュマロを大で食べておやつにしてみよう。※鳥井さんのデザイン作品の展示も予定しています

ポッチャで遊べる駄菓子屋さん

小井井がしがし地産地消センターさんや小井井社会福祉協議会さんによる出張駄菓子屋さん。アンケートにご協力をお願いした、駄菓子をプレゼント。ポッチャ体験もできます。ご来店もお楽しみに。

キッチンカーであたたかいご飯を食べよう

美味しいうちさんや、公設で、地元の野菜やお菓子を販売するPARTIALYさんによるランチ販売です。暖かい（えん）食の時間もあります。

※おみちゃんや鳥井さんらへの協賛金として寄付させていただきます

トイレの安心、移動の安心です

栗山公園内の「移動トイレセンター」には、誰でもトイレがあります。多目的に使える、ベットのあたたかみをお楽しみいただけます。なら、公衆交通機関での移動が難しい時、駄菓子屋の方には、フォームにて事前にお申し込みください。

※バスにのりかえられた方、お車でお越しの方には（近隣のタクシーサービスも利用可）

※本日は、近隣のタクシーサービスも利用可です。障がいのある子どもたちののびのびと遊べるようにという願いのもと、栗山公園では令和7年度に「インクルーシブ遊具」の設置が予定されています。今秋のイベントでも体験型に遊べるようにします（実際に設置されるものとは異なります）。みなさんでよりよい遊び方を考えていければと思います。

2024.12/1 (sun)
11:00-15:00
day 入場無料

栗山公園 のんびりデー

障がいのあるなしに関わらず
だれもが公園で
のんびりしたり遊んだりすることができます。

これは、その大切さを感じたり、
考えあうためのイベントです。

●インクルーシブ遊具を体験しよう●遊びの
道具箱でたくさん遊ぼう●マイベースカフェで
のんびりしよう●焚き火を囲んでマシュマロ
を食べよう●ポッチャで遊べる駄菓子屋さん
●キッチンカーであたたかいご飯を食べよう、
食のインクルーシブも考えよう●トイレの安心
移動の安心あります●みんなの公園を考えよう

主催：小井井みんなの公園プロジェクト「play here」
【お問合せ】小井井市環境政策課 緑と公園係 tel. 042-387-9860

大人数でも出ても、遊びたい人も大人数でも入場自由

小井井みんなの公園プロジェクト「play here」

このプロジェクトは、障がいのある子どもたちののびのびと遊べるようにという願いのもと、栗山公園では令和7年度に「インクルーシブ遊具」の設置が予定されています。今秋のイベントでも体験型に遊べるようにします（実際に設置されるものとは異なります）。みなさんでよりよい遊び方を考えていければと思います。

雨天候時は、社会医療学院病院さんにご案内させていただきます

（公式）インスタグラムでもお知らせします

お問合せ先
小井井市環境政策課 緑と公園係
TEL: 042-387-9860
WEB: www.shirayama-kouen.jp
Instagram: @shirayama_kouen

お問合せ先
小井井市環境政策課 緑と公園係
TEL: 042-387-9860
WEB: www.shirayama-kouen.jp
Instagram: @shirayama_kouen

(2) 冊子の作成

深い認知訴求のツールとして、本事業で実施したヒアリングを一冊の冊子にまとめた。

小金井みんなの公園プロジェクトインタビュー	やっぱコミュニケーションを育まない 試されることを待っているアディア あたにかい眼差しさあれば 理学療法や作業療法の知見を地域に ずつとみんなてなんとかしてきたん 来づらい人がいるんじや、道理が通ら 生きたことは嬉しいよって背中て語ら 医療のケアが必要な子にも勧められ	みんなてつくっていくってことを、 みんなて大切にするための方法
安心と挑戦の拠り所としての公園 怖くて公園に行けない人、たくさんいます 共生社会を本当に願うなら 迎え入れることを備え続ける公園的な地域へ 地域の植栽から考える、これからのインフラ それぞれの経験が持ち寄られる地域を目指して ここらところだと環境は切り離せないから	清…私はこのプロジェクトに今年度から参加している のですが、増野さんには昨年度にも当事者という立 場からもうすでに意見を伺っていますので、そこら の進捗という意味でも少し紹介をさせていただきます。 います、「インタラクション」道具の設置の前に、トイレが 整備されていないと出かけることができない」という お話があったと思います。 清…しましたね。 無…これでの調査のなかで増野さんに限らず、当 事者の方々からの同様の声を受け止め、トイレと いった基本的なところの環境整備に目を向け、少 ずつ…そうですね、だからSNSの発信をすれば良 いってことじゃなくて、実際にそれがただ当事者 や地域住民に理解されていくかっていうところが大切 ですね。なんというか、行政任せにしたいわけでも ないんで、「みんなてつくっていく」ということを、み んなで大切にしていくためにも、そういうことが必 要ですね。 無…まさに、そういうことを考えています。 清…いろんなことで言えると思うんですけど、やっ ぱりステップが大事だと思っています。今って、すぐ答 えを出さないといけないことが多すぎると思うんです けど、そもそも、みんながみんな同じ意見であるはず がないんです。誰かしら何かしら思うところがある はずなので、そこを恐るずに会話をしたり、対話 をしたりしていくっていうことで、みんなて話し 合って、折り合いつけていて、これやってみようあれ	清…結論ありきではなく、プロセスも地域に根ざ りながら進めていくというプロジェクトのあり方は、 よく言われていることだと思うんですけど、それが実 際にできていることはどれくらいあるんだらうって 思っていますか。私が知らないだけかもしれませんが、 無…あ、いや、そう思います。形だけのプロセス公開型 というか、話を聞いただけ聞いておいて、その後がさ なりになっているもの、多いと思います。
本 木 茜 さん 加藤 さやか さん 富永 美和 さん 阿部 裕太朗 さん 倉石 篤 さん 星 郁子 さん 鞍田 愛希子 さん	清…なんというかその、子どもが特別支援学校に 入ってそれをすごく実感したんですけど、息子さんは先 天性の筋疾患で、歳手前まで診断がつかないまま、一般 の子たちと一緒に保育園で生活をして、特別支援学 校に入る段階で、それはいよいよ決められているとい うか、もうそこ以外入れるところはないのに、その就学 ありのままを受け入れられると 試行錯誤ができる	やっつと云うっていうステップが増えたらいいなって本 当に思っています。 無…プロセスの実行錯誤に意味があるというか、過程 そのものも目的的なという感じはありますよね。

play here 参考書籍

・・・・・・・・・・・・・・・・

インデックス等で書き添った書籍と共に、play hereの構想や議論を支えてくれた書籍とその一部を紹介しつつご紹介します。ピントをどこに絞るかをあれこれ、実験に事し合ったりして頂いたり、イベントごとと距離を合わせながら時に離れたりし、広い意味での「読書体験」を探めて広げていければと考えています。

・・・・・・・・・・・・・・・・

飯野直子・基加良司・西条美幸
「社会」を扱う新たなキーワード
「障害の社会デザイン」の使われ方
(生活福祉)

222

障害者の福祉研究が明らかにしてきただけは、障害者の権利や問題意識は、マジョリティである非障害者やマイノリティである障害者との間の「権力(power)」の不对等な支配によって感じと認識されないことだ。マジョリティの側は、自分たちの持つた問題の解決を「社会」に期待することによってより意識で権力的な立場にあるが、実はその特権は、何故「社会」によって対応されるべき問題かを定義する権力をマジョリティの側が握っていることによっても支えられていた。他方、マイノリティの側は、そうした権力を持たないゆえに、自分たちの問題を「社会」によって放置され、排除されてきた。障害問題とは、心身機能の優劣の問題ではなくこうした権力関係の不均等な配置の問題に注目することが、社会や政策デザインの狙いだったのだ。

284

飯本マサ子の「心のバグラー」で、障害者に親しい関係と社会を共に生きるための障害者に求められ、さらに、そうした障害は、これまで社会がマジョリティである非障害者の利害を優先し、マイノリティである障害者の利害を無視・軽視してきたという偏った権力構造と気づき、それが変革されている。つまり、私たちが生きているこの社会が、既に不均等なものとして成り立ってしまっているという認識が、重要なメカニズムとして置かれている。

しかし、「心のバグラー」の目標が、未来において実現されるべき社会として設定され、それが「すべての人」が「誰もいない人」の形でも統一化されると、そうした現実の不均等性についての認識が変化すると思われる。(246)

「すべての人が」「誰もいない人、人びとの間に差や不平等を平等化するバグラーは、その道しるべとして現れ、一人ひとりの人生において異なる人々の間に存在する問題から目を反らす結果ももたらす。

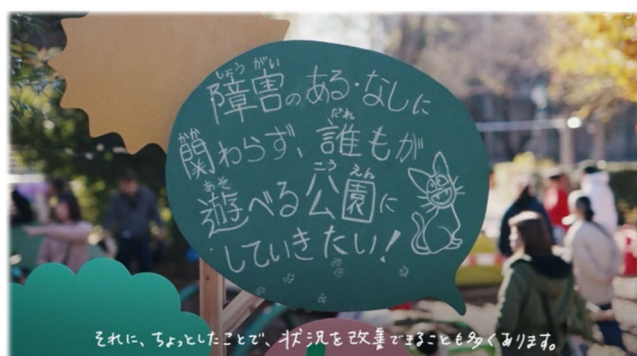
2504

「ルール」や慣行が社会的障壁として認識されにくいのはなぜか。その障壁としてまず考えられるのは、政治的な現実的に対処できないものはある、見えないものであることだ。「物理的・制度的」に地上と「制度的な障壁」「文化・情念上の障壁」「意識上の障壁」を「障害者を取り巻く(四つの障壁)」として認識したのは、平成七年(1995)年頃の「障害者自立支援」であった。平成十四年世帯より上層に達しているが、国の行政機関や地方公共団体などが障害に対して説明する際には、今なお「物理的な障壁のみならず、社会的、制度的、心障壁的な障壁」の障壁」(広義を指している)とから、社会的障壁が制度的障壁として実定的に理解される傾向は強い」と言えたとだ。

「ルール」や慣行が社会的障壁として認識されにくいのはなぜかという問いは、自明の理である。障害者の必要や利用性に合わせて形成され運用されているため、大多数の人に自覚されている、それが特定の

(3) コンセプトムービーの作成

栗山公園のんびりデーや小学校での出張授業の様子などを中心に、本事業の取り組みや、「小金井みんなの公園プロジェクト play here」に込めた想い、メッセージ等を紹介するコンセプトムービーを作成した。



(4) ホームページ・SNS (Instagram) の作成

本事業の取組み・検討を広く発信するとともに、冊子等のコンテンツの受け皿として、ホームページを作成するとともに、動的な情報発信ツールとして、Instagram を作成した。

また、ウェブサイトを開設・運営するにあたり、ウェブサイト運営ポリシーを作成した。

●ホームページ

WEB サイト：<https://playhere.site/>



小金井みんなの公園プロジェクト
Play here

関連資料リンク集

- ・最新情報 (Instagram)
- ・趣旨とメッセージ
- ・令和六年度事業計画
- ・推進メンバー紹介
- ・問い合わせ

過程もオープンに
随時更新公開していきます

- ・調査視座
- ・調査成果 2024.8.15更新
- ・整備計画 (案) 2025.2.7更新
- ・イメージ 2025.2.21更新

here

●Instagram

Instagram : @play_here_koganei



●ウェブサイト運営ポリシー

みんなの公園プロジェクト・ウェブサイト 運営ポリシー

みんなの公園プロジェクト（以下、「本プロジェクト」）は、ウェブサイト（以下「本サイト」）の円滑な運用を図るため、以下のとおり方針を定めています。

内容を確認し、ご同意いただいてからご利用ください。

1. 管理・運用について

本サイトは、本プロジェクトが管理・運用しています。

2. 掲載内容について

本サイトに掲載する情報は、みんなの公園プロジェクトに関するものとし、次に掲げるような情報の掲載を禁止しています。

- ・ 公序良俗に反する情報
- ・ みんなの公園プロジェクトの目的を著しく逸脱した商業的、営利的な情報
- ・ 特定の宗教の宣伝、布教等に関する情報
- ・ 政党、政治団体、結社等による政治的な宣伝、選挙活動等に関する情報
- ・ 個人、団体、組織等に関するもので権利、利益等を害するおそれのある情報
- ・ 他者を誹謗中傷する情報、またはそれを助長するような情報
- ・ 法律、法令等に違反する情報、またはそのおそれのある情報
- ・ 虚偽や事実誤認の内容を含む情報
- ・ 暴力的、わいせつ的な情報
- ・ その他、みんなの公園プロジェクトの広報に適さない情報

3. 著作権について

特に明示のない限り、本サイトの著作権は、本プロジェクトにあります。

ただし、本サイトの文書、画像等は、次に掲げるような利用でなければ、自由に引用、転載できるものとします。その際、本プロジェクトからの引用・転載であることを記載してください。

- ・ 営業活動その他営利を目的としたもの
- ・ 第三者の権利、利益等を害するおそれのあるもの
- ・ 特定の個人、企業、団体等を誹謗中傷するもの、またはこれらを助長するもの
- ・ 法律、法令等に違反する内容または違反するおそれがあるもの
- ・ その他、本プロジェクトが不適切と判断したもの

4. リンクについて

本サイトへのリンクは、原則として自由です。

リンクされる場合は次に掲げる事項にご留意ください。

- ・ みんなの公園プロジェクトへのリンクであることがわかるようにしてください。
- ・ 「2. 掲載内容について」に掲げるようなウェブサイトへのリンクは禁止します。
- ・ リンクを貼る場合に、本プロジェクトへの連絡は基本的に不要です。

- ・ 本サイトは、予告なく URL を変更、または掲載を停止することがあります。

5. 外部へのリンクについて

本サイトに掲載している外部へのリンクに関して、その内容について、本プロジェクトは責任を負いません。

6. クッキー (Cookie) について

本プロジェクトでは、利用者のアクセス状況を把握・分析するために Cookie 情報技術を利用することがありますが、個人を特定する情報は含まれていません。

7. 免責事項について

本プロジェクトは、本サイトの掲載内容の信頼性やサイトの安全性について万全を期すものの、完全に保証するものではありません。利用者が本サイトの情報を用いて行う一切の行為について、一切責任を負いません。また、本サイトの利用に関連して生じたいかなる損害についても、一切の責任を負いません。

8. その他

- ・ 本ポリシーは、予告なく変更する場合があります。
- ・ ウェブサイトのプライバシーポリシーはこちらです (別記1 のとおりです)。
- ・ ソーシャルメディア運用ポリシーはこちらです (別記2 のとおりです)。

(別記1)

プライバシーポリシー

みんなの公園プロジェクト（以下、「本プロジェクト」）は、WEBサイト利用者の個人情報保護に細心の安全管理を行います。その扱いにあたっては、法令を遵守し、本プロジェクトの保有する個人情報の適切な管理のための措置に関する規則とともに、以下の方針に基づき個人情報の保護に努めます。

1. 個人情報の取得・保有について

本プロジェクトは、適法かつ公正な手段によって、個人情報を取得することがあります。収集した個人情報は、本プロジェクトの遂行上必要な場合で、その特定された利用目的の達成に必要な範囲を超えての保有はいたしません。

2. 個人情報の取扱い

本プロジェクトは、個人情報を利用者である皆様の同意を得ることなく、第三者に開示することはありません。

ただし、以下の場合はその限りではありません。

- ・利用者の事前の同意・承諾を得た場合
- ・法令による開示、または裁判所及び警察等の公的機関から開示要請があった場合

3. 個人情報の管理について

本プロジェクトは、保有する個人情報の外部への流出、情報の紛失、破壊、改ざん及び不正侵入等の危険に対し、適切な安全対策を実地し、利用者の個人情報保護に努めます。

また、本WEBサイトでは、改善による利便性向上を目的として、利用者のアクセス状況を把握・分析するためにCookie情報技術を利用する場合があります。なお、個人を特定する情報は含まれておりません。

4. その他

上記に定めのある以外は、原則として小金井市のルールに準じるものとします。

(別記2)

みんなの公園プロジェクト・ソーシャルメディア運用ポリシー

本プロジェクトは、プロジェクトの情報をより広く発信するため、ソーシャルメディアアカウントを開設し、以下のとおり方針を定めています。内容を確認し、ご同意いただける場合、ご利用ください。

1. アカウント情報

本プロジェクトでは、ソーシャルメディアの公式アカウント（以下「本アカウント」という。）として、以下のアカウントを開設します

- インスタグラム
- フェイスブック

2. 目的について

本プロジェクトからのお知らせやイベント情報などを積極的に発信し、広報活動の充実を図ることを目的とします。

3. 運用方針について

- ① 本アカウントにおいて発信する情報は、本プロジェクトの責任において管理・運用します。
- ② 本アカウントは本プロジェクトからの情報発信に利用します。利用者のコメント・投稿等に対して、返信等はお約束できません。
- ③ ご質問等はウェブサイトの「お問い合わせ」からお願いします。
- ④ 本アカウントから、必要に応じて「いいね」、「シェア」、「フォロー」などのアクションを行うことがあります。しかしながら、当該アクションを行った場合においても、特定のアカウントに対する本プロジェクトからの支持を表すものではありません。
- ⑤ 発信する情報は、必ずしもすべてが本プロジェクトの公式発表・見解を表すものではありません。

4. 禁止事項について

本アカウントをご利用いただく際には、次に掲げるようなコメントはご遠慮ください。なお、当該事項に該当すると判断した場合は、コメントの投稿者に断りなく、コメントの全部または一部を削除します。

- ・ 公序良俗に反するもの
- ・ 営業活動その他営利を目的としたもの
- ・ 特定の宗教の宣伝、布教等に関するもの
- ・ 政党、政治団体、結社等による政治的な宣伝、選挙活動等に関するもの
- ・ 第三者の権利、利益等を害するおそれのあるもの
- ・ 特定の個人、企業、団体等を誹謗中傷するもの、またはこれらを助長するもの
- ・ 法律、法令等に違反する内容または違反するおそれがあるもの

- ・虚偽や事実誤認の内容を含むもの
- ・暴力的、わいせつ的な表現を含むもの
- ・上記の項目内容を含むウェブサイトへのリンクを目的としたもの
- ・その他、本プロジェクトが不適切と判断したもの

5. 免責事項について

- ① 本プロジェクトが、利用者が当アカウントの情報をを用いて行う一切の行為について、一切の責任を負いません。
- ② 本プロジェクトは、利用者により投稿された当アカウントに対するコメント等について、一切の責任を負いません。
- ③ 本プロジェクトは、利用者間、もしくは利用者と第三者のトラブルによって利用者または第三者に生じたいかなる損害について、一切の責任を負いません。
- ④ 本プロジェクトは、上記の他、当アカウントの利用に関連して生じたいかなる損害についても、一切の責任を負いません。

6. その他

予告なく本ポリシーの見直し、またはソーシャルメディアの運用を中止する場合があります。